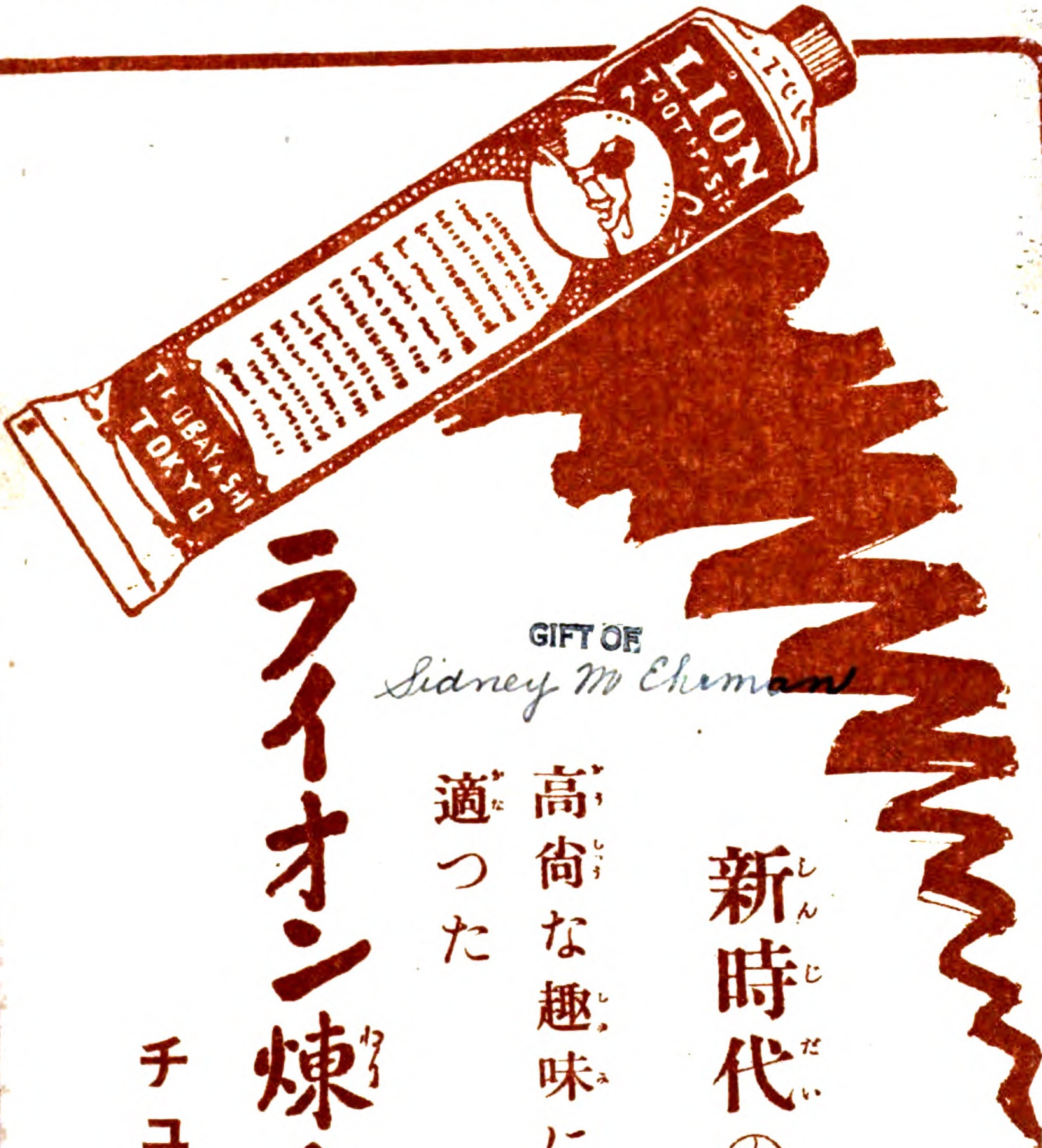
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第三十四年第五號　　第三百六十九號


LION
TOKYO

ノベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

十一版出來

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」

四六版總洋布製 全一冊
正價 壹圓五十錢 郵稅十錢

人間の死後は果して如何。絶滅か、永生か、將た『醒むる無きの睡眠』か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し。而も闇黑の中一道の光明あり泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす 現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ其神祕的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者卽ち此書也。譯者は將來世界を震憾すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者といへり。附錄とせる『交靈術とは何ぞや』に至りては、眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして、物質萬能の現代社會は之を讀でん將に大なる戰慄と畏怖とを禁じ得ざるべき也。

七版出來

獨逸。イエナ大學名譽教授 ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

四六判總洋布製
正價 貳圓四十錢
郵稅十二錢

(廣刊一の一)

東京本郷西片町 玄黃社
電話小石川一三一九番
振替東京七九九五番

豊島與志雄氏著

創作集

蘇生

初版忽ち賣切れ！　再版出來

▲大版箱入特製
▲紙數三百八十頁
▲定價壹圓五拾錢
▲郵送料金八錢

沈靜の風格と幽玄の意想とを以て、夙に新進文壇の一角に雄視する豊島與志雄氏が、『生と死の愛』以後の作中より、その粋を盡くして成せる短篇集にして、「生と死の記錄」以下十一篇を收む。氏猥りに筆を執らず、篇々從つて皆金玉。一卷、質量共に近時創作界の異彩たるや亦た論なき也。

ホイットマン詩集

白鳥省吾氏譯

『ハイネ詩集』同型美本

（新刊）　定價八拾五錢　郵送料金六錢

民主々義の代表的詩人ワルト、ホイットマンの名の我邦に傳稱せらるゝこと既に久しきも、其の詩に至つては未だ全く紹介せられずと云ふも過言に非ず。譯者はホイットマン研究の權威者と目せられつゝある人、其思想に沈潜し、其詩篇を愛誦すること正に十年、こゝにホイットマン誕生百年を紀念すべく、作中最も代表的なるもの數十篇を譯出して此の一卷を成す。今や民主的精神の大波は全世界に澎湃たるの時、其の波頭に立ちて千波萬波を麾く此の大詩人の莊重雄大の韻律を聞かざる可からず。

東京牛込矢來中の丸　振替東京一七四二番

新潮社

電話番町（局）八〇九番　八九九番

■ドストエーフスキイ全集第五編■原白光氏譯

賭博者

附録 貧しき人々

中版最上製美本 紙數五百八十頁 定價壹圓四拾錢 ◀郵送料八錢▶

ドストイエフスキイの作中最も異色あるものは、「賭博者」の一篇也。斯の文豪が、バアデン・バアデンの賭博場に於て、いかに陶醉的なる賭博者なりしかは、彼自身の書簡其他に就いて明かに知らるゝ所なるが、此篇、賭博場の光景を活寫し、賭博者の心理を解剖す。而して、誇り高き處女と魅力强き娼婦との間に置かれたる一靑年の煩悶を描き、縱横の奇想の裏に搏大の人間愛を潜めたるもの、これ此一篇也。添へられたる『貧しき人々』は作者の處女作にして、一人の貧しき男の、一人の貧しき女に對する優しく悲しき愛を描いて、涙無くしては讀みがたき哀趣を湛へたり。全ドストイエフスキイの種々相、既に此一篇の中に萌芽を示すといふも過言ならじ。譯者は新進の露文學者泣血の苦心になる直接譯也。

阿部次郎氏著（新刊出來）

ニイチエのツァラツストラ 解釋並に批評

中版特製 ▼定價壹圓貳拾錢 ▼郵送料金八錢

ニイチエの『ツアラツストラ』は極めて難解、誤り讀まるゝこと多し。著者此の書を愛讀してよく其の幽趣微韻を了す。卽ち爲めに深切なる解釋を加へ、創意ある批評を添ふ。ニイチエ論として、此の書まさに世界的權威たるを疑はずと稱す可く疑ひもなく、近來稀有の名著也。

東京牛込矢來中の丸 振替（東京）一七五二 新潮社 電話番町（良）八〇九番 八九九番

藤井眞澄作

（最新刊）

問題劇

民本主義者

全五幕

中判美本紙數二百頁

定價金壹圓拾錢

郵送料金八錢

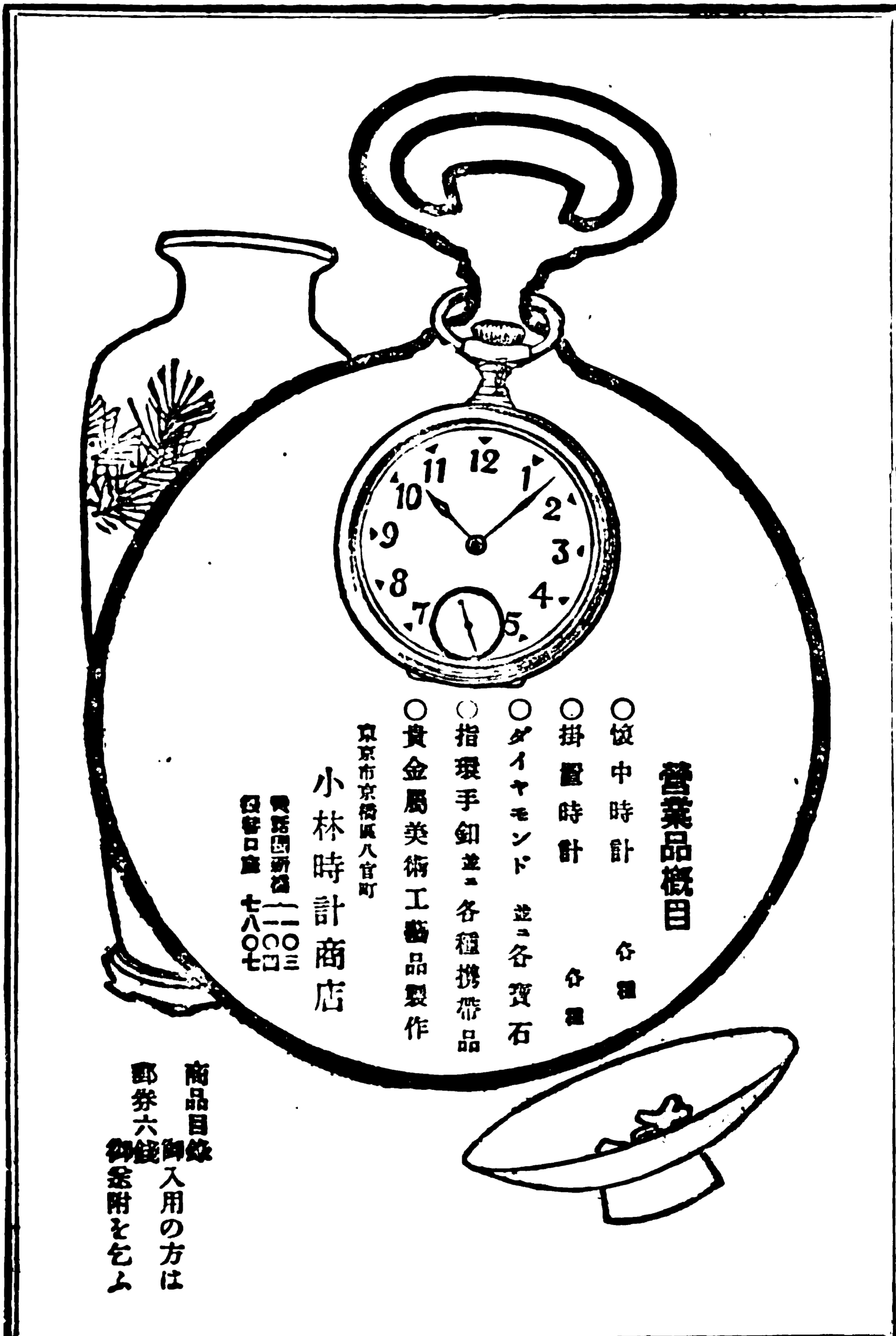
此戯曲は現下のあらゆる問題——經濟問題、宗教問題、戀愛問題、教育問題等を最も徹底的に取扱つて、夫々進むべき前途を指示すべく我國の讀書界に提出されたるものである。眞に此國最初第一の社會問題劇である。新しい男女の超人が活躍する場面！東洋神祕涅槃の世界と西洋科學の心理分析とを接觸させて第三文明を暗示する場面！實にショー、メターリングをも後へに瞠若たらしめんとす。本書は吾々の行くべき道に當つて一塊の火……光明を投げたる眞個永遠に紀念すべき藝術品である。敢て江湖の批判に問ふ。

東京市神田區錦町二丁目三番地
振替口座東京四五一五六番
進榮堂書店發行



中央公論第卅四年五月號目次




營業品概目
○懐中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各種寶石
○指環手釦並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七
商品目録御入用の方は
郵券六錢御添附を乞ふ



THE RED ROOFS

BY CAMILLE PISSARRO

東洋道德の眞髓

素行會々長 松浦伯爵監修
久保天隨先生 平野市十郎先生 編纂・山鹿素行先生全集刊行會藏版

文學博士 井上哲次郎先生・[illegible] 山本信哉先生 校
文學博士 三上參次先生・[illegible] 外崎覺先生
文學博士 黑板勝美先生・[illegible] 佐藤獨嘯先生 訂

山鹿素行遺著 四書句讀大全

附 津輕耕道軒先生諺解

宏博超邁の學識を以て我が國民精神を闡明し半生の心血を士道の振興に注ぎたる山鹿素行先生が紛々たる諸儒の箋釋を非として著はされしもの卽ち本書也。四書が儒學の根柢にして東洋史上の經典たるは贅せず、唯其の本旨を明かにして眞義を敷衍する、其人を得ずんば、遂に時勢に適應し、社會を救濟するを得ざるのみ、今や世界の大亂漸く終熄したりと雖、人心の動搖日に滋くして世態益々紛糾を加へんとするに當り本書を刊行する所以のもの聊か以て時弊を匡救し、民心の歸一に資せんと欲すればなり。

體裁 菊判總クロース綴天金美本箱入紙數二千五百餘頁舶來上等紙印刷鮮明

會費 一時拂金拾五圓 毎月拂 一個月分貳圓八拾錢毎月五日拂込

配本 大正八年五月より毎月一册宛刊行配本し六個月を以て完結す

申込締切 大正八年五月二十日限

入會金 申込と同時に金二圓拂込、最終の會費中に加算す。

內容見本 付規定書申込次第無代進呈

山鹿素行先生全集第一輯
武家事紀
菊判總布全三册 定價各金參圓 送料十二錢

發行所 東京市神田區駿河臺袋町 合資會社 國民書院 振替東京三〇〇九番 電話本局三〇〇二番

野村隈畔先生新著

新刊發賣

自我批判の哲學

[illegible]

（[illegible]）

如何なる思索も如何なる哲學も自我の本性に徹底することより深遠なものはない。現時哲學界に於て絶對自由の意志を說き絶對價値を高調し或は生命の流動を主張するものありと雖も自我の具體的本性に徹底するものなきは現代の生活要求を裏切る根本的缺陷である。著者はカントの理性批判に慊らずベルグソンの直觀批判に滿足せず自ら進んで獨特な自我批判の哲學を建設した。是れ現代の生活要求を根本的に確實ならしめ且つ凡ゆる思想主義を批判的に基礎づけるもの蓋し我國最新の哲學であらう而して餘りに專門的でなく又常識的でなきは何人も必讀すべき哲學である。

四六判最上製
美本四百頁箱入

正價金壹圓五拾錢
郵稅十二錢

稻毛詛風先生新著

忽ち再版

民本主義の眞髓

初版即日賣切第貳版亦々正に盡きんとす注文到

（現世界の最大問題）本書は現世界の最大問題たる「民本主義」を最も廣汎にして最も根柢的なる立脚地より純批判的に取扱ふ事に依り其意義と價値とを精細的確に論明すると共にそれに確乎たる基礎と整然たる體系とを附與し且それと我現代國民生活の關係を闡明して適切有效なる利用法を講ぜるもの紛々たる世の民本主義論は理論と應用とを兼具せる本書に接して初めて其歸趨を知るや必せり。敎育家政治家は勿論敢て全國民の必讀を要望す。

四六判最上製
美本五百頁箱入

正價金壹圓八拾錢
郵稅二十錢

東京市神田區
表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座
東京八七貳番

([illegible]付二〇六)

言論の取締と民心の開導

朝鮮の騷動が起つて以來、また言論の取締が嚴しくなつた。鮮人の要望に同情する樣な議論は言ふ迄もないが、政府の措置に對する忌憚なき批評や、果ては彼地に於ける出來事の多少誇張した報道などに至るまで、皆禁止事項として新聞雜誌に掲載を差し止められて居る。

此際些かでも騷動に油をさす樣な結果を惹き起してはならないから、動亂の鎭定と秩序の保持との爲め、有らゆる手段を盡すことは固より已むを得ぬ。併し如何に這の必要があるからとて、這の必要に藉口して政府の執る所の誤まつたる措置又は一部人士の唱ふる所の誤まれる言説に對し、我々國民は絶對に口を噤まねばならぬといふ理窟はない。

我々は固より秩序の確立を重んずる。併し之と同時に、否之よりも强き度合に於て、民心の開發並に之より生ずる社會文化の向上を熱求する。之が爲には、誤れる言説に對しては痛烈な攻撃を向けねばならぬ、誤つた措置に對しては忌憚なき批評を辭する譯には行かない。況んや世上には、秩序の保持に藉口して、國民の耳目を壅塞し、故らに其開發を妨げ、一時の苟安の爲めに永久の悔眞を顧みざる者尠らざるに於てをや。

民心の開導を名として無制限に言論の自由を認む可らざるも亦言を待たない。併し乍ら、秩序の保持は當面一時の問題に過ぎず、民心の開導は其影響する所實に永遠に亘るものあるを知らねばならぬ。一國文化の進歩發展に眼の開けてあるべき筈の二十世紀の政治家は、此意味に於て、彼等の思想と施設とに對する自由なる批評を、大に歡迎するの雅量がなければならぬ。

不幸にして我國の短見なる當局者は、當面一時の『秩序保持』に急なるの餘り、民心開導の任に當る思想家の社會的任務を解しない。而して彼等は常に『秩序保持』を重んずべきの理を移して、之が爲に彼等の執る所の具體的方策にまでも、絶對の承服を一般の國民に强ゐんとする。斯くして不當に言論の自由を抑壓するの態度に出でん乎、彼等は之に依つて民の耳目を蔽ひ、一國文化の進歩を礙げたるの責任を負はなければならない。

猶終りに一言する。最も多く惡事を強行した政府程、最も多く言論の自由を壓迫したことは、歷史上明白の事實である。政府の爲す所にして悉く公明正大ならば、公權を濫用してまで嚴重な取締を爲すの必要がない筈である。

中央公論

第卅四年第五號
五月號
第三百六十九號



左右田博士の「文化主義」を評す

野村隈畔

一、大戰の終熄と思想の勃興

今や世界各國の民衆は、人類文化の總勘定であつた慘怛たる大戰の終熄に伴ひ、彼れ等があらゆる犠牲を拂ひ、あらゆる困苦缺乏に忍從して戰つた悲惨なる努力をして、將來における文化發達の上に永遠なる效果を齎らさむがために、且つは彼等の形而上的努力の結果として根本的に新たなる文化、新價値實現の一層高遠なる文化を創造し建設せんがために、文化史上における凡らゆる思想及び問題に對して、新鮮なる思索と努力との獲得に熱中して居ることは事實であるが、世界大戰に參加して人類的努力の仲間入りをしたわが日本も、この眞劍にして潑溂たる大勢の影響を免ること

出來ないと見え、近頃急にわが思想界並びに精神界がどよめき出し、凡らゆる思想乃至運動に對する文化史的意義を獲得せんとする努力を增して來たことは、誠によろこばしい現象であると思ふ。

由來、大戰後における思想界並びに精神界が非常なる緊張と眞摯なる努力とを招致して來ることは、人類歷史の證明するところであるが、特に今回の如き殆んど世界の全人類をその悲慘なる渦中に捲き込んだ大戰後においては、世界各國共、啻に自國の文化の建設のためのみならず、人類文化の永遠なる發達のために、凡らゆる思想乃至運動に對して有らむ限りの努力と奮鬪とを傾倒して來ることは、容易に見易き事實である。從つて從來極めて貧弱であり輕佻であつたわが思想界並びに精神界も、今後大にその緊張と眞摯とを增進して來ることであらうと思ふが、か〻る時期に際しては、漲り切つた精神的自覺によつて、凡ての人間が自由獨立に各々自己の思想及び要求を主張するため、生活乃至文化に對する凡らゆる思想及び運動が、恰も雨後の筍の如く勃興し、そして互に鎬を削つて甲論乙駁、各々自己の思想及び要求を固持して一歩も讓らざる結果、遂にはその眞正なる批判的根據を見失ひ、皮相なる一片の感情論に墮し去ることあるは、免れない傾向であらう。そして目下わが思想界を賑はしてゐる凡らゆる思想乃至運動を代表するもの、言ひ換へれば、それらの思想及び運動の根據に流れてゐる精神、即ち指導的原理は言ふまでもなくデモクラシー、即ち民本主義であると見てよかろう。民本主義は今や世界的思潮として人類の精神的努力の焦點となつてゐる。

余が或る日、上野驛から市外線の電車に乘ると、歸營をいそぐ赤羽工兵隊の一兵士が余の側に腰をかけた。彼れは頻りに時計を出して眺め、歸營時間が遲くなると見えて電車の發車するのをもとかしがり、腰が落ち付かない風であつた。そして彼れは堪えられなくなつて煙草を吸ひ初めた。彼れは電車内にあつて喫煙を遠慮すべきことを少しも知らない風であつた。すると後から少し酒に醉つた二人の男が這入つて來て、自分の前に立つて吊り革を握つた。彼れ等は醉のた

めにくだらぬことを喋り合つてゐた。間もなく一人の男が、歸營時間に追ひ立てられて氣が氣でない兵士の喫煙を見付け、それを攻撃するともなく大氣焔をあげ初めた。「やあ！兵士君！煙草は遠慮し給へ、禁煙といふ譯ちやないが、――(友人を顧みて)なあ君！電車内にあつては『喫煙を御遠慮下され度候』で、――實は吾が輩も大に煙草は好きだが、しかし君そこが――フウ所謂デモクラシーで、今後の社會は大にデモクラシーが支配すべきものだねえ君！しかしだ、吾が輩の現下の問題はデモクラシーが勝つか、官僚軍閥が勝つかだ、軍閥が負けるかデモクラシーが負けるかだ、――なあ君痛快だね！」彼れは恰もデモクラシー戰を參劃しつゝあるが如き態度である、兵士は笑つて喫煙を止したが、所謂デモクラシーの何たるかについては馬耳東風であつた。車内の人々は大に醉漢のデモクラシー論に傾聽した。

これは一寸した一例に過ぎないが、民本主義の眞意がいかほど徹底的に理解されて居るかは別として、いかに廣く民本主義が民衆の間に意識されて來たか、いかに民衆が熱心にその實現を翹望してゐるか、或は電車内において、或は道路上において、或は室内においていかにそれを論じつゝあるかといふことが、これによつて容易に理解されると思ふ。從つて文化に對する凡らゆる思想及び運動が悉くその民本主義を標榜し、民本主義の眞正なる文化史的意義及び價値は別として、たゞ民衆の注意と社會的人氣とを得る必要上、是非共民本主義をその主張の根據と定めねばならぬやうになるは當然であらう。その結果民本主義は凡らゆる思想及び運動によつて利用され、從つて甚だしく低下され且つ俗化されて來ることは免れない。尤もデモクラシーは元來凡俗化さるべき性質のものだと言つて了へば、それまでゞあるが、併し單に低下され且つ俗化されるばかりでなく、その爲めに民本主義の有する本來の文化史的意義を誤り、延いては眞正な文化價値實現の根本精神を忘れ、更に生活乃至文化における凡らゆる價値を凡俗化するにおいては、これ大に憂ふべきことであると思ふ。かゝる憂ふべき傾向は目下のところ、わが思想界において認めることは出來ないが、しかし全

然てかゝる傾向がないと斷定することも出來ない、たゞ吾々は凡らゆる文化價値を否定するやうな反文化的傾向の發生する前に、一層高遠なる一層必然的なる確固たる批判的根據に立つて、民本主義乃至他の思想の文化史的意義を徹底的に闡明すると同時に、その本來の方向を指導して文化的使命を完からしむることが、最も必要なことであると思ふ。この點から見れば、雜誌『文化運動』三月號に發表された左右田喜一郎博士の『文化主義を提唱す』(並にデモクラシーに對する徹底的批評)といふ論文は、吾々及び現代文化の大に傾聽すべき價値のあるものである。(尙博士の外に『文化主義』を論じて居る人も二三見ゆるやうであるが、余はそれらの人の說は未だ讀んでゐないから、玆には左右田博士の『文化主義』について、その所感を述ぶることにする。而して博士の論文は決して散漫な漠然としたものでなく、頗る纒まつたそして判然(はつきり)したものであるやうに思ふ)。

二、左右田博士の『文化主義』

今博士の『文化主義』のいかなるものであるかを理解するために、先づ博士がいかなる要求によつて、言ひ換へれば、いかなる哲學的根據によつて『文化主義』なるものを提唱するに至つたかを吟味して見よう。現代の文化においては、その眞正な文化史的意義を獲得せんとする凡らゆる思想乃至運動の起りつゝあることは、前述の如くであるが、そしてそれらの思想及び運動の最も力強い指導的原理として、民本主義の存在することも一般に認められて居ることであるが、是等の思想及び運動に對して、更にそれらの根據である民本主義に對して、新たに『文化主義』を提唱するには何等かの根據がなければならぬ。否嚴密な意味において、現代文化における凡らゆる思想乃至運動に對して超越的な、而かも認識論上必然的な哲學的根據がなければならぬ。否らざれば博士の謂はゆる相對的な感情論に陷らざるを得ない。然らばその根據はいかなるものであるか、この根據を明かにすることが、やがて博士の『文化主義』を理解する根本契機をなす

ものである。

博士は吾々の有する思想上の凡らゆる主義、例へば官僚主義、軍國主義、侵略主義、帝國主義、或は民本主義、平和主義、自由主義、進歩主義、非侵略主義と云つたやうな多くの主義は、單に思想上若しくは文化上に共存並列して居るのでなく、そは互に相排擠して自他の優劣を決せんとするもの、即ちそは吾々の思索的乃至文化史的要求に對して、取捨選擇の可能を認容し、且つその文化史的價値の承認を要求して居るものであるから、吾々が是等の主義に對してその價値の正當な批判をなすには、言ひ換へれば、それらの主義の要求をして「論理上に根據あらしむる」ためには、一層高汎なる立場即ちこれらの主義に對して「内在的にして且つ超越的な」立場を求めなければならぬ。詳しく云へば、吾々が「Aの主義を排してBの主義を採り、又はBの主義を斥けてAの主義につかんとするには、即ちAそのものにもあらず、又Bそのものにもあらぬ立場に在つて、A及びBを顧みるものでなければならぬ。而も此の如き第三の立場は、一方のA、Bの如き内容を超越すること無論でありながら、他方又此の如き内容に密接の關係がなければならぬ、此等の内容と全く絶緣されてあつてはならぬ、換言すれば、此の如き立場は批判哲學の語を借りて曰へば、内在的にして而かも超越的ならざるべからずといふことが出來る。今官僚主義、保守主義、軍國主義乃至民主主義、進歩主義、自由主義を論ずるものにして、其の一を排して他に與みせんとするものが、その論ずる所をして論理的に有意義ならしめんとするならば、今言ふた意味に於て、此等の主義に内在的にして而も此等の主義を超越する立場を見出すことを得るものでなければならぬ」といふ、高遠なる批判哲學の見方から、更にかくの如き立場の哲學的意義に言及して、博士は斯う言つて居る。

「今、吾等が當面の問題とせる一主義を貶して他主義を擧ぐるに當つて、此如き價値判斷をなすは必要なる論理的『ア・

プリオリ』たる規範、當爲は、此等の內容が依つて以て上下の等督をなして、一義的に一列に配置し得べき極の目標でなければならぬ。即ち此等の內容たる諸主義を或る一定の觀點から見て、之を純化しつゝ進む過程の窮極に立てる一個の『イデー』でなければならぬ。余が他の機會に於て述べた語を借りて曰へば、此の如き『ア・プリオリ』は『內容を純化する過程に於て、其の一方的高昇の極限概念として見るべき『イデー』であり、『ゾルレン』(當爲)であり、『ノルム』(規範)である。——此の如き『ア・プリオリ』が立てられ、凡らゆる文化史上の主義は之に照されて價値の判斷が行はれ、或は此の如き『ア・プリオリ』を實現すべき使命を有するものとして、或は之を阻害するものとして、一を採りて他を棄つべしとの根基が適確となることを得るものである。」

然らばかくの如き『ア・プリオリ』、即ち哲學的立場は、吾々の有する思想上の主義に對して、いかなる意義を有するものであるか、博士の所謂『文化主義』といふものと斯くの如き立場とは、いかなる關係が存するか、『文化主義』は果してかゝる高遠なる立場に立ち得るものであらうか。博士は更に論及して、「此の如き『イデー』あつて、此の如き『ゾルレン』あつて、吾等の現今の社會が有する各般の主義は、一々之れによつて其の文化史的價値判斷を受け、或るものは吾等を文化の極致に導くを阻害する所以なりとして之れを撲滅せざるべからず、或る他のものは之れに反し歩一歩、吾等を文化の歸趣に近づかしむるものなるが故に之を育成せしめざるべからずとして、其の間に取捨選擇を可能ならしめ、依つて以て吾等が有する人文の趨く所を察せしめ、且之を悟らしむることを得べきものである。逆言すれば、吾等が有する人文史上の諸價値を純化し、一方的高昇の過程を極致に導きたる時、其の極限に立つて吾等が人文史上の凡らゆる努力に對して、其の目標となり得るものは、所謂文化價値即ち是れである。余は今此の如き論理上の普遍妥當性を具有する文化價値の內容的實現を希圖する、謂はゞ形而上學的努力を呼んで玆に文化主義と言はふと思ふ」と言つて居

る。

以上に述べたところによつて、博士が新たに『文化主義』を提唱するに至つた動機が明かになつたと思ふ。即ち博士の『文化主義』提唱の論理的根據は、言ふまでもなく『文化主義』そのものゝ論理的根據であり、そしてかゝる論理的根據は即ち批判哲學の立場であるといふことも明かであらう。詳しく云へば、『文化主義』は吾々の有する凡らゆる思想上の主義に對して、内在的で而かも超越的『ア、プリオリ』の立場であり、從つてそは凡ての主義の批判的根據として論理的普遍妥當性を有つて居る、言ひ換れば、官僚主義、民本主義乃至他の凡らゆる思想は、「悉く文化主義に來つて而して其の批判の規準を此處に求めざるを得ない」といふところに、『文化主義』存在の、又それを提唱せねばならぬ唯一の根據があり得る。そしてかゝる根據を有する批判的規準としては、『文化主義』を措いて他に求め得ないといふのが、博士の主張である。

三、文化主義と人格主義

余はもつと博士の『文化主義』を具體的に理解する爲めに、『文化主義』がその論理的根據として内有する、若しくは具體的實現の目標として有する文化價値の何たるかを、明瞭に掴んでおきたいと思ふ。尤も文化價値は前に述べた批判哲學の立場から云へば、一種の『ア・プリオリ』としてのイデーであり、當爲であり、極限概念であるけれども、吾々が有する具體的な文化そのものから見て、そはいかに解すべきであるか。これは文化そのものゝ意義によつて理解されることゝ思ふが、文化は價値實現の過程であるから、文化の歸趣即ちその高昇的過程の極限に立てるイデーが文化價値であると云へば、充分に理解し得られる。しかしこれは文化を價値實現の過程と見て、その終局に立つべき或るものを豫想したのが文化價値であり、或は豫想された文化價値を實現して行く過程が眞の文化であるといふことに理解され易い。

孰れでもよいが、前者ならば文化は何故に價値實現の過程であるかといふことが問題になり、從つて文化價値は夙に豫想された形式的概念であつて、吾々の形而上的努力を要求すべき何等の實質内容も有つてゐないものになり、後者ならば文化は何故に文化價値を實現せねばならぬかといふことが問題になると思ふ。これは極めて解り切つた問題のやうであるが、そして價値といふものを何處までもイデーとしてゾルレンとして立する、博士の價値哲學の立場からは、何も問題にすべきほどのものでない自明的なことであるかも知れぬが、しかし尠くとも或る種の讀者にとつて問題になる以上は、もつと徹底的にそしてもつと吾々の具體的要求に即して說明せねばならぬと思ふ。博士の解するところによれば、文化は云ふまでもなく價値實現の過程である、即ち「何等かの意味において與へられた自然の事實を或る、一定の規範に照して之を純化し、窮極に於て其の理想とする所を實現せんとする過程の全體」が文化である。文化價値は即ちかかる「文化をして意義あらしめる當爲」である。けれども、文化は既に價値實現の過程であるならば、その「當爲」としての文化價値を内在的根據として先有するといふことが出來る、即ち文化は文化價値によつて意義あらしめらるゝものでなく、却つて文化價値こそ文化の過程によつて豫想されたものといふことが出來る。何故なれば文化を價値實現の過程と見る限り、既にそれ自身の内に獨立の意義を有するものであつて、そしてこの獨立の意義は内面的創造力として具體的に活動しつゝあるものであつて、單に吾々がそれを文化の歸趨として、若しくは理想として反省するとき、初めて當爲即ち文化價値として意識され、且つ理解されるものであるから。

博士が更に文化價値と人格との關係を論ずるにおいて、漠然とした文化價値の概念が稍々明瞭になつたやうに思ふ。博士は次のやうに言つて居る、「一切の人格は此の如き文化價値實現の過程に於て、一以て他に代置し得べからさる、其れ自らの價値を保有し得ると見らるゝに於て、語を換へて曰へば、一切の人格は文化の生產、創造にたづさはることに

よつて、其れ自らの重要と價値とを發揚するに於て、其れ自身固有の意義が有し得られる。人格とは文化價値と相對してのみ意味がある、文化價値は其れ自らの論理を內在的に含み得る客觀であり、人格は之れをして抑々意味あらしむる主觀である。人格なきの文化價値はなく、文化價値なきの人格はあり得ない。——此の如き意味に於て解せられたる一切の人格は、文化價値實現の過程に於て、假令其の中の一箇でも其の過程の表面以下に埋沒せらるゝことなく、悉く皆その表面に於て其れ自身固有の位置を占め、一義的且つ一律的に一列に配置せられ、而して其の究局に於て、假として目標たり規範たる文化價値が立ち、而かも其の有する論理的普遍妥當性が此等一切の人格によつて、事實上にも內容的にも實現せらるゝことを求むるものは、即ち余が茲に提唱せんとする文化主義である」と。だから博士の『文化主義』は又人格主義であるといふことが出來る、即ち「文化價値の哲學を基礎として、一切の人格、一切の文化を承認せんとする」人格主義である。言ひ換へれば、「各々限られた範圍における文化所産の創造にたづさはることを透して、個人々格の絕對的主張に普遍妥當性を與へんとするに於て」、『文化主義』は即ち人格主義である。

余は最後に、博士が以上に述べたやうな『文化主義』の立場から、吾々が現下の生活乃至文化において、當面の問題として居る民本主義に對していかなる態度を採つて居らるゝかを見ようと思ふ。博士は次のやうに論じて居る、「限られたる一部の人生觀を以て全部に强ひんとする官僚主義、軍閥主義を蛇蝎の如く忌み嫌ふ文化主義は、又民衆一般の假面の下に、假令大多數なりとは云へ、單に無特權階級を以て特權階級に代置せんと企つる社會民主々義を斥けざるを得ない。」「眞正の民主々義は、無特權階級のみならず、現在の制度が存續するならば常に見らるべき樣の特權階級の凡て、即ち換言すれば一切の人格が文化價値なる規範の實現過程に於て、其の表面の上に各々其の固有の位置を占め得べきものでなければならぬ、即ち眞正の民主々義は差別主義の上に立つ民主々義でなければならぬ。而してこの場合に於て一切

の人格が承認せらるゝことを要求するが故に、其の規範實現の過程の表面の下に埋沒せらるゝ如何なる人格も、無きに至るといふのが理想でなければならぬ、限られたる民主々義の排すべきは、尙官僚主義の排すべきと程度上の差こそあれ、其の性質全く同じ。——吾等の要求するは反之、人格の自由である、自由なる人格の自己發展、創造である。而して是ぞ言ふまでもなく文化本來の意義である。文化は人格の目的論的原理の完成せらるべき位置である、哲人主義、官僚主義、民主々義は、此の目的に對する手段として考へられ得べき範圍に於ては、是認せらるべき其れの根據はあり得る」と。かくして『文化主義』は民本主義乃至その他の主義に對して論理的基礎を與ふると同時に、凡ての文化史上の思想及び主義は皆その『文化主義』の上に立つて眞正の批判的根據を仰がねばならぬものである。

四、セオリーとしての「文化主義」

左右田博士の『文化主義』については尙注意すべき點もあるが、しかし大體以上の所論によつて、『文化主義』の意義及び内容が畧ぼ明かになつことと思ふ。吾々は賢明なる博士が該主義を提唱された態度の、いかにも徹底的で且つ高遠なる思索に基かれたものであるといふことに、多大の敬意を表すると同時に、その主義が「內在的で而かも超越的な」批判的立場に根柢をおき、從つて確固たる論理的妥當性を有して居ることを、充分に認めざるを得ない。即ち博士の所謂『文化主義』が形式上論理的普遍妥當性を有して居るといふことについては、何人も否定し得ないところであらう。何故なれば『文化主義』の立場が博士の言はれる如く「內在的にして而かも超越的」なる論理的『ア・プリオリ』であるとすれば論理上かゝる立場を外にして嚴密な普遍妥當性を有し得るものがあり得ないからである。だから『文化主義』を一の『Theorie として或は一の Anschauung として見るときは、完全なる論理的確實性を有するものといふことが出來る。かゝる立場を有するものにして初めて、現代思想界の凡らゆる主義及び主張に對して、眞正な批判的規範たることが出

來、又凡ての主義及び主張はかゝる規範の嚴密なる價値判斷によつて、自己の意義及び價値を決定することが出來る。何等嚴密なる批判的根據に基かず、又何等高遠なるそして普遍的なる理想を有せざる主義及び主張は、文化史上決して價値を有するものではない。殊に現代の如く、思想乃至生活に對する凡らゆる主義及び運動が簇生する緊張した時代において、そしてそれらの主義及び運動が何等嚴密なる思索に基かず、たゞ徒らに民衆の附加雷同を求めて空騷ぎする非論理的な時代において、『文化主義』の如き批判哲學の立場に立てる高遠なる論理的思想の必要なるは言ふまでもない。卽ち吾々は『文化主義』の「內在的にして而かも超越的」な立場に立つて、思想界の凡らゆる主義及び運動を忌憚なく批判し、そして文化史上何等の價値もないところの思想主義は、ドシ〳〵撲滅して行かねばならない。

然らば『文化主義』は、現代の思想界における凡らゆる思想及び主義に對する價値判斷の根據として、果して完全なものであらうか。吾々は『文化主義』の批判によつて、凡らゆる思想及び主義の文化史的意義を完全に且つ具體的に決定し得るであらうか。言ひ換へれば、一のセオリーとして若しくは一の見方として論理的確實性を有すといふ其のことが、直ちに吾々の形而上的要求を滿足せしめ得るものであらうか。勿論『文化主義』が批判哲學の根據に立つてゐる限り、凡らゆる思想及び主義に對して論理上確實な、そして普遍妥當的な價値判斷をなすであらう。而かも論理上確實な價値判斷といふそのことが、生活乃至文化における吾々の根本要求であらうか。博士の言ふが如く、人間は一片の感情論で動くものではない。しかし又必ずしも一片の論理のみで動くものでもないと思ふ。感情は必ずしも論理を斥くるものでなく、論理は又必ずしも感情を斥くるものではない。論理と感情とは相俟つて全體的價値を具體化するものである。感情が價値の實質であるとすれば、論理は價値の形式であるといふことが出來よう。從つて吾々の具體的に要求するものは必ずしも價値の形式ではなく、却つてそれと同時に價値の實質をも要求するものであることは否定出來ない。この點か

ら云へば、論理的普遍妥當性を有する『文化主義』は、一のセオリーとして完全であるに拘らず、必ずしも吾々の形而上的乃至文化史的要求を滿足せしめないところがあるといふことが出來る。

然らば『文化主義』が吾々の根本要求を滿足せしめないところのものは、何であるか、それは感情を斥くるためであるか、否、一片の論理に籠城して居るがためであるか、否。余は『文化主義』の論理的確實性が、いかほどの内面的體驗を具有して居るかといふ疑問が。吾々の形而上的要求の滿足を阻害するものでないかと思ふ。尤も體驗といふことは各自の内面的自證に屬する事實であるから、『文化主義』には相當な體驗があると云へば議論のしようがないが、しかし眞に體驗言ひ換へれば、單なる靜觀的印象の如きものでなく、ベルグソンの言ふやうな創造的持續的直觀があるならば、『文化主義』はもつと具體的なそして創造的は色彩がなければならぬ、解かり易く言へば、『ア・プリオリ』たる規範を單にイデーとしてゾルレンとして理解するばかりでなく、もつと具體的に實質的に摑んで來なければならぬと思ふ。たとへば文化價値の如きものにしても、單に極限概念として理解した丈けでは、それは論理上假定されたものに過ぎないものであつて、實際上それを規範として價値判斷をするといふことは、隨分むつかしいことである。況してかゝる概念的な價値が吾々の形而上的要求を動かして、文化の上に具體的創造をやるといふことは到底考へられないことである。リツケルトが吾々の認識對象たる絶對價値は、一種の感情として體驗されなければならぬと言つて居るやうに、價値が價値として實現せらるゝには、吾々の必然的な根本要求として人格的に體驗されなければならぬ。否らざれば決してゾルレンとしての創造力を有つて來ることは出來ない、否、普遍妥當的な論理性すら有つて來ることは出來ない。論理は必ず體驗を背景とし根據として生命を有する。體驗は論理によつて具體化されるけれども、決してそれに支配されるものではない。否、論理こそ内面的必然的な體驗の反省されたものであるから、體驗がなければ論理はその具體的創造力を失はなければなら

ぬ。即ち若し論理が體驗を無視するとすれば、それは自己の根據たる創造力を否定するものである。この意味において體驗はその本性上、必ずしも論理を否定するものでなく、却つて論理は體驗の必然的具體的な發展であるが、論理は決して體驗を無視すべきものでないといふことが解かる。從つて體驗に乏しき若しくは體驗を重んせざる論理は、決して吾吾の根本要求を滿足せしめ得ないのみならず、それ自身の價値をも全體的に具體化することが出來ないと言はなければならぬ。所謂獨逸新カント派における論理主義の哲學の缺陷は、以上に述べた如き體驗若しくはベルグソンの所謂創造的直觀を認めない點にあると思ふが、それは兎に角、余が博士の『文化主義』に對して感じた不滿足は、以上の如き點にあることは事實である。

五、文化價値とその體驗

實際吾々は、博士の所謂文化價値なる漠然とした概念によつて、具體的に何物も摑むことは出來ない。尤もそれは極限概念としてのイデーであるから、かゝるものによつて具體的に何ものかを摑まうとするのは、するものが無理であるといへば其れまでゝあるが、しかし吾々が具體的に何ものも摑むことの出來ないものを、ゾルレンとしてノルムとして實現することが出來るであらうか。何ものも摑み得ない漠然とした陰影を根據にして、價値判斷をやるとは果していかなることであらうか。たとへば、「善は吾々の生活における最高の價値であり、當爲であるから、吾々はそれを必然的に實現しなければならぬばかりでなく、凡らゆる行爲はこれによつて批判されなければならぬ」と言つたにしても、若しその「善」なるものが吾々に具體的に乃至は人格的に體驗されなければ、吾々はそれを實現することも又批判の根據にすることも出來ないであらう、結局、それは一種の論理的遊戯に終らざるを得ないのである。吾々の文化においては、特殊の文化現象即ち學問とか、藝術とか、宗教とか、政治とかいふ活動の準據すべき特殊の樣式、言ひ換へれば、博士の

謂はゆる「文化の一方的所産たる文化財」をして發達あらしむる、特殊の價値が多く存在する。たとへば學問の準據すべき價値は眞であり、藝術のそれは美であり、政治のそれは法であり、道徳のそれは善であると言つたやうに、これらの特殊的な文化價値は、それ〲自己の領域たる文化の特殊範圍を規定すべき當爲であるとされて居る。然るにこれらの特殊的文化價値のいかなるものであるかについて、特殊的に研究するそれ〲の專門的科學があつて、その意義の決定においてすら中々容易に解決されない。況んやその實質の體驗といふことに至つては、殆んど何人も獲得し得ないところである。從つてかゝるものを根據にして、吾々の文化における複雜な現象の價値判斷をやるといふことは、實際において甚だ覺束ないことである。吾々の文化における特殊の價値においてすら、猶且つ然りである、況してこれらの價値の綜合たる、言ひ換へれば、特殊價値に對して「內在的で而かも超越的」な文化價値によつて、思想上乃至生活上における凡らゆる主義及び運動に對して、具體的に價値判斷をやるといふことは、理論上容易に言ひ得るとしても、實際上甚だ困難なことであると思ふ。

若し文化價値といふものを、吾々の生活規範として實現せんとしても、或は凡らゆる思想及び主義の批判的根據として價値判斷を正當にやらうとしても、それを吾々の必然的な根本要求として體驗し得ないならば、言ひ換へれば、もつと人格といふものに強烈に即して、內實的に具體的に掴み得ないものであるならば、そは畢竟陰影に均しいものものであらう。たとへ吾々の人格は「文化所產の創造にたづさはることによつて」、言ひ換へれば價値實現の過程において、「文化價値の論理的普遍妥當性を內容的にも事實上にも實現する」ことによつて、「其れ自身固有の意義」を發揮し得るとしても、若し吾々の人格が文化價値を內面的具體的に掴み得なかつたならば、そは人格に對して何等の創造關係をも持續することは出來ないであらう。若し強ひてかゝる價値を吾々の當爲として規範として實現せねばならぬとするならば、そ

してかくすることによつて人格本來の創造的意義を具體化するものであるとするならば、そが吾々の人格の必然的創造的な根本要求であることを徹底的に理解すると同時に、又强烈に內實的に體驗し味讀して居るものでなければならぬ。否らざれば、吾々の人格は陰影の把握に對して麻痺昏睡の狀態に陷えるであらう。認識論上若しくは論理上、一種の極限概念として豫想された文化價値が、吾々の具體的な根本要求として人格的に體驗し得ないことは、博士といへども認むるところであらう。從つて文化價値は一のセオリーとしてその論理性を認む得べしとしても、實踐的具體的には、言ひ換へれば、一のイズムとしてドクトリンとして、卽ち實行の原理として、その價値を認むることは出來ない。吾々の現に要求してゐるのは、一の論理的立場としての見方卽ち Anschauung ではなくて、ドクトリンとして强烈な體驗と創造力とを有つた實行的原理である。そしてかゝる實行的原理卽ち具體的な主義は、その本性上論理的普遍妥當性を有つて居ることは言ふまでもない。

余は現代の文化、詳しく云へば吾々の思想乃至生活の全體に貫流してゐる、强烈な根本要求の那邊に在るかを博士はいかに理解して居らるゝか、問はまほしく思ふ。現代人が眞摯に强烈に人格的に要求してゐるものは、決して概念的な抽象的なイデー論やア・プリオリ論や當爲論ではなく、却つてそれらの概念の創造的根據となつてゐる、具體的な體驗的な生命、そして吾々の人格が必然的に自發的に刻々展開し具體化しつゝある創造的原理そのものであるまいか。哲學はかゝる生命かゝる原理を反省して、或は概念化し或は規範化するけれども、吾々はこれを直接文化の上に具體化し事實化せんとするものである。そして勿論かゝる具體化には規範的原理の存存を豫想するけれども、そは決して一種の概念でもイデーでもなく、體驗的な生命であること言ふまでもない。體驗的な生命は凡らゆる價値の自發自展的創造力として、それ自身に論理的普遍妥當性を有つて居るものである、そして論理的普遍妥當性は前にも言つたやうに、價値の

形式であつてその實質ではない。だから現代文化の強烈に要求してゐるのは、價値の創造的實質であつてその形式ではないといふことが出來よう。實際吾々は形式的なイデー論には飽き〳〵してゐる。これ體驗の豐かなそして創造力に富んだ潑溂たるベルグソン哲學が熱狂的に歡迎され、獨逸流の峻嚴なそして形式的な論理主義の哲學があまり歡迎されない所以でないかと思ふ。かく言へばとて吾々は必ずしも論理を無視するものでもなければ、又は一片の感情論や常識論に妥協を貪らうとするものでもない。しかし前述の如く、論理は體驗によつて生命を與へられ、體驗は論理によつて具體化されるものであらから、言ひ換へれば、體驗と論理とは相俟つて全體的價値を構成するものであるから、一方を貶して一方をのみ擧ぐることは、吾々の形而上的要求を滿足せしむる所以ではない。一體吾々が何等かの價値判斷をしようとするには、その判斷さるべき對象を超越した一層高遠なる見地に立つて居ること、又立つて居るべき筈であることは事實である。貴族主義に對して民本主義を主張するにしても　社會主義に對して個人主義を高調するにしても、吾々が意識すると意識しないとに拘らず、それらの主義に對して「内在的で而かも超越的」な立場に據つて居ることは、吾々の要求發展の本性上必然的なことである。否らざれば吾々は何等の價値判斷も爲すことは出來ないのである。既に價値判斷を認むる以上は、何等かの『ア・プリオリ』を豫想せねばならぬことは當然であるから、今吾々が凡らゆる思想及び主義に「内在的にして而かも超越的な」立場を採擇するといふことは、單に吾々の事實的な價値判斷の方向を反省したものに過ぎない。この反省によつて吾々の價値判斷が創造的に具體化さるゝと思ふは、大なる謬見であらう。言ひ換へれば、吾々の思想乃至生活における凡らゆる判斷の批判的根據として、「内在的で而かも超越的」な『ア・プリオリ』が立せられねばならぬといふことは、批判哲學の入門における教科書的說明であつて、何も博士のむつかし議論に俟たなくとも、苟も何等かの價値判斷をやる位の人は皆承知して居ることである。そしてかゝる超越的な『ア・プリオリ』が果して文化價

値そのものであるか、或はその他のものであるかといふことは、各人の人格的體驗によつて定まることである。イデーとか當爲とかノルムとかいふ概念は、決して吾々の人格的體驗を支配すべきものではない。たゞ眞のイデーとしてゾルレンとして立せらるべき人格的體驗の内容が、果して如何なるものであるかといふことが、思索上乃至實踐上の根本問題である。要するに、現代文化における吾々の根本要求は、價値の形式にあらずしてその具體的實質である。概念的アプリオリにあらずしてその體驗内容である。文化價値といふことは一種の極限概念であつて、何等の體驗内容も示して居らぬ。

六、人格主義及民本主義に對する「文化主義」の態度

博士が文化價値と人格との關係に論及して、「人格は文化價値と相對してのみ意味がある、人格なきの文化價値はなく、文化價値なきの人格はあり得ない」といひ、從つて「文化主義は人格主義であり、ヒューマニズムである」と論定されて居る點は、吾々も至極贊成を表するところであるが、併し博士の說明だけでは却つて「文化主義」そのものを曖昧にした傾きがあると思ふ。文化價値は人格との關係によつて稍々具體化せられたやうに思はれるかも知れぬが、しかし人格そのものゝ意義が明瞭でない限り、依然として文化價値は抽象的なものである。余はこゝにも亦體驗の不徹底といふことを認めざるを得ない。「人格なきの文化價値はなく、文化價値なきの人格はあり得ない」といふことは、論理上至極結構であるが、そしてこれは吾々の文化における實踐的理想であるが、しかし人格そのもの、吾々の根本要求を具體的に表現すべき人格そのものを體驗的に把握してゐなければ、それは何のことか一向に理解されないであらう。人格は「一以て他に代置し得べからざる、其れ自らの價値を保有し得る」ものであるといふことは、カント以來いろ〳〵と言ひ換へられた說明であつて、そして人格の說明としては可なり完全なものであるが、しかしそれが抽象的概念的なものである

限り、人格の創造的本性は毫も損むことは出來ぬ。人格なきの文化價値はなく、文化價値なきところに人格も有り得ない―といふことは、徹底的な思索と鋭敏にして強烈な體驗とがなければ、その關係のいかに必然的で創造的でそして有機的であるか、言ひ換へれば、人格と文化價値との具體的關係のうちに、自發自展的に自己を展開し創造する生命のいかなる表現が在るかは、到底理解されないであらう。殊に純粹にそれ自身の要求と價値とを內有する獨自的な人格が、何故に文化價値の普遍妥當性を實現せねばならぬか。文化の所產及び創造にたづさはり、そして文化價値を實現することが、いかにして人格本來の意義及び價値を發揚する所以であるかは、人格そのものに對する徹底的體驗がなければ、說明することも理解することも出來ない。吾々の形而上的な根本要求たる人格の必然的發展が、いかにして論理的普遍妥當性を有する文化價値として規範化され得るか、又文化價値はいかにしてその普遍妥當性の實現を人格に對して要求し得るか、といふ創造哲學上重大な問題は、到底一片の論理性を弄する價値哲學の說明し得るところでなく、前に述べた現代文化の熾熱な創造的な根本要求を具體的に體驗し得るものにして、初めて徹底的指導的に理解する事が出來ると思ふ。

若し人格といふものが文化價値と同じく、「內在的でそして超越的」な『ア・プリオリ』の立場を表現するものであるならば、從つて『文化主義』は眞正な人格主義であるならば、何故に人格主義を外にして新たに『文化主義』を提唱せねばならぬ理由があつたらう。何故に『文化主義』を措いて他に「內在的で而かも超越的」な立場はなく、凡らゆる思想及び主義は悉く玆に來りてその批判を仰がねばならぬと高調する必要があつたらう。漠然とした文化價値を標榜して曖昧な『文化主義』を新造するよりも、むしろ從來認容されてゐた人格主義を一層徹底的に、そして一層創造的に主張した方が、却つて文化の要求に對して適切ではなからうか。尤も『文化主義』は人格主義によつて具體的に意義あらしめらるゝものであり、そして普遍妥當的な文化價値を規範とするものであるから、それは後者よりも一層高汎な立場であり、そして又人格

主義は以上の如き『文化主義』によつて基礎づけられた、一層根柢の論理化された新人格主義であるといひ得るかも知れぬ。けれども之は要するに言葉の綾、若しくは説明の巧策に過ぎない、『文化主義』が人格主義に比して一層高調せられ、論理化さるべき根據とはならない。若し『文化主義』は人格主義によつて基礎づけられ、そして人格主義は又『文化主義』によつて基礎づけられるものとすれば、博士の立場からすれば、二主義よりも一層高遠な普遍的な立場、即ち『文化主義』及び人格主義に對して「內在的で而かも超越的」な立場に立たねばならなくなるだらう。若し又人格主義が『文化主義』によつて基礎づけられて初めて根據があるとするならば、それは眞正の人格主義といふことは出來ない、何故なれば眞正の人格主義は、それ自身に獨立の要求と價値とを內有する創造的人格を根據として居るものであるから。要するに「文化主義は人格主義である」といふことは、相互の根據を確實にするやうに見えて、實は却つて孰れの根據をも薄弱にし曖昧にするものである、若しこの相互の曖昧を除去して而かもその關係の必然的創造的であることを理解するには徹底的なそして人格的な體驗を必要とする。

以上の所論と關聯して、余は尚最後に、民本主義に對する博士の態度のいかにも不徹底であることを看過することは出來ない。民本主義の文化史的意義に對して、博士がいかほどの理解と同情とを有つて居らるゝかは不明であるが、しかし民本主義に對して一言その道德的乃至宗教的意義に論及するところ無かつたのは、甚だ物足らなく感じられた。たとへば個人主義といへば社會主義や團體主義に對するものと解せられる如く、民本主義はたゞ貴族主義や官僚主義に對してのみ意義を有し、從つてそれは他の主義と共に相對的な感情論に立脚して、何等普遍的な論理的根據を有つてゐないと解するは、決して民本主義の文化史的要求を認容する所以ではないと思ふ。若しこれらの思想及び主義が互に感情的相對論に立脚して居るものであるならば、言ひ換へれば、個人主義は團體主義や社會主義の滅亡と共に滅亡し、民本

主義は又官僚主義や貴族主義の弊害と共に滅亡するものであるならば、『文化主義』[illegible]らう。余の解するところによると、個人主義は團體主義が滅亡しても尚永遠に存續し、民本主義は貴族主義が滅亡しても尚永遠にその文化史的使命を有するものと思ふ。これ個人主義や民本主義は文化史的發展の特殊段階に在るに拘らず、價値發展の體驗的內面性から見て、何等か永遠なる普遍的根據を有するからであるまいか。言ひ換へれば、吾々は新たに『文化主義』を標榜して文化價値を立てなくとも、既に個人主義乃至民本主義のうちに、「內在的にして而も超越的」なア・プリオリを單なるイデーとしてゞなく、却つて人格的創造力として具體的に體驗して居るものであると思ふ。この意味からいふと、單に民本主義を貴族主義や官僚主義に對する相對的なものと見るよりも、むしろ民本主義の體驗的內面性を指摘して、その創造的な文化史的意義を闡明することが、現代文化の要求から見て必要なことだと思はれる。博士の解するやうに、眞正の民本主義は「一切の人格が文化價値なる規範の實現過程に於て、其の表面の上に各々其の固有の位置を占め得べきものである」とすれば、これ眞の人格主義である、人格主義は卽ち『文化主義』であるから、民本主義も亦『文化主義』であると言はねばならぬ。さうすと人格主義も民本主義も『文化主義』の代用を爲し得ることになるから、『文化主義』の提唱は畢竟無意味に終りはしないだらうか。

デモクラシーと我歴史

法學博士　中田薫

「デモクラシー」なる語は元來、「デモス」(平民)「クラタイン」(支配)なる希臘語より出でたもので、已に希臘時代に於て法律的と政治的と兩種の意義を有して居たのである。例へばアリストーテレスは或る場合には此語を法律的意義に用いて、主權が民衆の多數に屬する國家組織(民主國體)の意味に使用したこともあるけれども、最も多くの場合に於ては寧ろ之を政治的社會的意義に用いて、貧民階級が政治の實權を執れる政治的狀態即ち貧民政治を指して「デモクラチア」と稱したのである。彼の有名なる國家分類論に所謂「デモクラチア」なるものも實は後の意味であつた。即ち彼は國の政治的支配が一人の手に在るか、少數人の手に在るか、將た又た多數人の手に屬するかに從て、國體を三類に分ち、更に各類を政治の目的が民衆一般の幸福を圖るに存するか、又は治者の私利を計るにあるかの標準に從て、正體と變體との兩種に區別し、そして三正體を「バチライア」(君主政治)「アリストクラチア」(貴族政治)「ポリタイア」(良民政治)と名づけ、これに對して三變體を「チランニス」(暴君政治)「オリガルキア」(富者政治)及び「デモクラチア」(貧民政治)と稱したのであるが、此場合に於ける「デモクラチア」は民主國(法律的)に於て中産階級が中心となつて一般民衆の利益の爲めに行ふ政治即ち「ポリタイア」に對して、貧民が中心となつて彼等の私利私慾を目的として行ふ政治を指したものに外ならぬ。

併かしアリストーテレスの如く「デモクラチア」なる語に貧民政治の意味を持たしむることは希臘に於ても一般ではなかつた。寧ろ彼の所謂「ポリタイア」の意味に之を使用することが普通であつた。それ故に彼よりも遙か後世の人ではあるが、「ストア」哲學の流を酌める有名な歴史家ポリビウスの如きはアリストーテレスの國家分類論を祖述したに拘はらず、一般普通の用語に從て前記の三正體を「バジライア」「アリストクラチア」及び「デモクラチア」と呼び、これに對する三變體を「デスポタイア」「オリガルキア」及び「オクロクラチア」と稱して居るのである。

ことを要する。「デモクラシー」なる語は[illegible]時代に於て已に二重の意義を有し、法律上に於ては國の主權が多數人に屬する國家組織を、政治上に於ては多數人が中心となつて行ふ政治を意味して居たものである。

希臘人によつて法律的よりも寧ろ政治的意味に於て屢々繰返された「モナルキー」、「アリストクラシー」及び「デモクラシー」なる語に對して、確定的に法律的意味を附與したものは實に第十六世紀の有名なる佛國王權論者ジヤン、ボーダンであつた。彼はアリストーテレス等の國家分類法を不精確であると難じ、國家はその主權が一人に在るか、少數者に在るか、或は多數者に屬するかの點を標準として區別せねばならぬと主張したのであつた。これより以降右三語は憲法論としては主權の所在に繫る國體の種別として今日迄學者の間に使用されて來たのである。

併しこれが爲めに「デモクラシー」なる語は近世に至てその政治的意味を全然失つた譯では無い。今日に於ても尙依然として政治上の一主義一主張として政論家政治學者の間に洽く使用されて居るのみならず、その意味も亦た希臘時代に於けるよりも複雜多樣になつて來て居る。卽ち此語は或は民衆を中心とする政治とか民意を基礎とする政治とか云ふ樣な充分の意味に使[illegible]か、民意を政治上の一要素たらしむ[illegible]意味に使用されて居る。今日君主國に於て主張さるゝ「デモクラシー」なるものは、最も普通に後の意味を有するものである。蓋し極端なる民意政治、充分の意味に於ける平民政治なるものは民意卽主權である所の民主國(法律的デモクラシー)に於てのみこれを行ふことを得るもので、主權が君主一人に屬するの國體とは互に相容れざるの思想であるに反し、或る程度に於て民意を尊重し、これを實際の政治の上に發現せしむることは君主國體の觀念と毫も背馳する所でないからである。否近世に於ける所謂立憲君主政治なるものは、君主獨裁政治に加味するに後の意味に於ける「デモクラシー」を以てしたるものに外ならぬのである。

年來我日本に於て一部の人士の間に主張さるゝ民主主義なる語は、法律上に於ける「デモクラシー」(民主國體)の譯語では無く、全く政治的「デモクラシー」然かも制限的意味に於ける「デモクラシー」の譯語であると自分は確信して居るのである。併しながら已に「デモクラシー」と云ふ語には前に述べた如く、古來多種の意味があるのみならず、民主々義と云ふ語が如何にも君主國體に反對する主義の如く誤解さるゝ虞があるの

で、近時此語に代ゆるに民本主義と云ふ語を以てすることが流行して來た。併かし嚴正なる政治論から言へば民本主義と民主主義とは決して同一物では無いのである。何となれば所謂民本主義は一般民衆の安寧幸福を目的とする政治の謂で、必ずしも此目的を達するが爲めに民衆をして政治に參與せしむることを要するものでは無いからである。前述の如くアリストーテレスは獨裁政治を治者が一般民衆の幸福を圖ることを目的となすか、或は自己自身の私利を計ることを目的となすかに從て君主政治と暴君政治とに區別し、ポリビウスも亦た『眞正の君主政治は被治者任意的理解を基礎とし、威嚇と權力とよりも多く理性に依て支持さるゝ政治』であると說いたが、これは民本主義の獨裁政治であると云ふことは出來るが、民主主義の政治であるとは云へない。又た支那の儒教は民は之に由らしむるべし之を知らしむべからず、と云ふことを以て政治の原則として居るから、民主主義を容るゝの餘地は無いけれども仁政を行ふことを以て王者の政と解して居る點に於ては明らかに民本主義であると云へる。勿論民主主義も民衆の安寧幸福を圖ることを以て目的となすものであるから、仁政主義と同樣に民本主義の一形式否仁政主義よりも遙かに進步した民本主義の一形式であるには相違無いが、これが爲めに兩者を全然同一視することは論理上底到許されない。

近世往々民本主義は我日本の歷史に存在して居たか否やと云ふ樣な議論を耳にするが、若しもその民本主義にして前述の仁政主義を意味するものならば、我王朝の政治は總てこれを民本主義であつたと云へる。その例證は幾らでもあるが、僅かにその一端を擧げて見るならば、先づ第一に歷代の天皇は皇位を以て御一身の私位では無くこれを皇祖皇宗より承けて皇子皇孫に傳ふべき公けの位であると考えて居られた。例へば光仁天皇の寶龜三年五月皇太子他戶王を廢し給ふ詔に

『其高御座天之日嗣座ハ吾一人之私座ニ非ズトナモ所思行(オモホシメ)ス』

とあるが如きその一證である。從て第二に天皇が此高御座にまし〲て行ひ給ふ國の政治も亦た御一身の私事では無くて宗祖より委囑された公けの職分であらねばならぬ。天平寶字二年八月淳仁天皇卽位の詔に

『掛マクモ畏コキ現神(アキツミカミ)ト坐ス倭根子天皇我皇此天日嗣高御座之業ヲ拙(ツタ)ナク劣(ヲヂ)ナキ朕ニ被賜(タマハリ)テ仕奉レト仰セ賜ヒ授ケ賜ヘ頂キニ受ケ賜リ恐(カシコ)ミ受ケ賜リ懼(ヲヂ)進モ知ラズニ退モ知ラズニ恐(カシコ)ミ坐(マス)クト宣リタマフ天皇ガ勅ヲ衆(モロモロ)聞食ヘト宣ル』

寶龜元年八月光仁天皇卽位の詔に

『掛マクモ恐キ奈良宮ニ御宇倭根子天皇去八月ニ此食國天下之業ヲ拙ナク劣ナキ朕ニ被賜而仕奉レト負セ賜ヒ授ケ賜フ天皇ガ詔旨ヲ頂キニ受ケ被賜リ恐ミ受ケ被賜リ懼進モ知ラズ退モ知ラズニ恐ミ坐クト勅命ヲ衆ロ聞食ヘト宣ル』

とあるが如きは如何に歴代の天皇が國の政治を以て天下の重事と視られ、常に恐懼措く所を知らざるの態度を以てこれを繼承されたかと云ふことを證して餘あるものである。此の如く皇位は公座であり政治は天職である以上、第三に政治の目的は民を愛撫しその幸福を圖るに在りと考えらるゝことはもとより當然のことゝ云はねばならぬ。即ち文武天皇即位の詔に

『此天津日嗣高御座之業ト云々倭根子天皇命ノ授ケ賜ヒ負セ賜フ貴キ高キ廣キ大命ヲ受ケ賜リ恐坐シテ此ノ食國天下ヲ調ヘ賜ヒ平ケ賜ヒ天下ヲ公民ノ惠ミ賜ヒ撫テ賜ハムトナモ隨神所思行サクト詔フ天皇カ大命ヲ諸ロ聞食ト詔ル』

慶雲四年七月元明天皇即位の詔に

『遠皇祖御世ヲ始メテ天皇ガ御世御世天ツ日嗣ト高御座ニ坐テ此食國天下ヲ撫テ賜ヒ慈ミ賜フ事ハ辭立ニ在ラズ人祖ノオノガ弱兒ヲ養治ス事ノ如ク治メ賜ヒ慈ミ賜ヒ來ル業トナモ隨神所念行ス』

神護景雲三年十月稱德天皇の詔に

『畏ニ謂タマヘドモ天下ノ政事ハ慈ヲ以テ治ムベキ物ニ在リ上ハ三寶ノ御法ヲ隆シメ出家道人ヲ治メマツリ次ハ諸天神地祇ノ祭禮ヲ絶タズ下ハ天下ノ諸人民ヲ愍給ヘ云々』

その他同樣の勅語は屢々史上に見えて居る。我王朝の政治が民利民福を圖ることを以てその目的となす所の民本主義（仁政主義）の政治であつたことは以上の三點から見て些少の疑をも容れぬ所である。而して此思想は近代に於ても充分に表明されて居るのである。例は明治天皇が明治元年三月十四日下された億兆安撫國威宣布の御宸翰に

『今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得ザル時ハ皆朕ガ罪ナレバ今日ノ事朕自身骨ヲ勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始テ天職ヲ奉ジテ億兆ノ君タル所ニ背カサルベシ』

とあるを見るべしである。

若しそれ民衆をして政治の上に分前を持たしめよ、民意をして政治の一要素たらしめよとの主義即ち政治的「デモクラシー」（民主主義）に至つては維新の時迄は我國に發達するの機會が無かつたことは事實である。併しこれを以て維新後に於いて歐米から輸入し移植した新思想であると解することあらば、維新そのものゝ歴史と意義とを無視した一大誤謬と云はねばならぬ。何

となれば維新の鴻業は幕末に於ける公議輿論の裡に生れ出で明治に於ける輿論政治を產み出したものであるから、王政の復古であると同時に王政の民本化(政治的)である。而して此輿論政治たるや、歐米に於ける自由民權論の模倣でも無ければ、天賦人權說の移植でも無く、又た主權在民論の感染でも無い。公議輿論の力に依て遂行された王政復古の大事業に伴つて自發的に發達し來つた維新史の副產物であることは當時の歷史を繙くものゝ皆首肯する所であらう。横井小楠は已に文久二年に德川幕府の總裁職たる松平春嶽公に對して『大開言路、與天下爲公共之政』ことを建言し、慶應二年には幕府の爲めに『大變革之御時節なれば、議事院被建候筋尤至當也、上院は公武御一席、下院は廣く天下之人才御擧用』との意見を開陳して居る。若しも維新當時の輿論政治に多少なりとも外來的影響が加つて居るとするならば、そは如何にして此政治を行ふかの形式問題に就てゞあつて、此思想の內容そのものは全然自發的であつたのである。

明治元年二月十日各藩より貢士を徵するの御沙汰書に『右ハ今般王政御一新爲仰出輿論公議ヲ執候御趣意ヲ以テ各藩ヨリ貢士トシテ太政官ヘ差出候樣被仰出候條其御趣意ニ相基キ國々國論ニモ可相代者人選有之差出候樣御沙汰候事』とあるのは維新の後に於て輿論政治卽民意政治を實行した抑の始と云ふべく、而して翌三月十四日の所謂五個條の御誓文の第一條に『廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決ス可シ』とあるは輿論政治を我國是として原則的に宣明あらせられもので、今日の言葉を以て云へば正に民主主義(政治的)を我國是として公認されたものに外ならぬ。自分は前に制限的意味に於て民主主義とは民衆をして政治に參與せしめ民意を以て政治の一要素たらしむるの主義であると云つたが、右御誓文の趣旨も亦正に此に在つて存したことは、維新の元勳木戶孝允が之を解釋して『向者戊辰の春東北未ダ平定セザルノ際百官有司及諸侯伯ヲ闕下ニ集メ皇上親ラ天神地祇ニ祈リ誓言五條ヲ制シ之ヲ天下ニ頒ツ……但文明ノ國君主擅制ヲ得ズ闔國人民一致協合共ニ其意ヲ致シ以テ國務ヲ條例シ而シテ後其裁判ヲ課シ之ヲ一局ニ委托シ名テ政府ト謂フ……若シ夫レ人民未ダ文明ノ化ニ浹洽セザル如キハ則暫ク君主ノ英斷ニ依リ以テ民意ノ協合スル所ヲ逆ヘ而シテ國務ヲ條列シ其裁判ヲ有司ニ課シ以テ漸ク之ヲ文明ノ域ニ導ク是自然ノ理ナリ……恭ク惟ニ前日詔旨天下ヲ以テ皇家ノ私有トナサズ民ト偕ニ居リ民ト偕ニ守ルヲ誓フ夫レ天下ノ事務一トシテ天下ノ人民ニ關涉セザルナケレバ則天下ノ人民亦自カラ天下人民ノ盡ス可キ務メアリ皆只循々然朝令ヲ聞テ奔走シ意ヲ受テ升降スルノミニシテ可ナラン

ヤ』ト云ひ、明治元年八月四日[illegible]ニ[illegible]

ニ於テ政體一途人心一定スルニ非レバ何ヲ以テ國體ヲ持シ紀綱ヲ振ハンヤ故ニ於テ大ニ政法ヲ一新シ公明列藩及四方之士ト與ニ廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スルハ素ヨリ天下之事一人之私スル所ニ非ザレバナリ』とあるに考へて見ても明白であるが、尚ほ此輿論公議政治の原則がその後如何に發展して行つたか、その經路を辿つて見れば一層顯著となつて來るのである。

自分の見る所によれば、右五個條御誓文の後に於ける輿論政治の發達には大體に三時期を劃することが出來ると思ふ。その第一期は政體書及公議所の時代である。五個條御誓文を頒たれた翌月卽ち四月の廿七日に歐米三權分立の思想に基きて定められた政體書なるものを頒布したが、これによれば立法權は議政官に屬し、議政官は上下兩局より成り、上局は議定參與を以て議員となし、下局は前に掲げた各府藩縣選出の貢士（後公議人と改まる）を以て議員となすの制であつたが、此議政官は間も無く停廢され、右の下局は更に公議所の名稱を以て十二月五日東京に移置された。同月十四日の告示に『萬民ヲ保全シ永世不朽之皇基ヲ確定スルハ固ヨリ萬機公論ニ出ルニ在テ卽御誓文之大本ニ候依テ當夏議政行政ノ御制度相立各府藩縣ヨリ徴貢士之法御設相成候儀卽御政體之通リニ候然處春來兵禍引續候ヨリ御

實[illegible]

定額前日之[illegible]會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベキトノ御趣旨ヲ以今般改テ被仰出東京府[illegible]ヲ以テ[illegible]公議所ト被定明日ヨリ春ヨリ開議致シ[illegible]之私見ヲ去リ公明正大之國典確立之慮ニ熟議ヲ遂ケ四條文ノ御趣意致貫徹候様御沙汰候事』とあるに依れば、下局と云ひ、公議所と云ひ、共にこれ彼の五個條御誓文の趣旨を以て設置された輿論政治の機關であつたとことは明瞭である。併し當時の貢士と云ふのは依然『司代國論』き者卽ち各府藩縣の輿論を代表する者に過ぎなかつたから、此時代の輿論政治なるものは未だ純然たる民意代表の政治と云ひ得る程度のものでは無かつたのである。

其第二期は地方官會議の時代である。明治七年五月二日地方官會議なるものが召集されたが、その詔勅には『朕踐祚ノ初メ神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴充シ全國人民ノ代議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開キ全國人民ヲシテ各其業ニ安ジ以テ國家ノ重ヲ擔任スベキノ義務アルヲ知ラシメンコトヲ期望ス故ニ先ヅ地方ノ長官ヲ召集シ人民ニ代テ協同公議セシム乃チ議院憲法ヲ頒示ス各員夫レ之ヲ遵守セヨ』とある。輿論政治は此時に至つて幾日の游論代表政治より進んで漸く民意代表政治の域に入つたのである。但だ人民

をして『國家ノ重ヲ擔任スベキノ義務』を充分に履行せしむるが爲めに彼等に選擧被選擧の權利を以てし、彼等の中より彼等の『代議人』を選出せしむる迄には進歩しなかつたである。而して此最後の發達は實に第三期卽ち國會開設の時を以て始めて到來したのである。之に由て是を觀れば五個條御誓文以後に於ける輿論政治の發展は、一歩は一歩と民衆を政治に參與せしめ、民意を政治の要素となすことに向かつて進み來たつたもので、而かも常に五個條御誓文の趣旨を擴充し敷衍し來たものに外ならぬことが了解せらるゝのであらう。此意味に於て所謂民主主義(政治的)は五個條御誓文に依て公認された我日本帝國の國是であると云ふのである。

之を要するに「デモクラシー」なる語には古來法律上政治上種々の意味があるから、我國に於て唱道し得べき「デモクラシー」には自から制限が設けられねばならぬ。卽ち先づ第一に政治的「デモクラシー」(民主主義)であつて決して法律的「デモクラシー」(民主國體)であることは許されない。次に第二に政治的「デモクラシー」であつても決して制限的「デモクラシー」の範圍を超越することは許されない。何となれば極端なる「デモクラシー」は政治論としても遂には主權在民(法律的「デモクラシー」)にまで到達せずんば已まざるものであつて、之れ卽ち、我君主國體を危くするものであるからである。同一の理由に依て我國に於ても「デモクラシー」と云へば一概に之を咀ひ之を排斥すると云ふことは許されない。何となれば所謂制限的「デモクラシー」をも危險視するに至つては、その極遂に明治大帝の皇祖皇宗の遺訓たる我國古來の民本主義と、世界の大勢とに鑑みられて非常なる御英斷を以て永く我國是として天神地祇に所誓された輿論政治そのものをも咀はざるを得ざるに至るからである。かるが故に自分は今日我國に於て「デモクラシー」を唱ふる人に對しても、又た之を咀ふ人に對しても、双方共に以上の點に就て三たび思を致されんことを切望するものである。

將に來らんとする經濟生活上の革新

法學博士 堀江歸一

社會組織革新の時機

前後四年に亙る歐洲戰爭は交戰諸國の國民生活に著しき動搖を告げたるは勿論、國民思想に大なる變調を來し、將來に於ける社會組織に如何なる變革を生ぜんとするや、測り知る可からざるものあり、余は其經濟生活上に起る可き變動に就て、自由なる推測を試みんとす。唯交戰諸國は今日戰爭を熄止して講和條件議決の半途に居り、如何なる條件の下に、戰爭の終局を全うし、又其條件が將來の經濟生活に如何なる影響を及ぼす可きや、將た又交戰諸國に於て其一端を示したる復員計畫は今後如何なる狀態に於て、進行す可きや、共に豫想に困難なるを以て、經濟生活に對して余の下さんとする推測も果して能く事實に適合するを得るや否や、姑く記して、時局今後の發展に檢せんとするものなるのみ。

從來文明諸國に於て經濟社會の組織せらるゝや、私有財產制度と自由競爭とは社會に於ける二個の支柱と認められ、個人は苟も社會の公益に背反せざる限り、自由に其能力を發揮して、生存の目的を到達せんとし、他と競爭するに當つては、優勝劣敗の事實を極端に暴露する一方に、自己の獲得したる富にして、生計上に費して、剩れるものは之を蓄積し、資本として之を利用するを怠らず。斯くて社會に有產者と無產者との階級相對立し、有產者階級は土地を所有し、資本を利用し、益々富を獲得蓄積するの機會に豐にして、又一度び蓄積したる富は之を子々孫々傳へ、財產保護制度の完備せる今日に於ては、財產所有者自ら直接に資本を事業に注入して、其經營に意を勞せざるも、財產は年と共に利殖增加して、殆ど極まる所を知らざると同時に、一旦無產者階級に生を享けたる者は社會の表面に出でて、他と競爭するに足るの知識を吸收し、技能を修得するに難く、加ふるに土地資本に接近して、之を利用するの機會に乏しきを以て、無產者の階級を脫出する能はず、玆に世襲的無產者階級なるものゝ出現を促さされば已まざるの勢を生ず可し。有

產者階級に對して無產者階級あり、而して兩階級間に踰越す可からざる溝渠の生ずること斯の如く、互に世襲的に存續するに於ては、兩者は其思想に於て、感情に於て、生活に於て、何等相通ずるものなく、次第に疎隔して、遂に階級的鬪爭を惹起せざるを得ざるに至る可し。

歐米諸國に於ては、戰爭前に於て、既に此階級的鬪爭の顯然たるものあり、有產無產兩階級を調和して、圓滑なる關係を維持せしむるが如きは、何人も之を企及する能はざる所なりとしたり。現に諸國に於て一朝資本勞働の關係に異變を來し、勞働者が同盟罷業を決行するや、階級的反感に驅られて、爲めに罷業の解決を困難ならしめたるは著明の事實なるのみならず、時に總同盟罷業を敢てして、資本家を脅嚇するの計畫すら、屢々其實行せらるゝを見たり。實に勞働者をして資本家に對して、平靜なる關係を持續しつゝ、其勞働能力を發揮せしむるの一事は歐米諸國に於て、政治家事業家の苦惱して、今日に至れる問題なり。然も彼等は此問題を解決するに就て、經濟組織又は經濟社會の現狀を打破するが如き一大壯擧を決行するの覺悟を有せざると共に、自信をも缺乏す資本的生產制度は之を存續すること依然として舊の如くし、唯其弊害として、貧富の懸隔の著しき場合には、國家の公權に依て、資本の利用せらるゝ範圍、資本利用の結果として、資本家の收得する利益の限度、勞働者の收得す可き勞働報酬の最小限度、國民生活に對する最後の保障等に就て、或る種類の保護干涉を施し、之に社會政策なる名稱を冠して、以て資本家に對する勞働者の反感、有產者階級に對する無產者階級の不平を緩和するの用に供したり。

過激思想の橫行偶然ならず

然れども社會政策の如きは、社會に於ける疾患に對する療法として、之を見れば、恰も身體の一部に生じたる腫物を切開して、病根を刈除するの方法を取らず、膏藥を貼付して、病根を體內に消滅せしめんとするの類なるのみ。消散意の如く行はれ、又一般機關の活動に依て、病根の體外に排泄せらるゝことある可しと雖も、又、身體の他の部に浸潤して、如何なる患害を釀成するやも知る可からず。歐米諸國に於ける社會政策進行の狀況に就ては、國に依て相違の著しきものありと雖も、尙ほ諸國を通じて社會政策の施行に熱中しつゝあるの一事は之を否定する能はず、然も佛蘭西伊太利等に於ては、戰前既にサンヂキカリズムの思想の勞働者階級に旺盛なるものありて、動もすれば總同盟罷業、之に附隨する暴行に依て、資本家に打擊を加へんとする傾向著しく、英國に於ては社會主義の勢力、次第に職工組合の運動方針を左右せんとし、加ふるに職工組合中、最も有力

の[illegible]、[illegible]た[illegible]る三[illegible]同盟を組織し、[illegible]組合の一が[illegible]罷業を行ふときには他の二組合に於ても亦同様の態度に出で、以て同情的援助を與うことゝ爲り、獨逸に於ても亦社會主義者の勢力は政治上に伸張し、社會民主黨は千九百十二年以來帝國議會に於て、百十二の議員を擁したり。而して合衆國に於ては、近年資本が國際間に亘りて、勢力を有し、其國際間に於ける聯絡の鞏固と爲れる以上は、勞働者の利害關係も亦資本に對抗して、國際間に之を及ぼさしめざる可からざる主張の下に、所謂「國際産業勞働者」即ちアイ、ダブリユー、ダブリユーの運動起りて、社會上の一勢力たらんとするの趣あり。

是等の事實に對して、世人は如何なる解釋を下さんとするや、之を知らずと雖も、吾輩は之を以て歐米諸國の人が諸國の實施に熱中しつゝある社會政策の效果に滿足せず、社會政策以外に、勞働者の獨力又は勞働者間の團體的勢力に依て、自家階級の爲めに、有利なる新天地を開拓し、又は舊來の社會組織を改新せんとする努力の外間に發露したるものと認めざるを得ず。斯くて今次の戰爭と爲るや、各國共に勞働者は、戰爭の當初社會上に經濟上に、將た又他の方面に起れる種々の變動に堪え、祖國の爲めに、或は過重の租税を負擔し、或は兵員の徴募に應じて、[illegible]は[illegible]るも[illegible]たしとす可からず。[illegible]に、社會生活上に不利益なる地位に立つ勞働者が資本家の利益を増進することの大なる戰爭に貢獻して、何等酬する所なきは、世人の寧ろ奇異に感じたる所なり。交戰諸國が開戰の當初より或は食糧の供給を調節するに、全力を盡し、或は必要品の代價を公定して、其暴騰を防止し、或は失業者救濟の政策を確立し、或は戰時利益税を資本家に賦課して、彼等の戰爭に乘じて、暴富を占めんとする勢力を抑制したるが如きは、要するに平時資本家に對して、勞働者の有する感情が戰時の變動に刺戟せられて、如何なる事件の出來を見るや、測り知る可からざるを恐れたるが故なり。然も露國に於ては勞働者の運動は最も早く過激性を現はし、今や國を擧げて過激思想の赴く所に委しつゝある一方に、獨逸亦過激派の支配下に立ち、内國の秩序紀綱共に壞亂して、歸着する所を知る能はず。過激派なるものは今日の如く、自國の内部を紛亂せしめて、如何なる形態の下に、時局の收拾を謀らんとするや、容易に推測するを得されども、露西亞に於て、彼のレーニン一派が事を起すに當り、其主義とし、信條としたる所を類うに、其可否は姑く措き、首尾一貫したる理

想に據れることを認む可し。即ちレーニンの企圖する所は國際間に於ける過激主義の革命を方便として、全歐洲に共產主義を實行せんとするの一事にして、其全歐洲に之を實行するは、最も重きを置く點なり。卽ち共產主義の露西亞を資本主義の歐洲諸國と並立せしむる能はざるは、レーニンの明に承認したる所にして、隨て過激主義者は單に露國を過激化するに滿足せず、進んで他の諸國をも過激化せしめざれば、已まざらんとするものなり。

過激思想と經濟組織の革新

今や歐洲諸國が戰後に於ける社會上若しくは經濟上の變動に關聯して憂慮措く能はざるは、如何にすれば獨露兩國に於けるが如き慘憺たる過激的思想の襲來、過激的行動の勃發を回避するを得るやの一事にして、諸國に於て着々經濟組織を革新するの機運を示せるが如き、要するに過激的思想の橫行に顧みる所あるが故に外ならざるなり。固より露西亞に於て過激的行動の今日の地位を占むるに至れるは、帝政時代に於ける失政が國民の感情を刺戟したるもの少なからざる上に、勞兵會時代に於ける政治亦過激派の行動に便宜を與へたるに依る可く、獨逸の過激思想は戰時の壓迫に對する國民の不平反感と相關することの大なるを認めざる可からず。隨て今日戰捷國として、有利なる條件の下に、講和條約を締結するを得るの地位に居る英佛伊米の諸國の狀況は獨露兩國と趣を異にし、國民全體に國家の現狀に滿足しつゝあるを以て、過激思想の襲來する餘地を存せずとして、將來を樂觀するが如き果して見解の當を得たりとす可きや否や。或は斯く觀察する者もある可し、然も戰時歐米諸國に於て政府が、戰爭遂行の必要を理由として、人民の自由に干涉を加ふることの大なりしは爭う可からざる事實なる一方に、國民は戰爭に伴う變動に依て、生活上に大なる壓迫を蒙り來り、而して資本家の輩が戰時の危機に乘じて、暴利を占むるの不公正を目擊したり。加ふるに戰前既に勞働者は當時の勞働條件に滿足せざるは勿論、社會上に於て認められたる地位に平かなる能はず、或る手段に依て、現狀を打破せんとするの運動を企劃しつゝありしことの明瞭なる以上は、聯合諸國と雖も、如何なる機會に於て、過激思想の襲來を蒙るや、測り知る可からざるの危地に臨めるの嘆なき能はざるなり。況やレーニン一派の信條を懷抱する者は主義として、國際間に過激思想を傳播するの急を認め、常に其運動に從ひつゝあるに於てをや。

諸國が過激思想の襲來を防止するに就て、如何なる方策を施す可きや、又施すを以て、可なりとするや、愼重なる研究を要する問題なるが、吾輩をして忌憚なく、所見を敍述せしめんか、

[illegible]さるを可と[illegible]進するものに外ならざる事實の[illegible]するに[illegible]るものあり[illegible]今、事實の明瞭は始に指き、經濟組織改革の方策として、必要なるは果して何ものなりや。吾輩の見る所を以てせしか、從來の資本的生産の制度は既に幾多の弊害を暴露し、世人をして之に堪へざらしむるものあり。然らば經濟組織を改革する爲めには、之に代つて資本國有の主義が將來世間に認められ、苟も社會の公益に關係ある物資勞務を供給する事業は之を國家の經營に委し、資本家をして自家の利益を收むるの目的物たらしめず、廣く社會に其供給を擴充するに至る可きか。是れ吾輩が經濟組織革新の第一方策として、豫想する所にして、現に英國に於て發抗、鐵道國有の說ある如き、正に其端を示したるものとす可し。

從來多數の國に於て、或る事業に國有主義の適用せらるゝや、其目的は國庫に收入を收むること、事業の經營を統一することとの諸點に存し、時に事業其ものを改良して、產物の代價を低廉にし、其供給を廣く社會に擴充する一事の如き、國有の理由として、重さるゝ場合なきに非ずと雖も、多く實現せらるゝに至らず、個々世人を瞞着するの[illegible]たるに止まれり。然も今後國有[illegible]するものなれば[illegible]其[illegible]を決定するに當り、[illegible]に收む可き財政上の利益を目的とせず、寧ろ國民全體をして物資を消費し、勞務を利用するに、容易ならしむるを期す可く、一方に國家自ら公正と認むる勞働條件を自家の使役する勞働者に認め、多年資本家勞働者間に存したる利害關係の衝突を除却す可し。斯くて從來資本家が自家の有する資本を利用するの具としたる所は個人の私有を離れて、社會の公有に移ることを知らざる可からず。今や民主政治の風潮は期せずして諸國を左右し、如何なる國も之に對して孤立の地位に居る能はず。今日まで諸國が一面に國有主義を實行しながら、他の一面に於て國有主義を社會化するに至らさりしは、一に資本主義の政治の行はれたるが故なりと雖も、資本主義の政治廢れて、純正なる民主義に於て、民主政治の行はるゝ日に於ては、國有事業の社會化は遂に已む可からざるの勢とす可きなり。

事業經營法の革新

固より國家が國有に移して、國家自ら經營す可き事業の種類に至ては限りあることを知らざる可からず。各種生產事業の大半が個人の經營に屬するの一事は依然[illegible]異ならざる可しと雖も、

其經營の方式は果して何等かの變化を呈するに至らざるなし。多年資本的生產の行はれたる結果として、資本家は生產の狀態、程度、分配等を左右するに就て、絶對の權能を握り、一方に資本家と雇傭つて、生產上に貢献しつゝある勞働者は單に一定の報酬に對して、勞働力を賣却する以外に、產業の經營に干與する所なかりき。是れ或は勞働者が多年の因襲として、產業の經營に關する知識に缺如したる結果なるやも知る可からずと雖も、一個の勞働者は兎に角、團體に依て指導せらるゝ勞働者は其知識に於て、將た又其才能に於て、決して資本家に劣れりとす可からず、否資力に於てすら、職工組合の資金の豐富なるに隨て、資本家に對抗せんとするものあるに非ずや。斯る場合に於て尙ほ從來の如き資本家專制の生產制度の行はるゝが如き、求めて資本家勞働者間の利害を衝突せしむるものと言はざるを得ず。例へば或る事業に於て、資本家が飽く迄も事業の經營に伴う暴利を貪らんとし、其手段として、操業の短縮を行ひ、物資の供給を制限するの方策は屢々世上に見る所なれども、一方に勞働者は操業短縮の結果、勞働時間の減少に依て賃銀の減縮を強ひられ、他の一方に於ては一般勞働者と共に、物資の供給減少に伴う代價の騰貴に苦しむことを免かれず。即ち今日の社會に於て、消費者たり、將た又勞働者たるものは資本家單獨の意思に依て、生活上に如何なる影響を受るや、測り知る可からざるの地位に居るものなり。果して然らば消費者が事業の社會化を必要とし、勞働者が事業の支配權を求むるは當然の數なりとす可く、立憲政治の下に、國民をして政治に參與せしむるに道理ありとすれば、國家が或る事業を社會化する爲めに、國有に移し、他の事業に於ては、勞働者の團體をして、資本家と相並んで事業を經營せしめ、結局資本家と云ひ、勞働者と云ふが如き階級の差別を撤去するの道理あるや、論を俟たざるなり。

從來國家が資本主義の政治を助成したるは、戰爭の如き非常の事變に際會し、軍需品の製造に於て、軍資金の調達に於て、共に資本家の活動に俟つもの、大なることを信じ、且つ資本主義に依て、外國に自國の勢力を伸張するの必要なることを認めたるが故なり。是等の二點に於て、將來の國家は如何なる見解を下すを以て、正しとするや。此問題に對する議論は之を他日に讓る可し。唯吾輩をして將來の事相を判斷せしめんか、軍國主義の如きものを偏重して行はるゝ政治の如きは、其實質に於て、又其形式に於て、新時代の要求に適合するものに非ず。此要求に適合するものは、平和主義の下に、從來の資本生產制度に伴う弊害を抑制し、一方に社會多數の人民に文明の恩澤を光被するの政治に外ならざるなり。或は言はん、資本生產制度の弊

害を除却するときは、[illegible]の自由を[illegible]し、[illegible]增殖を抑止するの不利益を避けんとする可しと。然も天下は資[illegible]し。資本家にして自國の經濟組織に大なる不自由を覺へんか、宜しく其資本を經濟組織の幼稚なる、將た又資本家の跋扈を許容する未開國に移して、以て其富源を開發し、又之を利用して、事業を興起す可きのみ。而して時の經過と共に、此未開國が文明國と爲り、資本的生産に不便なる事情を生ぜんか、更に他の地方に赴き、資本家の勢力を以て、全世界の文明を進むるの覺悟と用意とを致す可し。現に今日資本家が資本を放下し、事業を經營する領域を世界の邊土に及ぼしつゝあるは、明に如上の勢に制せらるゝの結果に外ならざるのみ。內に退いて、外に進むるは資本家たるものゝ、將來に處する要訣なり。此覺悟なく、徒に資本的生産制度の舊時代を夢みんか、資本家として窮地に陷り經濟組織革新の犧牲たるを免かれざるは、吾儕の斷言するに苦しまざる所なり。

桃源夢裡の日本

歐洲諸國に於ける社會的變動の潮流漸く急ならんとする今日に於て、我國民は果して世界大勢の赴く所を理解して、之に順應するの覺悟を有するや否や。巴里平和會議に於て、我國全權委員が如何なる言動を爲しつゝありや、新聞紙の所報を綜合して考ふるに、我全權は[illegible]世界問題に就て、[illegible]なる[illegible]を有せず、[illegible]問題の討議[illegible]つゝある事實に對して一語を發せず、第二國際勞働問題の議決に於ても、日本の立場を說明せんとして、原案を用意したるに拘はらず、之に先だちて演說したる他國委員の所說の進步的なるに驚愕して、演說を差控へざる可からざるに至り、第三日本委員の演說腹案なるものは日本に於て勞働問題を解決するには、日本に特有なる雇傭者勞働者間の主從關係に訴へんとするの希望を表明するに外ならざりしと云ふが如き、一に我國の全權委員が當代思想の一端だも、之を了解せず、官僚に共通する偏狹なる意見を懷抱するものなるを證明して、餘りありとす。斯る[illegible]して世界改造の[illegible]會議に臨ましむ。彼等自ら恥ぢて、何事をも言はず、何事をも爲さず、默々たる間に、外國に機先を制せらるゝは已むを得ざる所ならんのみ。然も此事たる、現に我國を代表して、巴里に赴任せる全權委員のみの罪に非ず、假に[illegible]委員の候補者として指目せられたる二三の人士を以て、今日の全員に代らしめたりとして、果して能く現時の如き窮地に陷らざるを得るや否や、何人も此點に就て、其然るを斷言する能はざるなり。

要するに我國が國際間の交通極めて密接なる今日に於て、殊に世界改造の大會議に臨んで孤立無援の窮地に沈淪したるは、

平生國民をして新思想に遠ざからしむるの政策あり、國民亦政府と爭つて新思想を吸收するの勇氣なく、政府は思想の頑腐なる官僚軍閥政黨員の專斷に歸するの結果に外ならず。巴里講和會議に於て、我國全權委員の執れる措置は多年來の陋習に對して一切の決算を爲す可き時期の到來したることを語るものなり。吾人は之を取つて、我國民を喚醒するの警鐘に充てんとす。政府未だ之を悟らず、一時を糊塗する爲めに、施策を弄して、自家の失計を蔽はんとするが如き態度に出づるは、國步の艱難を將來に加重するの外に、何等資する所なかる可きなり、濠洲聯邦政府の首相にして講和會議の委員たるヒユース氏が徹頭徹尾、日本の提議したる人種差別撤廢案に反對したるは、敵ながらも天晴れの態度なり。而して其反對の理由として、人種差別撤廢の理由として、撤廢が直ちに日本移住民の入國自由と爲り、濠洲に於て今日以上に、人民一般の生活程度を上進するの妨碍たる可きことを恐るゝ旨を公言したるが、我國民はヒユース氏の此主張に對して、如何なる感を懷かんとするや。或る者は氏の頑冥を難ず可く、或る者は氏が自國の與論に執着して、世界の公道を無視するを攻む可しと雖も、吾輩は氏が世界の大舞臺に立ちて、自國民の生活程度を上進するの急を絕叫し、而して此要求に對して、障害と爲る可き事項に全力を擧げて、反對を試みんとする勇氣の絕倫にして、決心の牢固なることを嘆稱せざる能はず、此意氣ありてこそ、世界改造の大會議に參して、英佛米伊諸強の代表者に讓らざるを得るなれ。我國民たるもの自省せざる可からざるなり。

中華民國に於ける儒教の民主化

宇野哲人

（一）

若し最も簡明に儒教の要領を述べよといはゞ、恐らく何人も儒教は人倫五常の道を說くと答へるであらう。人倫とは即ち儒教倫理に於ける本務的であつて、之を分つて君臣、父子、夫婦、

見[illegible]仁が根本[illegible]に於てある[illegible]といへば仁義の一[illegible]も重視するの故を以て、儒教を仁義道德の教ともいふ。然し[illegible]の方は今論せんとする問題とは直接の關係が無いから暫く之を措いて、茲には本務論即ち五倫に就て述べようと思ふ。

五倫に就て孟子は君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありと云つて居るが、漢代あたりから、五倫の中でも特に君臣、父子、夫婦の三倫を重視して、之を三綱といひ、君は臣の綱たり、父は子の綱たり、夫は妻の綱たりと說く。從つて本務論に於ては忠孝が最も重要の位置を占めて、忠孝一致の論は、古來儒者の極力鼓吹する所である。忠臣を求むるに孝子の門に於てすといひ、或は孝を以て君に事ふれば即ち忠といひ、忠孝傳家久とは支那民族の誇りとする所であつた。

(二)

然るに先年革命が成功して、中華民國が創立せられたので、五倫の中の一倫、三綱の中の一綱即ち君臣の關係が、宣統帝の退位と共に亡滅し、忠孝といふ双關の中の一方が缺けたのである。儒教倫理の最も重要なる一角が崩れたのである。所謂保守派の人々は非常に之を憤慨し歎息し痛惜したことは言ふ迄も無い。而して革命黨の人々は如何に此の問題を解釋したかといふと、[illegible]故に、中華民國と[illegible]は[illegible]といふ者が[illegible]南方各地に於て或は孔子の廟を毀ち、或は[illegible]祭祀を廢止したのは、此種の見解に出つたのである。然しながら滅滿興漢を提唱した革命黨が、何時の間にか、五族共和を標榜した如く、實際上に於て孔子排斥の不便不利を覺つた彼等は、遂に孔子の思想を民國と一致せしむるの解釋を取つた。此の第二の見解を取る者が、現在中華民國に於て最も勢力を占め、第一の見解は今や殆んど見ることが出來ぬやうになつた。斯くの如くにして忠孝を主張した儒教は、今や中華民國に於て全く民主化するに至つたのである。

(三)

まづ何故に革命黨は斯くの如く強いて孔子を擁がうとするかといへば、夫には種々の理由があるが、第一の理由は中華民國の思想統一の必要に迫られたことであらう。現在に於ては南北兩分して互に相爭ひ、和平會議も思ふやうに捗取らぬけれども、何人も統一を望まぬ者は無いが、特に民國創立の當初には統一されたる民國の實現を希望したことは勿論である。而して此の統一に就ては、矢張り支那民族の誇りとする孔子を以てするのが、他の何物を以てするよりも最も有功である。第二の理由に

孔子の思想も解釋の方法如何に由つては、共和國と衝突矛盾なきものと見ることが出來ることであらう。若し孔子の思想が絶對に共和國と相容れぬならば、之を共和國たる中華民國の思想統一に利用することは出來ぬ譯である。然るに支那人からいへば、幸に孔子の思想も、之を共和主義と解することが出來ると主張する學派がある。勿論方便として之を利用するのであるから、彼等に取つては其解釋が科學的なるや否や、客觀的に正當なるや否やは問題で無い。但し其所に大なる困難の伏在して居ることは、恐らく彼等の氣付かぬ所であらう。

（四）

孔子の思想を以て民主主義、共和主義、社會主義、であると解釋するのは、所謂春秋公羊學派の一派である。抑も春秋は孔子が畢生の心血を注いで、尊王の大義を鼓吹した著述であるが、其解釋の内、今存する所は左氏傳、公羊傳、穀梁傳の三種であつて、之を春秋三傳といふ。就中公羊傳は最も善く孔子の筆法を發明したもので、公羊傳其物は元來何等特別な奇怪な解釋がある譯で無い。然るに所謂春秋公羊學派の解釋に至つては驚くべく怪しむべきものがあるのである。尤も莊存與や劉逢祿等に由つて創唱された當時は、尚ほ弊害は尠かつたが、清朝の末期に廖平、康有爲、梁啓超等が最も奇怪なる主張を爲すに至つて其の弊極まる。其の主なるものは春秋三世の義である。公羊傳には春秋十二公二百四十二年間を所傳聞、所聞、所見の三階段に分つて、凡そ記事の體裁は、傳聞する所よりも、聞く所は詳しく、聞く所よりも見る所は詳しといふの意を述べたに過ぎないのを、公羊學者は隱、桓、莊、閔、僖の五公は據亂の世、文、宣、成、襄の四公は升平の世、昭、定、哀の三公は太平の世であると說く。初は亂世であるが、漸次進步發達して升平となり、孔子出現するに至つて太平理想の世となつたと說く。是れはもと孔子を尊ばんとして說いた所の僻論である。然し是れだけならば弊害は尚ほ尠いと思ふ。然るに清末の公羊學者は之を禮記禮運篇の語に附會したのである。禮運篇の文は議論上最も重要なるものなれば、之を原文のまゝ引用することゝする。曰く、

大道之行也、天下爲ㇾ公、選ㇾ賢與ㇾ能、講ㇾ信修ㇾ睦、故人不三獨親二其親一、不三獨子二其子一、使三老有ㇾ所ㇾ終、壯有ㇾ所ㇾ用、幼有ㇾ所ㇾ長、矜寡孤獨廢疾者、皆有ㇾ所ㇾ養、男有ㇾ分、女有ㇾ歸、貨惡三其棄二於地一也、不三必藏二於己一、力惡三其不ㇾ出二於身一也、不三必爲二己、是故謀閉而不ㇾ興、盜竊亂賊而不ㇾ作、故外戸而不ㇾ閉、是謂二大同一、今大道既隱、天下爲ㇾ家、各親二其親一、各子二其子一、貨力爲ㇾ己、大人世及以爲ㇾ禮、城郭溝池以爲ㇾ固、禮義以爲ㇾ紀、以正二君

[illegible]勇知[illegible]爲己[illegible]是作[illegible]由此起、禹湯文武成王周公、由此其選也、此六君子者、未有不謹於禮者也、以著其義、以考其信、著有過、刑仁講讓、示民有常、如有不由此者、在勢者去、衆以爲殃、是謂小康、

禮記には之を孔子の語としてある。即ち彼等に從へば春秋太平の世は禮記大同の世、春秋升平の世は禮記小康の世であると說く。從つて孔子が君臣の大義を說いたのは升平小康の世をいつたもので、これはたゞ小乘的教理である。孔子の理想は太平大同の世に無ければならぬ、是即ち孔子の大乘的教理であると。從つて彼等は荀子が君權を重んじたのを　孔子の小乘的教理を得たものといひ、孟子が君を輕んじ民を重んずるを以て、孔子の大乘的教理を得たものと說く。彼等の思想の根柢に、歐米共和國の精神が橫はつて居ることは勿論である。

大同の世には天下爲公、選賢與能といふは、今の民主國で、大統領を公選すると同じく、小康の世には天下爲家といひ、又大人世及といふは君主及び貴族の世襲を承認するの意である。又大同の世には己の親子のみを特別に親愛せずして萬人を平等に博愛すといひ、小康の世には親疎の別を承認すと說く。又大同の世には貨物の浪費を避け、勞働に從事すれども自己の利益を[illegible]弟、夫婦の關係を正しくすと說く。換言すれば升平小康の世には君主政體、世襲制度、私有財產制度、差別的博愛が行はれるので、古の禹湯文武周公の治世は夫れである。太平大同の世には民主政體、自由平等主義、共產的社會主義、が遺憾無く行はれるといふのである。

（五）

上述の禮運篇の語が若し果して孔子の主張ならば、彼等が孔子を共和主義なりとして、中華民國と何等矛盾せぬと說くのは當然と言はねばならぬ。即ち現代支那思想界に於ては、以上の春秋公羊學派の說が、一國を風靡して居る有樣である。かくて儒教は現今中華民國に於て全然民主化されて居る。今吾人は數項に分つて少しく之を論評して見たいと思ふ。

第一に春秋は過去を以て據亂とし、漸次升平に進み、現在を以て太平の世とするのに、禮運篇は現在を以て亂世とし、過去を以て小康より大同に溯ると說く。彼と此とは全然正反對である。然るに此の二者を一致せしめんとするは首尾を顚倒するものである。

第二に禮運篇の思想は決して孔子の意見にあらず、孔子は[illegible]

舜を祖述し、文武を憲章し、特に周公を理想とし、常に之を夢想せしことは論語に確證あり、決して之を小康の六君子として第二義に墮せしめざることは是れ其の一證である。孔子は禮義を重視せしこと論語に確證あり、決して之を小康として蔑視せざることは是れ其の二證である。我が老を老として人の老に及ぼし、我が幼を幼として人の幼に及ぼすは孔孟儒教の博愛の眞義であり、決して無差別の博愛を認めざることは是れ其の三證である。孔子は寧ろ堯舜禪讓を美とし、湯武放伐に遺憾の意を表すれども、決して世襲制度を非とせず、且つ君主の尊嚴を重視せることは是其の四證である。先儒既に禮運篇の孔子の言にあらざるをいふ者あるは、蓋此等の點に見る所があつたのであらう。

第三は禮運篇の思想は寧ろ老莊の思想たること疑ふ可からず。老子が大道廢れて仁義ありといひ、禮を以て忠信の薄にして亂の首といふは、禮運に禮義を以て紀と爲すを小康とすると一致す、是れ其の一證である。禮運に謀の興らざるを尚び、謀の作るを非とするは老子の無爲自然を尚ぶと一致すること、是れ其の二證である。

第四に禮記は儒教の經典、五經の一なれども、必ずしも悉くは信ずべからず。何となれば禮記は漢儒の編纂である。漢代に於ては儒道の二教漸く接近して、次第に融合せんとする傾向を示し、老莊學者と雖も儒家の經典に通じ、儒者と雖も老莊學の要旨に通じ、自から一致を採用して自己の說を成すに至つた。従つて當時の儒者が編纂した禮記に老莊思想を混じたのは止むを得ぬことである。禮運篇の如きは其一例である。然らば何故に斯くの如き老莊思想が、孔子の言として記されて居るかといへば、これは莊子の所謂寓言、即ち老莊學者の慣用手段で、當時に於ける一種のプロパガンダであつて、自家の意見を孔子に託して述べたものである。

大體に於て以上列擧した様な理由によれば、禮運篇を引用し、之を春秋三世の義に與するは不當である。且つ夫れ自分が大なる困難の伏在をいふのは、よしや一時は孔子の思想を民主的なりと說明して之を彌縫し得たとしても、之を以て中華民國の典據とせんか、やがて科學的研究の結果、孔子の大義名分說が明かとなれば、其所に民國の自殺といふ危機を胚胎すると思ふからである。故に中華民國に於ける儒教の民主化論は、多くの學者により、種々の言説を以て、盛に鼓吹されて居るけれども、是は凡て徒勞である。寧ろ別に其の據る所を定めねばなるまいと思はれる。

教育の國民化を望む

與謝野晶子

現在の文部大臣中橋氏はこれまでの伴食大臣とちがつて、教育界の現狀を慨嘆する識見と、それを改造する意志とを多分に持つて居られるやうに見え、そのうへ、改造を斷行する實力をも兼備されて居るやうに思はれます。私は中橋氏を信賴して、ここに私が平素から希望して居る教育改造の一端を御參考までに述べたいと思ひます。

第一には、教育が國民から孤立して居ることを改めて頂きたいのです。明治の初年このかた何事も官僚に由つて切り盛りされねばならぬ未開時代にあつたのですから、教育もまた官僚化したことは已むを得ない歴史的過程であつたでせうが、今はもう教育の民主主義化を實現しなければならぬ時機に達して居ると思ひます。

現在の教育は文部大臣と、それに屬する官僚的教育者とに由つて支配されて居る教育です。臨時教育會議と云ふやうな文部大臣の諮詢機關が出來て、官民の間から委員が撰ばれることもあるやうですが、その實際は眞の國民の代表者は參加して居らず、國民の中の特權階級である少數の財閥者が其れもほんの申譯だけに一二の人達が加つて居るに過ぎません。私は司法部の改造を唱へる人達が陪審制度を要望し、それに由つて司法部の民主主義化を計らうとするやうに、府、縣、市、町、村に民選の教育委員を設けて、我國の教育制度を各自治體に於ける其等の教育委員の自由裁量に一任し、これまでの官僚的劃一制度を破ると共に、普通高等一切の教育を國民自治の中に發達させて行きたいと思ひます。

教育委員としては、その三分の一を教育界の經驗家から選擧し、三分の二はすべての階級に亙る家庭にあつて現に數人の子女を教育しつつある父母から選擧せねばなりません。かう云ふ家庭教育の經驗者——實際に我子の教育に責任を感じて居る父母——をして國民教育に參加せしめると云ふことは、教育を以て國民の自發的要求たらしめることであり、之に由つて教育が國民自身のものとなる事が出來、また今日のやうに國民が學校教育に冷淡であると云ふやうな變態を生じることが無くなるで

あらうと思ひます。

今日は文部省の專制的裁斷に屈從した教育です。國民は全くその子女が如何なる理想と手段とに由つて教育されて居るかを知りません。國民に由つて討議され承認された教育では無いのです。現に子女を持つた家庭の父母にして、その子女が小學初め中學程度の學校に於て何を學びつつあるかを明確に認識して居る者が幾人あるでせうか。彼等はその子女のために最も大切な二つの教育、即ち家庭教育と學校教育とを如何に協同し統一せしむべきかを知らないのは勿論、學校教育に對してその是非を批判する材料さへ持つて居ないのです。之がどうして國民教育の名に値する教育と呼ぶことが出來ませう。教育が國民から孤立して居ると私の云ふのは之がためです。

學校教育は子女を教育の機械たらしめるもので無くて、子女をしてその年頃に必要な一つの生活を創造せしめる事です。その生活は子女自身の生活ですが、教育者は現在の社會生活から得た知識と感情とを以て、其等の子女の生活を輔導し助成する用意が無くてはなりません。然るに教育ばかりで無く、これまでの教育者もまた國民から孤立して居るために、彼等が我國の司法官が非常識であるのと同じく、國民の實際生活に就て極めて貧弱な經驗しか持つて居ないのです。教育者のかう云ふ缺陷を補ふためにも、多數の教育委員を家庭の父母から選擧して官選司法官に對する陪審司法官のやうに、教育者の參考人たらしめる必要があると思ひます。

國民の參加を許さない教育であればこそ、今日までのやうに家庭の父母が學校教育に對して冷淡になつて居ますが、教育委員として各自治體の教育に參加する權利が多數の父母に容認される曉には、子女の教育に對する國民の自覺が俄かに尖鋭となり、その權利を立派に行使するだけの實力が國民に備はつて行くことを私は豫斷します。かう云ふ風に國民の自發的要求に支持されてこそ初めて國民教育の意義を實現することが出來ると思ひます。只今のやうに、學校から父母に對して、時々の參觀や學校に對する注意を形式的に求めて居るに過ぎない間は、決して教育は國民化せず、官僚任せの孤立的教育に停滯するのは已むを得ないことだと思ひます。

第二に私の希望する改造は、小學及び中學程度の學校に於ける國語科の一大整理です。誰にも氣が附く通り、只今の學科の配置では國語が餘りに多くの時間を占めて居ます。私は國語を愛重することに於て、詩人として何人にも讓らない熱情を持つて居る者であると共に、國語に對する理解に就ても相應の自信を持つて居る一人です。私の愼重に考察する所では、國語は國民の意志を表示し合ふ手段です。既に手段である以上、國民の言語としては、端的に國民の意志を表示することが出來て、それが自由に且つ一般的に使用されるもので無くてはなりません。手段の爲めに主要な意志の表示が不自由になり、迂遠にな

[illegible]手段と[illegible]
[illegible]出來るだけその手段は容易に使用さるる
ものであることを必要とし、手段を學ぶために特に多くの心力と時間とを消費せねばならぬと云ふやうでは面白くありません。

國語に對する私のこの見解が承認して頂けるならば、普通教育に於ける國語は專ら口語體のみを課すべきであると思ひます。口語體は現在の國民の思想感情を最も明確に表示して、命も、血も、熱も之に打込んだ第一次的の言語であるのですから、すべての子女は早くから家庭で之に習熟して居ます。學校に於ては、其れを書きあらはす文字と、少しの口語の規則とを教へさへすれば、子女は其れを鳥の自ら囀るやうに、樂々として讀み且つ書くことが出來るのです。其上すべての讀本を口語體で統一すれば、特に國語讀本を授ける必要も無くなり、作文も頭に浮んだ第一の思想を其儘寫せば好く、之がために子女及び教師の心力と、授業の時間とをどれだけ多く他の有用な學科に善用し得るか知れません。

文章體の言語は古代人の言語です。それは決して現代人の精神と感覺を端的に表示し得るもので無く、それを現代に役立てようとすれば、我々は先づその型を學ばねばなりません。

また文章體の言語は、今日も猶不完全な日本文典で辛抱して居る程に、科學的に出來上つた言語では無く、直覺を以て感得せねばならぬ所の多い特殊な詩的言語であるのですから、之を頃[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]放任して置いても[illegible]何れは大抵に行はれない傾向を有つて居ますが、文章語の文法は之を教育に於て果斷に除外しない限り、永久に國民の意志表示を困難にして、莫大な損害を國民生活に與へるものだと思ひます。文章語がどれだけ私達の意志を曲げたり、稀薄にしたり、勿體ぶらせたり、誇張させたりして居るかは説明を要しない事實です。倫理教育に於て「虚言を戒べ」とか、「正直に物を云へ」とか教へて置きながら、文章語の讀本及び作文に於ては、反對に、意識して、眞實から遠ざかつた文章を讀み且つ綴つて居るのです。手段を學ぶために多大の心力と時間とを消費するのも文章語であり、その手段のために却て目的の意志表示を不便不自由にするのも文章語であると思ひます。私のこの意見に反對される人達は、小學なり、中學なり、女學校なりの何れかの讀本を一讀されるなら、立ちどころに承認されるであらうと思ひます。何事にせよ、形式に屬する手段に多くの崇拜と未練とを持つ國民は、文化的に世界と進歩を競ひ得る積極主義の國民で無いと云はねばなりません。

或人達は反對して云はれるでせう。文章語は單純なる意志表示の手段では無く、それには日本國民の貴重なる傳統的精神が含まれて居る。文章語の廢絶はやがて國民性の廢絶であると。恐らく之は保守主義者の據つて以て自ら守る有力な反對理由であらうと思ひます。併し私は、手段たる言語に由つて國民の精

神が左右されるものとは考へません。その貴重な傳統的精神は現代人の言語である所の口語に新譯することが出來ます。現に私達は和漢の古文を讀んだり、その講義を聽いたりする時、もとの古文の儘では受用して居ず、それを一々現代の言語に意譯して理解して居ます。日本人の古代精神がすべて古事記や萬葉集の言語に依るので無ければ理解が出來ないと云ふもので無い限り、今日にも猶必要だと思ふ古代精神は、それを自由に現代の口語に新譯して教育すれば好いのです。古文を教へないと云ふ事は決して古代精神を教へないと云ふ事にはなりません。また古文の教育は大學其他の高等教育機關に於て特別に施しさへすれば決して反對論者の杞憂のやうに廢絶するもので無いと思ひます。

第三に私の注意したい所は、現在の國語讀本や修身讀本に書かれて居る口語體が餘りに惡文に滿ちて居ることです。どの文章を取つて見ても、之が現代語で書かれた立派な文章であると思はれるものを發見しません。教科書の文章は必ずしも名文たることを要しないと思ひますが、兎に角立派な現代文の標本であつて欲しいと思ひます。果して現代の日本はこんなにみすぼらしい文章を以て標本とせねばならぬほどに文學の進歩が停滯して居るでせうか。私は此點にも日本の教育が他の社會から孤立して居ることを悲みます。明治大正の文學者の努力は、前代に無かつた所の、非常に優れた口語體の文章を創造して居ります。國語教育は、どうして其等の最も進歩した現代の潑溂な國語と協同する所が無いのでせうか。私は現代の進歩した國語と離れて存在し得べき眞の國語教育は無からうと考へます。

殊に私の不快に思ふことは、讀本に編まれた長い詩や唱歌が、（昭憲皇后の御作は別として）口語體のも、文章體のも、すべて詩歌としての價値を持つて居ない事です。散文が既に惡文であるのに、更に一層拙悪野卑な韻文の横書きを以て詩歌の名を借して居るのです。我國の傳統的精神を尊重するなら、前代の文學に現れた優雅な國民性をかういふ所に細心に發揮して欲しいと思ひます。明治大正の新しい詩歌は未成品が多いとは云へ、其等の讀本にある詩歌よりどれだけ高く眞の藝術品となつて居るかも知れません。

一體に文部省が現代の國語學者を文學者のやうに誤解して居るのが宜しくないと思ひます。國語讀本の編纂に專門の詩人や文學者を除外して居るために、かう云ふ粗野な讀本が出來上り、之に由つて國民の感情教育が非常に退化させられて居ると思ひます。私はこの見地から、國語讀本や修身讀本の國民化を望み、現代の國民的文學者をその編纂に參加させて、完全なる口語體を以て統一的に改修して頂くことを中橋文相に御相談します。（四月二十五日）

世界的大勢力たらんとする

過激思想對應策

過激思想對策

法學博士　吉野作造

過激派と云へば誰しも之を憎むべきものとして居る。併し乍ら彼等の思想の如何なるものたりやを理解して居るものは存外に少い。西伯利方面では往々日本軍に反噬するものを悉く過激派と呼ばるゝ事すらあると聞いて居る。朝鮮の暴動も過激派の影響であると說くものあるも誰も怪しむものはない。甚だしきに至つては、予輩の如く民心の開發の爲めに些か微力を盡さんとて同胞に苦言を呈するものをまで過激派などゝ呼ぶものもある。是れ過激思想の我國に於て著るしく誤解せられて居ると云ふよりも、寧ろ殆ど全く諒解せられて居ない事を證するものである。

過激思想の憎むべきは誰しも知つて居る。それが當今の流行として非常の勢を以て世界の各方面に擴がりつゝあることも公知の事實である。從つて我國に於ても如何にして其流す所の害毒に對抗すべきやは最近殊に識者の頭を著るしく刺戟して居る所である。併し乍ら適當なる對策の論究は先づ事物の正當なる諒解から始らなければならない。故に我々は先づ過激派思想とは何ぞやといふ問題から出發せねばならぬ事を主張する。

予輩は之より過激思想の主なる主張を說き、其主張が何う云ふ社會的事情に基ゐて起つたかを明かにして、兼ねて之に對應すべき方策を考へて見ようと思ふ。

予輩の考ふる所に據れば、所謂過激思想の特徵たる主張は大約四つあると思ふ。一つは勞働者の支配である。二は直接行動である。三は國際主義である。四は非國家主義である。

過激派の主張の一番根本になるものは、天下を勞働者の命令な支配の下に置かうと云ふ事である。此考も細かく分析すると、更に次の三つの要素から成り立つて居ることを認めなけれ

ばならない。第一は資本主義の否認である。近代の產業組織が資本家並びに勞働者の固定的二階級を發生し、玆に困難な資本對勞働の問題を生じた事は今更ら說くを要しない。更に兩者の間に於ける富の分配が不公平であるといふ事實、而して此不公平なる分配を支持するものが資本主義であるといふ事は何人も之を疑はない。カール・マルクスの如きは此不公平なる事實を經濟學上から說明せん事を試みたが、よしんば富の分配に關する經濟學上の正義が明白に論證せられないまでも、今日のやうな狀態に放任して置くことは、少くとも社會的正義の容認せざる所である。此處に於て資本主義に對し、或は其制限を說くものあり、更に進んで其廢止を唱ふるものあるに至る。而して所謂社會主義は後者に屬するが、此點に於て過激派の主張は全然社會主義と其立場を同じうする。今理論の問題として資本主義は之を撲滅すべきものなりや否やと云はゞ、或は之に幾多の異論もあらう。只最小限度の要求として之に大いなる制限を加ふるの客觀的必要ある以上、此種の思想の起るは止むを得ない。只實際上一般民衆の思想が制限論に止るか、或は廢止論まで進むかは、政府當局並びに資本家自身の態度如何に依るものと言はなければならない。溫情主義などゝ云ふ事を資本家自らも唱へ、政府當局も之を裏書すると云ふやうな狀態では、資本主義に對する態度の過激に流るゝを防ぐことは出來まい。

第二の要素は資本家階級の撲滅と云ふ事である。社會主義は資本主義の廢止を主張するが、其根據は社會的正義の實現にある。而して社會的正義の實現はもと社會を作るすべての人の共通の問題たるが故に、少くとも其範圍に於て資本主義の廢止は、又資本家の問題たるを妨げない。貴族自身と雖も、社會公共の問題として貴族廢止論を唱ふるを妨げないと同樣である。併しながら過激派は資本主義の廢止を資本家勞働者共通の問題とする事を肯んじない。資本家は資本主義の上に立つもの、資本主義の廢止には當然反對するに極つて居るものと看做し、所謂社會的正義の實現を、資本家と共に計るは猶ほ木に緣つて魚を求むるの類なりとして居る。否、寧ろ彼等は資本家は本來資本主義の廢止による社會的正義の實現を極力妨害するに極つて居るものと認むる。之れ彼等が更に進んで資本家階級の撲滅を主張する所以である。斯う云ふ考の正しいか正しくないかは姑く別問題とする。只斯う云ふ思想の廣く民衆の間に勢力を得るに至つた所以を考へて見ると、其主たる原因は資本家の方が餘りに勞働者を馬鹿にした結果であるは疑を容れない。賃銀の協定に於て資本家は曾て勞働者の意嚮を參酌した事があるか。況んや事業の經營等の問題に於てをや。甚しきに至れば不當に賃銀を上

[illegible]は勞働者は一致して資本家を打倒するに[illegible]其の[illegible]、[illegible]ない[illegible]論ずるに至るのは當然である　斯かる思想の流行を妨ぐと言ふ事に就いても、吾人は寧ろ資本　側により多くの要求をなす必要を認むる。

第三の要素は階級鬪爭である。一般に社會主義は資本對勞働の階級鬪爭を說くが、併し此鬪爭は資本家の覺醒を促し、勞働者と共に公正に共同の問題を考ふるに至らしむるの手段として行はるると云ふ事もあり得る。予輩と雖も資本家一般の態度が勞働問題に對して餘りに頑迷なるを思ふ時に、一種の階級鬪爭は最後の目的たる資本勞働の調和の爲めに必要であらうと考へる事もある。勞働者の結社權を認むべしといひ、更に進んで同盟罷業權を認むべしといふが如き議論も、要するに此根據に立つものであらう。然るに過激派は前段にも述べた如く、資本家と勞働者との間には何等共通の要素がないといふのであるから、資本家は結局撲滅して完全に勞働者の天下にする事が必要である。そこで彼等に取つては階級鬪爭は手段にあらずして目的である。茲に過激派の最も著るしい特徴が現はれて來る。斯う云ふ立場が理論の上で正しいか否かは固より一個の問題たるを失はないが、現在の不公正なる分配制度の改善を社會的正義[illegible]、而して[illegible]み[illegible]勞働者[illegible]とする以上、勞働者[illegible]に常軌を逸して右の如き極端に走るのも避け難いと思はるる。昔は無理に勞働者を抑へ得た時代もある。今はなか〳〵さうは行かぬ。戰後に於て殊に甚だしくなるだらう。而してかゝる過激な思想の流行を阻止せんとせば、一方に於て勞働狀態の改善に勉むると共に、他方に於ては強ひて勞働者の言動を抑ふるなからん事に注意しなければならない。

過激派の主張の第二の特色は所謂直接行動である。前にも述べた如く彼等の根本の主張は所謂勞働者の支配であるが、其主張を如何にして實現するやと云ふに、從來の社會主義者の普通に取つた方法は議會主義(パーラメンタリズム)であつた。近代立憲國に於て實際政界の中心勢力は常に議會にある。故に「勞働者の支配」は議會に於て之を實現するの外はない。斯くして彼等は一方には普通選擧を要求し、他方には勞働者の政治的結束を計つて彼等の要望の近き將來に於ける實現を期待して進んだ。其期待は實際上裏切られては居るけれども、併し今日諸國の社會黨は尙此立場を取つて居る。然るに過激派は斯う云ふ微温(ぬる)い方法では彼等の希望

は到底實現せられ得ないとして居る。所謂合法手段に據る主義の實現に斷念して、彼等は革命的非常手段即ち彼等の所謂直接行動に訴ふることを主張する。此點に於て彼等の主張は全然彼のサンヂカリズムと其立場を同じうする。彼等惟へらく、主義の實現、換言すれば社會的正義の實現は直接に勞働者自身の行動によつて社會を改造する事によつてのみ期せらるる。今までのやうな間接の代議制では駄目だ、所謂政治的活動は代議政體の基礎の下に立つものなるが故に、勞働者の幸福とは何の係はりもないと。斯くして彼等の間には政治（ポリチツク）に對する極度の輕蔑が一種の風潮をなして居る。今日我國でも普通選擧要求の政治運動なぞの價値を不當に低く見るの議論をなすものがあるが、之は恐らく此種の考から自然に誤られたものであらうと思ふ。更に進んで過激派は主張する、直接行動は主義の實現の唯一の手段なるが故に、其前途に横はる障礙は何物と雖も之を破壞する事を辭せないと。而して最も有力なる障礙物は國法の秩序と云ふことであるけれども、もと〳〵法なるものは資本家連中が彼等の利益を擁護する爲めに勝手に作つたものであるから、勞働者に取つては取りも直さず一種の威嚇である。暴に酬ゆるに暴を以てするを妨げずとせば、我等が腕力によつて法の秩序を紊亂するは資本家の横暴に對する、謂はゞ一個の正當防衛であると。斯くして彼等は此確信の上に傍目もふらず、非妥協的に一本途を突進する。過激派の特徴は其主張の根本をなす思想其ものよりも、其實現の爲めに取る所の手段並びに態度にありと言ふべきである。

斯う云ふ考の起つたに就いては、彼等自身にはそれ相當の說明はあらう。併し我々が歷史家としての客觀的立場から說明するならば、畢竟之れは議會主義に對する失望の結果に外ならない。故に若し今日の代議政體の下に於て勞働者の言ひ分がもつともよく通り、社會政策的立法が一層よく行はれ、更に一般の政治がより多くデモクラチツクになつて居つたならば、右のやうな過激思想はそれ程の勢力を得なかつたらうと想像さるる。況んや今日尙勞働者の大多數は議會主義に執着して居るに於ておや。故に議會主義の下に行はるゝ政治を何時までも今日の儘に放任して置いて、而かも尙過激思想の發生を妨げんとするのは大いに困難である。過激派自身の主觀的見地よりすれば直接行動には大いなる理論上の據り所があると云ふ譯だが、我々の客觀的見地からすれば之れ亦社會の缺陷が產んだ一つの病弊に過ぎない。

第三の特色は國際主義である、過激派は何故に國際主義を取

[illegible]ると云ふ事夫れ自身は必ずしも排斥すべき事ではない。[illegible]激派の思想行動が國際主義と連繫すると、此處に注意すべき二つの現象は、極端個人主義に奔つて國家主義に反抗する事と、勞働者支配主義の世界的宣傳を目論んで一種の思想的侵略主義を實行する事である。現に露西亞の過激派は自ら世界のプロレタリアートの代表者を以て居るのみならず、日本にも態々人を派して主義の宣傳を試みたのである。

併し彼等の國際主義が單純な理論上の要求に止る間は之れ程危險はない。併しながら勞働運動に伴ふ國際主義の裏面には、實際的必要もあると云ふ事を見逃してはならない。何となれば、甲國で八時間勞働制を布いたり、最低賃銀法を制定したりしても、乙國では之を認めないとすれば、甲國の經濟界は必ずや乙國の壓迫を蒙つて結局當初の決心を貫くことが困難になるからである。故に勞働者に取つては斯う云ふ規則は世界共通になつて居なければいけない。之れ今度の國際聯盟規約の中にも特に勞働法規統一の一項を設けられたる所以である。此理を推して考へると、例へば過激派が露西亞に於て折角勞働者の上下を見るに成功しても、隣りに勞働保護の規定の不完全な國があれば、それは彼等に取つて一種の大いなる威嚇に相違ない。從つて彼[illegible]ば勞働保護の不完全な國は[illegible]過激思想宣傳の手を伸ばさ[illegible]險が多い。此點よりして予等は過激思想の宣傳に對しては[illegible]上の取締りを嚴重にすると共に、勞働の保護を十分に完全にすると云ふ根本的施設を怠るなからん事を希望せざるを得ない。

終りに第四の特色は非國家主義である。前にも述べた如く、過激派は現在の國家組織の下に於て主張の實現に斷念せる結果直接行動を說くに至つたのであるから、彼等が一轉して非國家主義になるのは怪むに足らない。併しながら彼等の當初の非國家主義は人類の生活が國家的團結に於てなさるゝと云ふ事實を否認し、又は反對したのではない。現在の國家的諸制度が悉く資本家の作る所であり。左右する所であり、其利用する所であるから、少くとも現在に於ては國家の名に於てなさるる總べての事に反對しようと云ふのである。此點に於て彼　と無政府主義者との間には尙若干の距離がある。然るに過激派に至つては更に進んで我々が餘りに國家に執着する事が即ち資本家等に瞞着せらるる所以であり、爲めに主義の實現を誤るに至る所以であるから、主義の實現と云ふ根本目的の爲めには思ひ切つて一國家

を掲てよと叫へ出した。彼等は之れまでの改革主義者が愛國と云ふ名の爲めにどれ丈け主義の實現を誤つたかを説き、人々をして十分此迷から醒めしむる爲めには戰爭などの場合には却つて負けた方がいゝと云ひ出した。所謂敗北主義とは此事を言ふ。此見地から觀て此度の露西亞の革命は從來の革命とは全く其類を異にするものである。何となれば從來のは其結果の如何は兎も角として、其動機は悉く愛國にあつたからである。支那の革命然り、土耳古の革命亦然り。而して愛國拔きの革命は實に今度の露西亞のそれを以て空前とする。之れでも純然たる無政府主義とはまた若干の距りはあるけれども、其實際に顯はるゝ所から見れば殆んど之に近いと言つていゝ。斯うなると、過激思想の危險な點はいよく\明白になる。

併し斯う云ふ思想は露西亞を除き西洋諸國に一般に行はるゝ所のものではない。斯る思想は非常に著しく眼に着くと、又其實行の結果がなかく\輕微なものでないから非常に世界の耳目を聳動しては居るが、併し其實際の勢力は決してそれ程恐るべきものではない。一部の人は獨逸を毒したものは過激思想であるとか、または獨逸は今に過激派の天下になるだらうなど〻云ふけれども、予輩は斷じて斯く信じない。過激派と同じ系統の思想が獨逸を毒したとか、獨逸を支配すべしとか云ふのなら、承認は出來るけれども、所謂過激思想の勢力は獨逸に於ても、又露西亞に於けると同じやうだと見るのは、兩國國情の差を辨ざるの議論である。此見地よりして右のやうな過激思想は又容易に日本に於て勢力を占むべきものではない。堅實なる國家主義に特別なる執着を有つて居る日本國民の頭腦は、過激思想の培養所としては極めて不適當である。けれども平素愼重に警戒するの必要あるは言ふを俟たない。然らば如何にするが警戒の途であるかと云へば、そは民をして不平不滿なからしむるにある。

之を要するに過激思想は近代產業組織の變革に伴ふプロリタリアートの發生と、資本家乃至支配階級の盲目的利己心との成り合ひから生れた私生兒であつて、國家組織の實質的に弱い所に特に著しく成長發達したものである。幸にして我國は國家組織の堅實確固なる事世界に其類がない。けれども近代產業革命の影響はまた著しいものがあるから、資本家乃至支配階級にして思を致す所なくんば、過激思想の幾分か擴まるのは到底之を避け難いだらう。事後に於て警察的取締りを嚴重にするが如きは抑々末である。政府並びに資本家の覺醒に俟つは、事前に弊竇を豫防するの唯一の途であらう。若し夫れ之を以て純然たる外來思想となし、新たに思想的鎖國主義を取つて之に對せんとす

[illegible]ならば、それは二重に誤謬を重ねて[illegible]何故なれば思想的に[illegible]主義の不可能なるは言ふ迄もなく、[illegible]想發生の主たる原因は社會の狀態其のものにあるからである。

過激思想とその對應策

木村久一

（一）

今やボルシエビズム——謂はゆる過激思想は、全世界を脅かしつゝありと云ふも過言ではない。一昨年の末露國の過激派が、政府を乘つ取つて勞農共和國を宣言して以來、彼等は全世界に向つて過激主義の宣傳を開始した。由來過激派はマルクス社會主義の正系を以て任じ、『萬國の無産者よ結束せよ』との標語に忠實に、國際主義を讓歩すべからざる主義として居る。彼等は運動を國際的にしなければ、理想の實現は不可能だと固く信じて居る。されば彼等は政權を握るや否や、モスコーに過激主義宣傳學校を建てゝ、各國に送るべき宣傳者の養成を始めた。而して日本に送るべき宣傳者の爲には、日本語が授けられて居るさうである。又過激主義宣傳の爲に、彼等が今日までに費した金額は、既に二億ルーブルに達したと云ふ。例の講和會議に於いて、

[illegible]

ツァ[illegible]ことを提議した。この時[illegible]はこれを排して、かくの如き議は過激派の侵入軍は防ぎ得ても、過激派の思想は防ぎ得ないと云つたと云ふが、面白い事もあるものである。佛蘭西革命の當時、「[illegible]軍の侵入は猶ほ拒ぐべし、思想の侵入に至つては拒ぐべからず」と道破したのはユーゴーではなかつたか。そのユーゴーを祖先に有する佛蘭西人が、今日同じ説法を外國人から聞いたとは面白いではないか。

それは兎に角、露國過激派の宣傳が奏效して、先頃匈牙利が過激派化し、勞農政府が成立したことは何人も知る如くである。その後巴威に於いても勞農共和國が宣言され、最近に於いてはバーデン及びブラウンシュワイヒに於いても、勞農政府が成立したと云ふ。而して獨逸も將に過激派化せんとして居る。スパルタカス團の過激派的なることは云ふまでもなく、獨立社會黨も過激派的色彩が甚だ濃厚である。スパルタカス團の失脚は、聯合諸國の電報に由つてしばしば傳へられたが、今から思へばあれは皆な虛報であつた。事實に於いては、過激思想は獨逸に於いて、目下ますます盛んになりつゝあるやうである。序ながら、露國過激派の失脚レニンの死等も、聯合諸國の電報に由

つてしばしば傳へられたが、あれも皆な虚報であつた。最近の歐洲電報に由れば、シャイデマン政府は國民議會の支持がない爲に、總辭職に決定し、これに代つて過激派的色彩を帶びた新政府が現はれんとして居ると云ふ。それは云ふまでもなく、スパルタカス團及び獨立社會黨を基礎とする政府であらう。さうなれば大統領エーベルトも、現地位を保つて居ることは六かしくなるであらう。聯合諸國が講和會議に於いて、獨逸に課すべき賠償金を議して居る間に、獨逸は日に日に過激派化しつゝある。或る人々は、シャイデマン等が、若し聯合諸國が獨逸に課するに過重の賠償金を以てするなら、獨逸は過激派化せざらんとするもせざるを得ないと云ふやうな事を云ふのは、過重の賠償金を免れんが爲の策略である、又シャイデマン政府は既に總辭職に決定したなど云ひ振らすのも、矢張同じ手だと論ずるが、論者の說の當否は兎に角、予はシャイデマン等が、こんな事を云ふことそれ自身が、獨逸の過激派化を助けて居ると思ふ。嘘から出た眞と云ふこともあるではないか。嘘から好く眞が出るものである。

併しながら過激派化の火の手は、今や獨墺ばかりではない。露國の過激派は今春以來、更に諸方に根據地を増して、主義の宣傳に努めて居る。先頃米國に於ける一宣傳者は、今より十年を出でない中に、米國を立派に過激派化して見せると傲語したと云ふ。而して過激派化の行はれるのは、必ずしも宣傳にのみ由るのではない、謂はゆる共鳴に由ることもある。宣傳の結果か共鳴の結果か知らないが、佛蘭西のサンヂカリストが、近頃甚だしく過激派化して居ることは事實である。愛蘭のシン・フェインは勿論、英國の勞働組合も同樣である。先頃英國に於いて、炭坑夫六十萬人の起したストライキの要求は、六時間勞働、賃銀二割増と云ふのであつた。要求を一見しただけでも、このストライキが普通のストライキでないことは明白である。これは云ふまでもなく、資本家に對する挑戰である。勞働政府要求の意志表示である。我等は過激派であると云はないだけである。

今や英國の民衆は、ロイド・ジョージを目して、彼は大嘘つき〲[illegible]だと云つて居ると云ふ。ロイド・ジョージが先頃の總選擧に於いて勞働黨を破つたのは、非常に惡辣な手段に由つてであつた。一例を云へば彼はヘンダーソンを脅迫して、一回の選擧演說もさせなかつたと云ふ。若し總選擧が、出征兵士が歸國してから行はれたなら、ロイド・ジョージは現地位を保つて居ることは出來なかつたらうと云ふ。蓋し出征兵士の多くは勞働黨に屬するからである。故にロイド・ジョージは獨逸と休戰の約が成立するや、出征兵士の歸國しない中に、疾風迅雷の勢を

[illegible]に、又に[illegible]したと云ふ[illegible]して[illegible]に[illegible]つたことは、[illegible]に著しく[illegible]を激[illegible]したことは云ふまでもない。

米國に於いても先頃シアトルに、過激派の煽動に由る壯烈なストライキが起つた。凡ての交通機關は勿論杜絶する、瓦斯電氣も斷絶する、新聞の發行も中止する、劇場學校等も閉鎖する、市は七萬の勞働者の手に歸して、彼等は警察隊を組織する、食用品廉價供給所を設ける等、宛として革命であつた。市長ハンソン氏はこれを『共鳴的革命』と呼んだ。勿論このストライキは間もなく鎭定したが、米國に於いては今後もかくの如きストライキが、しばしば起るではあるまいかと、懸念される。

通濟電報に由れば、露國の過激派政府は、極東方面に過激主義を宣傳する爲に、二千五百萬ルーブルの資金を浦潮に送つたことは確實ださうで、内六百萬ルーブルは日本に送られたと云ふ說もあるとか。更に最近の電報には、同政府は更に三千八百萬ルーブルを西伯利方面に送つて、主義宣傳に努めて居るとある。新聞に現はれた長谷川朝鮮總督の談に由れば、今度の朝鮮騷擾の裏面にも露國過激主義宣傳者の活動があるさうで、彼等の根據地は上海にあると云ふ。又最近臺灣にも不穩の兆がある[illegible]ると云ふ。更に莫斯科[illegible]でも、京濱二の他に[illegible]十名の[illegible]思想[illegible]九十[illegible]れで居ると云ふ。さればかくなつて見ると、過激思想は最早[illegible]の火事ではなくなつた。實に當面のゆゝしき大事である。

（二）

さて然らば、かくの如き燎原の火の如き過激思想を前に控へて、我國は如何なる處置に出づべきか。答は極めて簡單である。卽ち直ちに國民の生活の安固を計り、出來るだけ速かに社會的正義の行はるゝやうにすることである。勿論國民の生活の安固と云ひ、社會的正義の實現と云ひ、口で云へば極めて簡單であるが、その實行はさう容易ではない。石川啄木の歌に、『我が抱く思想は凡て金なきに因する如し秋の風吹く』と云ふのがあるが、この歌は一の大なる眞理を含んで居る。恒產なくして恒心を存するは、孟子も『士のみこれを能くす』と云つて例外と認めて居る。凡ての人を士とする事が出來れば兎に角、それが不可能なる以上、速かに國民の生活を安固ならしむることは、謂はゆる危險思想除けの最上策である。生活難は危險思想の母である。而して自己の生活難は、社會的正義の行はれて居ない[illegible]

果であると感ずる時は、國民の思想は一層危險性を帶びるに至る。近頃床次内相は本多日生氏、加藤咄堂氏等の雄辯家に囑託して、『危險思想除けの傳道』と云ふものを始めたさうだが、それも成程しないよりは優しであらう。併しながら説法は以て空腹を癒し得るものではない。若し内相がこれだけを以て、危險思想除けの目的が滿足に達し得られると考へて居るなら、我等はその呑氣なる樂天主義を憂へざるを得ない。床次内相は先頃議會に於いて、普通選擧の要求に頑強に反對した。若し内相が過激思想の對應策として、普通選擧の實行よりも雄辯家の説法を信ずることが厚いなら、我等の憂慮は一層大である。

普通選擧の要求は決して空なる要求ではない。一例を云へば、東京市は徹底した公設市場の設立を斷行し得ないで居る。何故かと云へば、かくの如き計畫は市會の賛成を得ることが六かしいからである。現在の市會議員は小數のブルジョアが選んだ市會議員であつて、一般民衆の選んだ市會議員ではない。故に彼等がブルジョアの不利益になる公設市場の設立などに賛成する筈は決してない。蓋しブルジョアの怒りを買へば、彼等の再選は絶望だからである。併しながら一般民衆の利益を計らなくとも、彼等の再選に障りはない。一體文明國中我國の政治ぐらゐ、上に厚くして下に薄い政治はない。今一々その例を枚擧するが如きは、此處には不可能でもあればその煩にも堪へない。併しながら普通選擧が實行されゝば、これらの弊害は全部とは行かなくとも、餘程取り除かるゝことは確實である。勿論普通選擧の實行は、直ちに國民の生活を安固ならしめ、社會的正義の行はるゝやうにする唯一の手段でないことは云ふまでもない。

新聞の傳ふるところに由れば、當局者は過激思想に對して『防波堤を築』かんとして居るさうだが、過激思想に對する防波堤なるものは勿論あり得ない。謂はゆる三軍の侵入は抗し得るが、思想の侵入は到底抗し得ない。要は過激思想が侵入して來ても、これを無害に終らしむることにある。身體が健全であれば、病菌が侵入して來ても平氣である如く、國民の生活が安固であつて、社會的正義が行はれて居れば、過激思想が侵入して來ても無害である。

侵入の避け難い過激思想をして無害に終らしめんが爲に、我等は第一に爲政者の反省を促さゞるを得ない。今次の世界戰亂の爲に、歴史の進行は眞に急轉直下した。而して時勢は全く一變した。今や戰前のつもりで選擧權の納税資格を、五圓の三圓のと云つて居るべき時代ではない。普通選擧が行はれゝば、勿論現存の政黨は將棋倒しに潰れてしまひ、現在の政治家は大部分永久に政治界から葬られてしまふ。併しながら彼等が潔く利己

[illegible]

次に反省を促したいのは[illegible]特權者流[illegible]

[illegible]如何なる見地から見ても辯護の餘地がないことは[illegible]ない。特に彼等の官僚主義に基いた[illegible]と傍若無人の行爲は、民衆の反感をそゝることが夥しい。一例を擧げんに、正直と廉潔を以て有名な寺内伯は、目下郵船會社の重役加藤某の別莊に納まり返つて居る。郵船會社が如何に國民の呪咀の的となつて居るかを思はゞ、かくの如き無遠慮の行爲は普通の人間には出來ない筈である。然るに彼は鈍感なのか傍若無人なのか、國民の思惑などは空吹く風である。鈍感や傍若無人もこゝまで來ると羨ましいくらゐである。併しながらこれに對して一言の忠告を進むる者が左右に一人もないとは、ぶつ惘つてしまふぞ主義の仲間も悲慘なものではないか。これは一例に過ぎない。かくの如き例は實はその多きに堪へないのである。兎に角閥族者流も、今や其態度を改めて特權地位を放棄すべき時である。特權階級の利己主義は國家の爲に最も恐ろしい。

最後に反省を促さゞるを得ないのは資本家階級である。民衆の不幸は大部分彼等の利己主義に基因する。然るに今日の政治はこの不幸の撲滅に努むるどころか、却てこれを甚だしからしめつゝありと疑ふところに民衆の怨恨がある。過激思想は資本[illegible]

[illegible]に入つて[illegible]べきものではない。[illegible]世界の平和は資本家の反省に繋ることを[illegible]はない。

對應策の二方面

本間久雄

過激思想と其の對應策――課せられたこの問題は實際重大な問題である。誰人も行住坐臥念頭にかけて置くべき重大問題である。しかし重大な割には、何となく捫みどころのない問題である。といふのは過激思想といふことそのことが、何となく漠然な、誰にも解つてゐて、而も誰にも解つてゐないやうな、捫みどころのない言葉であるからである。丁度危險思想といふことが、誰にも解つてゐて、而も誰にも解つてゐないのと似たやうなものである。

桑木博士は、危險思想といふことについて、「思想そのものが危險とか否とかいふことは大なる間違である。思想を何等かの目的に應用する場合に、それが或る場合に於て危險になつて

あつて、問題は思想と生活との關係もしくは思想の適用方法のところに存することは明かである」（早稻田文學四月號）といふ立場から「危險は思想そのものに固着するものでなくして、思想に對する人々の態度に存するものである」といはれたが、これは恐らく直ちに移して過激思想の場合にも應用し得る解釋であらう。

しかし、又「思ふこと」は「行ふこと」であるといふ立場から云へば、危險であるとか、過激であるとかいふ形容詞は、直ちにその思想そのものに固着したものとも見得るであらう。この場合には危險思想とか過激思想とか云ふことが、立派な概念を持つたものとなつて來る。さてこの場合に、過激思想とはどういふのを云ふのであらうか。過激思想の特質は何であるかといふことが當然問題になり得る。

過激思想といふ言葉の對照語としては穩健思想といふことが取り出される。丁度危險思想の對照語が健全思想といふことであり得ると同じである。さてこの場合、穩健思想と云ひ、健全思想といふことはどういふ思想であるか。これの具體的な問題は云ふまでもなく、個々人の判斷に待つて解決されることである。或る人に取つて、穩健であり、健全である思想が、或る人に取つて過激であり危險であることのあると同じく、又全くその反對の事實もあり得る。從つて、單に個々の立場から、全く個個の立場に居る人の思想を直ちに目して過激と云ひ、危險といふことは非常な誤りであることは云ふまでもない。

しかし具體的事實を離れて暫く抽象的に云ふならば、穩健といひ、健全といふことは、人間文化の進歩をして誤らない發達を遂げるに役立つ思想に冠したものでなくてはならぬ。そしてこれは、大低の場合に於て、一面理想的であると共に一面現實的である現實に即して而も一歩々々理想を追ふのである。革命でなくて改革である。飛躍でなくて漸進である。破壞でなくて建設である。少くも革命よりは改革、飛躍よりは漸進、破壞よりは建設といふ要素を多分に含んでゐるものでなくてはならぬ。そしてこの穩健、健全といふことの對照語たる過激又は危險といふことは如上の反對の要素を多分に含んでゐることはいふまでもない。

さて抽象的論議を離れ、實際の事實について觀察するならば所謂過激思想とはどういふのであるか。試みにこれをロシアのレニンとかトロツキーなどの主唱する過激主義即ちボリシエヴヰズムの影響を受けた、乃至傾向を帶びた思想と解するならば或ひはサンヂカリズムとかアナアキズムといふものゝ影響を受けた、乃至傾向を帶びた思想と解するならば、それは或ひは、

今日の[illegible]ものであるかも知れない。こゝでは便宜上、過激思想を上のやうな思想と解釋する。

ボリシエウヰズムやサンヂカリズムやアナアキズムなどの影響を受けた、乃至傾向を帶びた思想は、今日の吾々から見て確かに過激なものであり、危險なものであることは爭はれない。わが國の文化を促進する上において、これらの思想は、たしかに、改革よりは革命を、建設よりは破壞を齎すことによつて、寧ろ悪結果を醸し出すものであることは豫測するに難くはない。この意味でこれらの思想の影響を受け、乃至傾向を帶びた思想はわが現在の文化のために、文化の進展のために、當然に排除さるべきものである。

しかしながら、たとへ、排除すべきものであるにしても、その排除の方法がよろしくなければ、却つて、排除しないよりより以上の悪結果を來たすことが往々ある。こゝにその對應策について吾々の考ふべき問題がおこるのである。

過激思想の對應策には、消極積極の二方面から考へることが出來る。消極的對應策としては、餘りに干渉し、抑壓しないのが最上の策である。政府の當局が、餘りに敏感にならないことである。この場合の例としてこゝに擧げるのは多少奇異の感がならぬことはないが、[illegible]そのエリーダに對した[illegible]のやうな寛大な心持を[illegible]當局が持つことである。即ち、エリーダが夫を捨てゝ他の情人に奔らうかと、とつ追ひつ迷つた末、夫に暇を請求する。すると夫は、妻に、自分自身で、充分な自由と責任とを以て去就を決せよと云つて、徹頭徹尾無干渉の態度を取る。すると本當の自由と責任とを與へられた妻は、その自由と責任とを以て始めてよく反省して、結局夫の方に就く。といふあの物語は、この場合、まことに適はしい暗示的な物語ではないか。人間は誰れでも本當の自由と責任とを與へられると、決して滅多なことは出來ないものである。これは夫婦關係に於ても、親子關係においても、友人關係に於てもさうである。おしひろめて一切の對他關係においてさうである。即ち政府は、この意味で、一切の人に、各自に充分な自由と責任とを持たせるやうにすべきである。決して高壓的にでなく、強制的にでなく、命令的にでなく飽くまでも自發的に各自が各自の懷抱してゐる思想を[illegible]中に[illegible]し、そして各自をして健全な、穩健な方向に向はしめるやうにすべきである。さもなければ各自をして却つて徒らに反抗的ならしめるものである。ボリシエウヰズムやアナアキズムが如何にロシアの專制政治の下に起つたかを知るものは、以上の言の

して、理由のないものでないことを知るであらう。かくの如く、各自に自由を與へ、各自に責任を擔はせること、これが過激思想に對する策として、消極的方面の、最上乘なものである。

次に積極的方面の策として、私は、ソリダリテー(共同責任)の思想を力說し高調することによつて、自ら如上の過激思想の自然消滅を期するものである。私は今こゝにソリダリテーの思想の如何なるものであるかを細說するの暇はない。たゞこゝではソリダリテーといふことは、正しい意味のデモクラシーの根抵であること、及び正しい意味のデモクラシーは、新しい世界の基調であるが故にソリダリテーといふ觀念なしには到底新しい時代人たり得ないことを一言すれば足りる。

或る一部の敎育家などは、過激思想の對應策として、過般來國民思想の統一といふことを企て、「敎育の效果を全からしむべき一般施設に關する建議案」を定め、「我國建國以來扶植培養せる本邦固有の文化を基礎とし、時世の進運に伴ひ益々之が發達大成」を期してゐる。企てとして別にわるいとは云はない。しかしながら、國民思想統一といふやうなことは、決して外的に、他律的に出來ることではない。それは何よりも各個人そのものの自覺に待つべきことである。この意味で、各個人は、上に述べたやうなソリダリテーの思想に、本當によく目覺めない限り、國民生活を健全穩健の方法に導く一切の計畫はすべて徒勞である。

所謂過激思想は、今日のやうな過渡時代には、恐らく政府の當局者が考へてゐる以上の勢力を以て、國內に侵入し、且つ瀰漫するであらうし、現に又侵入し、瀰漫しつゝある。この場合單にその侵入し、瀰漫しつゝある現象にのみ恐れをなして、何等かの外的權力を以て、これを防ぎ止めようとするのは丁度手を以て堤の切れたのをせき止めようとするやうなもので、何の效果もないのである。一國の文化を司る地位にあるものは、よくこの點を自覺し、徒らにその現象のみに始終せず、その現象の依つて起る所以の何處にあるかを充分に考察する必要がある。そして常に彼等が口にするやうな「國民全體」の思想統一といふことを離れて、寧ろ「個々人」の自發的な反省に待つやうにしなければならぬ。この意味で本當のインデヰヂュアリズムの精神から爲政者と被爲政者と共に先づ出立しなければならぬ。私が、上に述べた過激思想に對する消極積極二方面の對應策の如きも亦、本當のインデヰヂュアリズムの精神を裏づけたものであることは云ふまでもない。

本當の個人主義から出發して、吾れ自らに自由と責任とを感ずると共に、他人にもそれを感ぜしめること、及び更に進んで

ソ[illegible]テ[illegible]間[illegible]人の[illegible]に[illegible]せる[illegible]
[illegible]として、私に敢てこれを力説する。

（[illegible]）

毛嫌ひ丈けでは不可

文學博士　三宅雪嶺

（一）

過激派に對する聯合國側の觀察は、單純より複雜に移り來つて居る。初め皇帝の政府が聯合國に加り、剰へ重要の部分を占め、その革命を以て顚覆したのは、聯合國に一大打撃の衝動を與へたけれども、ケレンスキイ新政府は革命を行つたのみで依然聯合國側に立ち、ケレンスキイ自ら東奔西走獨逸への反抗を鼓舞して已まなんだ。或は英米の力にて起つたと云はれた。レニン及びトロツキイが之を放逐し、政府を取りて代るに及び、獨逸への反抗を背てせぬ許りでなく、之と氣脈を通ずるの跡あり。獨逸と同じく看做すべき者となつた。獨逸と倶にする者を獨逸同様に敵とする事、何等疑を挾むべき餘地ないが、果して獨逸と同じく聯合國と戰ふの意であつたか、休戰に止るのみで聯合國と戰ふの意なかつたのであるか。

露國は一時の自由に[illegible]
要め得[illegible]てはない[illegible]
及び物資に於て多大の犠牲を拂ひ、民衆は甚だしく疲弊し、飢渇に瀕して居る。聯合國で救つて呉れねば立ち行かぬ。此儘で戰はうとしても戰ふことが出來ぬ。開戰の目的は何であるか、民衆を飢渇に苦しめようと云ふのではあるまい、露としては一日も早く平和を恢復するの外ないと言ふのである。裏面に種々の事情があり、猶太人が勢力を得て力を伸した所もあり、獨逸の運動功を奏した事もあり、聯合國側に不快の思をさせたのも一二でない。成らうならば過激派政府を倒し別に政府を作り度く思ひ、或はオムクス政府及び其他の之を倒す事を望んだりする。けれども過激派政府が仆れさうで仆れず、幾種政府の中比較的最も力あるかにも見える。過激派政府が仆ればそれまでどあるが、露國の秩序を如何にすべきかとの疑問に迫られる。露國へ聯合國側の有力なる者が資本を下して居る事頗る多く、之を何とすべきであるか。兎も角秩序が立たなくては考へる事も出來ぬ。過激派政府は借金踏倒しの度胸らしいが、其度胸があつてもなくつても、政府が無ければ話の相手がない。過激派政府か獨逸と氣脈を通じたので強制的に之を處分すべきである か。獨逸の形勢も分らぬけれど、何にせよルーズベルト政府に話

打[illegible]とする事[illegible]出來る[illegible]恐れる所は、[illegible]く[illegible]すれば[illegible]か仆れて露國と同樣になるにある。エーベルト[illegible]に係る事態い。レニン及びトロツキイ[illegible]いに於るの感じせぬではない。[illegible]か手取早く片が着きはせぬかと[illegible]。

（二）

けれども之[illegible]一致し難く、且つ一國內で[illegible]した過激派政府を打潰さうと[illegible]事は甚だ簡單明瞭である。然し其[illegible]でない。今こそ聯合國は總じて獨逸を憎み之と[illegible]けれども、其處に資本家と非資本家との[illegible]資本家の關係者は過激派の獨逸と提携した[illegible]た[illegible]資本を脅かすやうに聴き怖れ、非資本家は其點に於[illegible]特別に反[illegible]せず、唯父を失ひ、母を失ひ、友人を失ふやうになつた敵の同[illegible]味として憎むのみで、實際戰場に出でなかつたのを[illegible]くに從ひ、さほど憎む氣もしなくなる。露國人は單純であり、[illegible]である、今の狀態に可哀想であると同情するやうな事もある。資本家の方では國內に少しでも過激派に同情する者あれば、將來何事を起すか量り知られぬとの心配があり、過激派[illegible]れは人類の害毒の最も甚[illegible]しいものと[illegible]する。が、非資本家はその果して眞實であるかを疑ふ。過激派はそれ程恐ろしいものか了解に苦しむ事がある。それとも聯合國に於て過激派政府を仆し、之に代るべき適當の政府を作り得るならば、其方に着手するを望ましいとするけれども、旨く行くか何うか了テが着かぬ。過激派政府は憎むべきであるとし、能く國內の秩序を維持し得れば、それで通して行かねばなるまいと考へる。今のところ過激派政府を承認するかせぬかは、政府に力あると否との問題である。矢張り勝てば官軍敗くれば賊といふ趣がある。大體の上で言へばさうなる。或は早く其政府を承認する[illegible]意を仄かし、後日露國人の歡心を得やうと試むるもあるらしい。

（三）

我日本は何うかと云ふに、社會主義の名さへ口にし難くなつて居るので、過激派と云へば、怖毛を振ふものになつて居る。ボルシエヴィクスとかボルシエヴイストとか云はず、頭から過激派と稱する。凡そ露國に行はれた罪惡は悉く其所業とする。佛國第一革命にロベスピールが言つた「悪い事は悉く自分の爲た事になる。自分は最早生きて居り度くない」と。過激派にも此願の事がないであらうか。我國で過激派政府の獨逸に貢獻を通じたのを以て之を敵とし、チェック・スロバツク殘留の爲めに出兵したのは違つて居る。けれども米の七千に對し七萬の兵を

出した[illegible]であるか、[illegible]に對する
不況當時の狀況は[illegible]一面にされたことである。然し[illegible]如
恢復の後過激派人の名前は如何であるか。過激派は永く[illegible]動かないと
の意見があり、然るならば後に彼れ是れ言ふやうな事も無い。
今日何程脅迫したとて復讐するやうな事は無い。だが、若し彼か
ぬと極つて居れば、わざ〳〵力を以て脅迫する程の事も無い。
日本で我の過激派に對し、唯其名を用いて排むべきものとする
事、內地に於ける社會主義に類する所ありはせぬか。過激派の
續くか續かぬか、畢り正義人道に合ふ所が多いか少いかといふ
に歸する。昨の如く唯徒らに亂暴狼藉するならば永續きせぬ
に極つて居る。人類の間でさう勝手に亂暴狼藉出來るものでは
ない。現に比較的國內で勢力を得て居るのは、[illegible]あるから何
か取る所があるが爲めではないか。

（四）

各國が過激派を恐れるのは、無政府と同樣に存在するにある
が、無政府でない丈けは事實である。[illegible]かに政府が存在して居
る。唯其政府は普通に資本家が考へて居るやうに財産を考へて
居ないやうである。無政府とか共産とかは普通の當然な[illegible]で居る
のではない。正義人道の常軌に適はぬ。但し日本で云へば資産
の者も及び努力で月に三十圓を得、一千萬圓の資本家が勝つて
[illegible]ところである
[illegible]
[illegible]十倍もせぬことであらう。[illegible]
同じ事がないとせう。[illegible]百倍とし、
收入が千倍するのは如何なものであるか。一億圓の資本家なれ
ば幾倍にしよう。其當然なる事が國內に理解せられぬ以上、何
處かに缺陷あるかと考へらるるのも致し方ない。歐米の資本家
は日本のそれよりも多い。之れ其の十倍するのが少くない。
それ丈け過激派思想に對して恐れを抱く。けれども日本よりも
勞働者に力がある。過激派に對し列國の態度が定まつて居るよ
うで定まらぬのは、[illegible]詰めれば此邊から來て居る。
他國は他國で各考へがある。日本では過激派政府が害毒を及ぼ
さぬ間、成るべく國內の秩序を維持するに委すべきである。日
本一國を以て過激派政府の片を着けるのは難しい。此邊に力を
注ぐの餘地に乏しい。警戒を怠つてはならぬが、譯もなく毛嫌
ひして[illegible]ならざる面倒を起すに及ばぬ。白痴瘋癲ならざる限り、
誰に對しても相應の敬意を拂ふべきである。民族に對しても同
じことである。世界の事は毛嫌ひして行くものでない。毛嫌ひ
は不信を表すこと少くない。世界で何人が我信を通して行け
るか。

過激主義とその對應策

室伏高信

（一）

ボルシエヴヰキは既にロシア及び匈牙利において政權を掌握してゐるのみならず、オーストリーにおいても獨逸においても、ボルシエヴヰキの勢力は決して侮り難いものがあります。米國のＩＷＷもまた過激派と提携したと傳へられます。フランスの社會主義者がボルシエヴヰキ化したとはゴムハアスの機關雜誌 American Federationist（一月號）の主張して居るところ、ロイド・ジョーヂのようなデマゴーグの口調を借りていへば英國の勞働黨もまたボルシエヴヰキ化したといふことにされます。何れにせよボルシエヴヰキの勢力が漸次興隆してゐるとの事實は何人もこれを否認することはできない。ブルジョア階級の機關としての海外諸電報または外務省陸軍省邊の供給してゐる新聞雜誌によるときはボルシエヴヰキの勢力は極めて微弱なもので、ロシア共和國内において日日にその勢力を失墜し同國人多數の人民から敵視され、且つロシア國内の秩序は混亂のようであるとされてゐるのであるが、これ等は事實の誇張または全然虚偽の部類に屬するものであると申して差支ない。その點において最も信頼すべき材料と批評とを供給してゐるものは評論家エドワード・アルスウォース・ロッスの名著『Russia』であるとされます。彼れは極めて確信ある態度をもつて次のように述べます。『十二月においてさへ、ザアの政府が滅落して以來においての最もよき秩序と最も少き罪惡とが行はれたといふことを私は屢々聞いてゐる』と。このロッスの觀察は恐らくは眞實であらう。レニン・トロツキーの政府は既に一昨年組織されてから一年半になります。その間に聯合國から種々なる壓迫があり、また食物の不足は避くべからざる事實であつたにもかゝわらず、よくこの艱難に堪えてロシアの最高權力を維持し、更に隣邦に對してさへボルシエヴヰズムの宣傳をなして相當の效果を擧げるだけの勢力と基礎とをもつてゐたものであるから、ボルシエヴヰキが全ロシア人の反感のうちに立つてゐるものでなくして比較的多數の人民によつて支持されてゐることの事實だけはこれを認めなくてはならないと思ひます。

（二）

然らばボルシェヴヰキは何故に勢力を築いてゐるのであるか。『ウォールド・ウォーク』の記者はこの問に答へてレニン、トロツキーはロシアの人民の渴望してゐたもの——土地とパンと

平和とを與へたからであることは[illegible]この點が[illegible]直接の一原因であるに相違ない、ミリユコフやケレンスキーの政府は革命政府として立つたにもかゝわず、この三つのもの丶一つをだに與へることができなかつたではないか。その無能にして怠慢なるミリユコフ、ケレンスキーの後にレニン、トロツキーの政治的才能が現はれてパンと平和と土地とを與へたのであるから、その政府が勢力を久しうすることのできるのも當然であるにしても、このやうな過激なる主張が保守的なるロシアの農民の間にさへ動かすべからざる――それに近いほどの勢力を築き上げたことには更に他の有力な原因がなくてはならない。その一つの原因は、ベンソン氏が「カーレント・オツピニヨン」で述べてゐるとほり、戰爭からうけた久しい間の苦惱――絶望的の苦惱がロシアの人民を驅りてボルシエヴヰキの旗下に集中するのほかなき狀態においたといふとであるにしても、戰爭からの苦惱は獨りロシアだけではなくして、各交戰國もまたみな等しく絶望的の苦惱のうちにあつたのであるから、これだけをもつてボルシエヴヰキがロシアに起つた原因であるとすることはできない。獨りボルシエヴヰキだけではない。農民の間に最も勢力のあるとされてきた社會革命黨にしても屢々暗殺を行ひ、ボルシエヴヰキに劣らざるほどの革命手段を實行してきてゐること

はロシア[illegible]がつてきます。然り、社會民主主義の思想はロシアに入つてからみなロシア特有の性質を帶びてきたことは明白であります。その傾向はマルクスとバクーニンとの分裂によつても、メンシエヴヰキとボルシエヴヰキの分裂によつても知らるゝとほり、これ等の思想は世界的に漫延性をもつてゐる思想であるといふよりは、寧ろロシア特有の産物であるとすることに少くともその一半の理由をもつてゐます。即ちロシアにおける久しきに亙りてのロマノフ家のテロリズム、地主と農民との悲慘なる爭ひの歷史がロシアの人民に對して深刻慘虐なる思想の色彩を附加するに至つたものであることは容易に論證しえられることであると思ひます。けれどもまたこれだけの理由をもつてしても、過激主義が世界的漫延性をもつてゐる他の一半の理由を說明することができない。この一半の理由を說明するためには先づ過激主義とは何んぞやの問題について考へて見る必要があります。

（三）

過激主義と目すべきものは先づロシアのボルシエヴヰキ米國のＩＷＷ、獨逸のスパルタカス、フランスのサンヂカリストなぞであります。それ等のものは現代民主主義の諸潮流のうちにあつて最左端を代表します。凡ての過激主義に共通することは

階級闘爭を高調し、勞働階級の覇權を要求するの點であると申すことができます。その要求するところは單に階級闘爭だけではない。ブルジョア・レヂームを轉覆するといふことだけではない。更にその上にプロレタリアートの覇權（dictatorship）を確立するといふの點であります。この點を最も明瞭にしてゐるのは、ボルシエヴヰキの憲法、レニンの「ロシアの諸政黨」、トロツキーの「われ等の革命」などであると思ひます。トロツキーのわれ等の革命は全篇を通じてプロレタリアートの覇權を力説してゐます。レニンの「ロシアの諸政黨」によれば、レニンはボルシエヴヰキをもつて共産主義を奉じ、且つプロレタリアートの支配權を要求するの主張である旨を述べてゐます。それ等の思想から生れいでたものが即ちボルシエヴヰキの憲法であります。この憲法は「勞兵會全露社會主義聯邦共和國憲法」と稱せられるものであり、その憲法による時は、ロシア共和國とは「ロシア全勞働者の自由社會主義團體」のことであり、從つてそれは單に勞働階級のみの團體であります。その性質を最も明瞭にしたのは次の規定であります。凡ての權力はこの國の凡ての勞働者に屬する。即ち權力が人民全體に屬するのではなくしてたゞ勞働者のみに屬するのであります。そのボルシエヴヰキの憲法においての人民とは全人民のとではなくして、たゞ勞働者のことであります。その勞働者なるものも一定條件のもとにおける勞働者でなくてはならない。（World Work, Feb. 1919 參照）それゆえにボルシエヴヰキの主義は一階級のための覇權の要求であると申すことができます。政治的自由主義がブルジョアのための覇權の要求であり、アリストクラシーが貴族のための覇權の要求であるがごとく、ボルシエヴヰキの主張は一定勞働階級のための覇權の要求であると申すことができます。從つてその要求するところは民主主義そのものではない。民主主義は凡てのものの覇權に反對するものであるからであります。この民主主義とボルシエヴヰキとの相違は、ボルシエヴヰキの憲法と獨逸社會民主黨のエルフルトの宣言との比較によつて容易に觀取することができます。この點において私は明らかに過激主義に反對します。

けれども過激主義について眞實に理解するためにはもつと立入つて考へて見る必要があります。ボルシエヴヰキは何故に勞働階級のデクテータアシツプを主張するのであるか。その主張の根底にはいふまでもなく共産主義の主張があります。この點は絶對平等觀のうへに立つものであつて私の贊成し兼ねるところであるが、またそれとともに私どもの更に注意を要する一點があります。即ちそれが政治的及び産業的の凡てのエクスプロ

[illegible]ます。この點に就いて[illegible]自由[illegible]を[illegible]ることによつて自己が[illegible]に當つてゐる[illegible]がないにしても、その理想とするところはどこまでもこのエクスプロイテーションの排斥といふの點であります。この理想そのものについては如何なるボルシエヴヰキ嫌ひの人と雖これを沮すべき正當の理由をもつてゐるものではない。その點にボルシエヴヰキの強味があり、從つてブルジョアの弱點が存在します。こゝにボルシエヴヰキの世界的蔓延のある程度の可能性が存在します。

(四)

ボルシエヴヰキの何ものであるかゞ理解される時に、さうしてまたボルシエヴヰキが如何にして生れたかが明瞭となる時に、これについての對應策は極めて容易に考へ出すことができます。その對應策の第一はロシアの舊王朝的テロリズム――ザーリズムを排斥することであります。第二は政治的及び產業的階級的獨佔を廢滅すること、即ち貴族的特權またはブルジョア・レヂイムを排斥することであります。繰返していへば政治的とともに產業的民主主義を確立することであります。この二つの對應策は凡ての對應策のうちにあつて最も基底的のものであり、この對應策が實行されないとすれば世界はボルシエヴヰキの[illegible]ヰキに對して口實を[illegible]眞實た[illegible]理由を[illegible]るものであるからであります。日本にして若しボルシエヴヰキの脅威から免れようとすれば、彼れは先づ急速にその產業が民主化し、政治上にも民主主義を確立しなくてはならない。普通選擧に反對する日本、國際勞働法反對のチヤムピオンとしての日本の政治家は如何にしてボルシエヴヰキの危險から免れることの妙案をもつてゐるのであるか。彼等は矢張り軍隊と警察との威力によつてこれを實行する考へであるか。果して然らばこれ却つて過激主義に油を注ぐものであります。

(五)

われ等は過激主義を葬らなくつてはならない。さうして眞實なる政治上及び產業上の民主主義にと到着しなくなくてはならない。――その前にブルジョアのオートクラシーに反對しなくてはならない。(四月十九日)

過激思想對策

阿部次郎

この問題に就いては自分にも多少の考がある。併し今自分に

許された時間は極めて少い。自分は唯意見の一端を個條書にすることを以て滿足しなければならない。

過激思想とは何であるか。それは一般に社會の現狀と峻烈なる對照をなす理想の總稱であるか。世間ではさう考へてゐる者が多いやうであるが、自分はさうは考へない。それが理想として正當である限り、如何に現在と峻烈な對照をなす思想と雖も、思想そのものとしては決して過激ではない。此の如き思想を一概に過激として排斥するは、唯現在の情勢に引ずらるゝものゝ卑怯な考へ方である。本當に過激思想として排斥しなければならないのは、その理想が、正に社會の現狀と峻烈な對照をなしてゐる點に於いて謬誤を含む場合に限られてゐる。如何なる場合にも社會の現狀と矛盾する理想を避けんとするは過激思想である。さうして此の如き過激思想は——特にそれが國家の權力と結合する場合に於いては——過激思想と同樣に危險である。我等は先づこの事を銘記して置かなければならない。

併し理想としては正當な思想も、これを實現する順序と手段とに於いて謬誤を含む場合には過激となることが出來る。その社會若くは國家の歴史を顚倒させる——又はあるまじき手段を用ゐる——現狀の破壞は過激である。我等の理想を社會に實現するためには、社會の現實に適應する順序を踏み、人道に適ふ手段を用ひなければならない。この順序を無視するか、若しくは實現の程度と手段とに關する道德的批判を蹂躙するとき、其處には第二の意味に於ける過激思想を生ずる。この意味の過激思想は、第一の意味に於いては正當な理想と結合することも出來るものである。手段の過激は必ずしも直ちに理想そのものの過激を意味するとは限らない。實現の手段と理想そのものゝ價値とは別々に吟味しなければならぬ二つの問題である。さうしてこれは、革命といふが如き激動期の歴史的批判に於いて特にさうである。

現今の露西亞過激派は如何なる意味に於いて「過激」であるか。新聞の報道にして正しいならば、これが第二の意味に於いて過激なことは疑を容れないやうに思ふ。それは更に第一の意味に於いても亦過激であるか。——この問題は彼等の主張をもつと詳しく聞いて見た上でなければ、現在の自分には判斷がつかない。併し彼等の理想が思想そのものとしても過激であると假定すれば、それは如何なる點に於いてさうであるか、之に對應するには如何なる方策を以てすべきか——この點に就いては多少の見當をつけることが出來さうに思はれる。

一、過激派はプロレタリアートの專制を以て資本家の專制に代

[illegible]とを作らむとするが如く、[illegible]中間者に對して[illegible]生産者の從[illegible]欲として――是認し難き[illegible]理を含んでゐるといふことも出來るであらう。自分は此の如き[illegible]の上に立てる新社會を正しいとは思はない。故に此の如き思想を過激と稱する理由に同意する。然らば我等は如何にして此の如き過激思想に對すべきであるか。その根本的療法は、思ふに彼等勞働者の從屬欲を刺戟すべき社會的事情を除去することのみである。換言すればあらゆる階級の人々に、平等に自己發展の機會を與へることのみである。問題の重心は與へることであつて奪ふことではない。餘分に持つてる者が自覺と愛とを以て自己の所有をその同胞に頒つこと――これがこの意味に於ける過激思想を根絶する最上の道である。

二、過激主義は勞働者の生活内容を豐かにすることを要求するのみならず、その反面に於いて一切の人の生活内容を現今の勞働者と等しくすることを要求するものとすれば、自分は――特に現在の日本に於いては――此の如き新社會に生活するに堪へないであらう。さうして自分は此の如き新社會に生活するに堪へないのを當然と思惟する。これは經濟上の問題ではなくて精神上の問題である。思ふにこの點に於いて勞働者の平均的階落[illegible]中には固より、一時的[illegible]を含むことは[illegible]に教へることも亦入つて來るに違ひない。併し主要な問題は勞働者が[illegible]ことと であつて、「勞働者」の名稱を廢止することではない。あらゆる人の心に、高きものに對する敬愛の情を植ゑること――所謂「勞働者」にも充分にこの教育を受くるの權利と機會とを與へること――これがこの方面に於ける過激思想の對策でなければならない。

三、過激思想は勞働階級の利己主義を根據とするものとすれば、あらゆる利己主義が謬誤であると等しく、この利己主義も亦謬誤である。さうしてこれに對するには利己主義の征服――換言すれば、先づ人心の教育を以てするより他に途がないであらう。併し利己主義の征服は勞働者のみの問題ではない。從來不當に利己心の滿足を實行して來たものは、勞働者ではなくて特權階級である。故にこの教育は特に從來の特權階級に對して峻烈でなければならぬ。特權階級の利己主義が或程度まで征服されない限り、勞働者の利己主義も亦事實上之に對抗して増長して行くのみであらう。さうして益々事態を困難にするのみであらう。故にこの方面に於ける對過激思想策は利己主義の征服

――特に特權階級の利己主義の征服である。

心情の革命は心情の革命のみを以て止る性質のものではないであらう。併し社會的革命も政治的革命も心情の革命を基礎としなければ畢竟無意味である。自分は茲に心情の革命を齎すものを宗教と名ける。過激思想はこの意味に於いて反宗教的傾向を持つてゐるものとすれば、思ふに過激思想の最後の誤謬は此點にあると云はなければなるまい。併しこの誤謬は決して所謂「過激派」のみの誤謬ではない。唯物主義の政論家は皆この誤謬の上に立つ者である。

過激思想對應策

赤木桁平

プレストリトウスクに於いて、露西亞の過激派政府が獨墺政府から苛酷な條件を強制されて餘儀なく媾和條約を締結した當時のことである。過激派政府の首領レニンは失望と落膽とに沈んでゐる露國民を鼓舞すべく一つの宣言書を發して、「非道な獨墺政府のために吾人はかくの如き屈辱的な媾和條約に調印するの止むなきに立ち至つたが、假令國家としての露西亞が地球上から其影を失ふやうなことがあるにしても、吾人の思想そのものは必ずや何れの日にか世界を征服する時があるに相違ない」といふやうな意味のことを云つた。頭から過激派政府を見縊つて、いはゆる過激思想に對する徹底的な理解を缺いてゐた當時の世界各國は、此「ロシア革命のロベスピール」が發した意味深い豫言を以て單なる敗者の虚喝に過ぎないものと考へ、殆んど何等の注意をも拂ふところがなかつた。現に這般の事實を報道した我國の某新聞紙のごときも、多量の冷嘲的口氣を以て「レニンの負け惜み」と放言した位ゐのものである。併し、最後の正しき審判者たるべき事實は今日の世界各國に向つて果して何を教へたか！

今更多言を費すまでもあるまい。嘗て冷嘲を以て迎へたものは、今や冷嘲を以て酬ひられる時が來た。嘗て時代の動勢を支配する表面の事象にのみ氣を取られてゐたものは、今や隱約の裡に潜んで默々たる流動を續けてゐる力の如何に怖るべきものであるかを知る時が來た。この意味に於いて、現在に於ける最も花々しい捷利者は英國でもなければ佛蘭西でもなく、米國でもなければ伊太利でもない、寧ろ榮譽見る影もない露西亞であるとさへ云ひ得るではないか。かく考へて來ると、時運の旋轉實に逆睹しがたいものがある。

當時[illegible]

對して[illegible]、この[illegible]に[illegible]

するが早いか、あらゆるものは荒廢と死滅に[illegible]

獨逸は如何、墺太利は如何、強捍比ぶべきもののないカイゼル

の劍を以てしても、遂に此苦境に施すべき何等の策をも見出し

えなかつたといふ事實は、今まで傍觀者の冷靜を保つてゐた全

世界に與へる、新しい戰慄を以てするとともに、今まで戰勝者

の希望に生きてゐた全世界を包むに「赤い恐怖」を以てするに

至つた。過去の歴史のみが教へる Red Terror に觀面し

て、親しく其事實の背後に隱れてゐる悽慘な靈の叫喚を聞きつ

つある今日の世界から云ふと、此際最も緊切なる急務は如何に

して此「赤い恐怖」から脱却すべきかといふ問題であらねばな

らない。英國も然り、佛蘭西も然り、伊太利も然り、米國も然

り、日本豈唯ひとり然らざる理由あらんやである。

ある人は云ふ、「我國の國民性を知らずや」と。またある人は

云ふ、「我國の有する特種の歴史的背景と地理的條件とを知らず

や」と。一々御もつともな抗議と云はざるをえない。併し、時代と人

間とを支配する最も根本的な問題になると、いふところの國民

性も、また、いふところの特種の歴史的背景や地理的條件も、其

結果に寄與する上に殆んど何等の力をも持たない場合が多い。

殊に、[illegible]今日のやうな

に精[illegible]的、物質的の[illegible]な世[illegible]た時代に於いては、

[illegible]な意味に於いての除外例を認めることは出來ない。從つて、

彼を支配する法則は或程度まで自分を支配するものであり、自

分を支配する法則は或程度まで彼を支配するに相違ない。此見

易き道理を忘れて、いつまでも我日本帝國のみが「選ばれた國

家」であるかの如く考へてゐると、古い言草ではあるが、それ

こそ臍を噬むも猶ほ及ばない悔を貽すやうなことがないとも限

らない。最近の外電に據ると、現に伊太利は過激派の擡頭に苦

しんでゐるといふことである。或意味において、獨逸や、墺太・

利や、伊太利などと國情を等しうしてゐる我國の如きは、日に

日に猖獗の威を加へつつある熱病の襲來から自國を豫防するた

めに、此際特に愼重なる考慮を費すところがあつて然るべきで

はあるまいか。

此點に於いて、私は英國の執つてゐるやうな一種の鎖國政策

の効果に就いて多くの疑ひを抱かないわけにゆかない。現に、

英國は印度に於いても同じ政策を執ることとすでに久しいもので

あるが、その水も漏らさない警戒振りにも係らず、いはゆる「バ

ンデー・マータラム」のプロパガンダが年々印度土民の手に委せ

られることは、その數幾千の巨きに上るかは殆んど計り知り[illegible]

たいほどだといふではないか。假りに百歩を讓つて此政策が都合よく成功するものとして考へて見ても、單に外來のプロパガンダを防止することに依つてのみ此熱病豫防の目的を達しうべしと思ふものがあるとすると、それはあまりに事實の眞相を洞察しえないものの見方であるといはなければならない。何となれば、その傳播に於いて何等の中介物をも要しない主義思想の浸潤を防止して、恰も空氣傳染のやうに直ちに人の心に迫つて來る精神上の感化を排斥するためには、この鎖國政策はあまりに愚直に過ぎ、且つ、あまりに非力に過ぎるの憾みを持つてゐるからである。

從來、外から來る病毒の侵入を阻止する最善の手段としては、出來るだけ自分自身の身體を健全にして、その何れの部分を探しても一つとして病毒の乘ずべき缺點を見出さないやうにする外はない。併し、出來るだけ自分自身の身體を健全にして、その何れの部分を檢しても一つとして病毒の乘ずべき缺點を見出さないやうにするためには、果して如何なる手段を執つたらいいものであらうか。問題の性質からして、これは當然時と處との制限を受くべきものであるが、私は特に現在の我國に就いて考へて見たいと思ふ。

率直に云ふと、如何なる現狀謳歌者も、如何なる樂天論者も、現在の我國を以て全然滿足すべき健康狀態にありと診斷しうるほど盲目的な勇氣を持つてゐる人はあるまい。否、すこしく鋭い眼を以て時代の背後を流れてゐる暗潮を看取することの出來うる人であるならば、必ずや彼は現在の我國が一つの危險に向つて急ぎつつあるの事實を認めないわけにはゆくまい。食糧問題は如何、勞働問題は如何、階級問題は如何、個人の自覺に基づく政治問題は如何。――久しく外邦の歷史に於いてのみ吾人の見聞しつつあつた多くの問題は、今や近い未來に於ける嵐を豫想せしめるところの黑雲の一團となつて、徐ろに吾人の頭上を蔽ひつつあるではないか。憂國者流の口吻を籍りて云ふと、今の時は全局の危機頭に一髮の微にかかる時であると云つていいかも知れない。

併し、此危機を豫防するところの方法がいはゆる國民思想の統一とか、いはゆる道德的向上のためにする時の消費を奬勵するとか云つたやうな抽象論であつては何の役にも立たない。今日では最早單なる美名の下に隱れて現實の破綻を糊塗するの時期は過ぎ去つて、社會と人生との上に存するすべての不調和なり、すべての缺陷なりを一々實際上の見地から檢出しなければならない時期に到着してゐる。此點を看過して、徒らに民心の統一を計つて見たり、徒らに社會の道德的改善を企てて見たと

[illegible]
[illegible]ならば[illegible]りでなく、[illegible]下に於いて、[illegible]
て、[illegible]となる[illegible]ないことを[illegible]なければ
ならない。

當[illegible]に在ると、吾人に殘されたる豫防方法はたゞ一つしかない。それは何であるか。更めていふまでもない、非常な決心と、非常な勇斷とを以て、出來るだけ速かに、且つ、出來るだけ完全に我國の現在の社會と人生との上に存する缺陷を補塡して、いはゆる共同生活の不調和を除き、いはゆる世道人心の安定を得せしめることである。

この意味に於いて、私が特に急務であると思ふものは華族の廢止にあらずして寧ろ華族と平民との間に於ける障壁たる特權階級の廢止、立法政治上の不合理なる諮問機關たる樞密院の廢止、強制徴兵制度の撤廢、普通選擧の實施、工場法案のより適切なる改正及び勞働組合の設立に對する承認などである。その他に於いても猶ほ改善すべき多くのものがあるかも知らないが、以上の諸點を實行すると、先づ以つて大體の目的を達するに近くはあるまいかと思ふ。

普通選擧に對する國民一般の要望が如何に熾烈であるかとい[illegible]
[illegible]
つある國民に[illegible]居る[illegible]こと
て永久にかくのごときを[illegible]を繼續して、永久にかくのごときを以[illegible]策を斷行するものとすると、我[illegible]の[illegible]も未だ以て遽かに[illegible]しがたいものがある。國民一般の以て滿足とすべきものは、私は特に此點にありはしないかとさへ思うてゐる。

先づボリシエヰキーの眞相を知れ

播磨楢吉

ボリシエヰキー及びボリシエヰズムに對する對應策を論ずるに當つては、先づ先決問題としてボリシエヰキー及びボリシエヰズムの何者たるかを研究し之を明かにした上でなければ、其對策は樹てられるものではない。例を取つて言へば此問題に對人と醫者との關係の如きもので、病源を確かめないで投藥すれば藥の效がないのみならず却つて害を及ぼす。列國の對ボリシ

エヰキー政策なるものは、全く新人を容察しないで性急に政治に掛つてゐるやうなものだ。

世人はボリシエヰキーを誤解した、而して今尚ほ依然として誤つた見解を抱いてゐる。世間一般の考では、ボリシエヰズムは教育文化の程度低い無知暗愚な露西亜國民だけに起り得る不具的現象である、一時的現象に過ぎないと思惟してゐる。ボリシエヰキーの領袖連は山師的人物であつて、露西亜國民は無教育であるから此等山師に騙されてゐるのである、彼等は亂暴狼藉を働く無頼の徒であると思つてゐる。斯の種の謬見誤想は最早や之を打破するだけの價値がないと思ふ、若し今日尚ほ斯かる誤解を持つてゐる者があるとすれば、其無知に驚かざるを得ない。要するに世人はボリシヰキーに對して正確な知識を持つてゐなかつた、又正當なる理解を有しなかつた。之れ畢竟するに露西亜革命史を知らなかつたからである。

然らばボリシエヰキー及びボリシエヰズムとは何ぞや。之を歴史的に論ずれば露國の政黨である。ボリシエヰキーの前身は遠く千八百六十年代の末葉に起つた革命黨ゼムリヤ・イ・ウォーリャ結社に源を發し、以前は社會革命黨に對して單に社會民主黨と稱してゐたが、千八百九十七年に正式に結黨式を舉げ、露國社會民主勞働黨と稱するやうになつた。千九百三年第二回の黨會を開いた時、黨の政策問題が討議されたが、黨員の意見が二派に分れた。甲は中央集權說を持して、有產階級との提携妥協を全然排斥し、勞働階級の革命的執政を主張した。乙は地方分權論を唱へ、勞働階級の革命は覺束ないから有產階級と妥協すべきことを唱道した。黨員は甲說に贊成する者が多數を占め、乙說贊成者は少數であつた。之からして甲を多數派（ボリシエヰキー）と稱し、乙を少數派（メンシエヰキー）と呼ぶやうになつて、此時から露西亜社會民主勞働黨はボリシエヰキーとメンシエヰキーの二派に分裂して今日に至つてゐるのである。而して甲說はレーニンが主となつて之を主張し、乙說は故プレハーノフ、ツロツキー（因に言ふがツロツキーは此の大戰間際までメンシエヰキーの意見を持し絕へずレーニンと論鬪してゐた）等が唱道した。故にボリシエヰキー黨は千九百十七年の大革命までは自ら「露西亜社會民主勞働黨のボリシエヰキー派」と稱してゐた、共產黨と黨名を改めたのは去年からのことである。略ぼ之でボリシエヰキーは露國の政黨である、然かも一大政黨であるといふことが解つたであらう。

次ぎに政治的思想から之を觀れば、ボリシエヰキーはマルクス派に屬する社會主義である、卽ちマルクシスト派である。此黨に於て唱道は露國ボリシエヰキーの觀元である。國家社會主

義[illegible]
に由つて[illegible]社會主義の中でも共産的[illegible]極めて[illegible]であることは言ふまでもなく、自由、平等、四海同胞の三大理想を標榜し、其政綱とする所は折衷的民主義的プログラムである。ボリシエヰキーは病的にして缺陷多き現代文明を呪ひ、國家の奴隷となり支配階級の手先になり下せる現代宗教に代つて　社會を改造し革新する抱負を以て起つたのである。一面に於て彼等は世界の勞働者百姓兵卒に代つて先祖代々の怨みを晴し復讐するのであるから、支配階級に對し時に過酷な行爲に出でるのは已むを得ないと言はねばならぬ。彼等は歴史ある露西亞の政黨であると同時に、亦普遍的な宗教的性質を有つてゐる。ボリシエヰズムは冷やかな學說でない、一種の宗教的信念に由つて結合された民衆である。彼等が往々にして狂熱的で水火を辭せず生死を意に介せず、殉教者に似てゐる所があるのは此故である。

世人はボリシエヰキーに關して肝心な方面を忘れてゐる、否之を知らないでゐる　彼等は歴史的に發達し來れる露國の政黨であることを忘れてゐる、彼等は純然たる社會主義であるといふことを忘れてゐる。又世人は三百年來暴横を極めたロマノフ家を倒して正義人道を叫んだのは彼等であることを忘れてゐる

る[illegible]
[illegible]たた[illegible]すべき[illegible]
き[illegible]である。之を國家[illegible]へに、對ボリシエヰキー[illegible]は國家主義對社會主義[illegible]、又之を世界的に見れば、支配階級對勞働階級の問題であつて、資本對勞働、帝國主義對民主々義の關係である。

・ボリシエヰキーに關して正しい知識を有したかつた列國の對露政策は唯失敗を反復する許りで、今に五里霧中に彷徨してゐるやうな狀態である。列國は勞農政府を以て一時的のものである、少數野心家の煽動に過ぎないから間もなく自滅すると想つた。豫想に反して勞農政府は倒れないのみか益勢力を得て來たので、遂に軍隊を差向けた。赤衛軍なるものは職工百姓無頼漢から成れる烏合の衆であるから之を撲滅することは容易であると豫想した。少數な軍隊では到底赤衛軍に對抗することが能きない。それかと言つて大軍を露國に派遣することも出來ないので、今度は反過激派の小政府に援助を與へ、反過激派をしてボリシエヰキー討伐に當らしめる方法に方針を變へた。其結果英米日支各國は北露政府、デニキン政府、オムスク政府、小露政府の如き微弱な小政府に[illegible]上の援助を與へて、此等の政府の小軍隊をして大軍を擁するボリシエヰキー討伐を行らして

ゐる。然し一向に捗々しくない。ボリシエヰキーの勢力は更に猖獗を極めて來るばかりで衰へさうにもない。遂にプリンセプ島會議提案の窮策となり、昨今ではレーニンとの妥協說が傳へられるやうになつた。之れ皆ボリシエヰキーの眞相に暗い結果の致す所であつて、第一步を誤つたから今日の如く不測の成行きに立至つたのである。

勞農政府は早晩倒れるに決つてゐる。或は彼自ら倒れるに先つて之を倒すことが出來やう、勞兵會をも追拂ふことが出來やう。けれども勞農政府の倒崩、勞兵會の沒落は決してボリシエヰキー黨の滅亡を意味するものでない、又露國ボリシエヰキーの衰運は社會主義の衰滅を意味するものでもない。大砲は或る程度まで彼等を壓迫することが出來やうが、唯之れ壓迫である一時的壓迫である。壓迫さるれば壓迫される程、彼等は精神的に一致團結力を增し復讐心を刺戟するのである。西伯利の狀態が現に之を立證してゐる。殊に彼等は露西亞だけが社會主義的革命を起して、各國が依然として現在の儘である時に於ては、露國革命は早晩亡びるに極つてゐるといふことを能く承知してゐる。此際如何にしてなりとも、各國をして露國と同一運命に導かねばならぬ。そこで彼等は必死となつて世界的革命運動に着手し世界的にプロパガンダを行ふてゐるのである。また各國の社會民主派は露國の同僚と互に相呼應して陰に陽に聲援して各自其政府に對して壓迫を加へ、撤兵を主張してゐる有樣だから事が愈面倒である。即ち對ボリシエヰキー問題は國際的になつてゐることを注意せねばならぬ。

大砲や軍隊で彼等を討伐するが如きは愚劣な政策であり、無意義の殺戮であり、且つ第一にそれは不可能である。有形の大砲と無形の思想との戰鬪は結局思想の方が勝つ、これは各國の革命史が證明してゐる。

某サーベル大臣は軍隊を以て露國の過激派を討伐することが能きると豪語したさうであるが、之は多分誤謬ある過激派といふ字を見て、臺灣の生蕃と同一種類の蠻族とでも感違ひしたのであらう。若し討伐が出來るならば序に露西亞のボリシエヰキーを一掃して貰ひ度いものだ。我が國は過激派を討伐する目的で軍隊を出征せしめてゐるが、私は當局に質問し度いことがある。露西亞の政黨ボリシエヰキーは我國及び我國民の爲めに何故仇敵なりや。如何なる理由で他國の政黨を敵として血を流さねばならぬのだらうか。浦潮派遣軍々司令部でも又は政務部でも、過激派は日本の敵ではないと明言してゐたから、然らば對獨戰鬪が中止された今日尙ほ我軍隊が過激派と戰鬪するのは何故なりと質問すれば、彼等が秩序を紊すからだと答へてゐる。知

[illegible]

[illegible]露國[illegible]


の[illegible]た話である。彼等は事業を[illegible]して他國の革命を妨害してゐるのである。露國農民が革命の爲に大に爭つてゐるのを以て秩序を亂すものとなして彼等と戰爭をすることは理由が成立しない。或は言ふ、過激思想は危險だから默止する譯には行かないと。これも戰爭の理由にはならぬ。古今未曾有の社會主義的大革命を起した露國民に向つて、未だ革命後一二年しか經たない今日、秩序を亂すな、確かな政府を樹立せよと各國が要求するのは、餘り無理な注文である。支那やメキシコの如き平凡な革命でさへも今尚ほ治まらないではないか。

然らばボリシエヰキーを如何にすべき。若し列國に大軍を動かして彼等を討伐するの意向がないならば、又彼等を討伐し得る望みがないとするならば、對ボリシエヰキー問題の解決は妥協の一途あるのみと見たければなるまい。若しレーニンが列國に對して兎も角も列國に於て容認し得る如き妥協案を提議するならば、一先づ之に敵對行動を中止して置いて、然る後に徐ろに平和的に經濟的、財政的壓迫を加へて彼等をして共産主義の現代に不可能なる所以を事實的に了得さして、以て其の空想を放棄させる如き政策を講ずるのが最も賢明な良策であるまいか。

と[illegible]

若し列國[illegible]

[illegible]向があるとするならば、[illegible]目に帝國主義的政策を[illegible]して、妥協の交換條件として或は利權獲得或は外債の[illegible]部を利息と共に返濟させるとか、或は嘗て帝政府時代に締結された條約の履行を迫り、內政干涉的條件を持出して、彼等の困難に乘じて無理に之を強要するのは策の得たるものではない。露國の社會民主各派は帝國主義の權化として暴戻非道を極めたロマノフ家を覆して人道と正義の爲に盡すべからざる貢獻を爲してゐるのであるから、列國は多少同情的條件で滿足すべきであらう。


純品質主義
鷹印帽子は
日本品にして各國均しく歡迎す



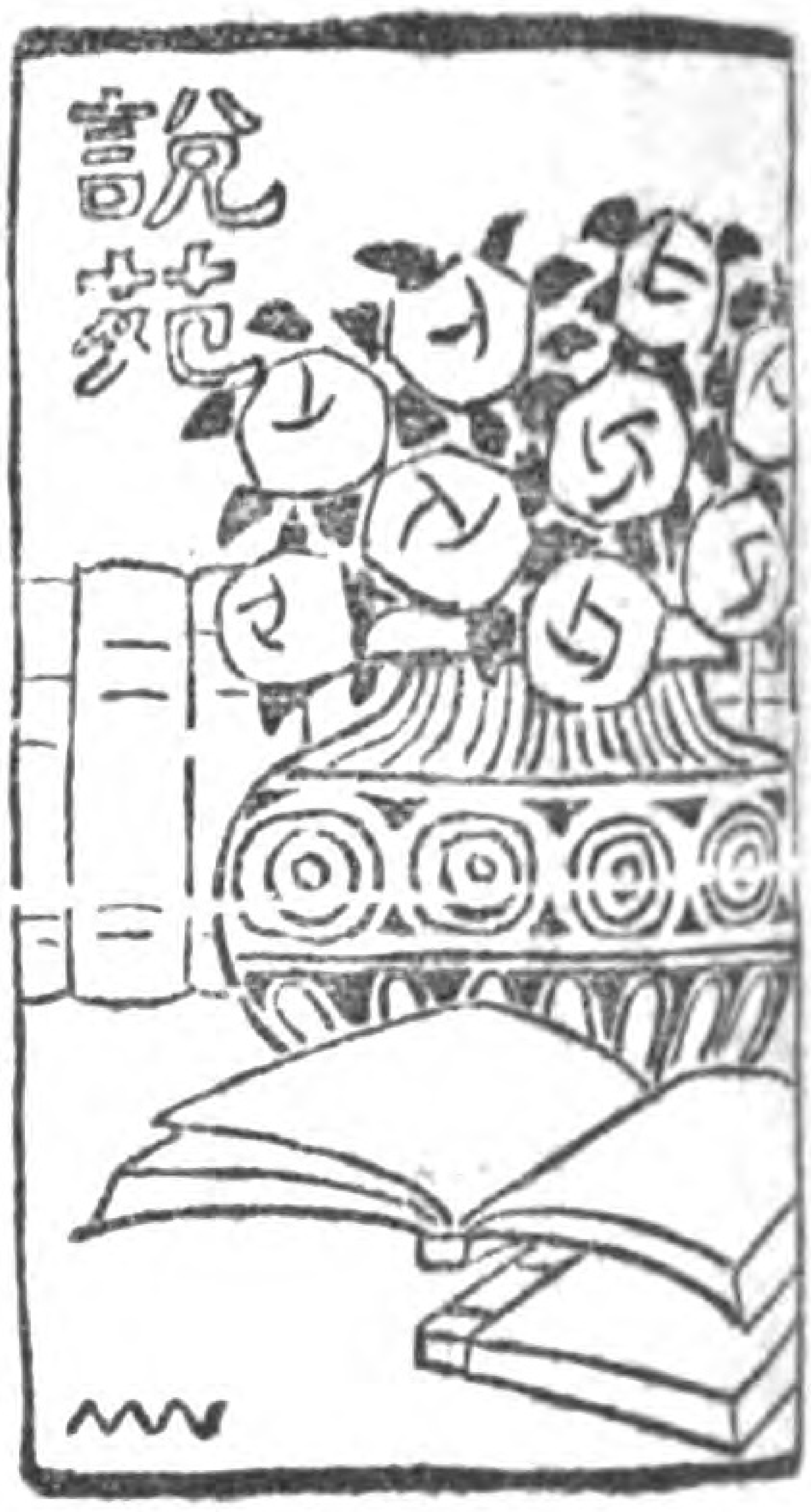
燈火の趣味
日本座敷にふさはしい上品で美しいベルリヤ反射笠其他嶄新の電灯器具が皆様の御用命をお待ちして居ります
マツダ電球各種
ベルリヤ反射笠
電氣器具各種
TEC
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎町
東京出張所 銀座尾張町 電話新橋 長一〇五九 一九三三 一三一二 二七二二
大阪出張所 西區阿波堀通 電話新町 長六三〇 長八八九 八九八
門司出張所 西本町 電話 長四六 六八二
名古屋 仙臺 札幌 大連 上海

D-209

支那情史

燈影綺談

村松梢風



候風

黄河の水は渺漫として流れてゐた。其の上から、明るい晩春の太陽が靜かに耀いてゐた。魚が、時々黄いろい水面を破つて鮮やかな鱗を空に躍らせた。翼の白い鳥が、何んにも知らぬ氣に高く高く舞つてゐた。

淮安の港には、無數の船が碇泊して風待ちをしてゐた。船舷が擦れ合つたり、帆柱が重なり合つたりした。船と船とで、舟人がだみ聲をあげて罵り合つてゐるかと思ふと、何處かの船窓からつれ〴〵のままに彈き出した蛇三線の音が、水面を傳つて聞こえて來たりした。岸邊には河柳が綠の枝を組み合はせて茂つてゐた。其の間に、屋上へ靑い旗を差し出した酒肆などが並んでゐた。遙かに城廓の樓門が、碧空へ繪のやうににじんでゐた。

情は、讀みさしの小說を伏せて大きな欠伸をした。もう幾日となく船路の旅を續けてゐるのだが、かうして無意味に淹留してゐるとなると今更退屈で溜まらなかつた。耀やかしい太陽の光が徒らに彼の血を沸き立たせた。靑草の萠えてゐる陸地を足にまかせて驅けづり廻る愉快さを、彼は薄暗い船窓の中で幾度びとなく想像した。彼は、商用で旅行する父に伴はれて東海地方を見物して、半歳ぶりで故郷の太原へ歸る途中であつた。船には、各地の物産が山のやうに積み込まれてゐた。父の張は、其の賣上げの利益を豫想して毎日ニコ〳〵して暮してゐた。そ

して尠しでも退屈すると、己が船室へ這入つて晝間からグウグウ睡眠を貪つてゐた。

情は、窓の扉を上げて顔を外へ突き出して見た。すると、何時の間にか、隣りの船がぴつたり近づいて來て、窓外の眺望をすつかり遮つてゐた。船と船とは手が屆きさうになつてゐた。濁つた水が、兩方の船腹をピシヤ／＼洗つてゐた。情は一寸忌ま忌ましさうな顔をした。やがて仕方が無いといふ風に視線を水面に落して、木の葉や埃などが流れて來るのをぼんやり眺めてゐた。

稍暫らく經つてから、情はヒヨイと眼を上げた。すると、意外なものを彼は認めた。それは隣りの船の窓から、扉を半分ばかり卷いてこちらを見てゐる女の顔であつた。情の視線とぶつかると、女は慌てて首を引つ込めてぱつたり扉を卸した。それはほんの瞬間に過ぎなかつたけれど、女の顔が鮮やかに情の眼に殘つた。

情はじつと向ふの窓を見てゐたが、それつきり女は顔を見せなかつた。仕舞ひに彼は諦めて窓を離れた。そして最前の小説の續きを讀み始めたが、最早一向氣が乘らなかつた。知らぬ間に女の顔が紙面へ浮かび出て來た。彼は恍惚りと夫れを見入つてゐた。

情は再び窓の外へ顔を出した。そして先刻と同じやうに水面を眺めてゐた。すると間もなく、向うの窓からも女の顔が現はれた。夫れを情は態と氣づかぬやうな振りをしてゐた。しかし、黄いろい水の上にも、ありありと女の顔が寫つてゐた。

日が暮れかけてゐた。空が薄紅く染まつて、水面が次第々々に暗くなつた。情の窓と眞正面になつた船舷へ、下婢らしい女がしやがみ込んで頻りに何か物を洗つてゐた。

「一向風が出さうもありませんね」

情は突然から話し掛けた。女は吃驚したやうに振り仰いで情の顔を見たが、

「ほんとに左樣で御坐いますね。何時になつたら船が動くで御座いましやう？」と、細い眼をして愛嬌よく應へた。

「あなた方は何處（どちら）迄いらつしやるんです？」

「わたくしどもは京迄參るんで御坐います。只今迄は福州に居りましたんですが、今度旦那樣が、お役をおやめ遊ばして、皆樣でお歸りになるので御坐います」

女は洗ひ物の手を休めて、福州は氣候が暖かでよかつたとか、海産物が豐富だとかいふことからはじめて、自分の主人は呉君といつて福州の太守をしてゐたことだの、郷里には澤山の田畑を有つてゐるから役人をやめても一向差し支えが無い――と云

つたやうな顔を目映さうに眉の間した。
「お嬢さんがいらつしやるんですね」と、……
子をして云つた。
「はい、いらつしやいますよ。内のお嬢様は、夫れは夫れはお美しい方です。福州では一番の御縹緻だつたんですが、京へ参つても、あんなお美しい方は滅多に御坐いますまい」
「名前は何んとおつしやるんです？」
「素秋様とおつしやいますよ」
情は窓から外へ長く手を差し出した。水に濡れた頑丈な女の掌の上に、銀色に光つた物が幾粒か上せられた。
「お願ひですから、是れをお嬢さんに差上げて下さいな」
情は直ぐあとから何か認めた紙片を女の手に渡しながら哏願するやうな調子でかう云つた。女は嬉しいやうな当惑したやうな表情をして両方の手の上を見較べてゐた。

素秋は窓際へ寄つて、低い調子で月琴を奏でてゐた。向ふの船の帆柱の丁度中頃に懸かつてゐる月が、青白い光を彼女の半面に浴びせてゐた。其處へ下婢が用あり気な顔をして這入つて来た。
「なに？」彼女は月琴を抱えたまま振り返つた。下婢はそれには答へずに「まあ、よい月で御坐いますこと」と云つて、窓……しきりに頷いた。
「お嬢様、この隣りの船のお方を御覧になりまして？」
「隣りの船の方つて、あの今乗つてるぢやないの？」
「否え、それ、お嬢様と同い歳位の、綺麗な男の方がいらつしやるで御坐いましやう？」
「識らないよ、わたしは。其の方がどうしたと云ふの？」
「あの、それがかうなんで御坐います。さつきわたくしが洗ひものをして居りますと、其の方が、お嬢様に差し上げて呉れつておつしやつて、こんな物をお寄越しになつたんで御坐います」と云つて、下婢は懐中から情に頼まれた物を出しかけて急にモジモジしてゐた。
「何、それは？　一寸お見せ」
素秋は尠し周章てた容子でかう云つて下婢の手から青い紙片を取つた。彼女はそれを燈の方に向けて読んだ。
「空復清吟託艶姻。班姫合是淵紅粉。相逢何必藍橋路。休負滄波好天月」——素秋は顔を紅くした。そして恍惚り詩箋を眺めてゐた。軈て彼女は、側に立つてゐる下婢に気がついた。
「お前、こんな物を持つて来ていけないぢやないの？」と、素秋は憤つたやうな顔をして云つた。下婢は吃驚して、
「はい……あの、わたくしには何だか判らなかつたもので御坐

いますから」

「判らなくたつて……識らない男の方からこんな物頼まれて來るといふことがありますか。いいよ、お父様に申上げて遣るから」

素秋はかう云つて直ぐに詩箋を手にして起ちかけた。

「もしお嬢様、どうか御勘辨遊ばして……全く氣がつかなかつたんで御坐いますから、旦那様にそんな事おつしやられますと、わたくしは何れ程お答を頂くことか分りませぬ」と、下婢は素秋の手首を捉へて泣くやうな聲を出した。

「ぢや、今度だけ許して上げよう。其の代り二度とこんな事をすると承かないよ」素秋は優しい眼で下婢の顔を睨めた。

「はい、お嬢様、誠に申譯御坐いませんでした」と、下婢はペコペコして謝つた。

「判つたらそれでいいの。——だけど、其の方も隨分失禮ね。あたし腹が立つから、何かうんと馬鹿にしたことを書いて返して遣らうかしら」

素秋は獨言のやうにかう云つて暫らく考へてゐたが、軈て卓の上に小形の詩箋をのべて、細い綺麗な文字を認めた。

自是芳情不競春。春光何事惱閑人。
淮流消送天邊月。比似郎心向我秋。

月は冲天へ上がつてゐた。河の水が黄金を流したやうに光つてゐた。船の中はしんと寢靜まつてゐた。

素秋は船の上に出て月を見てゐた。すると向うの船の上にも一個の人影が現はれた。軈て其の人影は、舷から舷へ架け渡した狹い板子をつたつてこつちへ歩いて來た。二個の影が、强烈な月光のために溶かされたやうにぴつたり一つになつたと思ふと、其のまますうツと下の方へ消えて行つた。

「貴孃、大變です?」

情は惡際から撥かれたやうに身を返して、低く魂切るやうな聲を出した。

「なに?」と、素秋は細い眼を明いて睡たさうに云つた。

「大變です、船が動いてます!」

「えツ!」素秋は吃驚して飛び起きた。

二人は顔を並べて外を見た。水が勢よく船舷を洗つて流れてゐた。うすうすと白みかけた彼方の岸が徐かに後の方へ動いてゐた。爽やかな朝風が、熱してゐる二人の頬を掵つた。頭の上では、ギイギイと帆綱の軋る音が聞こえてゐた。

「まあどうしたらいいでせう?」素秋は男の腕に掟まつて蒼く

なつて云つた。

「わたしだつて分らない——もうかうなつちやお父さんの船へは歸れない——、わたしが一等困つて仕舞ふんです」

情は兩手で顔を押さえながら泣き聲を出した。

張は、今朝に限つて何時迄も情が起きて來ないので最後には訝しく思ひながら自身で伜の室へ出掛けて行つた。すると寢床が空つぽになつてゐた。忽ち大騷ぎになつた。大勢手配けをして船中を隈無く搜したが、情の姿は何處にも見えなかつた。

「昨夜遲く厠へでも行つて、其の時足を滑らせて河の中へ墳まつたのに違ひない」

といふことに、誰れの云ふ處も一致した。張は直ぐ様船を淮安迄引き返させた、そして、其の日終日情の死骸を捜索させたが目つからなかつた。張は淵に臨んで慟哭して、太原をさして出發した。

素秋は、氣分が勝れないと云つて己が室にばかり閉ぢ籠つてゐた。食事も其處へ運ばせてばかり食べた。兩親は非常に心配して、用意の藥を取り出して飲ませたりした。然し幾日經つても、彼女は外へ出なかつた。

一番先きに一[illegible]だ——と[illegible]故かといふと、「氣分が惡い／＼」と云つてゐるけれど、顔の血色を見るといつもの通り艶々してゐて聊しも病氣らしい處は無い。そして猶一とつ奇異しいことには、近頃素秋が非常な大食家になつた。平常は半分も食べない食膳が、幾度び空つぽになつて戻つて來るのである。

「どうも奇異しい」

かう思つて、母は或夜更けてからこつそり娘の室を窺つて見た。するとヒソ／＼語らひ合ふ男女の聲が戸の内から漏れてゐた。母は吃驚して此の由を直樣夫に報らせた。吳君も驚いた。彼は腰に劍を吊つて、妻と一緒に娘の船室へ行つた。

素秋は聲へやうもなく狼狽した。彼女は着物なども取り亂して、内から戸を明けて兩親を迎ひ入れた。

「これ——今爰に居つたのは誰れぢや？」と、吳君は娘の顔を睨み付けて云つた。

「否え、誰れも居りません」と、素秋はオド／＼して云つた。

吳君は鋭い眼で室内を見廻した。そして側の戸棚に眼をつけると、いきなり其の戸に手を掛けた。戸棚の中では、情が小さくなつて顫へてゐた。

「不埒者！」かう云つて吳君は情の襟頸を捉へて床の上へ引

きずり出した。素秋は兩手で顏を押へて泣き出した。吳君は眞紅な顏をして、いきなり靴を擧げて情の躰を蹴つた。最愛の娘を傷物にされたのだと思ふと、盲目的な憤怒が心頭に燃え上がつた。彼はスラリと長劍を拔いた。

「あ！　どうかお助け下さい。お願ひで御坐います」

情はガタ／＼戰きながら兩手を擧げて救ひを求めた。刄の光が、魂の消える程彼を脅やかした。素秋も仰天して父の腕に取り縋つた。

「お父様、此の方が惡いのでは御坐いません」と、素秋は泣きながら云つた。

吳君は、一と思ひに若者を刺し殺して仕舞はうと考へたが、どういふものか躊躇らはれて腕の力が鈍つて來た。涙を限り無く頰に傳らせて自分を振り仰いでゐる上品な、若者の顏がなんとなく可憐に見えて來た。娘の悲しみが、自分の胸にも通じて來るやうな氣がした。

「戀だ――」

吳君はふとかう考へた。まるで別の世界が眼の前に展開したやうに感じた。一徹な腹立たしさや穢らはしさが、次第々々に薄らひでいつた。

吳君は態と情を河の中へ突き落した。そして濡れ鼠になつた情を再び引き上げて、水に溺れて流れて來た者を救ひ上げて訊ねて見ると、圖らずもそれが昔の友人の悴であつたと云つて、假作りの奇談を舟人共に披露した。船が濟州へ着くと、吳君は其處で娘のために、盛大な結婚の式を擧げた。舟人等は悉く招かれて其の宴に列した。軈て京の用務を果して、吳君は家族を率ゐて故郷の楚に歸つた。太原へも使者が立てられた。老ひたる張の喜びは云ふも愚かであつた。彼は數々の珍寶を船に積んで遙々と楚を訪れて來た。

吳君は別に立派な新館を建てて、其處へ若夫婦を住まはせた。そして情のために、京から名士を迎へて教育することを怠らなかつた。情の學業は大に進んだ。廿三歳の時鄉薦をうけ、其の翌年は進士に擧げられた。かうして彼は首尾よく官についたが、最初南京の禮部主事に任命されたのを振り出しとして、後には其郡の太守と迄累進した。素秋との間には數人の子供を儲け、いつでも春のやうな家庭をつくつてゐた。

章子厚

章子厚は、終日の讀書に疲れた頭を休めやうと思つて、夕方からブラリと街へ出た。

空には、さながら空中の飾りさうな雲がフウハリと浮いてゐた。往來を歩いてゐる人達の顏が赤々と染まつてゐた。紅綱を繞らしめた大きな旗亭だの、隙き間もなく金看板を掛け並べた藥屋の店などが、靜かな夕燒の中に極樂の建物のやうに耀いてゐた。車馬がしつきりなしに走つてゐた。

今時分街を散策するのが彼の日課で、又樂しみの一つにもなつてゐた。勉學のために草深い田舍から此の長安の都へ出て來てまだ一と月にもならぬ章にとつては、見る物聞く物總てが驚異の種で、かうしたつれ〴〵の散歩から受ける刺戟だけでも、血潮が波立つて來るやうな都會に對する讃美と感謝の念を起こさせるのであつた。彼は緩漫な足どりで、慌ただしげに活動してゐる街を歩いてゐた。

と、彼の背後から幾挺かの綺麗な輿が續いて來た。前後にも左右にも供廻りが隨いて、見るから美々しい行裝を整へてゐた。章は慌てて道を避けて、ぼんやり佇んで其の行列を眺めてゐた。輿が幾つも彼の前を過ぎつた。と、一番最後の輿に、眼の醒めるやうな美しい女が簾を卷いて乘つてゐた。章の眼は忽ち其の女の顏に吸ひつけられた。すると殆んど同時に、女の眼もじつと章の顏に注がれた。女は、蕩けるやうな媚を漂へて嫣然り笑つた。

章は思はず恍惚とした氣持になつて、暫くは其の輿に並行して歩いてゐた。彼は歩きながらチョイ〳〵横眼をつかつて女の顏を偸み見た。女の眼は絶えず章に向つて注がれてゐた。其の眼が頻りに動いた。それは「一緒に來い」といふやうな眼つきであつた。

妖艶な女の眼の行つてゐる魅力と、彼自身の強い好奇心とが何處迄も章の足を引きずつて行つた。何處をどう歩いて來たか彼は知らなかつた。藍色の黄昏が街を包みはじめたのも彼は氣がつかなかつた。

とある淋しい街の角迄來ると、女の輿が不意にぴたりと停まつた。章も思はず足を停めた。すると女がニコ〳〵笑ひながら手で彼をさし招いた。章は暫時躊躇してゐたが、漸く勇を鼓して輿の側へ近づいて行つた。

「是へお乘んなさい」

と、女は低い聲で云つた。そして自身の體を片寄せて、「速く速く」と眼で知らせた。章は何事を考へる餘裕も有たなかつた。背後から力任に押されてゐるやうな氣持で、彼は慌てて輿の中へ這入つた。女は手を伸ばしてばつたり簾を卸した。輿は直ちに動き出した。

章は夢を見てゐるやうな氣持がしてゐた。夢の中では、往々有り得べからざる奇怪な現象が極めて自然に進展することがあるが、全くそれと同じやうに、章は現在自身を卷き込みつつある不思議な事實に對して當然起きなければならない疑念も考察力も失つてしまつて、唯々女の體から發する魔藥のやうな高い香りに陶醉して、朦朧とした狀態に陷ちてゐた。

總てのこと、彼がはツと吾れに歸つた時は、輿が地に卸されたのであつた。

「お降りなさいな」と、女が靜かな聲で云つた。

章は簾を捲つて外へ出た。もう殆んど夜になつてゐた。眼の前に、大きな建物の屋根が眞黒く空を仕切つて展がつてゐた。邊りには大勢の人がガヤ〳〵云ひながら動いてゐた。なんでも其處が非常に廣大な邸の內であることだけは彼にも分つた。

「貴郎、こちらへおいで下さいまし」

章が呆然と突つ立つてゐる處へ別の女が一人やつて來て、かう云つて彼を家の中へ連れて行つた。家の廣いのと立派なことがすつかり章の膽を奪つてしまつた。部屋の數はどれ程あるか殆んど想像も及ばなかつた。然し一體人が居るのか居ないのか、何處も彼處も唯寂として靜まり返つてゐるばかりであつた。案內をする女は、默つて章の前に立つて、際限も無く長い廊下をあつちへ曲りこつちへ曲りして引つ張り廻して行つた。ところ〴〵に點つてゐる油燈の光が、恐ろしく高い天井や兩側の壁に黯澹とした色を漂へてゐた。章は再び朦朧とした世界へ引き込まれた。この建物も、案內をしてゐる女も、自身の姿も、總ての物が現實と夢幻との間に彷徨してゐるもののやうに見えた。彼は、ある不可抗力な運命に支配されつつある人間のやうに、默々として女の後に隨いて行つた。

ある室の前迄來ると、女は立ち停まつて、大きな扉を明けて中へ這入つた。

「どうぞこちらへ」廊下に突つ立つてゐる章に向かつて女が中からかう聲を掛けた。

室內には、章の足を竦ませてしまふやうな立派な敷物が張り詰めてあつた。眞中の卓には、燃え立ちさうな紅い絹の布が掛かつてゐた。金銀の器、七寶細工、或ひは精巧な象眼を鏤めた紫檀や黒檀——さうした器具や調度があたりに眩しいやうな光を放つてゐる。何人の筆になつた名畫であらう？　壁には天女舞踏の圖が絢爛たる色彩を躍らせてゐる。異國の物産らしい綾織りの帷が、隣室との境にどつしりと垂れてゐる。

女は物慣れた態度で彼に牀を勸めて置いて、「暫時（しばらく）是れでお待ち下さいまし」と云つて丁寧に禮を施して出て行つた。其の

い足音が内の方から聞こえてゐたが、軈てそれもなくなると、上の部屋の中が一度にしんと靜まり返つて仕舞つた。

章は珍らしさうに室内を見廻した。事實其處には、田舍出の貧書生などが見たことのあるやうな物は何一つとして置いてはなかつた。非常な富豪か、然らずんば餘程高貴な人でなければ斯様な住居を有つてゐる筈が無いといふことだけは章にも想像された――「それにしても、自分を一緒に輿へ乘せて來た女は何者かしら……？ 全體、何んの目的があつて自分を爰へ連れて來たのだらう……？」疑問が、群がる雲のやうに章の腦裡に渦卷いて來た。彼は初めて、先刻からの出來事を反省して見た。然し、考へれば考へる程、疑惑は一層增すばかりであつた。自分を誘惑したあの美しい女の眼つき、彼はそこに意味を求めて考へて見たり、或ひは全然別な、何か秘密の目的の下に自分は引つ張つて來られたのかも知れないといふ風に想像して見たりした。飽く迄も不可解な世界に向かつて、彼の妄想は限りもなく突つ走つて行つた。彼は眼前に異常なる幸運を描いて胸を躍動させたり、何か畏るべき運命の襲來を豫想するやう氣持で劇しい恐怖に打たれたりした。

足音が近づいて來た。章の胸は早鐘を打ち出した。運命の分岐點に立たせられたやうな不安が押し迫つて來た。軈て靜かに戸が開いて、輿へ一緒に乘つて來た女が艶やかな姿を見せて這入つて來た。章は「ほツ」と安心したやうな氣持になつた。

「先刻は失禮――」

女は艶やかなしなを作つて輕く會釋をして、章と對き合ひに腰を卸ろした。章は初めてよく女の顏を見ることが出來たのであつた。彼には齢比だけは明瞭り見當が付かなかつたが、とにかく廿前後位に見えた。顏はどちらと云へば圓い方で、體もそれに準じて可成り肥り肉のやうであつた。漆のやうな髮をぴつたり二つに分けて背後で束ねてゐた。刷毛のやうに揃へた前髮が、眉を覆ふばかりに房々と垂れてゐた。薄紅い色をした愛らしい耳たぶには金の輪が優美にぶらさがつてゐた。長い睫毛の間からじつと相手の顏を凝視める時、女の眸は露を含んで、臙脂を差してゐるらしいぴんと切れ上がつた眼尻に得も云はれぬ媚が湛へられた。

章は眩しさうに眼を外らした。彼は訊いて見度い事ばかり澤山胸に閊えてゐるやうな氣がして、其のくせ言葉は一向口へ上つて來なかつた。女も矢張り默つてゐた。其處へ以前の侍女らしい女が這入つて來て、美事な料理や酒などを卓の上に並べて置いて立ち去つた。

女は銀の盃へ酒を注いで章に勸めつつ自分も飲んだ。

「貴郎のお名前、何んとおつしやつて？」

「章子厚――」

「章子厚？　まあいい名ですこと」女は嬉しさうに云つて「お齢は幾つ？」

「十八です」

「お宅に、奥様がおあんなさるでしやうね？」

「否え……そんなもの有りません」と、章は顔を紅くして「私は省試を受けに來た書生ですもの」

「おや、さう……？ぢや、御郷里はどちら？」

「四川の龍州といふ處です」

「其處迄、此處からどれ位あつて？」

「さあ――二千里位でしやう」

「まあ、遠いんですねえ――貴郎其處からお一人でいらつして？」

「ええ……」

女は夫れから夫れと章に話し掛けた。章は郷里の方のことだの、自分の泊つてゐる宿のこと、或ひは試驗の學科の話――といつた風に自分ばかり喋らせられて、何時迄經つても肝心の問題に觸れる機會が無かつた。其の間に女は巧みに章に酒を勸めた。酒量の弱い章は、何時の間にか醉ひに囚はれて陶然となつてゐた。

「貴孃の名は何んて云ふんです？」と、漸く章は問ひ掛けた。

「妾の名？――玉香」

女は扇を口に當てて答えた。

「一體此處は何處なんです？」

「あら、そんなこと訊いてどうなさるの？　兎に角都のうちですもの、御心配なさることありませんわ」

女は直ぐに起つて章の側へ來た。「貴郎お睡くなつたやうね、」可愛らしい眼をしてゐらつしやるわ」

「私はもう歸らなければならないんです」

「おほほほほ。妾が貴郎をお歸しすると思つて？ぢや、何故妾の輿へ乘つてらしつたの？」

章は肩の上に非常な重味を感じた。酒で火照つてゐる彼の頬へ女の熱い息が掛かつた。

翌日、女はいちんち章の側についてゐた。時々思ひ出しては章が何か訊ねて見ても、女は唯輕く笑つてゐたり、不得要領な返事をして巧に問題を外らしてしまつた。で、疑問は依然として疑問の儘で章の胸裡に殘されてゐた。章は絶えず女に對して

經驗を積んでゐた。彼は、女性に關する智識は殆んど有つてゐないと云つてもよいくらゐな男であつたが、然し此の女が決して處女ではないことだけは種々の點から想像するに難くなかつた。猶彼が心に感じたことは、女の容貌だの衣裝などの美しい割りに品格の乏しいことであつた。媚びを含んだ眼もとにも、肉慾的な口もとにも、或ひは一寸した態度の端しにも何處かに下司な處があつた。再び追ひ話してゐるうちに、彼は女が殆んど文字に關する智識を備へてゐないことなぞも知ることが出來た。然し、かうした素質上の觀察は、一層此の女に對する不可解の度を昂めるばかりで更に事實を究める材料にはならなかつた。

昨日と同じやうな夕燒けが今日も空を眞赤に染めた。其の耀やかしい反射が室内迄差し込んで來た。章はふと歡樂の夢から醒めた後の憂欝な不安に襲はれた。彼は女に對つて、宿へ歸して貰ひ度いと云つた。すると女は冷やかに笑つて、章の體を其處へ押さへつけた。

或日、章が一人で居る處へ、違つた女が這入つて來た。そして、玉香といふ女がいつもするやうに、卓の上へ料理を並べたり酒を注いだりして章の相手をしてゐた。其の女は、丁度玉香と同じ位の歳比で、同じやうに美しい容姿を備へてゐた。ただ、表情といふ點に、玉香は實に乏しかつた、男を惹きつけるといふ點ではあつた。此の女の容貌には、露骨にして男を惑はすといふ程の強い力は無いが、其の代り何處といつて厭味の無い綺麗な趣きを有つてゐた。章は、玉香の體に何か差し支えでもあつて單に食事の相手に來たことにばかり考へてゐたところが、何時迄經つても女は出て行く樣子はなかつた。

章の處へは、幾人かの女が替る〴〵來た。そして、女達は出て行く時必ず外から入口の扉へ錠を掛けた。

章は室内でばかり暮してゐた。其處には寢室も厠も附屬してゐた。窓の外には狹い庭があつたが、周りを見上げるばかりの高い土塀が取り卷いて、此處と外界との交通を全く遮斷してゐた。其の塀の上に見える空が曇つたり晴れたりした。丈の低い庭の樹木の葉が、少しづつ色を變へて行つた。

ふつくらと圓味をもつてゐた章の頰肉が、著しく目立つて瘦せて來た。星のやうに生き生きと、青春の希望に耀いてゐた眼が、どんよりと濁つて來て、血の滲むやうな邪淫の光が氣味惡く燃えてゐた。顳顬のあたりに現はれてゐる青い筋が絕えざる不安と懊惱に苛ら立ちつつ蠢動いてゐた。疲勞と恐怖にさい

なまれて死んだものの如くなつてゐる章の魂が、殘酷な手で新しい歡樂の前へ引きずり出されると、病的に戰いて果てしもなく狂ひ出した。

或日章の處へ來た女は、今迄の者に比べると餘程齢が上らしかつた。身なりも化粧も總てがじみで、容姿も左程優れてゐるといふ譯ではなかつたが、何處となく温雅で、親切らしい處を有つてゐた。然し、遁れ難い怪奇な運命に翻弄されて、有らゆるものに對する抵抗力を失つてしまつたやうな章には、最早相手を觀察するだけの氣力も興味も湧いては來なかつた。

「貴郎には御兩親があつて？」女はふとこんな話を始めた。

「有ります。親達は郷里で暮らしてゐるんです」

「御兄妹は？」

章は面倒臭さうに默つて横に首を振つた。

「まあ、貴郎一人息子なんですの？　それぢや、御兩親は心配していらしやるわね」

女はかう云つて、憐れむやうな眼つきをしてじつと章の顏を凝視めた。女は時々何か考へるやうな容子をしてゐたが、暫らく經つと又章に云つた。

「貴郎は、此處をどういふ處だと思つていらしつて？」

女の言葉が「ハツ」と章の心を打つた。彼は、ビクリと神經を緊張させて女の顏を見返した。

「判らないんです。それを今迄どれ程訊いても、誰も敎へて呉れないんです。一體此處は何處なんです？　そして、どういふ譯で私は此處へ連れて來られたんでしやう？」

と、章は眼の色を變へて一と息に云つた。女は靜かに笑つて、

「それは誰も明かすことの出來ない秘密ですもの――、然し貴郎が餘りお氣の毒ですから話して上げましやう。貴郎は實に飛んでもない處へいらしつてるんですよ」

かう云つて女は、奇怪至極な、戰慄すべき物語りを始めた。

其の話によると、此の家の主といふのは今世に時めいてゐる某大官である。彼は、權勢といひ地位といひ財産といひ、此の世に於ける富貴の限りを盡してゐるが、唯一つ缺けてゐるのは子の無いことである。勿論數多くの妻妾を畜へてゐるのであるが、何故か今迄どの女にも子が出來た例がないのである。處が、此の國の掟として、實子の無い場合には家系が斷絶することになつてゐる。此の法律だけは、如何に權力を有する彼でも動かすことが出來ないのである。彼は久しい前から此の問題で心を惱ましてゐた。自分が高齢に達するに從つて、彼は益焦慮り始めた。其の結果、單に子を欲しいといふ念が彼の心理を異常な點迄導いていつて、他の男を自己の婢妾に合はせて子を生

ませることを計畫したのである。それ故[illegible]い若者を誘拐させて來ては此の邸内へ止め置くのである。そして、此の犠牲になつて來た男達は、秘密の曝露を防ぐために最後には必ず怖ろしい運命の坑に投げ込まれてしまふといふのであつた。

女の話を聞いてゐるうちに章の顏色は眞蒼になつた。

「貴孃、どうか私を救けて下さい。お願ひです」と、章はガタ〳〵顫へながら云つた。

女は親切さうな眼をして合點いた。

此の家の主は、毎朝未明に邸を出て參朝するのが例であつた。或朝章は、女が密かに持つて來て呉れた裝束を身につけて、供廻りの中へ紛れ込んで邸を出た。路の曲り角へ來た時、彼は足拵へを直すやうな振りをして行列を遣り過ごして置いて、反對の方角へ向かつてひた走りに走り出した。何處をどう驅けて來たか更に彼は覺えが無かつた。最後に彼は息切れがして路の上に倒れてしまつた。其の時は街を包んでゐた朝霧が隈なく晴れて、高い屋根の頂には旭日が金のやうに耀いてゐた。

章は都が恐ろしくて溜まらなくなつて來た。彼は省試に應ずることも止めにして、夫れから間もなく郷里へ歸つた。

[illegible]

丘といふ青年があつた。其の土地では代々續いた名門の息子であつた。彼は人に優れた容貌と才智を併せて備へてゐたが、殊に詩文を作ることと琴を弾じることとに於ては、卓拔な伎倆を有つてゐた。是れだけの條件でも、彼は此の世で最も幸福な生活を送らねばならない筈であるにも關はらず、事實は其の反對であつた。何不足の無ささうな彼の身の上にも、唯一つ大きな不幸があつた。夫れは早くに母を失つたことであつた。幼年時代の出來事である此の不幸は、何時になつても償ふ術が無いばかりか、軈ては彼の一身を過つ根元になつて來るのであつた。父は、母が死ぬと間もなく後妻を迎へた。そして、後妻の腹からも幾人かの子供が生まれた。繼母と丘とは最初から性が合はなかつたが、其の葛藤が追ひ〳〵劇しくなつて來て、家庭には常に險惡な空氣が渦を卷いてゐた。天成不羈放縱な上に詩人肌の丘は、此の不愉快な空氣の中に生活してゐることが耐えられなくなつて來た。最後に、彼は到頭家を飛び出し、生れ故郷の清河を後にして當途の無い旅に上つた。それは彼が十八の春であつた。

爾來足掛け三年、丘は遍く江湖を漂浪して、廿の歳を楚の國

で迎へた。或る土地の名士が、甚だしく丘の才を愛して永く其の家に足を停めさせた。丘も其の待遇の厚きに感じて、暫らく放浪の性を矯めてゐた。

或晩のこと、丘は唯一人の少年を随へて最寄りの河に舟を浮かべて遊んだ。頭の上にはまん圓な月が懸かゝつて、其の周圍で星が意味ありげに瞬いてゐた。河の水が音もなく滑つて行つた。微風が苫を滑つて流れて通つた。

自然に對して、歡喜にうたれてゐるやうな、哀愁に包まれてゐるやうな、何んとも云へぬ感激に丘の心は顫へてゐた。あらゆる過去の出來事と、遠い未來の姿と、交々彼の胸にのぼつて來た。故郷の事を思ひ出しては漂泊の此の身を傷ましく觀じたり、遠い星を眺めては猶更に未見の土地に憧憬れたりした。丘は少年に命じて舟を懸崖の岩に繋がせて、自ら琴を爐いて琴を彈じた。

不圖、崖の上から人聲が聞こえて來た。丘は琴を彈く手を休めて、苫の陰から簡をつき出して上を眺めた。紅い紗を張つた燈が眼に這入つた。月光を浴びた女の影が二箇崖のとつ先きに立つてゐた。

「納涼だな」

と丘は思つた。彼は猶じつと眼を据えて視た。夜眼だから貌形は明瞭りせぬが、何んとなく夫れが美しい女でありさうに思はれて來た。彼は忽ち好奇心を唆られて、舟を出て岩に掴まりながら登つて行つた。

丘の想像は正しく的中してゐた。燈を提げてゐる方は五十恰好の女であつたが、いま一人の白い着物を着て團扇を手にしてゐる方は、廿前後の繊麗な感じのする女であつた。

「今晩は」と、丘は側へ寄つて慣れ慣れしく會釋をした。

「あなた方も納涼ですな。こんな好い晩に、家に閉ぢ籠つてゐるのは勿體ないはなしですからな」

「否え、妾どもは貴郎の琴を聴きにまゐりましたの」と、若い女が別段羞かみもせずに云つた。「お蔭で先刻から好い樂しみをさせて頂きました」

「あははは」と丘は磊落に笑つた。

「僕の拙い曲が、貴孃のやうな佳人のお慰みにならうとは全く望外でした。——時に、お住居は此の御近所ですか?」

「ええ、つい其處なんで御座います。——貴郎のお宅は?」

「僕は旅の者です。丘と申して、當今は李氏の食客をして居ります」

「あ、それぢや貴郎が丘先生でいらつしやいまして?」

と、女は驚いたやうに眼を瞬つて云つた。そして、後を向い

て老女に何か囁いた。

「妾、先生のお名前は以前からうかがつて居りますの、御差支え御座いませんければ、是から宅へお立寄りを願ひ度いんですが……」女は新しく嬌態を見せて哀願するやうに云つた。

「僕は構ひませんが、夜分に婦人をお訪ねしてもいいでしやうか？」

「一向構ひませんの。妾の外には、此の乳母と門番だけなんですから」

事態が意外に發展して來たので丘は益好奇心を唆られた。彼は到頭女の勸めに委せて、其の家を訪れることにした。彼は崖の上から大きな聲を上げて、舟を停めて待つてゐるやうに少年に命けた。

燈を先登に立てて三人は其の場を歩き出した。暫らく崖について行つてから狭い脇道へ這入り込んだ。岩石の上に老松がどつしりと枝を張つてゐたり、溪流が勢よく流れてゐたりした。幽寂な山氣が丘の鼻をうつた。

谷川に架けた小橋を渡ると、瓦葺きのがつしりした門が建つてゐた。高い土塀が其處から兩方へ走つてゐた。園内には泉水があつたり、小流れが環つてゐたりした。丘は老女に導かれて客間へ通つた。外構への厳重さに比べて母屋の造りには瀟洒たる趣があつた。どの[illegible]にも、書[illegible]やうに[illegible]の[illegible]が殊に丘の眼を惹いた。

間もなく女が其處へ出て來た。明るい灯の光で丘は女の顔を熟視した。白粉氣の無い面は玉のやうに蒼白かつた。澄んだ眼も形のよい鼻も、どちらと云へば淋しい感じがした。全體、病身かと思はれるやうなかぼそい造りで、薄ものを纏つてゐるだけに頸筋から肩のあたりの痩せが一層痛々しく目立つてゐた。

此の住居といひ、女の様子といひ、丘には解し兼ねる節ばかりであつた。

「先生はいつ頃迄御滞在で御座いますか？」

「さあ、夫れは自分でも分りません。僕などの道程は其の日其の日の心持次第で變るのですから。――然し、李氏が懇親切にして呉れますから、現に仍まだ當分は何處へも行かないでしやう」

「さうした自由な生活を遊ばしたら、本統に御愉快なことで御座いましやうね？」と、女は沁々と云つた。

「時に失禮ですが貴孃はどういふ御身分の方なんですか？ 先刻から御見受けした處では、一向想像がつきませんが……」と、丘は卓に肱を突いて相手の顔を見上げるやうにして云つた。

「妾はお羞かしい身で[illegible]すの」

女は心もち顔を紅くしながらから云つた。彼女は名を翠薇と呼んで、相當な地位に居る或地方官の側室(そばめ)であつた。處が、其の人の正妻といふが非常に嫉妬深いために、男は爰へ別莊を建てて翠薇を住まはせて置くのであつた。かうした自分の身の上を、翠薇は丘に物語つた。

二人は時の移るも忘れて話し込んでゐた。月が傾いて、空氣は益冷えた。泉水で魚の潑ねる音が、邊りに一層靜寂な氣分を漂はせた。翠薇は餘程學殖があるらしかつた。詩の話などしても、時々丘を駭かせるやうなことを云つた。さうした時、寂しい彼女の眼に、詩的な感興が生き生きと耀いた。

丘の心は激しく動かされた。談話が杜切れた時、彼は其の儘對座してゐるに堪へられなくなつて來た。――翠薇は耳まで紅くしてうな埀れてゐた。

丘は憶秦娥の詞を作つて翠薇に見せた。

香篆裊羅幃。錦帳風光好。風光好。
金釵斜嚲。鳳頭鬆倒。恍疑身在蓬萊
島。邂逅相逢緣不小。緣不小。最關
情處。蛾眉淡掃。

すると直ちに翠薇が是れに和した。

楊枝裊恩情。無限天將曉。天將曉。
漏窮雞喚。教人煩惱。郵亭一夜風流
少。匆匆後會應難保。應難保。敢傷
情處。殘雪風掃。

丘が舟へ歸らうとすると、翠薇は世にも悲しさうな容子をした。

「今宵の樂みを、復た重ねる機會があらうぢやありませんか？」丘は慰めるつもりで、女の肩に手を掛けながら微笑むで云つた。

「先生、妾はもう是ぎりお目に掛かることが出來ないんです」かう云つて翠薇はさめ〴〵と泣き出した。丘は意外な感にうたれた。

「夫れはどういふ譯です？だつて、此の儘お別れしては餘り殘り惜しいぢやありませんか？」

翠薇は矢張り應へずに泣いてゐた。軈て彼女は筆を執つて有り合ふ帛へ何か認め、それを固く結んで丘に渡した。

「後で是を御覽下さいまし」と、翠薇は怨みの深い眼なざしを

して云つた。

丘は此の場を立ち去るに忍びなかつた。女から女を渡り歩く丘にとつては、一夜限りの戀を惜し氣も無く見捨て立ち去ることとも珍らしくはなかつたが、此の女に對しては、さうした淡泊な放縱な氣持にはなれなかつた。「然し、女はああ云つて居るものの、何んとかして復逢ふ工夫もあるだらう」彼は心のうちでかう思ひ返した。兎に角、夏の夜の明け易きを思ふと、何時迄かうして居る譯にもいかなかつた。

丘は最後に思ひ切つて此處を出た。翠薇は門外の谷川の縁迄送つて來た。月は疾うに傍の山の蔭になつてゐた。暗がりの中にほの白く佇んでゐる女の姿を、丘は幾度びも振り返つて見た。

舟の中では、少年が氣持よく睡つてゐた。丘はそれを揺り起こして、舟を川下へ流させた。そして、懐から女が渡した帛を取り出して、暗い燈の光に照して讀んだ。

不斷塵緣罣本眞。翠薇花下返香魂。
如今了却風流願。一任東風啼鳥聲。

丘は見る見る顏の色を變へた。

翌日丘は唯一人で昨夜の處へ行つて見た。此處には家だけはあつたが、昨夜見た時とはまるで趣きが異つてゐた。塀に倒れ門は傾き、庭は荒れ放題に荒れてゐた。蓬々と雜草の茂つた中に母屋が大破した儘で建つてゐた。昨夜翠薇と語らうた室を覗いて見ると、壁は悉く崩れ落ちて、屋根の破れ目に碧い空が映つてゐた。

谷川の向うで一人の老婆が頻りに枯れ枝の束を造つてゐた。丘は其の側へ行つて「爰はどういふ人の住んだ跡ですか」と云つて訊いて見た。

「お前様、此の屋敷には可哀相な話が有るでがんすに」

と、老婆はしよぼしよぼした眼で丘の顔を見上げながら云つて、こんな話をした。

此の地方の鹽運使を勤めた何公といふ人に、翠薇と呼ぶ側室があつた。翠薇は縹緻も氣だても優てゐたが、其上畫を描き琴を彈き、詩もよく作るといふ頗る多藝な女であつた。何公は非常に翠薇を寵愛して、爰へ別莊を建てて住まはせて置いた。すると何公の正妻といふのが甚だしく嫉妬深い女で、或時謀を設けて翠薇に毒を飲ませて殺して仕舞つた。何公は嘆き悲しんで翠薇の亡骸を家の左側へ葬り、其の塚の周圍へ薔薇を植えて目じるしにした。其の後何公は何れかへ轉任して、爾來爰

には住み手も無く荒れ果てて仕舞つたのであつた。——

丘は再び門内へ這入つて家の左側へ廻つて見た。果して其處には塚があつた。遲れ咲きの眞紅な薔薇の花が二つ三つ咲いてゐた。彼は薔薇の詩の韵を賡いで一絶を賦した。

精爽依稀迫太眞。何緣月下認芳魂。
淸風一陣渾無跡。惟聽流泉嗚咽聲。

丘は涙を流して、それを塚に捧げて立ち去つた。

心堅金石

某郡の知事を勤めてゐた阿魯臺といふ男があつた。或年阿魯臺は任期が滿ちて京へ赴くことになつた。其の頃京では伯顏が右丞相となつて一人で大權を擅にしてゐた。そこで任期が滿ちて還る人達は競つて伯顏に賄賂を贈つた。贈物が厚ければずんずん出世する代りに、廉直な人間は忽ち免黜されてしまふでのあつた。

玆に於て阿魯臺はハタと當惑した。といふ譯は、彼は元來餘り富んでもゐないところへ、近年さまざまの事から失費が嵩んで極端に手元不如意の折柄であつたために、如何せん右丞相に贈るべき金が無いのであつた。然し、金が無いからといつて默つてゐれば免職されてしまふのであるから、彼は此の問題に就いて非常に頭を惱ましてゐたが、別にこれといつて名案も浮かんで來なかつた。彼は思案に餘り、或日林といふ腹心の下僚を招いて相談して見た。此の林といふ男は學問はさらになかつたが一寸小才の利くところから、萬事につけて阿魯臺が目を掛けて遣つてゐる人間であつた。

然し、林も流石に是れには弱つたやうな顏をして腕を拱いてゐた軈がて、何を思ひ出したかポンと小膝を叩いた。

「閣下、それには良い趣向が御座ります」

「なに、良い趣向がある?」阿魯臺は急に面を耀かして乘り出した。

「はい。然し閣下、是はなまじ僅かばかりの金銀を持參致して見た處で到底他の人と競爭は出來ませぬ。其處で愚考致しますには、幸ひ伯顏公は頗る好色家ださうに御座りますから、當地の美人を撰拔して京へ伴れて參つて、夫れを獻じますのが一番上策かと心得ます。是れならば金が一文も要らず、且又女の髮には大象も繫がれる譬へも御座りますれば、贈り物としても何より效驗があらうかと存じますが——」

と、林は天晴れ智者といふ顏をして云つた。阿魯臺は救ひ出されたやうに急に莞爾々々し始めた。

一成る程、夫には一段と名案ちやな。美人の献物とあればお乖相の御意に適ふことは必定ちや。ええと、然らば其の事に決めて、萬事其の方に委せるから手落ちの無いやう計らうて呉れ」

「畏りました」

忽ち相談が一決して、林は上上の首尾で長官の前を退つた。

其の日から林は大活動を開始して、一郡を通じて美人を物色し始めた。先づ最初に百人を選み、次ぎに五十人を篩に掛け、其の中の十人を拔きといふ具合にして、一番最後に三名の尤物が殘された。その筆頭に擧げられたのが麗容といふ妓であつた。麗容の風姿は三名の中でもずば拔けて美しく、實に無双の國色であつた。此の女一人あれば、百の伯爵を擒にするも易々たる事のやうに思はれた。

愈出發の期が迫つて來た。阿魯臺は、榮達期して待つべしとばかり非常な元氣で、出發の準備に忙殺されてゐた。其處へ美人撰拔係長の林が遣つて來た。

「閣下、困つた事が出來ました」

林は此の頃中の威勢に引きかへてすつかり落膽して仕舞つたやうな顏をして、意外な報告をした。夫れは撰拔した三名の内の二名だけは、當人の身の出世の事でもあり寧ろ進んで京へ隨伴することになつたが、一番要な麗容が、に既許嫁の男があ

そから」と云つてさうしても貴く……ないといふ……ことのた。

「夫れは不可ん。他の奴ならば兎も角、麗容に缺けては……目にならんちやないか」と、阿魯臺は鮮むちやの顔を顰められるだけ顰めて云つた。

「左樣で御座ります。夫れ故手前も種々に口を酸くして説得して見ましたが、いつかな當人が承知致しませぬで殆んど手に餘して仕舞ひました」林はかう云つて掌で額の汗を拭いた。

「一體、其の許嫁の男といふのはどういふ奴なのぢや?」

「李彦直と申しまして、南山塾に居る書生で御座ります。それから手前も種々探索して見ました處、いやはや當人同志が誠に深い戀仲でな、死ぬの生きるのと申しますやうな譯から、物堅い彦直の親共も止むを得ず許したのださうに御座ります」

「ふーん、書生の分際で怪しからん奴ぢやな」

阿魯臺はかう云つて忌ま忌ましさうに舌打ちをした。折角玆迄築き上げた名案を、僅か一箇の乳臭兒のために妨げられて崩して仕舞ふのは如何にも殘念で溜まらない。——彼は最後に「構ふものか」といふ氣持になつた。自己の榮達といふことを考へると、一平民一賤妓の心情を蹂躙する位のことはなんでもないやうな狂暴な觀念がはびこつて來た。

「閣下、此の上はどう致したもので御座りましやう?」と、林

は畏る〳〵阿魯臺の顔色を覗つて云つた。

「構はん。厭應吐かさせる要はない。無理にしよびいても連れて行くのぢや」

阿魯臺は鋭い權幕でかう云つた。

麗容は到頭强制的に京へ連れて行かれることになつた。彦直父子は様々手蔓を求めて奔走したけれども何んの甲斐も無かつた。戀人同志は、生きて別れる位なら死んでしまはふと云つて相談した。然し女には自分の手で養はねばならぬ母親があつた。其の嘆きを思ふにつけ、又自分のため親の身にまで累を及ぼすことを考へると死ぬことも出來ない身であつた。――麗容は母親諸共船に乘せられて京へ向けて出發した。

船は河を溯つたり運河を進んだりした。麗容は船室へ閉ぢ籠つたまゝ一歩も外へ出なかつた。彼女は別れて來た男の事を考へて泣いてばかりゐた。

此の船が出帆した日から、絶ず陸地を走つて船の跡を追つて來る人間があつた。雨が降つても風が吹いても同じやうに走り續けてゐた。船が碇泊する處へ來ると、終夜岸邊で號泣してゐた。最早一と月以上に亘つた。彼は數千里を跋渉したのであつた。着物はずたずたに破れ頭髮はおどろに亂れ、足の肉は痛ましく裂けて、餓鬼のやうに痩せ衰へた全身が血と泥に塗れてゐた。

麗容は少しも夫れを知らなかつた。船が臨清に着いた時であつた。彼女は初めて船の上に出て其の姿を認めた。それが戀人の彦直であることを彼女は一と目で見誤まらなかつた。彼女は忽ち其の場へ氣絶してしまつた。

麗容は人に救けられて己が室へ戻つた。そして直ぐに一人の船人を賴んで彦直の處へ遣つた。「妾がいまだに死なずに居るのは母親があるからです。どうか妾の事は是れ迄と諦めて故郷へ歸つて下さい」といふ口上を、船人は彦直に傳へた。それを聞き了ると、彦直は天を仰いで慟哭したが、忽ちばつたりと大地に倒れた。駭いて手を執ると、既に彦直の息は絶えてゐた。船人は哀れに思つて、岸邊に穴を堀つて彦直の亡骸を埋めた。――其の夜麗容は船室で縊れて死んだ。

阿魯臺は絶望と憤怒のために猛獸のやうに喚き立てた。彼は麗容の死骸をピシ〳〵笞で打つた。けれどもそれだけではまだ彼の胸は癒えなかつた。

「此奴を丸裸にして燒き捨てて仕舞へ！」

と、阿魯臺は側にゐた家來に向つて命じた。家來の者は、麗容の亡骸を岸に運んで丸裸にして燒いた。玉のやうな體が一片

の様なものになつて仕舞つて居るが、何んだか分らぬが固つこい形をした物が最後迄殘つてゐた。

「是れは何んだらう？」と、一人が棒の端でそれをつつきながら云つた

「心臓だらう」

「否、膽だ」

人々はこんなことを云ひ合つてゐたが、軈て一人が足でそれを踏んづけた。するとグジャリと潰れて、中から何か堅い物が飛び出した。

「おやおや、變な物が出て來たぞ」

かう云ひながら夫れを拾つて、河の水で洗つて見た。それは丁度親指位の大きさで、黃金のやうに耀いて、質は玉のやうに堅かつた。衣冠を着け、眉目もありあり備はつて、宛然生きてゐる彥直の姿其のままであつた。一同は大いに駭いて、直ちに是れを阿魯臺の許へ持つて行つて見せた。阿魯臺も手に取つて見て覺えず驚嘆の聲を發した。

「實に不思議ぢやな。眞心が結晶したものであらうが、世には珍らしい事があればあるものぢや」

彼はふと氣がついて、家來に命じて彥直の死骸も堀り出して燒いて見させた。案の如く男の胎内からも同じやうな物が出た。それは三寸ほどの雪白の肌をもつた

阿魯臺は驚き且喜んだ「是れ程の珍寶は天下に二つとある筈はない。右丞相への贈り物として是れ以上の物があらうか」

二個の像は、錦のきれに包まれて香木の函へ一緒にして納められた。阿魯臺は是れに「心堅金石之寶」と題した。麗容の母は莫大の金を賜はつて其處から故鄕へ歸ることを許された。

阿魯臺は京へ到着した。そして旅の疲れもやすめず直樣右丞相の邸を訪れた。

彼は右丞相に面會して有りの儘の事情を物語つた上、恭しく函を取り出して其の前に捧げた。話をきいて伯顏は非常に喜んだ。そして取る手遲しと函の蓋をあけて見た。

「なんぢや是れは？」

忽ち伯顏は函を抛り出して怒聲を上げた。阿魯臺は吃驚仰天して函を手に執つて見た。二個の像は何時の間にか消え失せて、腐敗した血が錦のきれに汚ならしくこびりついてゐた。なんとも云ひ難たない惡臭が強く鼻をうつた。阿魯臺は呆れ果てて言葉も出なかつた。

伯顏は大いに怒つて、阿魯臺を獄に下した。無法に人の妻を奪つて死に至らしめた罪を擧げられて、遂に阿魯臺は死刑に處せられた。

此の噂さは忽ち國中に喧傳された。するとある物識りがゐて「夫れは全然あり得べからざる事とは云へない。それに類似したこんな話がある。——昔ある處に一人の婦人があつた。此の人は非常に山水を好んで、毎日窓に臨んで座して山水の景色ばかり眺めて暮らした。すると到頭氣欝症に罹つて死んだ。其の死骸を火葬に附した處が、心臟だけ燒けずに石のやうに堅く化して殘つてゐた。人々が不思議がつてゐると、丁度其處へ京の珠商人が通りかかつて、金を出してそれを買ひ求めた。全體何んにするのかと訊くと、珠商人は鋸を出して夫れを幾つにも挽き割つて見せた。各片悉く玉のやうな光澤を發して、透かして見ると中に山水樹木の形がありありと密畫のやうに寫つてゐた。是を尙薄く挽き割つて帶の飾りにすればどれ程の價格になるか分らないと珠商人が云つたさうだ。——山水無情の物ですら精神を注げば形が留どまる位だから、まして男女の情が凝り固まれば夫れ位の事はあながち不思議な話では無い。唯阿魯臺が其の像を別々に藏つて置かなかつたのが手拔かりだつた。二個の像が一緒になることが出來たために、情を遂げ氣が伸びて故に還つて仕舞つたのだ」と云つた。

文化文政の文明人抱一

野口米次郎

春も段々老ひて四月の末になるといやもう落花狼藉だ。心にあはたゞしい紛擾を感じて(冬期の受動的な灰色な氣分の嚴肅は何處へいつたであらう)僕は「しづ心無く花の散るらん」と歌つた百人一首の大宮人に共鳴する。五月にちか寄ると早や初夏の候。僕は二月の末に半分丈け見てその儘うつちやつて仕舞つた夢をまたぞろ見初めて、再び取戾した平靜な氣分に對し心から感謝する。——眼に靑葉山杜鵑はつ鰹の情調のなかで五尺幾寸の小軀をのび／＼させ乍ら、赤い帶を捨てゝ靑い着物

に言替へる自然に心一杯の感謝を捧げる。この詩人の心に浮ぶのはフヒオナ、マックレヲッド（フヒオナたゞ丶女形を一生棲めこんだ物婆千鳥なウヰルリアム、シヤープ）の『嗚呼青い人生！』といふ句だ。

僕が此句に興味を持つ理由は或は此句を吐いたシヤープの動機と異つて居るかも知れないが、然しそんなことは何うでも良からう。僕が有らゆる樹木に敬意を表する理由は決してその樹木が特殊の季節に持つ花や果實の爲めで無い、實に初夏の候にどつと潮のやうに滿たして來る彼等の青い葉の色に對してゞある。僕はその青い色の魔法に觸れると、いふに云へない青春の紅い血が再び戻つて來て人生の旅行を新たにするといふ愉快な感に撃たれざるを得ない。雨華庵抱一に『九泉のもとより初鰹送りければ』と前置して『魚の脊に鎌倉山の青みかな』の句がある、――親愛なる抱一上人よ、あなたが若しフヒオナ、マックレヲッドの所謂青い人生の嘆美者でなかたつならば、何うして鰹の脊に鎌倉山の青色を見ることが出來やう！　あなたは眞實な青い人生の核心を摑んで生れた……

僕は未だ嘗て山杜鵑の聲が何んなものだか聞いたことが無い。然しウオズウオスの杜鵑（クークー）の如く『眼に見へぬ一の聲又一の神秘、永遠に慕ぶべきもの』と想像する、――羽翼を生やした[illegible]の素晴らしい人間の[illegible]思ふ貴き時代に表現してある。こゝへ想像しても山杜鵑の方には在讀はあるまい。明治時代になつ初鰹の情感は一方ならず毀損されて仕舞つたが、前記の『鰹』の十七字が近人間ばかりで無く一般市民の聲であつた舊文明の德川時代の人間が食物に對する舌は、何んなに微妙に又區別的に發達して居たであらう。鎌倉を生きていでけんといふ初鰹を賣つて歩く聲を耳にしては、着物を質入れしてもその聲を聞捨てには出來無つたものと聞いて居る。如何にも洗錬し盡され懷しく、それで愚かで腐つた小說的な舊德川文明よ！　一般市民が初鰹に憧れたのはその實際上の味にもあつたかも知れない。が、實は季節の所謂走りを口に入れるといふ刹那の興味に醉はふとしたのである。たゞ食物の點ばかりで無く、其他何んなもの丶上でも走りに接するといふ特殊な氣分に生きたのである。彼等は官能の奴隸だ。――物質的な常識の一面を無意識に否定した不實際的な矛盾な江戸ッ子だ。僕の親愛なる抱一上人（上人などゝ呼ぶのは何んだか皮肉に聞えるけれども）はその一人で、しかも大な一人だ……

三馬の作『料理を食自慢する人の表裏』のなかに『けふは料理番が代つたナ、ナニかはりはしねへ、代らねへことがあるもんか、御口中が變らぬ鏡だワ』などゝいふ言葉もあつて所謂半

可通 "A fellow half-learned の態度を皮肉つて居るが、其時代の人は一般的に生花又は茶の湯同樣料理法も習つて、口晴の鑑定を紳士の資格としたものだ。無修養な江戸の立役者なる武士が差詰め自分の荒つぽい虚榮心を滿たす爲めに、彼等の初期時代では皆な建築に走つたものであつたが、それは如何にも自然であつた。そして時代が段々圓熟するに從つて彼等は着物の模樣或は色合上の趣向を吟味するに至つた時徳川時代も一廉の文明に達したのである。千八百〇四年から千八百三十年に渡る文化文政時代には料理も追ひ〳〵一種のカルトと成り、自然の順序として平清、葛西太郎、百川或は抱一其他の愛顧を得て山谷の八百善（八百善も座敷から電車の音を聞くやうな今日となつてはもうお仕舞だが）なんといふ料理屋が開かれるに至つた。僕の親愛なる抱一はこの封建文明の最絶頂時期なる文化文政の心の中にさして來た凋落の潮を代表した（いゝ意味にも又惡い意味にも）大デカダンだ……

僕は彼を以て全世界を通じ十九世紀の初葉に顯はれた數の少い才人の一人だと信じて居る。酒井家十五代備前守忠卿の二子として產れその地位に附着して居る四角張つた虚僞の空氣をさつと打拂つて、藝術と俳句に逃れ、――藝術と俳句が強ひる程良い抑制を受けて彼の遊蕩氣分（彼の時代では遊蕩生活が如何にも自然に見へた）も漸次に蒸溜され又洒脫するに至つて、彼は日本の藝術史中稀れに見る人格の所有者となつた。前時代に於ける光琳の豁達自由な藝術的模樣美も、彼の手に掛つて纖巧輕快の繪畫となつた。晋其角の文學的遺放した男性美も彼に取扱はれて卽興的洒落と化するに至つた。それは概念的に時代の影響だとも解釋は出來やうが、彼抱一自身の官能が特殊に銳敏な感じ易い素質から出來て居たからである。抱一ばかりで無い、その時代の藝術家或は通人は一般に衣服から食物の上に及ぶ人生の直接問題で、如何なる嬌嫩精緻な感覺性を持つて居たかは實以て驚くばかりであつた。彼等の態度のデリケートな程度は、一寸指の先で觸つたばかりでも心の中心點を亂すかと思はれる歌麿の美人にも比較することが出來やう。彼等新人卽ちデカタンの舌は一杯の冷水を飲んでも、その味から水の產地を識別することが出來、又一服の茶を喫してもその茶が何んな太陽の光線で養はれたものかを語るに充分であつたと云はれて居る。こういふ挿話が語られて居る、――ある日抱一は八百善で初鰹のさしみを食つた。彼は料理番を呼出して、お前は研ぎたての庖丁を用ゐたのでないかと責めた。驚いた料理番の質問に應じて抱一は、さしみに砥の氣が移て居た、さしみ庖丁は研いだならば數時間井戸の水につるして置かねばならぬと說明し

た。この微細な感覚性が彼〔の〕身上で一代の通人となりすましたのである……

それにしても僕等の口嗜の凋落はその極に達して居る。三百年の長日月續いた舊文明は半世紀も以前に亡びて、人を急激な混亂と怪しげな不安のなかに投込んで仕舞つた。僕等の心に平靜を缺いて居るから、初夏が來て樹木が青く山杜鵑が鳴いても初鰹の味を知らうとて蒲物を賞入する心意氣をどうして示すことが出來やう！　食道樂は文明最後の發達であるが、德川文明が贏ち得た舌の敏感もその文明の滅亡と共に失はれて仕舞つた。十年の西郷戰爭を一期として新時代も我緒に就いて、以前と異つた繁榮に入るに至つたが、日本固有の料理藝術は千八百八十年頃からぽつ〳〵その數を增して來た西洋料理屋の爲め非常な阻害を蒙つた。手取り早くて安價だといふので繁昌する西洋料理を見ると、如何に今日の日本文明が經濟の二字で解決されるかゞ知れる。僕なども中食の爲めとあつて何々軒とかいふペンキ塗りの看板を出し、東洋の美術國といふ責任を忘れて仕舞つて上海か市俄古の片田舍よろしくといつたやうな建物の二階へ押しあがることがある。——僕のテーブルの側に座つて居る紳士諸君よ、スープを飲む時そんなチユウ〳〵聲をさせることだけは止め給へ。又そんなにナイフやホークをがちや〳〵させ〔る〕こはいかん。食べ方の技巧に[illegible]〔そ〕んなに大な口を開いてビステキを食べるのは無禮だ。欠伸してはいかない。ナプキンを落したものは無禮だ。如何にも君等は西洋料理の食事法を知らない。然しそれでも新時代には嚴しく規定された形式に拠へて來た日本人の子孫といへるか。

又一方に料理の工合だ、——如何にも不味くて無味だ、その拙劣さ加減が分らない。僕は西洋料理屋へ入るといつも外形的西洋文明を輸入する効價果して何程ぞと自問自答する。それを完全に消化し得るまでには或は少くも二世紀位は掛るかも知れない。今日の日本人の口嗜は凋落し果てた、——再び昔のやうにそれを取返へすことが出來やうか。一度失つたものは恐く元へは歸るまい。僕は叫ぶ、僕等は中世紀の野蠻時代に逆戻りした。西洋料理に對すると禮儀作法は無用と心得るのは實に下等だ。又彼等は日本料理の食べ方も知つては居まい。それでも彼等は自ら文明人と呼びこの時代を日本の新時代だと喜んで居る。

僕はこういふ時代に若し抱一上人が居たならば、彼は何う生きて行くだらうか。これは僕の大な疑問だ。

僕は抱一に今日の不味い西洋料理を一度食べさせて彼の顰め面が見たい。

時代が進むに從つて僕等はだん／＼理智的になり靈肉共に乾枯びて潤澤な生命を失ひ、どの方角から見てもいやはや醜い人間となつて來る。僕はこの實際を考へる時いつも抱一の風致姿態にあやかつて一味の情致を僕等の生活のなかに吹きいれたいと希望する。――藝術的遊蕩の潤で痩せた人生の上に若々しい艶麗な精神を復活せしめたい。今日日本の時代精神は如何にも貧弱だ。貧弱であり乍ら浪費を避けることが出來ない。僕等の心は無意味に分裂して進んで自ら老衰を迎へやうとする有様だ。それは一般に今日の日本人が不自然な作爲的な理智の重苦しい壓迫に威嚇されて次第に畏縮して行くのである。此處に一人の男がある。その名は酒井抱一。彼は散文的な乾燥し切つた無味な道德的生活から逃れて、死ぬまで抒情的感情を豐富に支配した、――彼が江戸城本丸の大手前なる所謂下馬將軍の酒井邸から寛政五年丑十月九日に本所番場の隱宅に移つてから、文政十一年戊子十一月に根岸の鶯村莊所で死ぬに至る六十八年は（眞實な意味に於て）遊蕩生活であつた。彼は耳順の年になつても每日薄暮になると日課のやうに吉原を一廻りして相識の華魁や幇間の顏を見ないと氣が濟まなかつたと聞いて居る。其處が抱一の生命だ。彼が生の倦怠に捕はれずに一生青い／＼生命に祝福されることが出來た理由は其處にある。彼は自由自在な新しい情緒の世界を作つて道德を足で蹴り、片意地な理智的な打算根性を嘲笑し盡した。

彼の生活は愚であり又不健康であり又官能的であつたと云へる。然し狡猾な倫理一點張りの生活に比すると彼の生活は遙かに危險で無かつた。彼は前時代に於ける光悅や光琳のやうに人生や藝術を整理した唯美の悅樂世界の創造者で無く、清澄で恍惚な人生（又藝術も）を音樂的に愛した『完全な戀人（パーフェクト、ラバー）』であつた。彼は豪邁高逸な光琳の年老ひた梅樹で無く、彼が得意によく描いた幽艶清姸な一叢の萩であつた。――『ゆふ露や小萩のもとのすゞり筥』の句を入れた萩の繪の情緒は彼の大な半面である。彼は純粹な意味での遊蕩者即ち通人であつた。英語でいふと Dandy の完全なるものであつたが、決して伊達を見榮にする輕薄才子では無つた。そして彼は又放淫な酒色の頌揚者でも無かつた。實際の上でも『龜田（鵬齋）先生とは予も斷琴の中なれども樂みは酒餅の違ありければ』と前書して『ころ柿にわれも立ばや茶一盌』の句があるやうに、彼は生來の下戸であつた。『めいよう今の通は下戸さ』といふ京傳作總籬の言葉通り、この酒杯を口にせずして酒色の情に徹した所に彼の通人たる本領がある。彼の本能は餘りに瀟洒艷美であつて事實上の放淫者たり

得る野性が彼には無かつた。

そもそも英語のダンデイ日本語の通人は『懸座の藝術家』だ。如何にせば人生の廢墟と塵埃から脱して眞の情調に入ることが出來るかを知つた人間だ。唯美境とその雰圍氣を誘致する特殊な場合に對する嘆美者だ。靜寂と感激との間に流れる一の落付いた光に導かれて現實主義の聖殿に進む人だ。眞實なる通人の心は壯麗な希望とそれを整理する反省とがある。抱一のある場合に於けるやうに七分の衒氣や四分の賢風流に墮することがあるが、所謂通人主義 Dandyism の極致は自己遍照である、又自分自身に對する苦笑である。外部から見て麗はしい貝殼や鳥の羽の如く輕く精細に感ぜられるのは唯通人の半面に過ぎない。

眞實なる通人は眞珠のやうに內面から輝く人間で、流行の衣服や言語の裝飾を必ずしも必要としない。然し彼はまた外面的美觀を遠ざけるものでも無い。抱一の自畫像を見よ——彼は無地淡葡萄色の羽二重に同地質白色の下着を重ねて居る。古代紫の長紐で牡丹に蝶のとも色模樣の黑紋紗の信玄羽織を結んで居る。焦茶色の金絲で波紋を織出した帶をしめて居る。誰れがこういふ華麗な好みを一言の下に輕蔑し去ることが出來やう。自分を美化する態度のうちに平凡普通な時代精神を破壞しやうとい ふ反抗の力が匿くれて居て、僕が通人を役者や音樂の名人や稀有な美人の存在と同樣に尊重しやうとする心は實際に於る のだ。通人として抱一の存在はそれだけだ、——實際彼の藝術は甚の人格の水泡が散布されたに止るかも知れない。

僕の空想はこの抱一を胸間に大な向日葵一輪さして一寸の隙もない仕立をろしの着物を着飾つたワイルドと、牛津（オクスフォード）はブレスノース大學のペーターの部屋で一つ語らして見たいと思ふ。枯れた薔薇の葉を澤山入れた硝子の鉢と美麗な古希臘の貨幣を無順序に盛つた大な皿の外何にもない黃色の壁紙で張つたペーターの部屋はきつと抱一の氣に入るに相違無い。多辯なワイルドはロセチの審美論から牛津に漲つた俗物根性とヴヰクトリア時代の妥協趣味とを手嚴しく攻擊するであらう。然しこの Philistoism は必ずしも英國だけの專有物でないよ、——僕等の日本にも俗物根性が跋扈して困りきつて居る。つひ近頃の秋巢鴨の植木屋とかゞ菊人形を造りだした所が、物見だかい江戸中の大評判で、僕は憤慨一番して「見劣りし人のこゝろや造り菊」と一句やんわり冷罵して置いた次第だよ』と抱一はワイルドに合槌擊つかも知れない。高い鼻に殺げた頰、薄い唇に小な口。溫厚の君子で無く寧ろきりゝとした才人風の抱一とは全然異つて、ワイルドの容貌風采は重厚な金ピカ式に大膽だ、多少惡どい。ワイルドは抱一が根岸の鶯郁書門で女弟子などを左右に侍

らせて『難波津の習ひはじめや梅の花』の脂粉的女性氣分はちと了解し兼ねると云つてのけるかも知れない。

僕の空想は『無責任で利己主義を手綺麗に實行して初めて人生のパイのなかゝら甘いプラムを澤山さがし當ることが出來る——七つの眞面目な道德などを捜したとて到底そんなものが有る譯が無い』と隨分思ひ切つた痛快な言葉を吐いた愛蘭のジョウジ・ムーアと酒井抱一とを何處か巴里の酒場の居心好い隅ででも語らせて見たいと思ふ。彼等兩人は共に刺で手を傷めずに情調の薔薇を摘み罰金を拂はずに人生の享樂を盡し又悔恨を感ぜずに共幸福を味つた。きつと彼等は工合よく反が合ふことであらう。僕は嘗てムーアに關してこう書いたことがあつた。『徐徐と心を奪つて仕舞ふ遊蕩文學の大家には話の所謂山は不必要で、讀者自身も會話に迷はされて段々と戀人であり又誘惑者であると氣取りたくなる。憎らしい程上手な遊蕩兒の文學者ムーアは書中で自分が話の主人公で又その語り手の役を勤めて居る。彼の書中の女は六月の牧場に流れて居る風のやうな金髮を房々させて、花の如く愛らしくて弱い口元と水仙のやうに細長い手。これに配するに生の歡喜をいくら食べても滿足せぬ遊蕩的大食家を以てして居るのである。彼の書く遊蕩談の眞か僞かは論ずる丈け野暮だ、みんな眞實だと受取つて始めてムーアを讀む甲斐があるといふものだ。實際彼位西歐文壇で一生を若々しい滿足と愉快な色彩の凱歌の表象となしたものは無く、又それに相應しい稀有な文字を學び得たのはあるまい。聞く所に依ると——モウパッサンは自分の作品の主人公と同一視されることを非常に嫌つたそうで、特にベルアミと彼の個人的經驗との直接交渉のあることを極力否定したそうである。然るに我がムーアになると口にこそ出して語つた證據は無いが、その書中の主人公は皆ら自分だと暗示して居る。この告白的文學の脈は天主教の宗理を遵奉して居る愛蘭土人の血のなかにある。ムーアは祖先の宗教は永年捨てゝは居るが、血に染みた懺悔的習慣は忘れることが出來ないものか、さつくばらんに告白して仕舞ふのであるから、時には倫理を破壞するといふ非難を蒙つて居る。又ウオッヅウオスが嘗てゲーテのウヰルヘルム・マイステルに對していつた評言として有名な句で、「空中にぶん〱唸る蠅」といふ感じを起こさせるに相違ない。全く惡くいふと彼の著書は猥淫の聲、もう一層激烈に云つてのけると生殖器崇拜の讚美歌である。彼はその他の遊蕩兒のやうに何處までもエゴイストで手前勝手の擧動をする。又彼は外の男子と友人を作らず又それを作る感情の健康性を持たない。彼は自分自身と女のみを愛して、又女以上に自分自身を愛したのである。』岡野知十氏の

『雨華抱一』のどこかに書てある如く、田沼時代の世は奢侈浮華を極め、役人中の贈遺に、京人形一箱とある献物中の大なるに驚きて、蓋を開けば、内には遠く京都の歌妓を購ひしに高髷を着させしを納めありきと、又青竹籠に潑剌たる大鯛七八計に、些少の野蔬をあしらい、青柚一箇、彫し後藤の名作秋海の小柄にてその柚を貫けり。小刀は價値數十金の高價なりき』といふ奢侈放縦の時代に生れて、『雪の夜や伴車に引せぬ三布團』『傾城のふくささはきや大晦日』或は『傾城やまつ巴水の棒に腰一』などといふ青樓の情調を歌つて居る抱一が若し十九世紀下半期のロマンチツク。ナチユラリズムの欧羅巴に生れて居たならば、ジヨウジ・ムーアたることが出來ぬと誰れが斷言出來よう。

色男に限つて男の友人は無いものと相場が極まつて居るやうだが、抱一には龜田鵬齋もあり又谷文晁もあつた事實を見ても、彼の所謂近人主義は完全に發達したものであつたことが知れる。單に情界の色男たるのみで無かつた。ムーアは青年時代に『愛戀界の天才は愛戀に入りこむといふよりは愛戀を拾てるといふ所に眞價がある』と嘯き、中年男になつて「香水や絹ずれの音を聞かなくては愛戀を情然まで描きたてることが出來ない、藝術と女を夢想した日はもう過ぎた、――所で明日だ、カルヴァニーの倂正マコルマツク老人の所謂愛嬌の秀情なるものを否……この日を暮らすのだね」とさも弱い音を吐いて居るに比較すると、死ぬまで吉原の松山三郎の抱へ遊女であつた雛袖本名おかか、小鶯女史と號し剃髪して妙華尼となつた自分の家内の里言葉を喜んで聞いて居た抱一は、愛戀界の徹底者であつたと云はねばなるまい。

僕は五六年前倫敦で、ムーアがジエルサレムへ愛戀を採掘に行くといひ出して新聞の愉快な三面記事となつたことを記憶して居る。ジエルサレムに愛戀採掘――如何にもムーアらしい言葉だ。然しそれにも增して痛快なことは抱一が『遁るべき山ありの貴の大窓かな』と戯れ句一つやつて、さつさと圓頂緇衣に様子を替へて六ケ敷くいふと眞如法樂の淨境へ彼獨得の遊蕩氣分を無遠慮に持込んだことである。前記岡野氏の「雨華抱一」に彼が出家するに至つた經路に關してこう書いてある、『(一)少壯より幕政の要路に立むの志あり、二男の身の他家を繼ぐにあらざれば能はず、養子の申込み多きも此望を遂ぐるの門戸にあらざりしゆゑ、悉く斥くるにいたり、宗家老臣の如きは、抱一が宗家に望を繫るにあらずやとの嫌疑を生じ(兄忠以逝去しその幼子忠道嗣ぐの場合とて)抱一亦これを快しとせず、隱遁して放浪の身となりぬと、これ今の雨華庵(庵主道一氏は數年前逝去せり)の傳へいふところ、(二)風流三昧に身をまかしては、大

名の當主となり氣づまりの式作法に拘束さるゝのちるさき、一方には繪畫の揮毫を乞ひ門弟たるを望むもの多かりしに、寧ろ畫に隱れ、生涯優游して自適ならむにはとの考へにてありしと、これ酒井家諸士の説くところ、(三)白河樂翁の寛政改革に反抗してなりと説くものあり。この三説をもつて當時の情景を照し考ふ、隱遁の理由はやゝ明かなるべし、假令抱一が要路に立むとの志なかりしとするも、樂翁が施政にはカラカヒ氣は免れざりしならむ。』抱一は寛政九年十月十八日築地本願寺で夜酉の刻に得度した。彼の年三十七。彼はそれより等覺院少僧都文詮暉眞となつたが、勿論大覺悟の上の出家でなく又別に宗教研究といふ譯でも無かつた、圓頂緇衣が彼の趣味に合致した土、退隱といふ二字に匿くれて放浪自恣な境地を開拓したいからであつた。故に頭を苛く剃つたといふことゝ、彼が美妓を引率して郊外へ出掛け紙鳶を放つたり或は數十籃に果物を盛りそれを撒いて美人に爭つて拾はしたといふとの間に、何等の差別を彼は置かなかつたに相違無い。彼は唯人生に潤を付ける無責任な一波瀾に過ぎぬと見て居たであらうと思ふ。『鶯邨畫譜』のなかに、『遁るべき山ありの實』の句を書いて二箇の梨を籠に入れた繪がある、――この態度を人は抱一の瀟洒脱俗といつて喜ぶが、自分自身に對する苦笑或は厭嘲な人生の實行を側にそらした傍觀者の機智(ウヰト)と見るべきものである。それが彼抱一の本領だ。而してそれは舊德川文明の極致の半面だ。彼は實に日本が長い間に育んだ最大文明人の一人だ。文化文政時代の文明は彼に初めてその代表者を得たといふ譯だ。何何なる文明人でも聲曲の理解を持つて居るが、抱一も共點では決して人後に落ちなかつた。彼自身三味線を掻ならし、又澁い河東節も語つた。彼の作つた『青簾春の曙』と題する一篇に、

『シテモノモウ〳〵案内モウ
三下「長松がをやの名でくる御慶哉　ツレ「さて門〳〵は松竹の蓬萊山もよそならず玄關に立る二枚折合「ワキ光琳風のつる鶴も「ツレ八千代のすへや祝ふらむ　本テウシ「筒井つゝ井筒に組し扇箱萬歳あふぎ袖扇若菜の春の末ひろくたか呼子鳥とり追の　合「帶しどけなく山鳥の長ながし日もあかぬいろ山猫同し猿まはし福引繩のかづ〳〵も　ツレ「つけて日にたつ　ツレ虎御前名はこのさとにかくれなき三筋の絲のおと高く居士までも行春を此稲成が一聲に引とめられてかくれすむ庵のうらの二人寐のかはらぬ中こそ久しけれ』

彼に關する挿話がいくつも世に傳へられて居る。『鳴かぬ田もなく田も動く蛙哉』『刈のけて雁まつ小田の景色かな』又『落葉して都の見ゆる庵かな』の彼の『千束のいね』時代の千束村は

定めし夜に眞拆て役[illegible]あつたことであらう。彼は今[illegible]赤小田原提燈を澤山用意して置いて、雨夜のなかを歸へる客人に一つ／＼與へたそうである。僕十年以前初めて京都に遊んで、一夜南禪寺の瓢亭で食事して其處を立去る時僕に與れた小い小田原提燈を見て『ハアこれが抱一が千束隱士と署名して八百善にあづけて置いて人に與れたといふ提燈だな』と思ひ非常な愉快を感じたことがあつた。それから此處にこういふ挿話もある、――抱一は文晁に富士山の繪を幾百枚も描いて貰ひ、それを除夜更けた頃江戸名所の街頭に撒かした。翌日の元日年賀の客がそれを拾つて祥瑞の印と喜んだ、そして彼等はそれを『抱一上人の落し扇』といつたそうである。抱一が自分の繪を撒かずに文晁に花を持たした所に（文晁は富士が得意であつたからでもあらうが）彼の世事に長けた通人主義の情味が漂つて居る、又自分を匿くしてその實據も有利に顯はすといふ機智の鋭利さも推察せられる。由來通人なるものゝ行爲には多少芝居掛りに廣告的野卑性が動く場合がある、――抱一もそういふ弱點があつたと見て大差はない。彼が死ぬ前五六年間は採要の年譜に根岸に移つてから『御住居も廣く作りなし御庵を稱して雨華庵とかゝげて、朝夕の御佛事も御神妙にましましける』で、時々專門の僧を招いて維摩經を講ぜさせたり、又『山梔子の花を相手や世捨い[illegible]山』の句や『[illegible]』と詠んで[illegible]『[illegible]花[illegible]る芥子の花』などゝいふ句もあるけれども、それは畢竟[illegible]誹諧洒脱俗を彩色する爲めに使つた道具立に過ぎなかつたかも知れぬ。彼が雨華庵で度々催した報恩講も或は河東節の太夫を招いて語らした聲曲の催と何等の相違が無かつたかも知れぬ。若いたものを頼むと、引手茶屋の女將などが訪問すると機嫌のよい馳走振りを見せて小氣味のよい仕拂方を彼はしたに係らず、勝手元の請求や出入りの道具屋などに對しては不機嫌であつたそうだ。抱一も確にそういふ所があつたであらう。それは所謂通人の痛しく細い現實的一面の曝露だ。其處に至つて彼の通人主義も發達の極に達したのである。

今日英國での通人マックス・ビーアボームは小學校時代に寐床で Marius the Epicurean を耽讀したものだと書いて居るが、僕はこの抱一が七八歲にして『晋其角』を讀みふけつたか否やは知らぬ。然し彼はビーアボーム同樣に、幼少にして已に生熟し而して老ひて益々若かつたヲリンパス山上の作者であつたと思ふ。彼は終身若い／＼人生の唯美者であつた。傳記に依ると彼十一歲にして鈴木清兵衞から起倒流の柔術を學び、十三歲にして山本嘉兵衞から無邊流の槍術を學び、又十四歲にして中根新兵衞から弓術を學んだとあるが、別に幼少時代にかける

彼の文藝的關係は錄して無い。然し彼は二十一二の頃から自分の兄で酒井家を繼いだ當主雅樂頭忠以に伺候した四方赤良の太田南畝と友人であつたといふからには、彼も幼少時代から兄の文藝趣味に影響されて居たに相違無い。兄は宗雅といつて茶道に堪能であり、又狩野風の用筆施彩も素人の域を脫してディレツタントの完全なるものであつた。抱一は最初の俳名を濤花それから杜陵更に改めて屠龍といふ名前で所謂江戶座の俳諧師として顯はれた。

岡野氏は『雨華抱一』のうち「江戶座の俳諧」と題した一章の中に、『當時江戶座の宗匠として流行せしは馬場存義なりき。存義はつねの俗俳にあらず、漢詩家より出でゝ俳家となりしもの、且つ江戶座の吟風を吐きて會衆に喜ばれ、諸侯の歸向さへ厚かりき、其古來庵なる庵號さへ諸侯に望まれ、之を讓りたればさらに有無庵と改めしなど、その勢力を見るべく、後世宗匠がいくらも庵跡をつくりては、株式の如く讓與する例はこれ等より起りしものならむ。……輕艷なる洒脫なるこれ江戶座の特色にして、これたゞ存義のみならず、慶紀逸その他同時の江戶俳客の口吻はこれならぬはなかりし。存義の高足にして、抱一が先進なる哲阿彌が句はさらに妙なるものあり、哲阿彌初め湛露といひ、北齋といひ、朝四といひ、故ありて朝四の名をとゞめ三年桃栗と號し、三年を經て又朝四に復す、一號は木椎哲阿彌といひ、最も牛島庵脫得の名を以て知られ、一に又哲得庵・二露道入等の名あり、旦那俳客の色々と名にくるしみ、果は猫の命名の猫に了る戲話に類する笑止を免れず。明和の頃紫隱存來等と共に宗因の遺風を慕ひ「自高談林」の扁額を壁間に揭ぐ、談林派一陽井素外の請ふ所となり、その額を讓りきとあり、亦其風調の存するところ如何を察するに足らむ。その句集を「哲阿彌句藻」といふ、月成（狂歌師手柄岡持）序をつくり、抱一跋をつくれり、蓋し抱一いたく哲阿彌の風調を喜び、その口吻のこれに似かよへる、私淑淺からざるものありき。」

句集『屠龍之技』一名『輕擧觀句集』に於ける抱一を輕艷滑脫の才人とのみ外面的に見るのはいさゝか氣の毒であらう。彼の輕艷滑脫のうしろに潛んで居る彼の眞實な人格全部を評價して、初めて彼を知るものといふことが出來やう。ビーアボームは『ホレースの如く古く又チヤールス・ラムの如く新しい。彼は都會だ、彼は自ら保守し自らを笑ふ文明其物だ』と評されて居る。そして我が抱一も痛快なデカダン主義の裏に自嘲の苦痛があつて、彼の時代即ち文化文政の文明の痛ましい矛盾を代表して居ると云へる。文明人は聲高く叫び騷々しく議論せぬ者だ、そして抱一は――彼の文字の上又繪畫の上に於ても靜かであつ

た』如何に文明人らしく『心の影』の人であつた『心の影』の人は得てエゴイストである如く、彼も亦絶對的の若狭を辯つた洒價のエゴイストであつた。寛政十年齡三十八で千束村に卜居した作興の句に、『うぐひすや雪井の井を水かゞみ』とあるが、この態度は自分の完全を極點まで防衛せんとする清教徒的なエゴイズムともいふことが出來る。彼は多くの場合に『衒ふ人』であつた、――この『衒ひ』は文明が自然であるやうに自然なものであつた。文明は人世界の最高藝術で、文化文政時代の文明は所謂通人で支配されて居た。而して抱一は文明人であつた、卽ち大な通人であつた。

ジャクソンはビーアボームを評していつた、『彼は丁度圓柱が建築の細目であり平仄が抒情詩の條款である如く、彼自身は文明といふ藝術の細目條款である。彼は終尾の手入れだ。一言でそれを蔽ふと彼は伊達者だ通人だ』又ジャクソンはこうも彼に就いて語つて居る、『彼の通人主義は內面的である。心理的である、――心の通人主義といふ一點に彼の人格が懸つて居る。』これ等の言葉はその儘移して我が酒井抱一に適用することが出來る。ビーアボームの通人主義は評論文と彼得意の諷刺的鳥羽繪となつた。抱一の通人主義は俳諧と光琳派の繪畫となつた。僕は嘗てビーアボームに關して書いたことがある、その中に

『二十四歳にして全集を出して文壇の驚異の的となつたのも、既に古い話の昔に若しんで千八百九十九年に「幸福な偽善家」と題する空想小說に、續いて「更に」といふ暗示的名目を附けた新評論集を公にした。その後休息すること十年の長日月を經て、彼は再度文壇に復活して「また再び」の評論を公にした。彼が牛津の愛戀談と呼ぶ「ズレイカ・ドブソン」は表面小說と見へるけれども、評論家として彼の天才が小說の假面で延長したものだ。活動的な英國人には藝術の靜謐は兎ても了解されない、そして彼の藝術は則ちそれである。彼の評論は暗示の藝術で、その藝術は讀者自身をして其中に自らを發見し且つ語らしめる暗示の秘術を藏して居る。彼は樸直で溫和であるが、讀者と直に友情を築くには餘りに氣六つかしい所がある。彼の初期時代の文藝はウキスラーの「十時」を想起せしめるが、段々開け放しに成つて來て人爲的傾向を嫌つて來た。彼の性格は年を取るに從つて一種の皮肉と化して、十分に化膿した富んだ酒の香を増して來た。』酒井抱一の文學的作品は句集と數篇の河東節に過ぎない、――この點は必ずやビーアボームを滿山がらさせるに相違無い。英國の近代人ビーアボームは段々皮肉になるを餘儀なくされたけれども、『うぐひすの口明く影や下地窓』『よの中は團十郎や今朝の春』とか或は『若菜ひく女も鶴の歩みかな』とか

至極のんきな情致逸韻の有りたけを盡して死ぬことが出來たのも、必竟彼の時代が無邪氣な單純性と平和に包まれて居たからであらう。この點もきつとマックス・ビーアボームが浦山しく思ふに相違無いと僕は思ふ。

『等覺院殿年譜』に『畫も器用にわたらせられ、天明の頃は浮世繪師歌川豐春の風をあそばしける』とある。江戸座の俳諧に親しんだ抱一が浮世繪を作つたからとて何んの不思議が無い。彼が浮世繪式の構圖配色を知るに至つた以前に繪畫の手引を兄忠以から受けて居る。兄忠以は狩野派の素人畫家であつた。書いたものに依ると、土佐家の支族で繪所預となり別に一家を開いて從五位下に叙せられ、宣命を奉じて繪畫を調進して居た土佐光貞といふ繪師に京都滯在中弟子入りして、土佐派の筆意を專ら修めたとある。彼の第一期に於ける繪畫修業は狩野と浮世繪と土佐の三派であつた。『年譜』にまた『明畫の宋紫石にもちなみ玉ひて御巧みなりし』とも書いてある。紫石が沈南蘋の花鳥蟲魚に於ける筆意を學んで、長崎から江戸へ歸つて門戸を開いた時、不定の嗜好と激烈な好奇心の抱一は直にその門に遊んだ。然し間も無く彼は、圓山風の寫物寫生を善くして別に光琳を慕ひ自分の一生面を開いた渡邊南岳に走つた。彼は京都滯在中、土佐光貞から圓山應擧の子應瑞字は儀風に移つて、只管應擧の筆意を追つて寫實の秘密を握らうとしたとも書物に述べてある。これが彼の繪畫修業の第二期である。

彼がこの第二期を終つた頃には最早や彼の藝術も所謂自己(ゼルフ)實現(リアライゼーション)の域に入つて居たのであらう、——彼の筆技も運動の自由を保つて居たのであらう。渡邊南岳の獎勵も與つて力あつたかも知れぬが、抱一生來茶と俳に對する趣味性は益々力强い共鳴を光琳に感ぜしめるに至つた。而してこの傾向は抱一として最も自然なものであつた。光琳には在來の慣用句で語ると高風逸韻、英語でいふa certain zenialityがあつて彼の藝術には個人的魅力がある。然るに圓山風の寫實主義は冷やかだ、外面的技工の完成が精神の空虛を暴露する場合が多い。抱一は則ち形式論から光琳の韻致主義に入つたのである。だが抱一は光琳たることが出來なかつた、又光琳たるべき筈のものでも無かつた。抱一は何處までも抱一で無くてはならなかつた。

抱一の傑作と云はれて居るものは今日別府氏の所藏に懸る『四季花鳥圖』二枚折屏風二双であらう（元來は姫路侯の所有で江戸大手丸の内にあつた時は表裏八葉の襖であつたさうだ、）—その中夏冬の二景を『國華』が八十三號で復寫して居る。夏景の説明を同雜誌から抜くとかうある、『綠水汀渚に灑り水草離、披捺亂花を著けて香しからんとす、鵜鷺は其間に游泳せり、其草

殊その圖様はもとより、其尊ぶべきは[illegible]この[illegible]を用ゐて水葱を寫し、其餘幾種運筆毫も澁滯せず、一片の[illegible]方寸の中にありて沸々として十指の間に躍生す。一水を游ゞんとする鳥の姿態と小波うつ水の風致、其に幾つも高く伸びた水草の女性的清妍【?】に何んともいゝやうがない優艶な印象を人に與へる。又冬景を見ると寒い空の下に二羽の野鶴、その足を數尺水中に入れて居る。畫面の前景には一株の枯れた蘆。二羽の野鶴に對照する三羽の鶺鴒が氷の上に起つて居る。さつと輕く描いた水中の雜草を境として游水と結氷とを分けて居る、――これまた抱一が所謂獨詣の妙を極めた作品で、嚴肅の感じに幽艶な女性的情調を背樂的に絡み合せたものだ。この「四季花鳥圖」四枚の繪は『抱一上人眞蹟鏡』のなかにその大幅が選摘て出て居る。

風が薫る五月の沼に燕子花が咲いて居る。緑の水は紋を作つて微かに動いて居る、人一人も居ない渚に二羽の鳥が平和な眼を傾けて優游自適して居る、――この繪も配色の艶麗明美の點で、抱一作品中有名なものだ。勿論此處には光琳の大膽な構圖の力は發見されない、又配色の上でも聊か混亂した所が無いでもない。然し畫面に漲つて居る洋々として盡きない靜寂な情致は抱一獨得の畫境といつても差支あるまい。要するに彼の寫生味は[illegible]かに[illegible]の靈妙を發現せしめたけれども、時には外面的愉快に陷入らしめて居る。假令其處に所謂市中の俗氣に無いにしても、必ずしも瀟洒脫俗と許されない場合もないで無い。今抱一の作品を批評的に調査して見ると、彼が草花の女性的纖細精緻の趣を描いたものに逸品が多い。彼の秋草の繪を見ると、僕はいつも『秋のしらべ』の文字を想起させられる、「花の姿が眼に月影の男郎花、露まちかねて濡れかゝる、色香の怜やオ、怜や刈かや刈れもつこう、思ひ初めにし戀ごろも、色も仇なれ薄紫のふじ袴、つひ綻びし糸すゝき、夜半のあらしのまにまに花の、靡く心がしほらしや」の情調が畫面に浮いて見へて來るのを感ずる。

なよなよした萩が亂れ咲いて居る。そしてそれに大な圓い月が懸つて居る。冷めたい秋の露の下で飛んで居る秋蟲の晒く鳴き聲も耳に訴へるやうに感ぜられる、――これは『國華』第二十三號に復寫された彼の『秋草圖』である。この種の繪を見ると、國華記者が書いて居るやうに「[illegible]の秋思をましめ騷客の羈情を傷ましむ、一片の秋意筆墨の外にあり」の畫境である。鶯邨畫譜を見ても、別に秋草と限らず一般に草花の女性美を描くのがこの酒井抱一の畫家としての卓越であると云はねばならぬ。畫譜中にある『染めやすき人の心や糸さくら』の

短冊がさげてある咲くにはまだ數日間がありさうな糸櫻の繪や、薄紫の藤の花の繪何れも人に艶麗な脂粉的情調を與へずに止まぬものである。富士山や梅や海の波の繪などを見ても、光琳のそれ等の繪に於ける如く豪邁な男性美が無い、——それは抱一と光琳の相違で決して優劣で無い。又それを元祿時代と文化文政時代の相違とも見ることが出來る。

抱一は澤山櫻かざして遊び暮す大宮人や十二單衣着た官女を描いて居る。『風吹けば沖つ白浪たつた山』の伊勢物語を題材とした一枚、女が手づから飯を盛つて居る所を王孫が戶外から窺ひ見て居る繪は(光琳の模寫であらうが)その中でも傑作であらう。實にこの繪には春のやうな長閑な情味が纒綿して居る。又彼が俳句を書入れた即興繪にも他人が模し難い彼特殊の畫境があることはいふまでも無い、——『井の水の淺さふかさを問すずみ』の團扇の繪や、又『やみの夜一針ぬきの螢かな』の撫子の繪などなかなか捨て難い趣がある。

配色の艶麗の點からいふと彼の作品中で、今日別府家所藏に懸る『內裏雛』の繪を随一に推さねばなるまい。これは吉原玉屋の遊女白玉が其後抱一の養母となつて、向島に風流三昧の日を送つて居た時の愛品だと云はれて居るものだ。實に色彩絢爛を極め錦心繡腸の作といふことが出來る。こういふ繪の繪の具を見ると、抱一は如何に高價な繪の具でも宵越しのものは使はず筆を側に置く時殘つた繪の具は悉く捨てたといふ說も實際であらうと思はれる。又抱一から胡粉二兩目を京都の繪の具屋で買ふべく依賴された姫路藩の家老某が、繪の具屋で二兩目三十兩だと云はれて驚いたといふ挿話も、如何に精粹を極めた高價な繪の具を彼が使用したかを知る好資料になる。

僕は倫敦は大英國博物館(ゼブリテッシュミユージアム)で見た抱一の掛物一點を忘れることが出來ぬ。縱橫三尺五寸と一尺五寸許の絹を斜に横切る柿の木。五箇の柿の實が幹にとまつた一羽の鳥を中間に置いて眞赤に熟して居る。而して下へ垂れた小枝に靑い小な鳥がさかさまに成つて居る。これは寂しい秋の鳥で無く、圓熟した秋の醱酵に醉ふ小鳥である。構圖上抱一としては大膽な直裁で整理されて少しも弛んだ所が無い。僕はそれを彼の傑作の一だと思つて居る。東京帝國博物館藏として知られて居る『四季花卉繪卷』がある。然し僕は未だそれを見る機會を得ない。

岡野氏の『雨華抱一』中に久保田米僊の抱一談を揭げて居る、『畫に業畫と遊畫の別ある猶俳に業俳と遊俳とあるに同じ、蓋し丹靑を以て衣食とするものにありては、時間に用彩に勢ひ相顧みるところあり、且つその畫は時好に合さんと求むるの意なき能はず、遊畫者流の興來りて筆を下し時間を問はず、思ふ

がまゝに筆を揮し、墨を衆りて細描きざるの比にあらず、遊畫家のせゝコマしからぬところの妙はこゝにあらむ。光琳が形似を論せず、古法に替へて其好なところにまかし一家をたしたるもの、素よりその畫才の超凡にありと雖も、妙亦こゝにありしならむ。……抱一は世尙上人と呼び、抱一と呼びすてるものなし、家門といへば大名の子なり、資格をいへば大僧都なり、遊蕩たる點に於ては、雁金屋藤十郎の法橋光琳に勝れり、その用筆施彩のオウマカなるはこゝにあらむ、しかも畫を以て論ぜば、輕巧にして品位の高雅ならぬものあり、時代にあらむと雖も、これ光琳を誤解したるにあらざる歟、朱門の內に生長して由來世態を知らざりしもの、偶々足を浮世に踏みこむに至りては、間々極端に走り、家業見世の前に立ちて、鰶の鮓をつまみ以て大通なりと誤解するは無理ならず、取巻くものも亦しきりにこれを賞す、遂に當初のこの誤解は、世馴れし後も念頭を去らず、貴公子が墮落の、うたゝ普通人の下にまで走れるはこれなり、抱一の才慧にして、よく浮世馴れしも、この弊は免れざりけむ、この畫のやゝもすれば纖巧に失し、高雅ならぬはこれがためならむ。……ひたぶるイキにイキにとのみ睨みし眼は、遂に光琳を只だイキとばかりに解したりけむ、これ抱一の畫の品位高からざるに至りし所以ならむ、況んや四顧すれば、おいらん遊し、俳諧口吟ひ、碁を闘ふ、骨董弄翫し、書畫屋入る、四国巡の如くにして時に佛典の講義を聴くとも、これさへ洒落の一事とせば、この畫品の下れる怪むにたらず、イキの一念は抱一をあやまれるが如し。』

この評言大體論としてその眞實を突いて居るでもあらう。

僕が六七年前根岸の御行の松近くに一時の借家をして居た時何にかの機會で酒井道一氏を知るに至つた。道一氏今は故人であるが、雨華庵第四世として鶯邨畫所の衣鉢を傳へた人、――恐くは繪の上に於ける抱一の最後の相續者であつたであらう。『同じ垣根を幾曲り』して、一寸小高くなつた所に彼の質素な家は建てられて居た。彼は剃髮姿で一見昔の繪師らしく思はれた。正月になつて間の無い頃僕は一友人と彼を訪問したことがあつた、――彼はのべた毛氈の上で光琳風の梅か何にかを描いて居た。僕の友人は『昔ながらの春風が吹いて居るね、しかも忙しいとは今日の時代も無慈悲でないと見へる』と耳語した。部屋の欄間に大な眞黒な額が掛けてあつた、讀むと『雨華庵』の三字。裏に酒井忠實の書とかいてあるといつて道一氏はその額を取降して僕等に見せて與れた。雅樂頭忠實は抱一の甥で、抱一の死んだ時直に鶯邨畫所を訪問して彼の葬式を直接主宰し

人である。父忠以に似て風雅の血が身體に流れて居た。との額の書を見ても彼の人格は想像され得た。

抱一の雨華庵は此道一氏の家とは三四町も離れて居て、庵の跡に普通に奇麗な家が建つて居て今は日本橋邊の人の別莊だといふ事である。僕はある日數名の友人と一所にこの醬油屋新道の抱一の舊跡を訪問したことがあつた。勿論昔の俤はまるで無いが、餘り高くない築山の前にある石の四角の庭井戸は抱一時代と變らないといふことである。抱一は深いはいやだとあつて井戸を二頭底にしたそうであるが、覗いて見て僕等はそれもその儘であるのを知つて喜んだ。僕等はこの庭を歩いた、――僕の想像の耳に吉原あたりからの美人の弟子が抱一を取捲き繪の鉢を手にして立つたり座つたりする絹擦れの音が聞えた。又『ここへあがるもいゝが天井が落ちそうで薄氣味わるい』といふ彼等の細い色つぽい聲も聞えるやうに感じた。場面が變ると今度は鵬齋、南畝、文晁、米庵、五山に主人抱一の大一座で偶然開かれた雅會の景が僕の想像の眼に見へるのであつた。而して更に場面が變ると、彼がひそく出入りの骨董屋と書畫賣込みの相談、進んで彼が要求する手數料の額さへ聞えそうにも感じた。彼は出家して宗家から千石五十人扶持といふ待遇を受けて居たが、いつの間にやらその扶持にも離れ文化六年根岸ト居の前後からは主もに繪を以て一家の經濟を立てゝゐたので、手元が時々不如意であつたことは想像に難からない。

僕は根岸住居中毎日のやうにこの邊を散歩した。僕はいつも抱一の終焉の日を思ひ浮べた。僕は今しがた甥の忠實があたふた駕籠を走らして雨華庵へ乘りつけたと想像した、――根岸の狹い路が鉢はさみ箱の本供のために一杯塞がり、あと供はずつと坂本邊まで及んで居る光景が僕の眼前に彷彿として顯はれた。如何にそれが根岸の靜寂を破つたことであつたらうと僕は想像して見た。

太鼓が鳴る、初午だ、――僕は根岸で二度の初午を迎へたことを喜んだ。僕の家からつひ近くに石稻荷があつて、初午になると二本の幟が立つ。幟には注連繩を描いた下に『正一位石稻荷大明神金杉村大塚抱一道人拜書』の大な文字が書いてある。僕はこの勇健な抱一の書を見て喜んだ。少くもこの幟に於ては書家としての抱一が畫家としての抱一と隨分な相違がある。畫は最初董堂中井敬義に學び後ち俳人寶井其角の風を慕つたそうだ。『抱一上人眞蹟鏡』のなかに入れてある彼の書などを見ても女性的女々しさが無く寧ろ豪邁高逸な所がある。實際彼は艶麗洒落のデカダンばかりで無つたであらう。『素麺にわたせる箸や天の河』『片足はちろり下げたか雲の鷺』や又『乙鳥や汲んでは

なせし此[illegible]に發はれた抱一に於ける全部ではあるまいといへる。

「國華」第百九十一號に復寫されて居る『扇子圖』（濃厚な配色で濃い情調が溢れては居るが）や『抱一上人眞蹟鏡』中に納め

らん[illegible]の[illegible]抱一の用[illegible]を示すものといつてよい。

（此稿は明治二十三年出版[illegible]野知十氏著『雨華抱一』に負ふ所が多い。謹んで同氏に感謝す。——野口生。）

横綱剝奪論

横綱を横綱たらしめん爲成績不良の

水谷竹紫

相撲の時代が遷つて來た事は、今更申すまでもない。宮廷儀式の一つであつた時代、武技奬勵の一手段に過ぎなかつた時代から、趣味を中心として複雜な意味を有つ今日の相撲……即ち純然たる競技運動……つまり觀覽物……となるまでに、幾多の變遷が、その風俗に、習慣に、勝負法に、審判法に、その他内外の規定に、ひつくるめて云へば、角力と云ふものの生活に加へられたかは、また更めて申すまでもない。時代は何物をも動かす、變化は『進步』の生命であり、流轉は『永續』の核心である。むかしの標準を以て今日の相撲を律し、舊慣古習を以て今日の變革を評するは、つまり時代錯誤の大タハケ、共に相撲を談るに足らざるものに屬する。

顧れば、明治以來いや國技館以來、相撲の風習は急激の變化を來した。制度の上に、組織の上に、風俗なり作法なりにも餘程の變遷があつた。特にも角力術の如きは、その舊來の面目を全く一新したかの觀がある。しかしそれとしても、尙時代の急潮に伴つて居るかは疑はしい。勝負法や審判法の如き、多少は古い殼を脫しかゝつた趣が見えないでないが、まだ〳〵依然たる舊態、丁髷動物の遺風を脫却し得たとは云ひ難い。早い話が本誌の正月號にあつた『相撲苦情速決』の如き、既に幾多の人が幾癸のインキを無駄にして論じた問題なれど、いまだにそれが滿足な結果を得ず、今更ながら生駒翔翔氏をしてあの丁寧な精細な論議を費さしむるに至つて居る。仕樣がないと云へばそ

れまでだが、何とかどうとかならぬものか。

何とかならぬものかと云ふ序に、今一つ何とかして貰ひたいものに『如何にすれば横綱を横綱らしからしむべき』と云ふ問題である。『苦情速決』の方は、生駒氏が云つて下すつたからよいとして（小生は生駒氏の所論に徹頭徹尾賛成する。しかしあの論には未だ苦情速決の具體的方法は示されて居ない。それらは多分後日の爲に殘されたことゝ信ずるから、小生にも多少成案はあるけれども、氏の說を聞いてから更に論ずるとしよう）此の方は、左程未だ問題となつて居らぬ丈に、今ごろから少しく云はして頂きたい。

『如何にすれば横綱を横綱らしからしむべき』と云ふと、早合點の或る人は、即座に選定を愼重にせよと云はるゝであらう。それはさうに違ひない、横綱がごろ〳〵轉がつては固より横綱らしくない、力士の最上位と云ふ表面の名目にも拘はる。つまり容易に轉がらぬ人負けぬ人を見定めて横綱にする愼重が必要である。是れには何の異論もない。しかし問題はこゝに發生する。果して然らば、絕對に轉がらぬ人負けぬ人を見出し得るかどうか。成程ある時期……極めて短い或る時期の間は、何人にも負けぬ全盛を矜り得る力士はあるであらう。しかし稍長い時期を引續いて全勝を期し得る力士は、今日に於て一人もある筈はない。事實が偶然示す許でなく、本來の理論に於てさうあるべき筈である。なぜならば、今日の角力術は、舊來のやうな體格力量のみで律する事は出來ない、氣合本位作戰本位であり、變化が鋭敏であり、從つて偶然の機會が多くなつた。從つて如何に體格力量が拔群で、その平均價が偉大でも、巧にその弱點に乘ぜられるれば、屁のやうな弱敵にでも土俵の砂を掴む場合が頻繁ならざるを得ない。結果から見れば、上下の差が少くなつた様であるが、實は今日の角力術が然らしめたる氣運である。かう云ふ時代に強ゐて『絕對優秀』の名を存して、それを名實共に維持しようと云ふのは不可能であり、また時代錯誤である。『絕對優秀』の存置はデモクラチックの世にあつては舊時代の幽靈に過ぎない。デモクラシーを主張しつゝ尙偉人萬能主義の臭味を脫しない政治論人物論が、曖昧不徹底を免れざる如く、『横綱絕對優秀論』は今日の時代にとつては、最早時代遲れなタハケた沙汰に過ぎない。

私は曾て角力の番附と云ふもの、眞の意味の力士實力の順位表と云ふよりは、前場所の成績表考課表で、そしてその方が却つて意味もあり興味もある所以を述べた事がある。兩國が如何に幕尻近くなつたとて、鳳や朝潮とは好取組である。大潮が次場所如何に位地を降下したとて、依然大錦九州山の大敵であらう。所詮、番附は變化の興味、眼新しいと云ふ廣告的な興味以

外に、個々取組の勝負にはたいした影響もないものであらう。然から横綱と云ひ大關と云ひ關脇小結と云ふも、所詮は變化を主とする番附（紙の上の沙汰ばかりではない）の一時的現象である。實力表現を矜る力士社界にとつては、番附の異動即ち力士順位の變化そのものが、大に意義のあるところ、また同時に強味の存するところである。

から云ふ議論を前提として、私は『如何に横綱を横綱たらしむべきか』との問題に答へんと思ふ、そしてその答解は

一度横綱たりし人も成績の如何に依りてはその名稱地位を剝奪降下せしむる規定を設くべし

と、云ふ『横綱剝奪論』又は『横綱降下論』である。しかし、から云つたばかりでは、少しく突飛の嫌があるから、紙數の許す限り、簡單な說明を加へて見たいと思ふ。

一體横綱と云ふのは『順位』の名か『勳爵』の名か。先づ第一に是れからきめてかゝらねば議論が混雑する。順位の名稱即ち現在實力の名ならば、その當時の最優者が之れを襲ふのは云ふまでもないが、從つてまた、それが最優者たる事を失つた場合には、新たな最優者と交替するのが當然と云ふ譯になる。もしまた、横綱なる名稱が、單なる勳爵的名譽表彰的、卽ち過去の勳功に對する名稱ならば、敢て順位によるべきではない。第一位にあらうが第二位にあらうが第五第六であらうが、横綱は横綱である。番附の何枚目に列しようとも、それは現在の實力又は成績を示すもので、過去の勳功と何等抵觸する害もない。

要するに横綱と云ふ名が、第一位横綱第二位大關第三位關脇と云ふ樣な順序の名ならば、大關以下が實力成績によつて上下する如く、横綱も亦實力成績によつて上下すべきである。（此の際横綱の地位を下る人は横綱なる名を返上するのは無論である）もし假りに、横綱の名が大關にあつての全勝者、又は大關以上に地位を進むるを妥當とする優者に授與するものならば、横綱の名を冠したまゝ、その番附を上下すべきである……と云ふ事になる。そのどちらが今日の場合、妥當であるかは後に述べるとして、先づ此の「順位的」か「勳爵的」かと云ふ事柄を事實に就て調べて見よう。

相撲史上の古代に屬する事柄は、時代の違ふ現在を律するに權威が少いから暫く問はぬ事として、明治に入つてからの横綱に就て見ると、明治十六年の春番附の先代梅ケ谷には大關のまゝにその上に横綱の名を冠してある。所謂横綱大關である。つまり大關と云ふ順位のまゝに横綱と云ふ爵位を戴いたのである。之れは梅ケ谷が大關にあつて成績拔群であつたからである。然るに明治廿三年五月先代西の海が横綱となつたときは、

張出の地位に据ゑられて、單に横綱とのみ記された。當時の事情を調べて見ると、下から小錦がメキメキと進步して來て、大關西の海の壘を摩し、その前場所の如きは全勝の榮を占め事實に於て西の海以上の實力を示した。で、どうしても小錦を大關に進めねばならぬが、頭に西の海がつかへて居るので、それを除く爲に、横綱を與へ同時に張出とした〻解せらる〻節がある。つまり『大將に進め豫備仰付けらる』と云ふ趣が存したのである。

その後小錦が横綱になつたときも、常陸山梅ケ谷が横綱になつたときも、何れも大關のま〻に横綱を冠したゞけで、別に横綱と云ふより以上の席次に上つたゞけではない。（大砲の横綱は單なる張出横綱で之れは先代西の海の横綱に類する）むしろ小錦時代にあつては、横綱大關から單なる張出の横綱になつた場合は、その地位を降下したかの觀があつた。

これ等を見ると、明治の末位までは横綱の名は『順位』と云ふよりは『勳爵的』と云ふ意味が多かつたらしい。然るに明治三十八年、國見山常岩が大關昇進のとき、初めて横綱の意義が變じて「勳爵的」から『順位』となつた。卽ち番附の欄內に横綱と云ふ大關以上の席次が設かれたのである。つまり從來は大將（大關）たる人に何爵（横綱）と云ふ爵位を與へたのであつたが、此の明治三十八年五月場所からは大將の上に元帥と云ふ上席を設けた事になるのである。

此の横綱の解釋に於ける二樣の意義は、從來に於て屢々曖昧に使用された。たゞに觀客側の人々に於て曖昧であつたのみならず、角評家乃至は角力協會當事者に於ても徹底したる理解を有たなかつたらしい。そしてそれが常に攻擊辯護共に不透明なる横綱論となつて居た。私が敢て古番附を擔ぎ出してから云ふ區別を明示するのも、つまり事實に基く合理の論を建てたいが爲である。

また、この二樣の意義は、一面には、横綱絕對優秀論卽ち横綱唯一人說と、さうでない說との大切な區別となる。横綱大元帥說と元帥說との差異となる。從來に於て屢々衛式の人々から唱へられたところは、日下開山說、横綱唯一人說で、その論據に基いて、横綱濫設攻擊が展開された。曰く『無暗に横綱を作るから、ごろ〱轉がる横綱が出來て、我々が横綱と云ふものに描いて居た幻影を消滅せしむる、横綱は絕對に一人でなければならない。もしその資格に當るものがなければ、横綱の位地は缺いでもよろしい』と、此の論は他の事實を度外すればそれ自身に徹底する。しかし事實の示す處は單に『不可能』の一事に歸する。横綱絕對論者の云ふが如んば、今日に於ても將來に

於ても横綱なんて、決してアリウコはない。一番の優秀なものでなくて大元帥である。大元帥は神聖にして無責任なるべきものである。その無責任の神聖者を勝負を豫期する土俵に立たしむる事は、それ自身に矛盾である。現代の角力は決して最優者の固定を許さない。現代の政治が專權者の固定を許さないよりも手厳しい自然律である。之れが此の文の最初に述べた時代の進化で、如何に理想論者が口角の泡を沸立たしめても、事實の前には一支も許されない所以である。

絶對優秀が許されないとすれば、話は比較的優秀と云ふ邊に墮する、比較的の優秀は『同等』と云ふ事を許さねばならぬ。同等が許さるれば、その結果は多數となる、『唯一人』でなくして數人の共存を認むる事になる、濫設が是か非かは別論として、とにかく、或る檢定試驗に合格し、空席の存するものさへあれば幾人の横綱が出來ようとも、合理的に之れを論破する事は出來ない譯である。事實今日の横綱は、大關の位置にあつて、全勝又は之れに準ずる成績を得たものに授與されてる。今日の角力にあつては、全勝と云ふ事が既に非常に難しい檢定試驗である。しかも之れに合格したものが横綱の名譽を得るのは、當然の權利であらう。

しかしこゝに問題は生ずる、果して然らば横綱の椅子は無限にあくまで一人にして然るべきものか、それとも許すには二人でも四人でも或は五六七八人でも横綱を率るべきものか、と云ふ問題である。——もし横綱の名が勳爵を意味するならば、「大關にて全勝」と云ふ勳爵者には何人授與しても差支へない譯である。しかしもし横綱が席次の名であるならば、それは東西に唯一席であるべき筈である。日下開山横綱唯一人の論は破れても、東西各一人なるべき理論は打破し難い。處が前にも云つた如く、今日の横綱は爵位ではなく順位なのだから、其席はどうしても東西各一席であるべき筈である。一つの椅子に幾人も腰掛け得べきものではない。ところが、事實に於て横綱が同時に片方に數人も現はるゝは（それが資格存在に於て可能なりとするも）横綱の特權を不動のものとするから起る弊害である。一旦横綱となればもう番附を下らないと云ふ特權がある爲の弊害である。

此の弊害は、たゞに同一の椅子を數人して掛けると云ふ不合理ばかりではない。横綱になつた當の力士をして、最早功成り名遂げたる如くに思はしめ、稍もすれば研究と練磨とを怠らしむる。加ふるに横綱力士と他の力士とを先天的に差異あるものの如く思惟せしめ、立合や角力振に一種の遠慮を惹起し、公平互角なるべき土俵の上に、一種のハンヂキヤツプをつけ、眞の實力競技の意味を輕からしむる。風は此の爲にどの位眞價を傷

けたか、大錦が時々立合にその本領を發揮するを得ずして失敗したなどの實例は、つまり此の弊を語るものである。

此の弊はまた、下り坂ではあるが、まだ取れる横綱力士の引退を早からしむる。他の地位の力士ならば、まだ〳〵引退の時期でない場合でも、横綱たるが爲に、その負星を多くするを潔しとせずして、見す見す引退を餘儀なくされる。觀客に取つても斯界に取つても之れは大なる損失で、本人に取つては氣の毒千萬である。

更にまた不愉快なるは、負星を厭ふが爲に、或は星勘定の結果興行の中途より缺席する弊である。之れが爲に中日以後の期待した好取組をフイにする事は殆んど毎場所である。是等の弊害を除く爲には、どうしても、横綱を移動的のものとしなければならない。一旦横綱となつた人でも成績によつては、その横綱を剝奪して、更に大關乃至關脇より出直すと云ふ制度にしなくてはならない。

かうすれば、實力ありながらも頭の支へたる爲に、その地位を得ざる力士の不幸を緩和し、横綱競爭の興味を湧起し、横綱その者の權威を永久に保つ事となる安全第一の策である。今日以上に角技の興味を湧かしめ、その隆盛を無限に大ならしむる所以である。即ち『横綱をして、横綱らしかしむる』救濟策である。

この邊で、是迄の所論を一括し要約するとしよう。即ち

一　横綱なる席次は東西各一席とす。

　但しその資格に合格せるものなきときは之れを缺くを得。

二　横綱なる資格は、横綱候補者即ち大關に於て、全勝若くばそれに準ずる優勝を得るを要す。

　此の場合少くとも八個以上の勝星を得、その一つは必ず敵方の横綱又は大關を含むを要す、

三　横綱たりと雖、引續き成績不良なる場合は、之れを剝奪し、その番附を降下せしむるものとす。

こゝで當然の歸結として、如何なる場合、横綱を降下せしむるかとの問題が出るであらう。これに對する私案は、未だ十分ではないが、まあざつとこんなものであらう。

一　引續き休場二回に及べる場合、

二　勝星五個を得ざること引續二回に及べる場合、

三　味方の大關に比して、不良の成績引續き三回に及べる場合、

四　降下の地位は、次位の大關に進退なき場合は張出大關とし、その席次は大關の上位にあるものとす。

[illegible]もないが、「一」と「二」は[illegible]の休場を防ぐ為[illegible]して、[illegible]は後進の進路を開かん為であるが、少しく苛酷に失するきらいはあるけれど、此の位手厳しい規定を設けねば、今日の横綱の墮落を防ぎ難いと信ずる。

こゝで序に云つて置かねばならぬのは、横綱と同時に大關の地位の移動である。今日の大關は二場所負越ねば、その席を滑らない事になつて居る。之れも亦弊害であつて、徒らに實力なくしてその虚位を擁する大關を生じ、爲に休場相次ぎ取組の興味を減却せしめて居る。之れに對しても私は次の改革案を提供したいと思ふ。卽ち

一　休場引續き二回に及べる場合。

二　勝星四個を得ざること、引續き二回に及べる場合。

三　負越の場合。

四　味方の關脇小結に比して不良の成績引續き二回に及べる場合。

五　一、二、三の場合と雖、關脇以下の成績不良にして大關たるべきもののなきときは現地位に止るを得。

之れも別に說明の必要はない、横綱に比して更に嚴峻なる案を立てたのみである。尙こゝに味方の關脇小結と云へるは、必ずしも同一人たる事を要しない。その時の關脇小結に比するの

であると[illegible]

[illegible]二人[illegible]

むしろ横綱[illegible]として張出一人を置くのも可からうと思ふ。

思ひ出したまゝの記述で、議論が重複したり前後したりした樣であるが、大體の考はどうにか如上で述べたと思ふ。固より私が角力の觀客として、現在の角力に要求する改革案はまだまだ一二には止らない。しかしそれは何れ他日を期し、今日はこの横綱論の一節に止めて置く。

乾山焼の研究

今泉雄作

（一）

尾形乾山の事蹟に就ては、從來斯道に關係ある人々の考査によつて段々と明瞭になつて參つたので、今更私が事新らしく申述べる迄もありませぬ、が乾山の燒物と燒窯の事に關し、先年聊か調査したことがありますから、其概略を世間に紹介し、併せて識者の教示を仰ぎたいと思ひます。

乾山が抑も燒物を始めました動機は何うした動機から起つたかといふ事を先づ述べて見ますると、乾山の親父の宗謙といふ人が亡くなりまして、それから其身代を悴に繼がすといふ一段になりました所が、同人には悴が二人ありました。即ち總領は有名なる尾形光琳であつて、乾山は其弟でありました。そこで總領の光琳が宗謙の跡目を相續して東福門院樣の御用達を致すことになりました。

所が光琳といふ人は隨分洒落な人であつたが、乾山もまた餘り眞面目な人でなかつたのでありました。そこで兄弟が「一體此身代を誰に繼がせるなんて、御用達などゝいふやうな面倒臭いことは止めやうではないか』と相談一決の上、兄は繪畫を嗜む所から畫工になる。弟は燒物をやつて見たいと云つて燒物師になる。そこで身代を二つに分けて、兄貴の方は――是は傳説でありますから眞僞は何うだか知りませぬが――其貰つた金で悉く繪具を買ひ、弟はまた燒物の釉を買つて仕舞つたといふ事であります。これが尾形家の二つに分れた原因であると申します。

さて乾山が燒物に從事することに決心した次第に就て今から考へて見ますと、燒物をするといへば定めて珍らしいものを燒くとか、面白い物を拵へやうとかいふ事がありさうなものですが、乾山の製陶の目的は、最初より和蘭陀燒に倣つて遣つて見やうといふにあつたらしいのです。それで何故乾山が彼の燒物として餘り奇麗でもなく、殆んど樂燒の如く軟かい質の物を撰んだのでありますか、其邊の所は一寸分り兼ねますが、此和蘭

の燒物は今日では餘り見受けませぬから、十分な詳細に知り得て居らないかも知れませぬが、その和蘭風の燒物といふのは一種の燒〆といふが如き物でありまして、上に塗土をして、それに繪畫を描いてあります、多くはポンチなどを描いてありますが、中には文字を書いたのもあります。その品物は麥酒を呑みますコップとか、或は麥酒を入れます――佛蘭西でカネットといふ――德利見たやうな容の物が出來て居るのであります。また其繪畫は毛筆で描いてありますが、筆意が十分に現はれて居て頗る面白味があります。

元來陶器の書畫といふものは、なか〳〵描いた通りに出ないものであります。所が和蘭の燒物は、それが描いた通りに出るのであります。近來工業學校でワグネル氏などは旭燒（アサヒヤキ）などを燒きまして、描いた通りに墨色が出るといふ事が大變評判でありますけれども、其實乾山は既に二百年前に、そこに氣が着いたものと私は考へます。そこで乾山は畫も出來、書も出來る人でありましたから、自分で燒物の上に書畫を描いて、恰も紙面へ描いた通りに、其儘陶器に筆意、色彩の現はるゝ事が面白いといふ所から、他に立派な燒物のあるにも拘はらず、和蘭風の燒物をやらうといふ事に決心したものと想像されるのでありまます。

（二）

乾山はさういふ事で和蘭風の燒物を始めることになつたので、先づ京都の土で和蘭の燒物に一番よく似たのは何處であるかといひますと、鳴瀧の隣地に幡枝といふ村があります。其處が御所の土器の御用を勤めて居つて、昔からそれを納める所であります。其幡枝から出ます土器は內盤（ウチバモリ）といふ土器で、眞中に黑い燻煙（イブシ）がある。此處は土器を臂で作る、即ち古代の天（アマ）タクジりの遺法であります。その內盤の土器の土が一番和蘭の樂燒の土に似て居る。乾山は先づそこへ眼を着けたものと見えます。そこで幡枝の土は何處から採るかといふと直ぐ隣村の鳴瀧の山から採るので、即ち鳴瀧と幡枝との間に低い山がありまして、其山から出る土であるから、申さば幡枝も鳴瀧もマア同じであります。そこで乾山が鳴瀧に窯を築くといふ考へを起したのも、其土の關係からであると思はれます。それから鳴瀧へ窯を築いた所から乾山といふ號も起つたので、鳴瀧の方位は即ち京都の乾（イヌヰ）に當るのでありますから、乾の山といふ號を付けたのであります。

鳴瀧といふのは隨分大きな村であります。それで何處に其窯跡があるかといふに、先年私が京都美術工藝學校に居りました時分に、その近所を探して見ました。探して見ましたが、其時

は何うも本當によく分りませぬでした。所が其後圖らずも乾山の窯跡といふ事の話を聞きましたのは、只今でも其跡から破壞れた亞鉛釉のかゝつた土器の出る處がある。出る分量は至つて少ないが、其處に相違ないと敎へて吳れた人がありまして、先づ其處と信じました。此鳴瀧の土の出るといふは其山であるから其邊であらうと思ひます。で私に敎へて吳れました人の說を信じて、今日でも其處と極めて居ります。その土地は鳴瀧の北の方の山で、黃檗宗の寺が一軒あります。――海雲山といふ山號でありますが、寺號は何といひましたか忘れて仕舞つて、一寸思ひ出せませぬ――それで確かには申し兼ねますが、位置の關係上、仁和寺、大覺寺も至つて近い處でありますから、さういふ事はあるべき筈と思ひます。まづこんな事で燒物を暫らく研究されて居りました。

(三)

所が此乾山が、上野宮樣卽ち公寬法親王と仰つやつたお方の大變お氣に入りであつて、同親王がまだ京都の叡山に御出でになつた時分から――此叡山と鳴瀧とは餘程離れて居りますが――何ういふ關係であつたか、頻りに御寵愛を受けて居りました。それで此公寬法親王といふ御方は叡山の麓なる圓滿院といふ寺に御出でになつた宮樣で、元は覺尊法親王と仰つしやつたが、後に江戶上野の輪王寺宮御門主となりまして、御名を改めて公寬と仰つしやつた。そこで正德二年に、親王樣は江戶上野なる輪王寺宮の御住職とならせられたので、乾山は同宮樣のお供をして江戶に來ることになりました。所が此時乾山は餘程歲を取つて居りましたが、江戶へ參りまして此方も、宮樣より手厚いお取扱があつたと見え、特に屋敷を下賜になつた。此屋敷といふのが入谷の道へ賜つたといふ事であります。是はまあ確かな記錄にある譯ではありませぬが、入谷の道といふ事になつて居ります。

そこで私は入谷の窯跡を一つ探したいといふ考へが起りました。それで當時の地圖に據りまして入谷を周く探しましたけれども、何うも說が確かでありませぬ。何處であつたか、入谷に移つてからの窯跡といふものが薩張り分らない。そこで入谷道といふからは、古い道路に添ふた處へ屋敷を賜つて、燒物をしたに違ひないといふ所から、私は其古い道筋を更に探して見やうといふ念を起しまして、それからボツ〳〵と搜査に取掛りました。

(四)

話しが少し長くなりますが、折角探究致しましたから、こゝに其結果を述べて見ませう。元來此下谷上野の土地といふもの

は、往昔と今日とは非常な變化でありまして、迚も現今の道路を標準として、何の邊ならんといふ事は云へないのであります。

德川家が下谷から上野の近所へ掛けてやつた土木工事は、實に偉い計畫であつたやうですが、今日に至りますと、前申す如く、往昔の道路は何う通つて宜いか殆んど方角が分らぬ。それで私は先づ入谷へ這入つて來る道を尋ねて見んものと、淺草の觀音樣を出發點として段々に捜しましたのであります。

德川家入部當時の淺草の地理を按ずるに、只今の傳法院の場所が、觀音堂の舊地であつて、現在の堂宇は三代將軍が改築の時移轉せしめられたもので、傳法院の後の方即ち只今の見世物抔がある、あの六區の地面は當時は一體に沼地でありました。只だ傳法院のある處だけ多少高い地面になつて居つた。それからして此方は現今の東仲町邊りの町家の中を通つてズツと淺草山といふ山に沿ふて向ふに行く道があつたやうであります。

この淺草山といふは、上野の山よりは些高い山であつたと思はれるが、今日ではその影も形もありませぬ、併しアソコが山であつたといふ一つの證據を擧げて見ますれば、現に田原町に蛇骨湯といふ錢湯がありますが、私共幼年の時に出來た湯屋で、蛇骨といふ名を付けた譯は、彼所で井戸を掘りました時に、地の下五尺計りを掘り下げると大蛇の骨が出た。是は昔し地質學も一向知らぬ昔の中でありましたから、其の俗にいひましたが、今ならば象骨です。所が其時分は蛇骨と思つたので、斯く蛇骨湯と名付けたのである。然るに此蛇骨即ち象骨などといふものは、迚も沼地見たやうな處を、僅か五尺位掘つて出るものではないから、其時分でも稍々地層の事を知つて居る者は、こんな處から此樣なものが出やう筈がないと疑を起したこともあつたやうな次第で、是は何んでも、前々は此邊には高い山があつたのを、德川家が開墾して平地としたから、僅に五尺計りの地下から象骨が出るといふのも別に不思議はないと思はれます。

そこで其山へ登りますのに、直ぐ登つたら宜さゝうなものだが、なか〳〵さうは登れなかつたものと見えまして、彼の東仲町から田原町先きの方へ出て、今の十二階の邊(アタリ)を山へ沿ふて前方へ行きますと、新谷町五番地にある本然寺——慶長頃の開基——といふ寺の所へ出たやうです。此寺の境内には先頃まで可なり大きな一里塚が殘つて居りましたが、頃日は取除いて仕舞つて長屋が建築されて居ります。そこで舊道は此一里塚の傍を通つて南の方に向ひ、段々と山を登つて行つたことになります。

（五）

こゝに廣德寺前通りの北松山町十八番地に、淺草山東國寺と

いふ寺があります。其寺の縁起を見ますると『此淺草山東國寺の起りは、徳川家康公が、この近邊へ鷹狩などに來られた時には、何時でもお立寄りになつた』とある。その淺草山東國寺は丁度淺草山の絶頂にあつた薬師堂であつたといふことです。其辻堂の所へ新谷町五番地邊りから段々と山上に登つて絶頂へ行つたものと見えます。そこで家康公が、此辻堂へ御憩みになつた時に、堂守の坊主に『何か望みは無いか、望みがあれば叶へてやらう』と仰つしやつた。所が其辻堂守は了全といふ坊主でありましたが、無慾な人と見えて、『何も望みは御座いませぬ』と答へた。『併し人間何か望みの無い者はなからう』と云はれると、『否(イエ)、何も御座いませぬ、唯だ此所が辻堂で御座いますから、何うか之を一軒の寺にしたう御座います』と申し上げました。其時に家康公が『それは雑作もないことだ』といふ事で、山寺號を賜つた。即ち地名の淺草山といふを山號にして、それから東國へ來て始めて寺に命名する紀念として、東國寺といふ寺號にしたといふ事であります。(東國寺縁起に據る)それで見ますると、是が淺草山の絶頂の寺で、今の北松山町の東國寺といふ寺の在る所が、淺草山の一番高い處であつたといふ證據であります。併し只今は其山を切取つて平地にしたのでありますから、こ全く其趣きが變つて居るのであります。

それから此東國寺門前の道路の事に就て、一の口碑が傳つて居ります。その口碑に據りますと、寺門の前から道路が二ツに分れて、一つは入谷へ降(オ)り、一つは下谷の方へ降りるとあります。是も落穗集にも出て居りますが、廣徳寺前の上野の方に寄つた處は谷間で、慶長何年かに埋めて仕舞つたといふ事である。即ちこの上野に寄つた方が淺草山の南麓の通りになつて、上野に向つて、そうして谷間を山下へ降りた。そこで一方の入谷の道は何う行つたかといひますと、彼所(アソコ)から直ぐ東國寺の横町をズツと這入りますと、祝言寺(シウゲン)といふ寺があります。この寺の前を通つて何處へ出たかといふと、先づ無暗に低い所に向つて上野の山の裾に出たが、上野の山の裾は、今では切取られて仕舞ひましたけれども、上野の山は、元はその裾がズツと入谷の方に出て居つて、長い所は三町も四町もあり、短い所でも一二町位はあつて、所謂岡陵起伏といふ地勢になつて居りました。その裾を傳つて入谷へ這入つたものと見える。そこで入谷へ這入つて何處邊りへ來たかといふと、何うしても今の入谷の前田伯爵邸の前邊りに來たに違ひないのであります。

(六)

それから乾山の窯跡のお話に移りますが、こゝに一つの傳説がある。即ち前田伯爵邸の向ふの地面(八番地)——淺草の方か

ら來ますと左側の地所——に乾山の窯跡があるといふ説があるのです。所が此乾山の窯跡があるといふのが、其處ばかりならば、無論入谷道で八番地が乾山の窯跡であるといふことに極つて仕舞ふのですけれども、別にモウ一ケ所窯跡と傳へらるゝ處がある。それは入谷町の三十五番地で、その證據には、そこに焼物屋敷といふ名が殘つて居ると云ふ、斯ういふ説が片ッ方にある。そこで乾山の窯跡といふものが二つに分れますが、焼物屋敷の方は、文化の末から文政天保邊りに、當時の宮様から、御慰みとして焼物を仰付けられて、そこで焼物をしたから、それで焼物屋敷といふので、そんなに古く焼物をした所じやないといふ説が出て來た。そこで私は工藝大辭書の乾山傳を撰ぶ時には、八番説を採つて置きました。それは此土地は昔は前が沼で、後ろに上野山の裾を扣へて居る上、その正面は東南に開いて居て、何うも焼物などをするには適しさうに思はれるから、さう極めた次第であります。

所がまた段々土地の人などに承はるに、何うも乾山の焼物をしたのは八番地でないやうだ。何故かといふに、彼の乾山の死んだ時の葬式に、家主次郎兵衛といふ者が、上野宮様へ申上げて、宮様から小判一枚を頂戴して葬式を出したといふ事がある。此次郎兵衛といふ人の末孫と稱する、松本四郎右衛門といふ者が持つて居る地面が、右の焼物屋敷であります。これで家主次郎兵衛が、四郎右衛門の先代とすると、何うしても其家主の地面で焼物を焼いたに違ひない。さうすると焼物屋敷は乾山の焼窯の名殘りで、其跡で文政天保頃に、宮様から焼物の御用を仰付けられて、慰みにお焼きになつたといふ事にすれば、前説を飜して三十五番地の方に賛成せねばならぬ次第になります。それで八番地ならば淺草の方から來ると左側になり、それからズッと入谷に進入つて三十五番地の所へ行つて見ると、是は右側になる。只だ右と左の違ひであるが、私も今之を斷定するだけの確信はない、此上は松本四郎右衛門の先代が次郎兵衛であるといふ事が確實であると否とに因つて、之を判定するより外はないと思ひます。

（七）

それからモウ一つ乾山の窯跡で調べたいと思ひますのは、常陸國佐野で、——茶人の釜で有名な佐野天明(テンミヤウ)といふ處——陶器を焼きました。是は乾山が江戸へ出て來た後、佐野へ聘ばれまして焼物を焼いて、其法を同地の職人に傳へたものと見えます。之を佐野乾山といひます。只今では佐野乾山と云へば、一概に僞せ物と斷定する人もあるやうですが、決して僞物では無いのです。尤も乾山の佐野へ行つて居たのは長い間ではなく、僅か

ばかり行つて居たものと考へます。其佐野に居ました間は、土地の富豪村山といふ家に泊つて居たといふことです。それ故窯跡も尋ねますれば必らず知れる事と思ひますが、私は殘念ながらまだ之を調査する機會を得ませぬ。

先づ乾山が一生涯を通して燒物をした所は、京都の鳴瀧が一番長くて、それから江戸の入谷、それから常陸の佐野の三個所でありますが、此乾山の燒物にも三種類ありまして、一番澤山ありますのが鳴瀧の乾山である。そこで先づ鳴瀧に於て最初發明致しました亞鉛釉といふものが、何うも乾山以前には更に見當らないものであります。或はありますか知りませぬが、私の聞見の狹いのか、何うも眼に觸れないやうに思ひます。それで其亞鉛釉を鳴瀧の土へかけましたのが一番多い、この種類の乾山は一番堅いのであります。又一種軟かい江戸の燒〆土器のやうな土へ、亞鉛釉をかけた乾山があります、これは入谷乾山と思ひます。何故なれば、此土は入谷の土でないが、何んでも龜井戸邊の荒木田の土で燒きましたものへ、亞鉛釉をかけましたものと思ひます。それですから普通鳴瀧乾山は裂文(クワンニウ)がありませぬ。又ありましても小裂文であります。江戸の乾山即ち入谷乾山は、裂文が少し大きく這入つてゐます。又この鳴瀧乾山、入谷乾山の二種は、物によりましては繪付に色繪藥が色々使つてあります。

それからモウ一種の常陸の佐野乾山でありますが、佐野の土は縮みが强かつたか、何ういふ性質の土であるか知りませぬが、亞鉛釉には好く無かつたといふ事であります。馴染が惡いそれで裂文は小裂文が這入ります。佐野で拵へた物でも裂文の無いのも稀にはありますが、これは土を持つて行つて拵へたものではないかと思ひます。普通は小裂文があつて、繪付は鐵釉に限つてゐると思ひます。この佐野乾山を皆僞物であるといふ人もありますが、さうではない、隨分結構な乾山眞作もあります。併し此地の職工は乾山の手本として殘したものを、一々其通りに模造して賣出した爲めに、乾山と銘を入れざるも、詩などの落欵は其儘寫したものであるから、終に乾山の僞物といふ汚名を得た譯であります。

是れで乾山生涯の三處の窯跡と、鳴瀧乾山、入谷乾山、佐野乾山の製品、即ち三種の乾山のあるといふ事は分ります。尤も其外結構な染付或は伊萬里見たやうな物もありますし、又和蘭陀寫の中にも萬古ではないかと思ふやうな品もあります。それ等を皆惡いといふ事は出來ぬ。中々結構なものもありまして、何れも京都鳴瀧時代に出來たものと思はれます。

それから今一つ申上げたいのは、乾山の後繼の事であります。乾山に二代目乾山、三代目乾山、四代目乾山といふ事をよく云ひます、が是は世間一般に知られて居る事と思ひます。其二代目乾山は、鳴瀧で乾山が盛んに製陶事業をやつた時、甥の組合ひであつた職人がありました。伊八といふ者で、是れが乾山の名跡を繼いだ。實は乾山が江戸で死んだ後は、何も無くなつて仕舞つて、家はそれで斷絶した。子供も無く、親類も別に無かつたらしい。それに乾山の死んだ時には、公寬法親王は既に御薨れになつて仕舞ひまして、宮樣の方も昔の樣ではなかつたらしい。そこで前にも述べた如く、家主次郎兵衛が出て、輪王寺宮より小判一枚を下賜され、其金で乾山の葬式をしたといふやうな次第でありますから、何うも親戚も無かつたに相違ない。さういふ譯で跡目がないによつて、京都でこの伊八が乾山の名跡を繼いで、二代目乾山となつたのであります。所がその作品が初代乾山とはまるで變つてゐるので、僞物のやうに取扱はれたのであります。この伊八乾山といふものは風致も何も無い、樂燒へ白の釉を施し、藍藥で繪を描いた物が何うかするとあります。また硫黃藥、藍藥で描いたのもありますが、極く眞面目な物で、初代の如く面白いものではない、銘なども楷書で正しく乾山を書いてある。是れは僞物とはいへませぬが、乾山が見とゞけて、家に入つて相續させたといふ人ではないから是非がありませぬ。唯だ家名を絶たぬ功だけはあつたものであります。

その次に三代目乾山といひますのは、江戸で乾山の陶法傳書を得た者で、吳介といふ人でありました。この人が陶法傳書を得て三代目乾山といひました。世間では吳介乾山といひます。此人は些と燒物は出來ましたが、殆んど鞴窯位の樂み燒をやつたらしく思ひます。此人の作つた香合なども折々はあります。三代乾山、或は唯だ乾山と銘を書いたのもあります。

四代目乾山は吉原の名主西村藐庵であります。此人は近衛三藐院の書を學びまして、當時米元章を學んで米庵といひ、董其昌を習つて董齋などゝいふ號を付ける事が流行て居りましたによつて、此人三藐院の字を學んだから藐庵と號を付けた。此人が傳書を傳へて四代乾山といつた事もありましたが、燒物はしなかつた。藐庵から傳書は三浦乾也へ傳はりました。乾也は故あつて、死にます時に弟子にも讓らなかつたもので、その傳書は今現に大槻如電翁が所藏になつて居るのであります。

東西勢力の對抗

健堂生

1

東西勢力の對抗として見るべき多くの事實の象徵として、一高對三高の野球戰を論じて見たい。

關東、關西の勢力の對抗といふ氣分は、社會、各方面の事實に、遍ねく流通して居る。縱に長く伸びた日本の、地理的形態には、物理學上、楕圓形には自ら二箇の焦點を有する原則に支配せられざる能はずして、關東の東京、關西の大阪といふ二箇の焦點を有するに至つた。此の二つの地理的焦點を中樞とする關東、關西の精神が、潜勢力となつて、斷えず對抗的事實を社會の表面に生みつゝある。這般の事實の尤も顯著なるものを擧ぐれば、東西の新聞の對抗よりして、東西力士の合併興行、東西名人會、その他、數限無く行はれつゝ、その小なるものは、のみとり粉にまで及ぶ。而して東西對抗といふ事が、東西人の感興を鼓舞しつゝあるのである。

東西對抗の精神は、青年學生の對抗運動に依つて、尤も活潑勇壯に表現されつゝある。就中、その代表的にして、既に年中行事となつたものは、一高と三高との野球戰、東商と神商、及び東大と京大との二つの庭球戰で、後の二者は、勝敗如何に關せず、交互に應戰するのであるが、一高對三高だけは、敗者から出掛けて行くといふ約束が行はれて居るから、行くのは屈辱であり、待つのは得意である。隨つて一戰、一戰に、戰氣の緊張することも非常である。此の野球戰が、東西對抗戰の中の、尤も一世の人氣を吸收しつゝある所以も、此に存すると思ふ。吾黨の所見を以てすれば、兩京帝大の庭球戰も、やはり負けた方が翌年、押掛けて行くといふ約束にしたならば、對抗戰の氣分が、緊張を加へはしないかと思ふ。大學の庭球戰には應援も無く、彌次も無く、餘りに平穩無事である。應援に對する議論は暫らく措き、戰場の氣分が緊張するにあらざれば、對抗の意義が徹底しない。青年學生の對抗戰は、意氣の對抗である。技術に現はれたる意氣の對抗である。吾輩は、意氣の對抗に本づ

く、緊張したる戰場の氣分を喜ぶ者である。今の兩大學の庭球戰は、戰場の氣分が稀薄に過ぎはしないか。ケンブリッヂ、オックスフォールド兩大學のボートレイスが、あれほどの應援と緊張とを逞しくするに比べたら、日本の大學生の庭球戰は、おとなし過ぎるやうに思はれる。

2

四月三日、神武天皇祭の晴れたる春曉に、朝靄を衝いて、東京驛に著いた汽車から出現したる三高の應援團は、花盛りの帝都に於ける人氣者であつた。その翌朝に於ける都下の各新聞は、皆、此の記事を以て飾られざるは無かつた。從來、ボールの對抗戰の新聞記者が、これほど賑やかされたのは未だ無かつた。昨年、一高軍が十年來、野球界に於て再び掌握し得た霸權の華々しかりしに對し、正面の敵手たる三高軍が、臥薪嘗膽、以て一年の練磨を積み、今年の陣容は、多くの精鋭を失へる一高軍の壘を摩するに足るべく見へ、必勝の意氣を以て出陣し來れるより、一高、三高、果して孰れが強きやの問題は、異常の興味を以て迎へられた際、未曾有の盛大なる應援團が堂々として入京したのである。

三高應援團の態度こそ、もの／＼しきものなりけれ。彼等は東京驛前の廣場に集合し、四行に整列し、三百の櫻花章の學生、こ手に／＼赤の小旗を振り、數十の紅の大旗、應援旗を押立て、遙ばる百萬遍より鳴らし來れる大太鼓を先頭に進め、「紅萌ゆる岡の花」の應援歌を歌ひつゝ、東京驛より吳服橋、小川町通りを經て、須田町より本鄕通りに掛つて、行く／＼都人の目を驚かし、一高前に向ふ。朝靄、淸く晴れて、麗はしき春日、紅旗を照らし、壯觀、譬ふべきものもなかつたといふ。彼等は、一高前に至り、拍手して、以て、敵陣に、その襲來を報じ、一高前を過ぎて、根津權現に參拜して、戰勝を祈り、神前に於て解散した。抑、根津權現は、一高健兒の氏神にして、一高の武運を守護し玉ふべき神であるのに、敵軍から、此神に、戰勝を祈つたのは、神靈も、稍、挨拶に當惑せられたであらうと思はれる。三高應援團が入京日の示威運動は、此の如く目覺ましきものであつた。而して彼等の目覺ましき示威運動が、眼前に迫り來れる東西對抗戰の興味を煽つた。

三高應援團の入京は、先年、タゴールの入京以來の人氣であつたと言つても可いくらゐに、帝都に歡迎せられたのである。

3

一高對三高の野球戰に於ける應援は、由來、天下の名物である。此の二つの學校の氣分、特色、若しこれを一高式、三高式といひ得るならば、それが應援に由つて遺憾無く發揮される。

而してその色彩がまた自ら所謂江戸兒、上方兒の氣分を帶びて居るのは、關東、關西の勢力の對抗を象徴する事實として、社會的興味が、此の野球戰に集注される所以である。

對校マッチに於ける應援法は、十二三年來、東京で發達して、西漸した。今日に於ても、尙ほ西漸しつゝある。應援法は、東京が本山である。日露戰爭の頃までは、對校マッチの應援は、全く、彌次的、烏合的、突發的にして、對抗の情熱に煽られて、不規律に發する興奮の聲であつた。應援團といふものが作られて、統率的訓練が施され、應援歌を歌ふやうになつたのは、日露戰爭の二三年後であつたかと想ふ。吉岡將軍の出現は、應援法の發達に、新時期を劃したものであつた。固より彼、一人の力に歸するわけでは無いが、彼は、應援團の指導者としては、確に一頭地を拔き、その熱烈なると、公平なるとは、滿場の同情を惹いた。東京に於ける應援團の發明は、天下を風靡するに至つた。一高と三高とは、當初から、互に、世間構はずに、獨特の調子を發揮して居たが、對抗氣分の强烈なだけに、兩者ともに、應援法の研究に力を注ぎ、兩者の特色が唯だ思出し次第亂雜に表はれて居たのが、組織づけられて、能く纏まつたものになつて來た、現代の日本に於て、對抗戰の應援といへば、何人も、直ちに、一高三高を聯想するほどである。

4

一高の白旗、三高の赤旗、一高と三高とは源平である。源氏は關東に、平氏は關西に、源平對抗の氣魄が、一高、三高の健兒に宿つて居るかと思ふ、一高は關東武士にて、三高は京武士である。前者は豪勇で、後者は華巧で、その伎術の上にも、一高の堅實にして重くるしいのと、三高の輕妙なるのと、自から好對照である。

試に、兩軍の應援歌を掲げ、

（一高）戰はんかな、時機到る、
　　勝つた善い、勝つた善い、勝つた方が可い。
（三高）柏の葉、柏の葉、柏の葉を吹ッ飛ばせ、
　　グル／＼巻いたホーイ

兩軍の應援の氣分が、おの／＼この歌の中に現はれて居る。柏の葉は則ち一高の徽章である。柏の葉を吹ッ飛ばせと大聲で歌ふのは、敵愾心の披瀝かも知らぬが、聊か露骨に過ぎはせぬか。殺風景ではなからうか。唯だ敵を呪ふだけで、自奮の氣慨は徹底しない。此の應援歌は、戰はんかな時機到るといふ方が優さつて居る。凛然たる勇氣と決心とが見える。一高の寮歌集の中で、此の一節が尤も傑作であると吾輩は思ふ。これは日露戰爭の時の寮歌の一節を斷章して、應援歌としたもので、必ず

しも三高に對してのみならず、對校戰の際には、つねに歌ふの三高の柏の葉を吹飛ばせは、唯だ一高に對抗する時にだけしか歌はれない。

5

三高の應援振りは、皮肉で、辛辣で、而して京童の口吻を帶びて居る。一高の如くに蠻骨を有しないが、獰猛で無いことはない。獰猛といふよりも、寧ろ無遠慮である。京童の口吻を帶ぶるといふは、奇句、警句を續發して、動もすれば人身攻擊に涉ることもある、頗る際どい事を言ふ點に於て、一高は到底三高の敵では無い。啻に一高のみならず、恐らくは天下に無敵であらう。石油罐を叩き立てるのが、尤も能く、彼等の應援の氣分を現はすものである。吾輩、明治四十一年の春、京都で、三高兩京大學の庭球戰、一高、三高の野球戰を觀戰したとき、三高の應援の猛烈なるに驚いた。當時、三高、六高の庭球戰に、三高の彌次隊が、六高の低軍を取卷いて、石油罐を叩き、六高の選手に、鼻の低い人が出たとき、彌次の間に、大聲を發して、「君、褒大といふ事を西班牙語で何と言ひます？」と絶叫したことがあつた。勝に乘つたる六高の選手も、此の鋭利なる一言には辟易せざるを得なかつた。その時の印象が、まだ吾輩の頭に殘つて居る。グル〳〵卷いたホーイは、此の時の野球戰に、歌つたのが、例であるさうな。此の惡聲は、[illegible]、他校[illegible]。何かさういふ場合に於ける士方の罵聲から來たものらしい。

吾輩は、京都で、庭球戰、野球戰を觀戰しつゝ、三高軍の應援、彌次を觀察して居ると、全く、大平記に見えたる京童の面影が眼前に浮んで來た。太平記には到處に、奇警な落首があるが、それ等以上の警句が、彌次隊の口から噴き出される。古文學に見たる京童は、實に、天下一品である。京童の評語は、純上方の特産物である。更に言換へれば、京童は寸鐵的の批評家であり、また極めて皮肉なる彌次である。京童は、飽くまで彌次性の發達したるもので、舌を以て劒と爲す彌次である。弓矢の世の中にも、舌を以て弓矢を掃ふに足る力を有して居た。勝者は冷殺され、敗者は弄殺された。當年の劍戟は既に錆びて朽ちはてたが、舌は尙ほ存して働らきて居る。京童の魂は、今に至つて、京都方の青年の血管に宿つて居るかと思はれる。

6

連年、一高、三高の兩軍の應援の態度は、漸々、熱度を高めて來た。一高は、いよ〳〵蠻骨を現はし、三高は、ます〳〵辛辣を極めて來た。四十一年に、グラウンドにボートまでも引張り出したのは有名な話である。その外、石油罐の外に、いろいろの鳴物を揃へて、鳴らし立て、はやし立てゝ、それは〳〵

實に、賑やかな、騒然、雑然たる軍容である。平家物語といふよりも、寧ろ太平記の合戰物語を活動のフイルムに映出したありさまで、明治、大正の升平に、此の如き「血を見ざる對抗戰」を見ようとは想像も及ばない。三國志には、此の如き接戰もあつたやうであるが、支那に於ても、近年に於ては、これに匹敵すべき戰爭を目撃することは出來まい。應援の白熱に達するや、一高方が京都に入つても、太鼓は、既に、三高方が既に借占めて仕舞つて、もはや一高方が借らんとしても、借り得べき太鼓は無かつたといふ話さへある。事實の委曲は、吾輩、未だこれを知悉せざれども、全く、兩軍の應援熱は、ロウマンチツクの夢を實現させて居る。一高、三高の對抗戰の興味は、現代に無類のものである。然して、それが活潑なる青年に依つて、飽くまで無邪氣に行はれて居るから、興味が深い。

然しながら、此の對抗戰の應援法は、一年、一年に、面目を改めて來る。兩軍ともに本來の眞面目を保ちつゝ、その態度、方法は、頗る組織的のものになつた。應援熱は、同情すべく、尊重すべきものであるが、過ぎたるは及ばざるが如し。過ぐると過ぎざるとは、鉢に溢れんとする水の如く、危機、實に、間一髪に存する。水の一滴も、こぼれざる程度に於て滿鉢ならんことを得るは、理想的であるが、それを保持して、一滴をも溢れしめざらんことを力むるは、非常の努力である、また非常の細心、注意を要すべきもので、應援隊の首腦たるべき人々は、極めて冷靜、公平なる精神を有するに非ざれば出來ない事である。二十餘年來、帝都に於ける應援熱が沸騰點に達したのは、一高と高商とのボート、レイス及び早大と慶大との對球戰とであつたが、是等とても、吾輩、運動に趣味を有する同志者より見れば、必ずしも危險とばかりには想はれなかつたのであるが、老練なる當事者は深く杞憂を抱いて、遂に、對抗戰の中止を見るの悲運に陷つた。一高と三高との應援熱は、際どいところを、連年、經過して來たと見るべき點もあるであらうが、今年の如きは、頓に、面目を一新し、互に、その品位を揚げた觀がある。今より後、年、一年、改良を加へて已まずんば、蓋し白熱にして而して爛れざる、東西對抗戰の興味を、年々、確保するを得るであらう。

7

應援の要領は、選手を鼓舞するばかりでは無く、選手と相待ちて、味方の意氣を表現するものである。而して應援の態度は、餘りに勝負に熱中し、味方に熱中して、第三者の同情を失ふやうの事があつてはならぬ。若し、應援が、第三者の同情を失ふときは、假令、勝負に勝つことありとも、學校の名譽を損し、

撰手の徳を損し、青年學生の面目を損することあるは、[illegible]ならば、それは撰手の外、更に自軍、敵軍の撰手を加ふる漫罵である。應援隊が、敵の投手を彌次ることとは、考慮を要する問題では無い乎と思ふ。應援隊が、敵投手を彌次る事に對しては、第三者は不贊成を唱へるであらうと思ふ。吾輩は、此に、特に、今春に於ける一高の態度を稱揚するに止まらず、來春、華々しき三高の應援軍が、重ねて向陵に出現するの日、即ち道般の武士的態度を以て、一高の應援軍に相酬ゆるあらんことを期待し、而して他日、白旗の一高應援軍が京都に入ることあらば、同じく今日の態度を忘るゝこと無からん事を、豫め希望する者である。

事である。應援の態度が、飽くまで天眞爛漫にして、武士的の意氣を發揮すれば、その白熱なると、露骨なるとは問ふところでは無い。

此春の、向陵に於ける對抗戰の應援は、未曾有の整頓と、壯觀とを現出した。赤旗と白旗、京童とダンビラとの對照は、東西の對抗戰を彩どる興味であつた。應援席の前に、遍ねく木柵を結んで、太鼓と、石油罐との外は、一切柵外に拉出するを得ざらしめたのは、好工夫であつた。敵軍の注文に應じて十分の應援席を供給し、本壘より三壘に至るの間を擧げて、三高に明け渡したのは、一高の雅量を見るべきであつた。三高が、一高の投手の投球に際し、ワツショを連發し、石油罐を鳴らして、攪亂を試みたにも係らず、一高は、敵投手の投球その他敵手の動作に對し、鳴を鎭めつゝ、ワツシヨを發せず、太鼓を打たず、唯だ味方の成功を賞揚するのみを事として、終始、一貫して、その態度を維持したのは、武士的態度と言つて可い。

吾輩如き第三者たる冷觀より見れば、對抗戰は撰手の舞臺である。應援隊の本舞臺では無い。應援としては、撰手の舞臺に踏込まぬやうにせねばならぬことは言ふまでも無い。若し、投手が敵の打者及び應援隊までも敵として戰はねばならぬことに

8

一高と三高と孰れか强きやの問題は、今春、運動界に於ける絕好の話題であつた。此の二者は、互に、正面の好敵手である。およそ何種の競技にも、必らず快心の好敵手はある。譬へば碁敵の如く、特定の二者が相逢ふときに、尤も油が乘り、勝敗の興味が極めて充實する。一高と三高とは則ち其である。

去年、全勝を以て覇權を得た一高軍は、評判の投手内村の外、全軍、悉く精鋭を以て目すべく、捕手の中松、遊擊の岡崎の如き、いづれも斯界に於ける名選手といはれて居る。一高軍が、これほどの實力を蓄へ得たは、恐らくは創始以來、稀有の事で

あらう。されば去年の月桂冠は、啻に、一高が防禦強いばかりでは無く、偶に、實力を以て得た報酬であつた。然るに、今年は、その精鋭の大部分を失つて、去年來の勇將は、内村の外には、一壘の島村、中堅の萑原とだけであつたらう。此の形勢に對して、尤も深き杞憂を抱いた者は、世間よりも、第一に一高自身であつた。一高が果して能く覇權を維持するを得るや否やは、今日に於ても尙ほ好話題である。久しぶりに一高を訪れた黃金時代は、去年の一年にして、去るべきや否やは、一高の努力如何と、對敵の勢力如何とに由つて定まるべきもので、五月に早慶との試合を終るまでは、尙ほ未決の問題である。

これに反して三高軍の陣容は、殆んど去年に渝ること無く、新投手の朴も、去年、補缺の投手であつた。されば兩軍の對抗は、新入兵と老練兵との對抗で、初から一高の勝利は危ぶまれて居る。試合の前月に於ける一高の練習を見た者は、概ね勝算を確信するを得た者は少かつた。三月九日、兵庫縣の鳴尾に於て行はれた三高と、オール關西軍との試合に於て、一高軍の首將は、見物の中に居たといふことであるから、如何なる報告を齎らしたかは知らぬが、三高が勝つたのを見ると、固より侮る可らざる勁敵である。しかし此日、敵投手石川に十四の三振を得られたのを見れば、攻擊力は左まで恐る可きものとも速斷す可らざるようであつた。吾輩も亦、此日、鳴尾を經過した[illegible]他に用事があつて、試合を見なかつた。

9

三高軍が入京の後の練習を見ると、世評は、すべて三高の優勢說に傾いた。選手を箇人別に批評した者は、右側は、兩軍共そ匹敵と見ても、左側が著るしく見劣りがするといふ事に一致した。三高の捕手岡本は明らかに一高の捕手木内に勝り、唯一の投手内村が嶄然、頭角を拔いて、一の内村を以て他の八人に匹敵するといふ說さへ行はれ、一高の金城鐵壁は、唯だ内村を賴む外無しといふ評判が高かつた。然るに、一高の堅確なる練習は、試合に切迫するに隨つて、日一日に、その鋭を加へ來り、捕手も漸く頑丈を増し、最弱の打者といはれた戶田までも頻々として、ヒツトを飛ばすに至るから、結局、此の對抗戰は、鼎の輕重、容易に計りがたく、天秤は一髮の差を以て傾むくべく、尤も際どき切迫戰を現出するならんといふ世評は、此の興味ある東西對抗戰の人氣に、いよ〱油を濺いだのであつた。

對抗戰の實際には、弱かるべしと豫想された一高の左側は、三壘も、左翼も、遊擊も案外に善く戰ひ、却つて三高の左側に破綻はあつた。全體の實力としても、兩軍は伯仲といふよりも、より以上の差があるやうに見えた。練習を以て、試合を豫測す

ろは、容易ならざる事である。しかし、その豫測し易からざるところに、勝負の興味はある。そも／＼勝負の實力を考へるといふ事が、價値あり、興味ある問題である。

10

一萬應援軍の檄文の劈頭に、「大正八年四月五日、如何なる吉日ぞや」と書き出した榮ある其の日は來つた。當日は、實に、凄まじく緊張したりし光景かな。

當日、觀衆が、朝來、向陵に詰めかけた盛況は、新聞記事に、既に盡して居る。此日は、午前、微雨、正午頃から雨脚が稍繁くなつて來たから、吾輩如きは、決戰の延期を想像して躊躇したが、しかし萬一を慮り、おそまきながら出掛けて見ると、校門は閉鎖され、門前は、人の黒山を爲し、門柱の上に、學生の委員が跨つて、入場を謝絶して居る。微雨を冒しての開戰と見ゆ。觀衆は開門を絶叫して已まず、暫らくする中、數百人の押寄せる潮勢に、門扉のかんぬきは撓められ門は自ら開いて、觀衆は堤防を潰決した洪水の如くに門内に流入する。吾輩も、押されて雪崩れ込んだ一人であつた。而して幸にして押され／＼て、潜航して、應援隊にまで混入し、此の渇望したる對抗戰を觀ることを得た。

グラウンドを見渡せば、恰も好し、戰は始まつた。戰場は靈くが如く、今、名投手内村がプレートに立つて居る。本壘より二壘に到る赤旗、本壘より一壘に到る白旗、赤白の光彩、陸離としてグラウンドに照映し、兩軍の戰士、悠として驕らず。滿場、無慮五六萬の觀衆、堅唾を呑んで見る。何たる痛快の決戰ぞや。

11

東西の對抗戰は、天運に叶つて、微雨、漸く霽れ、薄墨の雲を幕となして天を蔽ひ、雨ならず、春日、輝かず、理想的の球日和かな。赤の大旗、小旗、數百の石油罐の參差として列びたる物々しさよ、白の大旗、小旗、敷布などの旗、根津權現、或は南無八幡大菩薩と墨、黒々と大書したる幟、大小六七十の太鼓、仰々しさよ、此の對抗戰に非ざれば見るを得ざる天下一品の應援の陣容。場を環つて爛熳として咲き薫く萬朶の櫻花、觀衆は、國技館の大入の二日分以上を、優に收容したるべく、人の垣、花の垣、流石の應援の團體も、此の大數に比すれば、物の數らしくも見えず、此の際、乾坤に磅礴する緊張の空氣、此の空氣の中に活ける人の輝く顔、此の間に立ちて輸贏を決する東西撰手は、晴の勝負かな。男兒の本懐なるかな、而して勝負そのものよりも、此の緊張せる空氣が、吾輩に於て、尤も愉快とするところである。

此の如き大勝負に於ては、緊張の氣分は、樂隊を超越して居る。石油罐よりも太鼓が適さわしい。鼕々として鳴り響く太鼓の音は、人の腸に浸み渡つて、言ひ知られぬ快感を覺ゆる。太鼓の美感は、端無くも、此の對抗戰に於て實驗せられた。明年からは、いよ〳〵太鼓か、應援旗の前を占領することになるであらう。而して太鼓に、校鼓を作るといふ説が起るかも知れぬ。三高軍も、今年より以上の、多くの太鼓を鳴らし來るであらう。太鼓を見るだけでも、觀戰の興味はあると言つた人がある。

此次の對抗戰に、白旗の關東軍を飾るべき光榮ある大太鼓を、吾輩は推薦したい。それは水戸の常磐神社に安置せる烈公の、驚天動地の大太鼓である。高さ五尺以上はあるであらう。驚天動地、呼雲起風、三軍踊躍、進思盡忠と大筆淋漓、如何に壯快なる大太鼓ならずや、馬の皮で、その馬、その胴木の出處も傳へられてある。此の大太鼓を一鼓すれば、眞に、驚天動地の概があるといふ。これぞ烈公が、士氣を鼓舞すべく、特製せられた名譽の大太鼓である。一高は烈公に特別の因縁を有する。一高の校庭は則ち烈公の別墅であつた。朱舜水の記念碑も、一高の校庭に建てられてある。然れども、此の大太鼓を持出すことは、此の如き、烈公と一高との宿縁に由つて、公の神靈も、これに由つて青年の元氣を鼓舞するを否み、玉はざるであらうとは思ふけれども、手續の上に於て、成否、豫めトし難い。一高の應援旗は、宜しく、驚天動地の大太鼓を新造しても然るべきだと思ふ。

尙ほ吾輩は附記す、驚天動地の大太鼓を水戸から拜借するに就いては、須らく敬虔の態度を以て懇請すべきであるが、今、水戸學者の木鐸たる菊池謙次郎氏は、一高の自治寮の創立の首倡者である。

12

對抗戰の戰績に就いて一言しよう。

此日、一高は初から三高を壓迫し、三高は終始、受身に立ち、伸びることが出來なかつた。三高軍には、その技術の輕妙なるを認むるを得たが、徹頭徹尾、敵から壓迫せられて、勝身は見えなかつた。四回のインニングまでは一人の走者を出さず、その後も時々、僅に走者を出すばかりであるのに、一高は初一回から走者、三壘に據るといふ有様、劈頭から毎回、危機が三高に迫り、遂に第三回に一高先づ本壘を突破して一點を得た。試合前の世評に反して、三高は守備に於ても、決して一高に優さるを得なかつたのは、事實である。見たところで、軍裝も、捕球も、すべて三高は輕快に、一高はすねを露出し、捕手は胸當をあてず、鬪氣稜々として、專ら意氣を以て戰ふように思はれ

るから、一高は實力以上、勝負强いといふ感想が、直ちに、觀衆の一部の人の頭中には閃めいたようで、さういふ批評も聞えたが、此日は、實力に於ても、三高は優さらなかつたのは、一般の認むるところであらう。

此の如く、每回、壓迫されて居ては、三高軍は守備の爲に、神氣、疲れて、攻擊に立つと雖、腕が伸びない、振ふことが出來ないのは實勢である。これに反して一高は、つねに壓迫しつつ、每回、守備は、極、簡單に終るから、身心とに餘裕がある。回數を重ぬるに隨つて、如上の實勢が、漸次、積もつて來たのである。

此の決戰に、三高軍は、作戰を誤まつたと思ふ。個人としての伎倆は、一高軍に比して遜色無く、まさしく伯仲であるだらうが、全躰のチームとしての力は、一高が優勢であつた。しかし戰績の大躰から言へば、三高が熱心なる練習の効は確に見え、對抗戰の開始以來、玆に十二年の間、此度ほど、三高が能く粘ばつて戰ひしことは無く、最終の第九回に至つて、一擧して二點を擧げたのは稱賛に値する。此日の戰に於て、三高の爲に、尤も惜しかつたのは、第五回のインニングに、三高軍、最初の走者たる捕手岡本が慓悍に盜壘して第三壘に據り、虎視眈眈として本壘を窺ひ、次の走者は第一壘に據り、未だ無死者である。好機まさに三高の頭上に來らんとしたが何事ぞ岡本は三壘に凡死し、第一壘の走者は投手内村の爲に釣出されて、逆モーションを喰ひ、折角の二走者は、空しく絶大の希望を抱いて、一掃されて仕舞つた。これが、第九回に至るまでの間、三高に唯一の好機會であつた。若し此時、幸にして一點たりとも博取するを得て居たら、戰氣も振ひ、局面一新せられて、非常の接迫戰を見るを得たであらう。返すがへすも惜しい事であつた。

13

「一高の實力」及び、兩軍の練習に就いて、研究しよう。

由來、一高は勝負强いといはれ、實力以上といはれて居る。勝負强いといふことは、事實であると吾輩は思ふ。此度の對抗戰にも例に由つて、三高は實力以下、一高は實力以上を發揮したといふ意味の世評を受けたようである。實力以上といふ語は、一躰、漫然たる語であるが、試みに、その意味を推測すると、平生の伎倆より以上に出來るといふ事であらう。一高、平生の練習に就ては、後に言ふべく、先づ第一に、言ふべき事は、今回の練習に於ても、試合前、一箇月は別人の如く、一週間前を見ても、確に面目を改めて居る。殆んど試合まで日々に進んで行くといふのが、一高の猛烈なる練習の特色であるから、試合前、一週間乃至十日前の練習振を見た者が、試合に對して、一

爲は實力以上といふ評を下すといふ事もあるだらうと思ふ。事實に於ては、試合に近邇した時には、試合に現はした丈けの實力は、既に一高に備はつて居るのであると、見るべきであらう。

實力といふ語は、漫然として言はれるが、その內容を考定することは容易では無い。隨つて實力以上に發揮するといふ語も疑はしいものでは無からうか。譬へば此に百圓札を有して、これを遣ふに、賢明なると、賢明ならざるとの遣ひ方はある。活金を遣ふと、死金を遣ふとの區別はある。然れども何處までも百圓札は百圓札で、それが百一圓に通用せしむることは不可能である。一高の伎倆といふものも、對抗戰に際して、平生、有する實力以上を出すといふことは、出來まい。唯だ、その實力を、一大事の場合に處して、運用するの意氣、及び作戰といふ事に於て、從來、屢、長所を示して來たが爲に、實力以上といはれるのであると思ふ。

三

對抗戰の當日、吾輩の所見を以てすれば、三高軍は確かに、氣合に於て一高軍に劣つて居たと思ふ。三高軍は、連日の、過度の練習の爲に、試合當日に至つて、疲勞に襲はれて居たらしかつた。試合には、三高軍はアガッタといふ世評を受けた。左側の外野及び壘手の不出來、殊に捕手の興奮は著るしく人目を惹いた。アガッタといはれても無理では無かつた。アガルといふ事に、二種あらう、上にも、下にもアガルといふことはあらう。元氣に逸やつてアガル事、おくしてアガル事との二つである。上にアガッテも、下にアガッテモ、畢竟、冷靜を失ひ、中心の動搖したのである。中心の動搖は、疲勞から來る。若し身心、毫も疲勞の氣を帶ぶること無く、神氣が清新、活潑であれば、以て、最善の努力を致すことを得る。中心が動搖する恐は無い。練習の爲に疲勞したとすれば、練習に於ては、三高軍は一高軍よりも拙づかつたといふ可きである。

練習の究極の目的は、試合當日に於て最大勢力を發揮する爲である。練習振の立派さと否とは問題では無い。試合の當日に於て、その伎倆を絕頂に達せしむるのが要領である。此に於て、練習の上に、難問題が生ずる。猛烈に行らなければ、實力は養はれず、餘り猛烈に行れば、怪我をする恐もあれば、また疲勞を催うすといふ事が最も恐るべきである。三高軍には、流石に、練習した丈けの効果は見えたが、同時に、その弊害を受けて、疲勞の色が、眉宇の間に隱くされずして、試合前ほどの鮮やかさが現はれなかつた。これに反して一高は、日、一日に油が乘つて來て、試合の當日が、尤も鮮やかな伎倆を見せ、油が尤も乘つて、譬へば日が天に冲する如くであつた。練習より見たる

東西兩軍の勝敗の分岐點は茲に存する。

次に、チーム全體としての氣合如何と見れば、三高は一高に及ばなかつた。個人別に、技術を比較して見れば、譬へば、各艦隻の噸數の對照に於ては、三高は決して一高に讓らなかつたであらうが、全軍として、氣合、戰鬪力に於ては、一高が優勢であつた。野球戰は團體戰であり、團體の勢力は、箇人勢力の物理的結合に非ずして化學的結合である。酸素と水素と化合して水となる如く、元素の化學的結合は、元素を別々に見たのでは、意外の結果を生ずる。野球軍の陣容は、その箇人、元素だけを對照したのでは、その結合して働く力を、豫想することは困難である。一高は、チームとして強かつたので、箇人として強かつたのでは無い。試合前の練習には、專ら箇人の力だけが目立つて見えるから、箇人として强くない一高が、試合に強いとき、實力以上の評を受けるやうであるけれども、若しチームとしての力を、平生より豫見し得可くんば、一高は初から優勢だといはれたであらうと、吾輩は想像する。

15

若し稍、誇張的に言へば、一高の練習は、木劍試合の意氣を有して居た。その技術の精疎以外に、頗る緊張した、頑疊なる氣分が見える。一高の練習は試合本位であると、吾輩は思ふ。

故に、[illegible]試合に[illegible]試中に[illegible]かない。吾輩は野球には素人であるから、誠に、武藝の心持を以て評論すると、平素、道場で、竹刀を廻はして、器用な藝を見せる者があるが、それ等は、試合には何の役にも立たない。況して眞劍勝負に、そのような輕妙な事が出來ようか。されば練習に鮮やかな、輕妙な、ファインプレイと見えるものが、試合に、屢、そのファインプレイたる所以を失ふことが多い。木劍氣合の一高の稽古は、試合的である。平素の能率が試合の實際に臨んで殆んど割引されないのが一高の強味である。割引された輕妙と、割引されざる頑丈とは、試合の際の實力として、ここ頑丈が優勢であつたのである。

吾輩は想ふに、惜哉、三高は作戰を誤つた。意氣が一高を呑んで居なかつた。內村の投球に對して、當てる主義を執つたのは大失策であつたと思ふ。去年の慘敗に鑑み、內村の投球が打ち惡いといふ事を考へ過ぎた餘り、當てる主義の作戰に出たであらうが、當てる主義では勝てる筈が無い。やはり打つて打ち捲くる方針に出でねばならなかつた。勝つ爲には、打捲くる外は無い。三高の當てる主義は、逸早く內村に看破されて、重ねて赤旗の不振に終つた。然し、當てる主義を作戰したのは、三高の弱かつたところである。明年、關西軍が捲土重來する時、

必らず打撈くる作戰で來なければならぬ。打撈くるといふのも意氣の表現である。成敗利鈍は必ずしも問ふことを勿れ。

16

最後に、吾輩は、東西の投手に對する素人評を試み度い。

東西の投手が、互に左利の對抗であつたのも、興味を添へた。左利の投手が對抗したのは、恐らく野球界に初めてゞあろう。殊に、西軍の投手朴が朝鮮人である事もおもしろい。朝鮮人の投手が此の晴の舞臺に立つたのも、未曾有の事である。吾輩は朴を豫期以上に巧かつたと思つたが、豫期ほどになかつたと言ふ人もある。豫期以上か以下かは、標準の如何に由つて定まる問題であるが、兎に角、此の對抗戰に於ける朴の奮闘を認めねばならぬ。あれ位のスコーアで喰止めたのは、朴の功、與つて力多しと思ふ。

朴が内村に及ばざるのは、投球は暫らく措き、その腰である。内村は投球して腰が崩れず、守備の點に於て非常の差がある。此處が三高軍の難關で、一高軍の鐵壁であつた。見よ、内村が投球して、バッターが打たなかつた刹那、彼は兩手を股間に垂れ、腰を落して、一二歩、寄り進む姿勢は、全く、栃木山が油が乘つて押すときの腰付に酷似して居る。彼が腰の好いことは、唯だ此の一事でも窺ひ知られる。走者に對する牽制に至つては、内村は全く精妙の域に入つて居る。一壘の走者は、彼の爲に殆んど釘付にされる。牽制は、由來、戰爭の要諦である。三高の外野をして十分の活動を逞しくするを得ざらしめたのも、一高の作戰、圖に中つて、牽制の效を奏したからである。それから内村が、双手を擧げて、全軍を警戒し、つねに全軍の緊張を確保したのは、彼の巧いところであつた。名投手としての内村の價値は、その投球、その腰よりも以上に、その頭に存すると思ふ。

一高と三高との對抗戰を観た者は、容易に投手内村の威力を嘆美する。内村は一高の精華である。彼の威力を嘆美する者は、彼の背景に、チームとしての調和と緊張と、全校學生及び先輩が必死の應援との意氣があることを忘れてはならぬ。先輩の一語は、一高軍の强味の一である。これほど先輩者が、對抗軍の爲に熱誠に努力する學校は、他には無いかも知れぬ、天下無類であらう。吾輩は、一高先輩の泰斗、中野老鐵山を尊稱して、「向陵の大御所」と言ひ度い。然し、此の大御所は民本主義である。（大正八年四月十七日）

支那劇の發展

鹽谷溫

支那の近代劇は唐の歌舞戲に濫觴せり。今もなほ優伶の輩が唐の玄宗皇帝を祭れるを見ても知るべし。玄宗は多才多藝の君主にして殊に音樂に精通し、內敎坊を蓬萊宮の側に置きて散樂倡優の伎を奬勵し、坐部伎の子弟三百人を擇んで梨園に於て天子自ら音樂を敎授せり。所謂宮廷音樂學校の如きものにして、その生徒を皇帝梨園の弟子と稱し、宮女數百人も亦梨園の弟子となり、宜春北院の梨園に居住せり。按ずるに宜春院は卽ち內敎坊を置きし處なるべし。又內敎坊の外に外敎坊あり、之を左右敎坊といへり。而して右には善く歌ふもの多く、左には舞に工なるもの多かりしといふ。

當時名伶に李龜年・李謩・雷海青・黃旛綽・賀懷智・馬仙期・張野狐の徒あり、音曲に明かに歌舞に巧なりき。舞の種類には自ら軟舞健舞等あり。楊貴妃の如きは最も歌舞に長じ、有名なる霓裳羽衣の曲も亦舞曲なり。而して歌舞音曲の外に戲劇あり。大面(代面)・撥頭(鉢頭)・踏謠娘・蘇中郎・窟礧子・魁礧子・參軍戲等の名諸書に見えたり。右の中大面・撥頭・踏謠娘・蘇中郎は舞樂にして、窟礧子は傀儡の戲、參軍は狂言の類なり。されば唐代に於ける歌舞戲には、故事を仕組みて歌舞を主としたるものと、專ら滑稽調笑を主としたるものと二樣ありしを知るべし。而して唐樂は夙に我國に渡來し、今日なほ雅樂としてその命脈を宮中に保てり。中に陵王・拔頭・胡飲酒等あり、陵王は蘭陵王の略稱にて卽ち大面のこと、拔頭は撥頭・鉢頭の音譯なり。共に面を有するを以て大體を想像し得べし。又胡飲酒は蘇中郎のことに非ずやとの說もあり。

さて參軍戲は一般には後漢の館陶の石耽の故事に本づくといふ。耽罪を犯したるに、和帝はその才を惜んで之を免し、宴樂ある每に白夾衫(罪人の衣)を着けしめ、俳伶に命じて戲弄して之を辱しめ、一年の後に放免し、後參軍に任じたりと。或は漢の世に參軍の官名なければ之を以て後趙の石勒の參軍周延の誤ならんといふ。周延も同じく館陶の令となり、官絹數萬匹を贓

んで獄に下されたるを宥し、大會毎に俳優をして之を戲弄せしめたりと。開元中には黄旛綽・張野狐の輩巧に參軍を弄したるのみならず、朝紳の中にも亦李仙鶴の如きは此戲を善くし、玄宗は特に仙鶴に詔州同正參軍を授けてその祿を食ましめたり。參軍戲は之より大に流行して一般に假官戲となり、石耽若しくは周延の故事を離れ、綠衣秉笏の官人が鶉衣髮髻の蒼頭(蒼鶻)を對手にして演ずる滑稽戲を指していふこととなれり。李義山の驕兒の詩に忽復學二參軍一、按レ聲喚二蒼鶻一といふもの是なり。恰かも狂言に於ける馬鹿大名と太郎冠者の如し。卽ちこれが實に宋の雜劇の源流たり。

雜劇の稱は宋代に始まり、宋史樂志に出づ。宋の宮廷に於ける春秋戲時の饗宴の折に、雜劇は小兒隊・女童隊の舞と共に餘興の一として催されたり。宋祁の春宴樂語勾雜劇の語中に宜下參二優孟之滑稽一、式助中都場之曼衍上とあれば、やはり唐の參軍戲の如く、當意卽妙の滑稽曼衍を主として調笑の中に諷諍の意を寓したるものなりと知るべし。例へば宋初に當り西崑體の詩流行し朝紳皆李義山を宗とし、中にも甚しきに至つては義山の語句を剽竊するもの多かりき。因て或日宮中内宴の折に、一優人裂けたる衣服を纏ひて、吾は李義山なるが、諸朝紳の爲に撏撦せられて此に至るといひしかば聞くもの歡笑せりといふ。宋の太宗は音律に通曉して親ら曲を製し、仁宗の時は天下太平なりしかば、太平を粉飾すべき遊戲文學の勃興を見るに至れり。卽ち一般には諢詞小說は宋の仁宗の時に起るといひ、又陶眞もその頃に創まるといふ。徽宗は驕奢淫逸にして亡國の君主なるが音樂に精通し、藝術に趣味を有し、之を獎勵保護したることは敢て唐の玄宗に讓らず。周邦彥を大晟樂府の長官として盛に新聲を起し、又爨國人の來朝によつて五花爨弄の雜劇を作れり。而して後世有名なる西廂記の粉本となりし趙德麟の元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞の鼓子詞も亦實に此時に成れり。

南渡の後は雜劇益隆盛となり、朱子が當時詩風の流弊を誹つて村裏の雜劇の如しと評したるを見ても、當時雜劇が獨り都城のみならず、地方にも博く流行せしを知るべし。而して溫州地方(今浙江省)が最も盛なりき。

南戲出於宣和之後、南渡之際謂之溫州雜劇、(祝允明猥談)、抑南宋の雜劇は北宋のそれの如く單に滑稽調笑のみを主とするに非ず、一の故事を搬演し、唱曲もあり、科白もあり、從來行はれたる大曲、隊舞、彈詞、小說等を集成せるものにして、直接元の雜劇の先驅たり。南宋の舊事を錄したる周密の武林舊事によつて、その概略を知るを得べし。中に官本雜劇段數二百八十

本の目錄を擧げ、又雜劇色の宗從數十人の名を列記せり。當時雜劇に四甲あり、一甲は五人若くは八人より成り、その脚色に

戲頭　引戲　次淨　副末　裝旦

あり、之を夢梁錄及び輟耕錄に參照すれば全く同じ。但し輟耕錄には戲頭を末泥となし、裝旦なく裝孤（輟耕錄に孤裝とあるは誤なるべし）あり。而して夢粱錄には末泥色は主張し、引戲色は分付し、副淨色は發喬し、副末色は打諢すといひ、輟耕錄に據れば副淨は古の參軍、副末は古の蒼鶻なり。即ち副淨の發喬と副末の打諢とは共に滑稽調笑の意にして、之が實に院本雜劇の骨子たりしなり。以て唐の參軍戲より出でたるを徵すべし。

靖康の變、北宋の首都汴京の陷るや、金人は宋の伶官樂器を收めて北に還れり。同時に南宋の高宗は臨安（今浙江省杭州）に都して東南半壁の地を保ち宋の舊人多く往いて之に依り、禮樂制度稍舊觀を復するを得たり。想ふに汴京の陷落は支那聲曲史上に一時期を劃するものにして、實に後世の南北曲の分岐點なりといふべし。即ち宋樂の流れて金に入りしものは、やがて元代に勃興したる北曲の先驅をなし、その南して江南に傳はりしものは、元末に再び興り、明代にかけて盛に行はれたる南曲の源流たらずんばあらず。

斯く金の文化には直接宋代の遺より繼承せしものと、後に南宋より輸入したるものと二源流あり。熙宗に及んで教坊を設け樂工二百五十餘人を置き、尋で世宗・章宗の時は宋と和し、南北を通じて小康を得し故に文化の發達も著しく、雜劇も大に勃興せり。論者云ふ、輟耕錄に載せたる院本名目六百九十種は金のものなりと。之を武林舊事の官本雜劇段數に比較すれば相似て更に複雜なり。中には同名のものあり。實際宋と金とは南北に對立せりと雖も、常に戰を交へたるに非ず。可なり永く平和が續き、且つ文藝の如きは聲息相通じ、南に面白きもの出づれば北に取り、北に新しきものが起れば南に傳はり、兩者の間には互に密接なる關係を有せしなり。

雜劇の外に諸宮調・搊彈詞・連廂詞あり。諸宮調は多くの宮調の歌曲を連ねたるものなり。搊彈詞とは絃索にあはせて搊彈せるもの、なほ我が琵琶歌若くは淨瑠璃の如くなるべし。元曲西廂記の粉本たる董解元の西廂記は之に屬し、之を絃索西廂と又は西廂搊彈詞といふ。或は以て諸宮調なりとなす。連廂詞は司唱一人琵琶一人笙一人笛一人あり。司唱が素樂に和して曲を唱ふれば伶人が勾欄に上り、唱詞につれて搬演するなり。之を唱連廂、打連廂といふ。但し唱者は舞はず、舞者は唱へずといへば、なほ我が能の仕舞、若くは芝居の首振の如くなりしか。

鬼に傀儡戲に一歩を進め、しかも元曲と相距る一歩といふべし。

百川の流れて海に入る如く、元に至つて諸業が大成して元曲即ち雜劇となり、支那文學史上に爛漫たる光彩を放ち、漢文・唐詩・宋詞と並んで實に空前絕後と稱す。即ち元の雜劇に至つては、曲あり、白あり、科あつて體製全く備はり、登場の優人自ら曲を唱へ白を說き、之に從つて所作を演ず。然れども曲を唱ふるもの一人に限られたるは連廂詞の司唱一人に屬する例に依れるなり。而して元の大都即ち今の北京を中心として起りしかば之を北曲といふ。北曲の作者及びその目錄は元の鍾嗣成の錄鬼簿及び明の涵虛子の太和正音譜に詳なり。錄鬼簿に據れば作者を凡そ三期に分てり。第一期は蒙古時代にして太宗窩濶臺が中原を經略してより世祖忽必烈の南北統一に至るまで、約五十年間。第二期は一統時代にして世祖の至元より順帝の後至元に至るまで約六十年間。第三期は元末時代にして僅に三十年に過ぎず。作者を時代別並に地方別にすれば大部分は第一期に屬ししかも皆北方漢人にして大都がその中心たり。第二期以後は南方漢人か、又は北方人にして南方に僑寓したるもの多く、杭州(浙江)がその中心たり。蓋し杭州は久しく南宋の都となり、文學の淵叢たりしを以ての故なり。第三期に至つては殆ど言ふに足らず。就中關・馬・王・白(第一期)鄭・喬(第二期)を推して六大家となす。關漢卿の雜劇六十三種を筆頭として、鄭德輝は十九種、白仁甫は十七種、馬致遠と王實甫とは同じく十四種、喬夢符は十一種なり。例へば馬の漢宮秋。白の梧桐雨。鄭の倩女離魂。喬の金錢記。關の竇娥寃。王の西廂記を推して壓卷となす。西廂記は北曲として幾多の例外はあれども、南曲の傑作琵琶記と共に曲中の雙璧と稱せられ、今日に在つても才子必讀の書たり。

元代は詩文章の著しく衰頽したる時代なりしに係らず雜劇は空前絕後の盛觀を呈しければ、元は雜劇を以て士を取るといふ說あり。然れども此事は元史の選擧志に見えず、却て元初には久しく科擧を廢したるに徵すれば信ずるに足らず。否むしろ科擧の廢せられて出世の途なかりしことが、不平の文士を驅りて才筆を雜劇に揮はしめしに非るか。由來支那歷代の帝王は儒學を以て政教の本源として尊崇せしが、人種を異にしたる元朝はさばかり儒學に重きを置かず、從つて儒學の權威も輕くなり、思想の繫縛も弛みたるに乘じ、漢人は異人種の治下に在るを屑とせず、詞酒を以て自ら慰め、殊に宋金より傳へたる新奇の雜劇を喜び、古人の嬉笑怒罵を借りて、我が不平牢騷の思を發し

たるに、偶〻一二三の天才がその間に出で、巧詞妙曲を以て人の耳目を聳動せしめしかば、天下は靡然として之に赴くに至れり。しかも百戰百勝の餘威に乘じたる蒙古人は、中原の樂土に安居するに及んで、漸く足を娛樂方面に向け、小說や雜劇を歡迎せしのみならず、實際又之を以て支那の歷史風俗人情を知る捷徑を爲せしかば、雷同的なる輕薄者流は爭ひ起つて之に附和し、玆に雜劇の黃金時代を現出するに至りしなり。

太和正音譜には元人雜劇五百數十本の目錄を擧げたれども、當時に在つてはなほ多數ありしことは想像し難からず。從つて雜劇の分科も頗る多く、同書には十二科に分てり。

雜劇十二科

一日神仙道化
二日隱居樂道又日林泉丘壑
三日披袍秉笏即君臣雜劇
四日忠臣烈士
五日孝義廉節
六日斥奸罵讒
七日逐臣孤子
八日錣刀趕棒即脫膊雜劇
九日風花雪月
十日悲歡離合
十一日煙花粉黛即花旦雜劇
十二日神頭鬼面即神佛雜劇

又洪武(明の太祖)の初年には親王の藩國に赴く時に、詞曲一千七百本を賜ひしといへば、その盡くが雜劇に非ずとするも、明初に在つて元曲の多くありしことは推して知るべし。而して元曲の今日に傳はるものは僅に元曲選の百種あるのみ。明の萬曆中臧晉叔の編纂する所に係る。是が實に北曲の全集なり。但し西廂記は此中に收められず、琵琶記と共に明曲六十種の中に收めらる。近時元槧古今雜劇三十種が京都文科大學より覆刊せられたり。元來粗本にして讀み難しと雖も、元曲選になきもの十七種なり。何ぞ學界の珍寶とせざるを得んや。

北曲には嚴格なる規則あり。試にその體製の一斑を擧ぐれば、

(一)一本は四折より成ること

折とは英語のアクトに當り、芝居の一幕のことなり。勿論一折の內に場面の換はることはあれども、兎に角四折にまとめざるべからず。五折、六折、と用ふる如きことなし。(但し趙氏孤兒は元曲選中唯一の例外として五折なれども、古今雜劇

本によればやはり四折なり)。或に二本三本を連用することとあり。例へば西廂記は五本雜劇にして二十折より成る如し。

(二)一折は一調、一韻を用ふること

一調とは同一宮調を用ふることとなり。宮調とは古樂の律呂といふ如く、旋律の調子なり。三味線の本調子とか、二アガり三サガりといふ如し。而して北曲の宮調は十二調あれども套數の關係上雜劇に用ひらるゝものは五宮四調に過ぎず。之を九宮といふ。

黃鍾宮　仙呂宮　正宮　中呂宮　南呂宮　雙調　大石調
越調　商調

套數とは同調中の數曲を連ねて段物となしたる、首尾ある樂律の演奏なり。大抵十曲以上より成り、自らその排列の順序定れり。而して第一折は必ず仙呂宮點絳脣の套數を用ふる例なり。

又一折の中は一韻到底なり、その韻は詩韻(百六韻)と異り、元の周德淸の中原音韻に載せたる十九部韻を用ふ。

(三)楔子を用ふること

一本四折にて不足する場合は楔子(セツ)を用ふ。楔子は折首に在ることもあり、また折間に在ることもあり、或は一本中折首と折間とに二つ用ふるもあり。その折首に在るものは序幕の如く、折間に在るものは間幕(アヒノマク)の如し。而して楔子は套數を用ひず、一二の零曲(コウタ)に過ぎず。大抵仙呂賞花時、又は仙呂端正好に限らる。

(四)一人獨唱

北曲の唱者は一人に限らる。卽ち正末に非れば正旦なり。他の雜色(ハヤク)は入場するも白(セリフ)を說(イ)ふのみにして曲を唱(ウタ)ふることとなし。正末は立役、正旦は立女形にして、能樂のシテの如し。一本四折を通じて一人獨唱なるは全く連廂詞の司唱一人より來れるを知るべし。唱曲としては妙ならんも、演劇としては單調に陷るを免れず。後來南曲に至れば登場の優人皆曲を唱ふることゝなり、互歌迭詠によつて問答をなし、和歌同吟して共に思を敍ぶる等のことあり、複雜變化を極む。愛曲家は之を墮落といへど、劇としては寧ろ進步發展なるべし。

(五)題目正名

北曲の末尾に必ず題目正名あり。何れも二句或は四句より成り、大抵は七八言の聯句を用ふ。而して多くは正名の一句を取つて何何雜劇といひ、更にその三四字を剟取して題名となす。例へば漢宮秋は

題目　沈黑江明妃靑塚恨
正名　破幽夢孤雁漢宮秋

とあるによつて、破幽夢孤雁漢宮秋雜劇、略して漢宮秋といふ。又梧桐雨の如きは四句より成る。

題目　安祿山反叛干戈擧　陳元禮拆散鸞鳳侶
正名　楊貴妃曉日荔枝香　唐明皇秋夜梧桐雨

因て唐明皇秋夜梧桐雨雜劇、略して梧桐雨といふなり。

誠に元曲選の首に在る漢宮秋の一斑を叙して北曲の體製を略說すべし。

破幽夢孤雁漢宮秋雜劇

楔子　正末唱　仙呂賞花時帶曲　家麻韻
第一折　正末唱　仙呂點絳唇套數　家麻韻
第二折　正末唱　南呂一枝花套數　尤侯韻
第三折　正末唱　雙調新水令套數　江陽韻
第四折　正末唱　中呂粉蝶兒套數　庚青韻

題目　沈黑江明妃靑塚恨
正名　破幽夢孤雁漢宮秋

登場人物の脚色(ヤクワリ)

正末　漢元帝　沖末　呼韓邪單于
正旦　王昭君　外　五鹿充宗
淨　毛延壽　丑　石顯
雜色　文武内官　宮女　番使　番兵　部落

本劇は王昭君の胡國に入る故事を叙したるものなるが、唱者を王昭君となさずして、漢元帝となせり。脚色中沖末は掛役外には老人役、淨は敵役、丑は道化といふ如し。茲に雜色と名づけたるは一人前の役者に非ず從者の格なり。

さてその梗概を述ぶれば、

楔子に於て先づ匈奴の呼韓邪單于が上りて前代より漢と和親の次第を叙し、已れも亦漢の公主の降嫁を請はんとする意を述ぶ。是れ昭君胡に赴く遠因なり。やがて場面一轉して漢の宮庭となり、元帝は後宮の寂寞を愁へ、佞臣毛延壽を選擇使として遍く天下の美人を探訪し、その圖を寫して献ぜしむ。是昭君宮に入る次第なり。

第一折はやはり漢宮の場にて、昭君は毛延壽に賄はさりし爲、その呈せし圖形頗る醜くして永巷に幽閉せられ、長久天日を見るの期なきを悲しみ、一夜琵琶を彈じて孤悶を遣る折しもあれ元帝はゆくりなくも後宮に步を移しつゝ、その琵琶の音を聞いて昭君の局に幸し、一見して傾國の色に驚き、毛延壽の姦を怒り命じてその首を斬らしめ、昭君を封じて明妃となす。然るに好事魔多くして昨日の喜は變じて今日の悲となりぬ。

第二折の劈頭、呼韓邪單于は漢より公主の幼なるを以て斷られ、甚不快に堪へさる處へ、毛延壽罪を逃れ來りて、昭君の眞

容を單于に獻ぜしかば、單于大に喜んで直に書を寫して昭君を乞ひ、肯かれされば干戈に訴へんとする勢なり。漢の朝廷爲に震駭し、尚書令五鹿充宗、內常侍石顯等帝を諫め、社稷の爲に恩愛の情を割かしむ。帝は昭君を寵幸して之を離すに忍びず。然るに昭君は慨然として身を以て國難に代らんと請ひしかば帝は已むなく之を許す。是昭君胡に入る近因なり。

第三折は送別の場なり。帝は文部內官を率ゐて灞橋に幸し親しく昭君を送り、慟哭して別を惜しみ、群臣に慰められて纔に宮に還る。此處詞曲極めて妙なり。

【梅花酒】……他他他傷心辭ニ漢主一。我我我携レ手上ニ河梁一。他部從入ニ窮荒一、我鑾輿返ニ咸陽一。返ニ咸陽一、過ニ宮墻一。過ニ宮墻一、遶ニ廻廊一。遶ニ回廊一、近ニ椒房一。近ニ椒房一、月昏黃。月昏黃、夜生レ涼。夜生レ涼、泣ニ寒螿一。泣ニ寒螿一、綠紗窗。綠紗窗不ニ思量一。

【收江南】呀不ニ思量一、除ニ是鐵心腸一。鐵心腸也愁淚滴千行。……

場面一轉、單于部落を引いて昭君を迎へ、北行して黑龍江に至る。こゝはやがて漢を蕃との境なりと聞き、昭君は單于に請うて馬より下り、盃酒を澆いで遙に南方を望み、再拜して漢家の恩を謝し、間を窺て、身を跳せて江中に投ず。(是固より史傳と異る。恐くは作者は薄命の美人をして失節の名あらしむるに忍びず、借りて以て當時元に降りし漢臣を諷刺せしならん。單)于大に驚き救はんとせしが及ばざりき。乃ち厚く昭君の遺骸を江邊に葬れり。凡そ胡地の草は皆白草なるに唯昭君の塚のみは內地と同じく青草を生じたるにより、名けて青塚といふ。故に題目に沈黑江明妃青塚恨といふなり。單于は昭君を憐み後悔すれどもせんかたなし。もとはといへば毛延壽のなせしことなれば、單于は之を縛して漢に送り、舊に依つて和親を請はんとす。

第四折漢宮の場なり。元帝は昭君に別れてより鬱々として樂まず、秋夜の孤燈枕席蕭索を嘆き、乃ち美人の圖を掛け、爐香を燒いて供養する內、困睡して夢に入り、昭君が胡地より私に逃れ回る後より、蕃兵が追ひ來つて再び昭君を挐へ去らんとす。帝はあつと驚いて夢覺め、壁間の丹青に對し、神思恍惚たる時、大空に哀雁の兩三聲を聽き、淒愴悲切、輾轉夜を徹せり。明早蕃使毛延壽を送り來つて昭君の喪を告げしかば、帝は大に悲しみ、毛延壽の首を斬つて昭君の靈を祭り筵席を排して厚く來使を犒はしむ。是を本劇の大尾となす。故に正名を破幽夢孤雁漢宮秋といふなり。

以上にて一本四折及楔子より成る北曲の體製を見るを得べし。その詞曲及び評論に至つては說くに暇なし。之より更に進んで明曲の一班を敍し、然後近代劇に及ぶ筈なれども、記者の

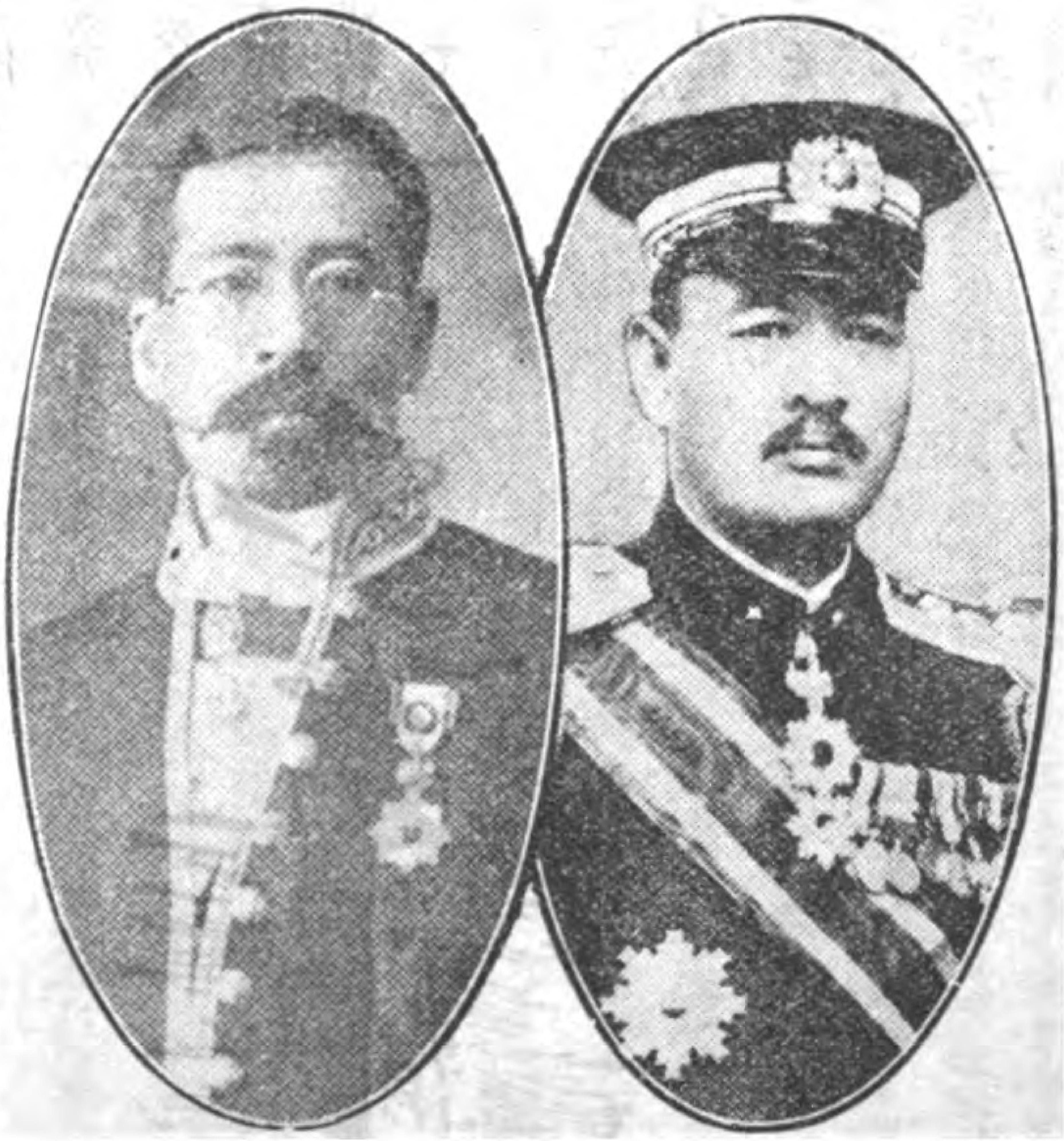
需に應じ倉卒に稿を起したれば此に擱筆するの已むを得ざるを遺憾とす。

　但し明曲即ち南曲に至れば北曲の一本四折、一折一調一韻、一人獨唱等の嚴格なる規則破れて、大に自由となり、齣數も多く(南曲にては折といはずして齣といふ)、大抵は四十齣に上り、從つて結構も雄大となり、演劇としては大なる發展なり。例へば清曲として有名なる桃花扇傳奇の如きは、復社の文士候朝宗と秦淮の名妓李香君との悲歡離合を中心とし、明末の兵馬倥傯、國家興亡を背景として仕組める一大史劇なり。固より一本四折の漢宮秋と同日の論に非ず。又梧桐雨より出でたる清の洪昉思の長生殿傳奇の如きも明皇貴妃に關する逸時逸聞を網羅して一大情史を演成せり。之をしも進歩といはずして何ぞや。然れどもその詞曲の妙に至つては、明清の大家といへども容易に元人と勝を爭ひ難し。是れ元曲の古今に獨歩する所以なり。近代劇に至りては文學として見るに足るものなし。その實際のことは前號に福地學士の詳說あれば寡聞なる余の贅言を要せざるなり。南北曲に關しては拙著近刊「支那文學概論講話」に述べたれば、好曲家の一讀を得ば幸甚なり。



人物評論（一〇四）

岡警視總監
と
川村警保局長



▽警視總監と警保局長

鵜崎鷺城

警視總監と警保局長は其の定められた管掌事務以外に、政略上の機務にも若干關係を有し、職務の性質が政務官のようになつてあるので、時の政府は之れを任用するに當つて滅多なものを取らず、政府と密切の關係あるもの若くは政府の系統に近いものを取り、隨つて内閣交迭毎に其の人を取換へることになつて居る。現警視總監岡喜七郎氏は政友會であ

り、警保局長川村竹治氏は表向き憲政との關係はないけれども、事實上政友系の人である。

嘗て閥族中の二元的勢力が相拮抗して權力を爭ふたとき、警視廳は薩摩の勢力範圍に屬した形があつて、警視廳の前に建てゝある川路利行の銅像は創立の功勞者と云ふ以外に、薩摩其物を象徴した所がある。中にはさうで無いのも有るけれども、歴代の警視總監は十中の七八まで鹿兒島人であつた。然るに近年斯くの如き傳統的因習は破れて、時の政府に近いものは何國の出身でも構はぬことになり、第三桂内閣の川上親晴と山本内閣の安樂兼道が薩系から取つた最後の警視總監である。夫れより大隈内閣の西久保弘道、寺内内閣の岡田文次を經て今の岡に及び、斯くして警視總監を任用する範圍は廣く且つ自由になつた。而して大學派は今まで、纔に西久保一人であつたのを今又岡が加はつたが、是れからは以前と違つて正式の學問をしたものを警視總監にする場合が多くなるだらうと思ふ。從來警視總監と云へば武斷主義の役人の如く思はれ、又た本人も武斷主義が警視總監として執るべき道の如く誤解し、政府も努めてさう云ふ古い頭のものを此地位に置いた。それ故に川上のような氣紛れ者が飛出して民衆の激昂を招いたりしたのである。今までの警視總監は單純な頭でもお茶を濁して行けたかも知れぬが、社會狀態が益々複雜になつて面倒を加へた今日に於ては、最も多く社會に接觸する警視總監たるものに新しい知識と新文明の理解とが無ければ實際の仕事が出來なくなつた。それ故に是れから先きはドシ〳〵若手の物の分つたのを用ゐるが好いと思ふ。

岡は岡山縣の生れで、前年山本唯三郎が岡山の補缺選擧で國民黨を向ふに廻して競爭し、莫大な運動費の使ひ損になつたとき、わざ〳〵出懸けて山本の爲めに應援したのも同郷の緣故からであつた。大學を出たのは明治二十四年で、水野錬太郎、福原鐐二郎等より一年早く、元と衞生局長窪田靜太郎、遞信次官の内田嘉吉等と同時代であるが、十八人中の十一人目だと云ふから、卒業成績は役人仲間の所謂る出世帶に入つて居なんだ。初めから内務省畠に育ち、地方の警部長を長く勤めて居たが、其の後伊藤の統監時代に統監府の役人になつて朝鮮へ行き、副統監の曾禰荒助が統監に直つてから參與官を以て警務部長を兼ね、石塚英藏、荒井賢太郎、木内重四郎等と共に幹部と云ふ位置にあつた。曾禰時代は統監府の紀綱が弛んで役人の間に妙な暗闘が行はれたが、取別けて岡と木内の暗闘が最も劇しく、兩雄並び立たずと云ふ所があつた。兩者の暗闘については當時いろいろに傳へられたが、無論性格の相違や權力爭ひ以外にもいろいろな事情があつて、是非曲直のいづれにあつたかは知り難き

も、歸する所正々堂々の爭ひでは無かつた。朝鮮では岡の遣口が餘り惡辣だと云ふので、却て木內に同情を寄せるものが多く、岡を善く云ふものは少かつたが、元々兩人間の爭であるから、喧嘩兩成敗にするのが當然であるが、結局は岡が參與職を解かれ、木內は依然農商工部次官の位置に留ることゝになつた。是れは岡に同情が無かつたからでもあるが、一は三菱の婿と云ふので木內を罰るを遠慮した點もあつたらしい。兎に角岡は朝鮮を逐はれて元の內務省に引取られたが、邊僻な鳥取へ知事になつて行つた。同じ知事でも鳥取などは第三流知事で、勅任一等の參與官であつた岡としては明に左遷であつた。と云つて斷然罷めて了ふ程の勇氣も無く、行くには行つたけれども、鳥取在任中は不平滿々で殆んど毎日毎夜の如く燒酒を呷つて居つたさうである。無論さう云ふ譯であるから縣治の事などに身を入れる模樣も無く、唯だ仕方が無いから辛抱して時節の來るのを俟つと云ふ所があつた。

其の中に果して彼の期待した時節が向いて來た。それは山本內閣が出來て政友會が之れと投合した時である。由來岡山出身の官吏は古いところでは故花房義質などが先達となつて小松原英太郎と云ひ、有松英義と云ひ、窪田靜太郎と云ひ、坂谷芳郎と云ひ、濃厚な官僚系の色彩を帶びたものが多い。軍人でも相當の位置に行つたものは大抵長州系統に入つたものが多い。岡も元は何方かと云へば有松などと同じ系統に近い官僚の切ッ端で、其の關係から朝鮮へ行つたのであるが、何日の間にか官僚系に遠かつて政友系に漸化し、特に原敬に接近するやうになつた。山本內閣の前頃は彼と原との間に大分結附が出來て居たようである。そこで原が山本內閣の內務大臣に任ぜられたとき、今まで不遇の位置にあつた岡を警保局長に起用したが、是れには床次も推薦者の一人であつたと思ふ。然るに例の海軍問題で世間が騷いだとき、原內相と新聞團との間に衝突が起り、政府の言論取締は可なり苛酷だと云ふので民間に非難もあつたが、當時岡は警保局長として政府特に原內相の爲めに大分忠勤を勵んだ。是に至つて彼と原との關係は從來よりも更に一歩を進めた。

是れより先き政友會は憲政擁護運動に加はり、原の如きも後には洞ケ峠を下つて白票懇親會に列し、犬養と卓を並べて閥族打破の演說までしながら、其の舌の根の乾かぬ中に政友會が山本內閣に割込んだと云ふので、世間から攻擊され、又た黨內にも反對があつて終に脫黨騷ぎが起つた。そこで政友會としては名分と體面の二つから先づ大臣の入黨を求めることになり、山本達雄を始め權兵衛の連れ子と云はれた高橋、奥田が入黨したが、

續いて今まで政友系と目せられた水野錬太郎、大塚惟太郎、橋
本圭三郎、小山温等はゾロ／＼入黨した。岡も此の時警保局長
のまゝ公然入黨し、名實共に政友會となつたのである。警保局
長を罷めてから直ちに勅選議員に任ぜられたが、貴族院では政
友會の別働隊とも云ふべき公友俱樂部に籍を置いて世話を燒い
て居た。

　昨年原内閣組織せらるゝや、警視總監は今更安樂に三度の勤
めをさせるでも無いから、原の頭には初めから岡をと云ふ考が
定つて居たらしい。彼は地方の警部長や朝鮮の警務部長を勤め、
特に警保局長の前歴もあつて、警察行政の知識經驗ある所から
云へば、警視總監として勝手も分り、特に内輪の一人と云ふ所
で彼れならば原首相にしても床次内相にしても、或る程度まで
信用と安心が置ける。彼は警視總監になつてから從來の流儀を
改めて幾分か平民主義の新しいところを實行するに努めて居る
ようであるが、彼の手腕を充分に發揮することが出來るか何う
か疑問である。が、兎に角政黨出身の警視總監と云ふので多少頭
の置所が違つて居るようである。少くも歷代の總監中最も平民
的の所がある。

　蓋し彼は一種の人物で、粗豪放縱と云つたような點があつ
て、多年役人をした男としては餘り窮屈な鑄型に嵌らず、多少

形式放れのした所がある。酒も飲めば女道樂もするし、時とす
ると羽目を外して警視總監が部下の巡査に叱られるような振舞
も仕兼ねぬ。彼の女遊びは女に持てようとの成心は無く、又た
アノ顏ではチヤホヤされる理由が無い。其の點は何處までも岡
式で、所謂る刹那主義の享樂。言ひ換へれば brutalism であ
る。第一彼の形貌風彩からして少しも refined and courtly な
ところが無く、飽まで粗野で多量の蠻味を含んで居る。若し彼
が學問も位置も無い生地のまゝの人間であるならば、或は博徒
か勞働者の親方にでもなつたか知れぬと思はれる。或者は彼の
謹嚴ならざるを批難し、中には人格を疑ふものもあるが、彼の
個性には一寸面白い所もある。少くも嚴めしい警視總監として
は一變りも二變りもして居る。

　今では原の乾兒で、夫人なども切々原邸に出入して親密な交
際をして居るさうである。大して新しい頭は無いが、腕は相當
切れるし又た社會問題や思想問題に對しても萬更理解のない方
では無い。將來彼の位置は何處まで伸びて行くか分らぬが、少
くも本人は警視總監を彼の得べき最上の地位として滿足しては
居るまい。

　川村警保局長は岡よりもズツト後輩で、明治三十年の帝大法
律科出身である。同級中後年位置を爲したものは駐支公使小幡

西吉、神奈川縣知事井上孝哉、正金總裁梶原仲治、福岡縣知事大河内麻吉、江木翼、筧博士等で、二十七八年に次いで粒の好いのが出て居る。川村は秋田の人で、大學を卒業するまでに隨分苦學した人である。初め杉浦塾に入つたが、學費の途が絶えたので中途に退學し、漸く同郷の先輩から學費を得て一高に入り、勉強の傍ら私立學校の夜學教師になつて學費の不足を補ふた。大學に入つてからも英語教授や雜誌に原稿を書いて自給生活を爲し、國許から學費を貰ふて勉學するもの丶想像にだも及ばざる苦勞を經驗[illegible]、謂はゞ立志傳中の人である。

彼は岡と違つて遞信省の畠に育ち後に内務畠に轉じた人で、初めの志望は外交官たるにあつた。大學を出ると直ちに遞信省に入り、通信事務官、遞信書記官を經て郵便電信局長となり、多度津や長崎に勤めたが、後には京都にも居たことがあると思ふ。遞信省では郵便、電信、爲替、貯金に關する法規の編纂に與り、電信法要義と云ふ著書もあつて、其の方の知識經驗は可なりある。遞信から内務に轉じたのは第二西園寺内閣時代であつたと思ふが、初め和歌山縣知事に任ぜられ、次いで香川縣に轉じ、それから青森へ行つたのである。地方官としては先づ三流どころで、從つて、勤務先きも餘り有難い縣で無かつたが、昨年原内閣の警保局長に任ぜられて漸く運が向いたのである。初め彼の個人的位置は唯だ普通の官吏に過ぎずして特に誰の系統にも屬せず、地方官に轉じてからは漸次政友系の色彩を帶び來り、今ではそれが一層明かになつて居る。彼を警保局長にしたのは原首相よりも寧ろ床次内相の註文であるらしい。

警保局長としては一通りの仕事は出來るが、岡の如く警察行政に關する頭は無く、また永田前局長のように廣い知識趣味が無く、唯だ几帳面に事務を扱ふ循吏と云ふに過ぎぬ。元來苦學辛酸の境遇を經たから、自ら性質に陰氣なところがあつて、岡や永田に比すれば人間の型が窮屈に出來て居る。自分では官僚振らず、人に會つても務めて愉快な風を裝ふて居るが、人焉んぞ廋さんやで矢張り何處かに官僚の匂ひがあつて、餘り人に快感を與へない。隨つて頭が餘りプログレッシーヴの方で無く、思想問題とか社會問題とか云ふような新しい方面の知識は無い。其の代り脫線家の岡と違つて人間はキチンと纏つて居る。

▽岡、川村兩氏の印象

前田蓮山

▲福田老兄、岡、川村兩氏に就て批評を試みよとの御使にて、

一度御引受けは致したれども、實は小生、是れまで岡氏に就て考へたることとなく、言論取締の方針等に就ても、直接聞きたる所も之れなく候へば、纏まりたるお話は出來されど、責ふさぎに思ひ出すまゝを書き付けて御送り申候。

▲小生が岡氏と顏なじみになりたるは、氏が警保局長を罷めて浪人中なり。小生一日政友會本部を訪ひしに、頭髮の無恰好に禿げて顏色飽くまで黑く、膚は其の顏色よりも更に黑き長身の中老男が、ガラ〳〵した粗末な盤にて相手にからかひながら、圍棋を戰ひつゝあるを見たり。

▲見知らぬ人なり、どこかの縣會議長殿が上京して幹事長を訪問したる次手に、田舍初段とでも云ふ自慢の棋戰ならんかと想像したるが、後にて聞けば、あの膚の黑い男が前の警保局長岡喜七郎氏なりきと。其後度々政友會本部にて顏を合はせ、いつとはなく言葉を交はす仲とはなりぬ。

▲世間は廣いやうで狹いものなり。此の語は何人も常に言ふことほど然樣に、屢々小生等の實驗する所なり。實は小生、岡氏の養父敬考氏と淺からぬ關係あり。敬考氏は古き報知新聞の社員にて、後實業に從事して可なりに成功し、小生も二三度は面會したる事あり、或御世話にもなりたる關係あり、寔に敬愛すべき老人に候。

▲[illegible]氏は[illegible]敬考氏の養子となり、二十四年帝國大學を卒業せり。鈴木喜三郎、内田嘉吉氏等は其の同期生にて、小野[illegible]太郎氏は一年後、中川小十郎氏は一年前の卒業に候。氏の成績は中以下なりしならん。氏は學問の人にあらずして、敏腕の人に候。

▲氏は内務省參事官より段々築き上げて和歌山縣知事となりしが、氏はコツ〳〵と事務を執る柄でなく、寧ろ豪傑肌の人なれば、殖民地驗出向きと長官に見出されしか、或は自ら希望したるか、三十八年韓國統監府警務總長となり、伊藤公の御目鏡にかなひて、韓國農商工部次官、内部次官等に歴り、四十四年朝鮮併合と共に内地に歸りて鳥取縣知事に任じ、次で原内相の下に警保局長となれり。

▲郷國の友人森長次郎君が某雜誌を經營せる時代（岡氏浪人中）小生は君より屢々經營上の相談など受けしが、其の雜誌の後援者が岡氏なりしと聞くに及んで、小生は又た世間の廣いやうで狹いのに驚きたり。後（岡氏浪人中）岡氏が公然其雜誌を引受けて、今回青森縣知事より佐賀縣知事に榮轉したる澤田牛麿氏を主筆とし、大々的發展を試みんとするに際し、小生も森君の縁故にて屢々岡、澤田兩氏と面會し、編輯上の相談など受けたりし。

▲澤田氏は韓國時代より岡氏の子分にて、思想頗る深く[illegible]

く、且つ文章に長じ、若し此の人にして新聞雜誌記者として努力せば第一流の評論家となるべしと期待されしが、雜誌の經營は又た格別にて、事業家として一種の天才を有する山口恒太郎氏(代議士)まで附いて居りながら、なか〳〵思ふやうに行かぬ樣子なりき。

▲其の思ふやうに發展が出來ぬに就ては、岡氏自身充分に了解せる理由もありたり。忠告者は屢々岡氏に對し、も少し面白く作りては如何と勸め、氏も一應之れに同意すと雖も、猥褻の事は避くべし、人身攻擊は避くべし、無理に政府を攻擊すべからずなど、此等の諸條件を取除けは、殘る所は矢張り乾燥無味にて、幾度論議しても面白き雜誌は出來ず、經營は日一日に困難となれり。

▲折りも折り、トンダ事にて春季增大號が發賣禁止となりぬ。それは某文學士の『デモクラシーの心理』と題する一文が政府の忌諱に觸れたるなり。讀んで見れば何んでもない事にて、編輯の責任者たる澤田氏は餘りの馬鹿々々しさに呆然たるのみ、岡氏も此の報を得て飛んで來り、其の黑き髯をそらして、當局者の非常識を笑へり。

▲幸に時の内相水野氏(寺内内閣)は岡氏の親友なるを以て、色色運動したる樣子なりしも、水野氏も事後に知りたるもの丶如く、ハヤ如何とも爲すべき道なくして少らからざる損害を蒙り、泣面に蜂と云ふ光景なりき。其の時岡氏ツク〴〵嘆じて曰く『吾輩が役人をして居た時も斯うだつたらうなア、思へば恥かしい次第だ、役人とても惡意は決してない、充分人民に同情を持つてやるのだけれども、役人の生活は單純で經驗が狹いから、斯んな非常識な事をやるのだ、こりや吾輩も再び役人になつた時は能く考へんければいかん、なア澤田君』

▲澤田氏も苦笑して『吾々も役人をして居た時は斯んなもんだつたでせうよ、斯う浪人して居ると役人の缺點が見へるけれども、再び役人になつて役人の雰圍氣中に投ずると、又た知らず知らずの内に斯うなつて仕舞ふもんです、能く考へなければ』と感慨無量の態なりき。(今は岡氏と其雜誌と何等の關係なし)

▲今や岡氏は警視總監となり、澤田氏は知事となれり。浪人中の經驗を忘るゝなきや否や、過日小生某所に於て偶然岡氏と會せし折、警察事務に就て市民の要求を二三ヶ條話したるに氏は『イヤ何うも有難う、色々の事が輻湊するので、手帳に書き留めて置かなければ忘れていかん』とて、フロックのポケットより手帳を取り出して詳しく書き留めたり。大分評判は宜しきやうに聞き及び候が、老兄の聞く所如何。

▲川村氏とは現内閣成立の際、内相官邸の晩餐會にて初めて

面會したり。小生が新聞記者として內閣より招待を受けたる時[illegible]に候。小生は先づ其の風采の頗る堂々として而かも溫和に、自づから老練長者の風あるを感じ候。

▲氏は明治四年秋田縣に生れ、三十年帝國大學を卒業せり。卽ち赤司鷹一郎、井上孝哉、江木翼、筧博士等と同期生なり。卒業後文官試驗を通過して遞信省に入り、久しく地方の郵便局長を勤めたるが、後內務省に入り、又た臺灣の內務局長ともなり和歌山、香川、青森の知事を經て警保局長に拔擢せられたり。內務省に入りてより、原首相と同じく東北人たるの故を以て、一しほ懇親らしく、今度の拔擢も原首相の推薦なるかに聞き及び候が其の眞否を知らず。

▲原首相は自己と全然性格の相反する人物を用ふる事頗る多し。川村氏の如きも其の一人にて、氏が悠然として長者の風ある、原首相が卓勵風發的なると頗る懸隔あるを覺え候。併し原首相の私生活は頗る悠々乎たるものにして、殿樣風の側面之れあり、川村氏の如きも確かに原首相の一側面を有する人ならずとせず。

▲川村氏の議會に於ける答辯振りを見るに、如何にも事もなげに、あつさりと正直に、時には間違ひを後に訂正したりなどして、悠々迫まらざる風あり。或評者は『川村は馬鹿だ』と言ひしも、[illegible]却つて嬉しく感じられ候。荒削り然たる所が面白く候。

▲川村氏は床次內相の型に能く似たり。而して大體の型[illegible]兩氏と異れども、岡警視總監も亦た荒削りの代物なり。是より講和問題なども八ケ間しくなりて、岡氏と川村氏との仕事は多かるべきが、餘り神經過敏になれば却つて仕損じあるべし。凡て荒削り的にやつて欲しきものなり。老兄以て如何となす。

▽岡警視總監と川村警保局長

鐵拳禪

一

政友會總裁衆議院議員原敬を首相兼法相、政友會相談役衆議院議員床次竹二郎を內相兼鐵道院總裁とした所謂平民內閣の下に新公論社長貴族院議員岡喜七郎は警視總監に、青森縣知事川村竹治は警保局長に任ぜられた。而も白晝公々然と、一點の遲疑なしに任ぜられた。――それから最早六個月は經過した。

その間に警視總監が消防出初式に列する爲に乘馬の稽古しをてる事や、馬好きの警保局長が仕事が忙しいので馬にも乘れない事や、そんな人を馬鹿にしたやうな事が傳へられたが、彼等

の言論取締の新方針と云ふやうな物に就ては、餘り聽く所が無かつた。併しその行ひつつある處を見ると、從來と大した變化は無いやうである。縱令如何程新しい進んだ考を持つて居たとしても、內閣其物の方針に變化のない限は、彼等は何うする事も出來ないのだから、上官の意嚮を迎合するを無難なりとする事になる。彼等の名は嚴しい警視總監であつても、警保局長であつても、矢張內閣の屬僚である。首相及び內相に簡拔された役人である。その手足として働くべく運命づけられた。役人である。今若し內閣の方針に反し、首相及び內相の意に背いて、我意を張り、主義を貫かんとすれば、潔く冠を挂けて去るの覺悟がなくてはならぬ。それが無い以上は、命令の遵奉と、自我の屈從とに由つて、讓歩と妥協と迎合の議色の中に納豆となつて粘り合ひ、その地位を保つに努めるより外ないのである。その點に就ては、岡にしても川村にしても頗る分りが早い方であるから、衝突の無いやうに、ちやんと心掛けてゐる。で、原なり床次なりが寬大なれば、彼等は彼等の特色を出し、自由に手腕も揮へやうと云ふものだが、事每に干渉されるとなれば、その羽翼を伸すことが出來ないのは當然である。で、彼等が言論取締の態度を論ずる前に、內相床次の言動を觀るの必要がある。

床次の官僚から政黨に轉化し、原の知遇を得て內相の椅子を占めたのは世の知る所で、今更茲に說明するまでも無いが、役人から鰻登りに登つたたげに、過激な改革などを欲せず、可成的漸進的に、穩健な遣り口で行かうとして居る。保守退嬰は彼れが政治上の標語でなくとも、何程かそんな風が見え、一歩進んだ理想を行はうとはせぬ。斯う云ふ社會の進運を解せず、固陋な偏見から出立した穩健は、縱令自身に在つては穩健でも、それを他に强ふる時は、得て專制に墮し易いものである。卽ち他の進步的、理想的の言動に對しては、自分常規の方針で以て取締らうとするから、勢ひ壓迫するを免れぬ。取締は勿論放任ではないから、取締それ自身が拘束を意味するのだと云へばそれ迄だが、如何に取締でも官權を酷用して、壓迫と强制とを加へられては溜つたものでない。彼れの穩健は、どの程度に於て穩健であり得るかは知らぬが、自分常規を以て他を律しないまでに穩健であり得るだらうか。言論尊重を果して其の字義通りに實踐し得るだらうか。彼れが過月の議會に於ける選擧法案に對する意見及び態度が、能く彼れが民衆に關しての理解と、彼れが政治思想の輪廓を語つてゐる。

彼れの言說に從へば、「出來るだけ選擧權の擴張を行ふが可いと信ずるが、濫りに擴張してはならぬ。宜しく其の時代の要求

に一致する程度に止むべきだ』と云ひ、『立憲政治の發達上、選擧民の政治思想を養成するは最も必要な事だが、それは小選擧區制に於て始て望み得べき事だ。同士打をなすやうな現行制（大選擧區制）は、政治思想の醇良な發達を促す所以でない、要するに、法を立つる者は、時の情勢に合せしむるを最も必要とする』とも云つて、時代の要求に合するものでなくてはならぬ事を力說したが、法案其物は政黨本位で、時代の要求とぴたりと呼吸が合つて居なかつた。時勢は何を要求してるかといへば、云ふ迄もなく普通選擧を望んで居た。議會の形勢の普通選擧に傾かなかつたのは、官僚軍閥の鼻息を顧慮したからであつて、それを以て直ちに時代はまだ普通選擧を要求せぬと云ふことは出來ぬ。彼れは臆面もなく、小選擧區制でなければ政治思想の醇良な發達を期する事が出來ぬと獨斷するかと思へば、更に『日本の内閣は餘りに短命で、その所信を斷行することが甚だ困難である。それを救ふには、議會に多數を占める政黨が内閣を組織するより外にない。だから、必ずしも小數者の代表を出す必要がないと信ずる。』と云ふやうな謬論を吐いて居る。多數黨の勢力で以て押して行けば、何でも出來るやうに思つてゐる。内閣の起仆は官僚軍閥の辣手に由つて行はれたが、併し民衆の信望を失した弱點に乘ぜられたのだから、多數黨の内閣必ずしも長壽とは云へぬ。然るに氏等には、その點どうしても未だ眼中に入れて居ないやうな、民意を無視した態度を以て、儼然として放言した觀がある。然うした黨派的觀念、然うした保守的思想に、遂に『普通選擧を施行する時は、却て選擧權を不眞面目ならしめる傾向がある。』と云ひ、『地方議會は頗る責任を感じて居るから、無資産階級に選擧權を與ふるを惧れ、擴張を希望せぬ。』と叫んで、普通選擧其物を危險視するに至つた。況んや女子に選擧權を與ふる事をやである。

既に時勢の迫出したものを時代の要求でないとして斥け、民衆の危險視せぬものを危險視するやうな誤解と、詭辯とを以て言論界に臨むならば、その行はんとする所も略知る事が出來る。それに隨分非難の多い新聞紙法を改正せず、治安警察法を撤廢せず、又撤廢するの意なき所から觀るも、彼れが官僚主義を蟬脫せぬことは分る。首相原及び其の閣僚が聲明した民意尊重を何等の割引なく、如實に現はすものとすれば、民意尊重を阻害する一切の障害物は撤去されなければならぬ。然るにそれが依然として撤廢されず、縱令惡法惡令でも苦しい時に擔ぎ出せば、多少の利き目があると云ふのでは、物騷千萬な話でないか。民意尊重、言論自由の標幟は、黨勢擴張のプロパガンダでは有るまい。若しそれをプロパガンダに過ぎないとして、權勢を得た今

目に於て一顧を與へないならば、それは驚くべき欺瞞であらう。然うした床次の思想感情が事毎に發露すれば、それが乾度言論取締の局に當る者の心鏡に反映する。

二

警保局長川村は明治三十年の帝大英法科出身で、先年警保局長を勤め、此程福岡縣知事に移された安河内麻吉と同窓であつた。秋田縣の人で、政黨的色彩が濃厚でなかつた爲に、數次の内閣更迭を餘所に見て、數年間和歌山縣知事に居坐ることが出來た。別に毒にも薬にもならないと云ふ意味で、或は動かされなかつたのかも知れぬが、兎に角抜擢もされなければ、左遷もされずに、じつとして腰を落着ける事が出來た。低い木には風の當らぬ所から見ると、その風の當らなかつたのは、づば抜けて高くなかつたと認むべき理由もあるが、その防風設備の巧妙な點からも來てゐる。彼れは馬を御するの術が旨いやうに、人心操縦の腹帶を手際よく締めて、鐙を踏ん張つて見せたりする。その如才なく立廻る所から、上官の氣にも入り、落馬するやうな處れは無かつた。確か滿鐵の理事などにもなつて、如才なく泳いで居た筈だ。然うした人物であるから、政黨の小ぜりあひの激しい青森縣に居ても、大した縮尻もなく、比較的無難に通つた。如何の特色が原の眼に映じたのかは知らぬが、恐らく其の如才ない點のみではなく、多少骨のありさうな所が、稲妻程の閃鋭さを以て、ぴかつと來たのであらう。そして其の閃光の瞬間に照し出された視野の色彩を見ると、何時しか政友會の色彩を帶び居たと云ふやうな珍しさもあつたであらう。

警保局長と云へば、その名の手前、その官歴に『警臭』のあることを要件とする。一たび警察部長になつた經驗、閲歴のない者だと、如何に敏腕家であり、趣味の人であつても、此處に据ゑられないやうだ。川村は幸ひに、警保局警官になつて、飯田旗郎譯『巴里』に發賣禁止を喫はせた閲歴がある。又、臺灣總督府警視總長と云ふ警臭も煮染んで居た。殊に臺灣仕込となると、何處か辛辣味がありさうに見える。縦令辣腕でなくとも、今に揮つて見せるぞと云ふ威嚇だけでも、相當功能がありさうである。まさかそんな處まで詮索したので無からうが、警臭のあるが故に警保局長に簡抜された。西園寺内閣時代彼れと顔を並べた府縣知事で、今日首を繋いで居る者は幾許もないのだから、知事としても可なり顔が古い。その古參と云ふやうな點、古參中の手腕家と云ふやうな方面から觀察しても、警保局長位に引き上げるが至當であらう。併し警保局長は、單に知事の古顔、手腕家、警臭所持者と云ふだけでは、適材なりとする事は出來ぬ。その職責中に言論出版の取締と云ふ、一國の治安風致

に關する重要事があるのだから、少くとも近代思想を理解する能力あり、藝術鑑賞の趣味ある、官吏として比較的進んだ思想を抱いて居る人物でなければならぬ。何でも美しいものと云へば蠱惑的なもの、新しいものと云へば危險なものと云ふやうな、偏見固陋な色眼鏡を掛けてる人物では不可いのである。譯が分つて取締るのと、譯が分らずするに取締るのとでは、その取締の結果に非常な懸隔を生ずる。

彼れは苟も最高學府の出身者である。如何に警臭があるからとて、彼れを無學無識な沒分曉漢と同一視することは出來ない。彼れは相當に新思想に對する理解や、新文藝に對する鑑識眼や、乘馬以外の好尙もあるだらうが、彼れは今それに對する同情と餘裕とを持つてるかは甚だ疑はしい。生中俳句などを作つた爲に、一廉の文藝作家乃至思想家のやうに買ひ被られた靑嵐永田秀次郎は、却て酷烈に發賣禁止を喰はせ、言論取締の轡を締め直したでは無いか。學者肌の聰明な内相水野は、言論に對して理解ある取締をやるだらうと想はれたが、米暴動の際に周章狼狽して、全國の新聞紙に大鉈を揮ひ、なほ慊らで官選記事の揭載を强要すると云ふやうな惡辣を敢てしたでは無いか。それ等は寧ろ彼等自身の發意よりも、首相寺内の强要に出でたのであつたが、それにしても彼等が内閣の惡方針を矯正する事をせず、徒らに寺内の意を迎へて大鉈を揮つたのは、何と云ふ不見識であらう。水野は寺内に强要され、永田は水野に制肘されたやうに、床次は原に、川村は床次に、同一筆法を施されて、ぐうの音も出ないものとすれば、彼れ自身の敏腕も、理解も、何の役に立つものでない。唯言論の鐵口具となり、發賣禁止の器械して、活動するに過ぎない事になる。彼れは如何に屬僚でも、その鐵口具たり、器械たる事を望まず、或程度まで自家の眼識手腕に由つて、職責を盡さんと欲するに相違ない。果して然うであるならば、理不盡の制肘なり壓迫なりを跳ね返して、理解ある取締を成さなければならぬ。

然るに川村の思想感情は、床次のそれに比して、何程の進歩を示して居るだらうか。彼れが治安警察法に關して、議會に辯明した所を見ると、矢張内相床次と同一口吻である。治安警察法の改廢どころか、その第十七條を庇護して、職工が自己の利害關係に由つて同盟罷業するはまだしも、他の者が誘惑煽動する時は、それを取締らねばならぬ。だから、治安警察法第十七條の如きは現存するが可いと信ずる。」と云つた。無論勞働組合の設置などにも反對であつた。勞働者が資本家に對抗する一切の運動は好まなかつた。我が國はまだ無產階級から來る政治上の危險が現前せぬから、何處が風が吹くかと嘯いて居れる者

の、心ある者は決して等閑に附する事の出來ない問題である。若し萬一の事があれば、治安警察法でやつ付けてしまふ、それで安心だと云ふ風に多寡を括つて居るのは、所謂官僚式と云ふものである。も少し世界の大勢に眼を開いて貰はねば困る。當議會の問題とはならなかつたが、治安警察法の改めなければならぬ個條は多々ある。婦人の政社加盟及び政談集會の出入に關する拘束の如き、早速解禁せねばならぬ。然う云ふ進んだ考を持つて改廢しようとせず、何時までも其の舊套を被つて傲然と構へ、官權の威力で以て押へつけさへすれば可いと云ふのでは、お話にならぬ。

前局長永田の時代に比べると、發賣禁止が其の度數を減じたやうだが、併し其の制裁がより酷烈に、其の取締がより辛辣になつた。前は大抵發賣禁止だけで濟んだが、今は發賣禁止になれば、乾度告發されて著作者や發行者が罰金に處される。發賣禁止にならずとも、雜誌の如きは其の編輯者が告發されて、罰金に處されることが往々ある。警保局長が默視しても、檢事が告發するのかも知れぬが、その取締に辛辣の度を加へたのは爭はれぬ。かう云ふ風に、著作者を罰金に處し、その言論思想を壓迫し、生活上の脅威を與へると云ふやうな事をやれば、その反動は恐ろしい結果を生まずとも限らぬ。勞働者と智識階級の提手が、或種の危險を醸成する事に想ひ到つたならば、今日までの遣り口に就て餘程考慮しなくてならぬ。現局長川村は、何事も官權の威力で、辛辣に强行すれば、それで可いやうに思つてるらしいが、それで滿足な結果が得られるであらうか。

三

警視總監岡は、朝鮮總督府警務總長となり、次で參與官に進み、農工部次官を經て內部次官に陞り、かれこれ六年間も朝鮮に勤めて居た。餘り遣り過ぎたせゐもあつたらうか、急遽辭職して、鳥の飛び立つやうに本國に歸つて來た。その前秋田縣知事をやつて、既に良二千石の稱が付いて居たのであつたから、可惜人物を浪人させて置くでもあるまいと、誰が氣を利かしたものか、鳥取縣知事に拾ひあげて呉れた。この時分、そろそろ原敬のふところに這入つて、政友會に流眄して居たやうであつた。遂に警保局長に簡拔された。一たび朝鮮で躓いた彼れが、斯うとんとん拍子に陞進したのは、原の恩顧に由ること勿論だが、併し彼れに一種の魔力があることも見逃してならぬ。

岡は岡山縣の生れだが、先代の家に養はれて、高等學校に學び帝大法律科を卒へた。それは前內相水野の前年、現內相床次の翌年であつた。三十年出の川村に比べると、實に六年以前である。彼れは養子であるが、養子と云ふやうな素振は見えず、

隨分豪放に振舞ひ、大酒も呷る。その爲に隱し難い悲哀も、悔恨もあるだらうが、子女の運命とか、人生とか云ふものに對して、深く考へやうとはせぬ。朝早くから夜遲くまで活動し、活動の爲に寸暇が無いと云ふ風であつた。女には好かれぬが、男惚れのする男だ――。そんな風に稱される所を見ると、彼れに一種の魔力あることを思はざるを得ぬ。

彼れに趣味があるかと云へば、別に趣味のあると云ふ話も聞かぬ。併し書は書く。總監になつてから、依頼されるのでは已むを得ず書くのであらうが、野山と號し、ちやんと印章まで用意してゐる。その雅號の由來は知らぬか、野山――岡野山と云ふのは如何にも沒風流である。斯う云へば或は彼れの揶揄に觸るかも知れぬが、廬山の八面觀式に八方から熟視して、野山の風趣、滋味を掬することは出來ぬ。如何にも彼れがつけさうな雅號だと云ふ氣がする。それ程に彼れは我武者で、沒趣味で、何も構はぬ男である。そんなら頑鐵の頭々たる人物かと云ふに、然うでない。隨分お世辭の好い、人をそらさぬと云ふやうな、社交的な處がある。一見舊知の如き親味を以て人に接するが、下風の者に對しては盾の半面を見せ勝である。それは多年官吏生活をした者に免れない通弊としても、彼れの豪放がる處に稚氣が頭を出したり、怜悧が手を出したりして、締まりの付かぬ所に、岡野山の特色を見る事が出來る。茲に於て總監としての好評は、その手腕の辛辣なるよりも、寧ろ社交術の巧妙なる處から流れてゐる。

岡は單純な頭だけに、平民内閣の總監だから、何處か平民的氣分を見せねばならぬと云ふ風がある。言論取締に關しても、舊來の官僚の如く洋刀で威嚇し、彈壓しては不可いのだと云ふ觀念もある。そこで可成的自由な態度を執らうとするが、内相床次は然う放漫な取締では困ると云ふ肚があつて、彼れの頭だけでは何うすることも出來ぬ。が、日比谷公園に於ける普通選擧に關する民衆運動にしても、上野公園に於ける普通選擧の屋外講演にしても、絶對禁止の方針を執らず、條件を附して許した。然り許したのでは有るが、それを警官隊で包圍するやうにして監視した。まだまだ官僚の舊殼は脱しないにしても、民衆運動と屋外集會とを許したのは、取締上の一進歩である。それは、總監岡に至つて始て行はれた。

彼れは新公論社長であつたが、名儀上の社長で、その經營にも編輯にも、餘り容喙しなかつた。勿論筆は執らなかつた。けれども、問題が突發するやうな事があれば、それを傍觀して居なかつた。先年『新公論』が文學士木村久一の一論文（確かデモクラシーの心理と云つたやうな論文だと記憶する）で、發賣禁

止を食つた。發賣後幾日も經たないうちにやられたのであり、增大號であつたのだから、その損害は大したものであつた。發賣禁止は何うする事も出來ぬが、その忌諱に觸れた部分だけを削除して直ちに臨時號を出さうと云ふ事であつた。が、玆に困る事には雜誌は皆押收されてゐる。押收を免れた殘本は、何程も無いのであるから、急の間に合はぬ。急の間に合せて、損害を最少限度に止めるには、押收した雜誌を返還して貰ふより外仕方がなかつた。時の內相は後藤、次官は水野で、警保局長は永田であつた。岡は水野を訪うて相談したが、彼れ一個で決する事は出來ぬので、內相局長等を會して熟議を凝した。併し一旦押收した物は、返還する事は出來ぬと云ふ事であつた。岡は始て發賣禁止より來る、有形無形の打擊の如何に大なるかを知つた。彼れはその時、何うかせねばならぬと云ふ考を起したに相違ない。そして又、一旦押收した雜誌はその不可なる部分だけを切去つて、發行者に返還するの至當なるを認めたに相違ない。若し然うで無かつたなら、彼れは態々內相を訪問して相談する迄も無かつたのである。彼れは單に雜誌社長として毫も官邊の事情を知らぬ人ではなし、曾て警保局長の職に在つたのであるから、押收の不條理を發見せずに、縱令內談にもせよ、その相談を進行しようとは信ぜられぬ。その苦い經驗を嘗めた彼れは、今その發賣禁止を執行する實際の局に當つて居るのである。雜誌發行者に對して、同情を持つだらうと見るべき理由がある。

發賣禁止を値すべき一論文、若くは一創作の爲に、雜誌全體を葬り、一旦押收した物を返還せぬと云ふのは、從來の慣例で然うやつて居るのである。惡い處だけ切去つて發行者に返還し、その缺部を補塡するなり、その儘に頁附を直すなりして、更に發行するを許すのは、別に違法でも無からう。發賣禁止は其の社に損害を與へる目的でない限り、寬大な處置を取つて、經營者の利益を害さぬやうにせねばならぬ。而も發賣禁止を蒙つても、その當否を爭ふ途の開かれてない今日の實狀にあつて殊に然うでなければならぬと思ふ。宜しく內相床次、警保局長川村を說いて、官僚式の惡慣例を破つて、發賣禁止の上に新例を開かんことを、彼れの爲に望んで歇まぬ。（大正八・四・二二）

評論

時論

關東州行政改革の裏面に潛める重要意義

法學博士　吉野作造

關東州行政改革案は三月廿四日樞密院の通過を以て完成し、四月一日より實施せられて已に夫れ〳〵改革が斷行された。而して之に對しては世上賛否の論區々になつて居る。

都督武官制を廢めて長官は文武何れにても可なりとせるは、我殖民政策の動機に對する從來の誤解を避くるを得べしとて、新改革案を謳歌するものがある。更に進んで此事を根本的に殖民地に於ても武官制を廢するに到るの豫兆として喜ぶものあり、又は新改革に依つて著しく事務の統一を進むることが出來ると説くものもある。併し又他の一方に於ては、あれ丈けでは從來の三頭政治の弊害を十分に除き切らぬとて其不徹底を難ずるものもある。併し大體に於て新改革に贊同する方の議論が多い。予輩も亦其一人であるが、併しながら新改革を歡迎するの理由は、單に以上説く所の如きに止るかと云ふにさうではない。予輩は更に其中に尚一層重要なる意義の潛めるもののあるを認めるものである。

今度の改正はいろ〳〵の點に亘つて居るが、其中の眼目は長官を文官でもいゝとした事である。此事が最も注目を要する點である。何故なれば、之に依つて關東州の施政は事實上確實に内閣の監督の下に歸し得るからである。

然らば從來の武官制では内閣の監督權が十分に行はれなかつたかと云ふに、表面は兎も角、事實は然りと答へざるを得ない。少くとも總理大臣は武官たる關東都督の總ての行動を監督する事が出來なかつた。何故なれば武官たる都督は制度上已に總理大臣の監督以外に行動する自由を有つて居つたからである。

尤もさうかと云つて關東都督は全然內地官憲の監督外に勝手の行動をなし得るのでもなく、又なして居るのでもない。彼を事實上命令監督するものは陸軍大臣と參謀本部とである。而して參謀本部陸軍等は我國の政界に於て全然別天地をなして居る事は世人の知る所であらう。參謀本部が天皇に直屬して、全然內閣と對等の地位にある事は言ふ迄もない。陸軍大臣は內閣官制に於てこそ所謂內閣を組織する一分子なるも、總理大臣を初め他の閣僚に諮ることなくして軍令を發布するの權を有つて居る。此權利に據つて陸軍大臣は全然總理大臣の監督の外に立つて、其支配の下に立つあらゆる機關を利用して自由自在に行動することが出來る。故に表面の形式論は兎も角、事實に於ては陸軍大臣は他の軍事諸機關と共に日本の政界に於ける治外法權の別天地である。故に國家の政務は總理大臣の下に統一されて居るが如き外形を備へながら、其實文武截然として對立し、而かも其權限は明確に分れて居ないから、所謂軍閥の活動が往々にして文治的官憲の施設と衝突する事が珍らしくない。殊に外交の方面に於て此不祥なる衝突は最近頗る頻繁であつた。

斯の如き制度のいゝか惡るいかは別問題として、近時我國の大陸政策は其支那に於けるものも、又西伯利に於けるものも、往々二途に出て、爲めに帝國全體として迷惑を蒙つた事が少くない。一方に於ては普通の所謂外交家は無爲無能を極め、傍から見て齒痒くて堪らないと難ずるものがある。其處で軍閥の活動も亦止むを得ないと辯護するのであるが、併し軍閥系統のものが無相談で勝手な行動をした結果、外國から何か問題を持ち込まれ、直接交渉の衝に當るべき外務者が其事件に就いて何にも知らなかつたと云ふやうな事は度々あつたと聞いて居る。斯う云ふやうな事は外交官の無爲無能の結果已むを得ない事として默認し得べき事柄ではない。外交上の成績を擧ぐる上に、兩者の何れが敏活に活動し得たかの實際の比較論は別問題として、所謂政府と軍閥と沒交渉の活動をなすの結果、常に外交の不統一を暴露するやうな制度は誠に不都合と言はなければならない。而して官制の根本的改革に依つて文武對等の現制に手を觸るゝにあらざる以上、關東州行政の如きも武官制では到底此方面に於ける國家的活動を內閣の監督の下に完全に統一することは出來ない。

今度の新改革案を發表せる際、諸新聞は此改革はもつと早く發表すべきであつたけれども、長春に起つたある小事件の爲め後れたと云ふやうな記事があつた。此所謂小事件なるものは實は政令二途に出る事の弊害を最も明白に語るものであり、又今度

の改革の必要を感ぜしめた一原因であることを[illegible]は昨年北京駐在の帝國憲兵が或る誤解の爲め支那の外國[illegible]人[illegible]師を凌辱したと云ふ事件である。[illegible]人に擲くまで凌辱[illegible]を楯に取つて屈しない。帝國憲兵は又飽までその悖せる所に一點の過誤なきを主張して屈しない。其處で之が遂に兩國の一外交問題となつた。北京駐在の帝國公使は其配下の機關を通して事實を精査せしめた結果或る解決案を得、之を關東都督府に通告した。けれども都督府は其部下の憲兵の報告以外に一顧を與ふるの要なしとして一顧として右の解決案を容れない。詰り文武對立の結果外交問題の徒らなる紛糾が此處にもあらはれたのである。事は固より小問題であるが、併し見様に依つては此處に我殖民地行政上の一大禍根が伏在するものと言はなければならない。北京公使館の解決案がいゝか、都督府の屈せざる態度がいゝかは姑く別問題として、兎に角右の如き結果の發生を許す現在の制度其ものはどうしても之を諒解するの餘地が無い。

今度の改革は關東州の行政を完全に内閣に統一し得ると云ふ事を意味する。長官は武官でも差支ないが文官でもいゝと云ふ事であれば、結局自分の思ふ通りの人を据えることが出來る。假令任免の權は内閣にあつても必ず武官たらざるべからずとあ[illegible]つて、今度の改革は多年の支那外交の一大障害であり、日支[illegible]地[illegible]治上の一大禍根であつた領事館の治外法權の一角を崩すものとして頗る重要なる意義を有するものと言はなければならない。

宏大なる宅地を構ふるものを税せよ

近頃東京の郊外を歩いて見ると、宏壯な邸宅を作つて居るものが頗る多い。啻に東京附近ばかりではない、旅をして見ると到る所此現象を觀る。講和になつて幾らか減じたらうかとも思はるゝが、所謂戰爭成金の勃興した頃は右のやうな現象は京阪神地方に殊に著しかつた。併し之は戰爭景氣の如何に拘らず、富裕階級の最近の流行と觀てもいゝ。

田畑を倒すものに宅地の外に工場もある。之は同じく殖産工業の用をなすものであるから已むを得ぬとして、宅地の方は此儘に看過する事は出來ない。況んや食料問題の矢釜しく耳の開墾助成法などゝ云つて耕地の増殖を計つて居る際に於てをや。

あんなに田畑を倒しては耕地の面積は年々減るではないかと思はるゝ程であるが、事實は斯くても相當に増加しつゝあると云ふ事である。開墾助成法などの實施の結果は更に一層の増加を見るだらう。併し他の一方に於て人口の激増と云ふ事を考へ合せて油斷は出來ない。何れにしても食糧問題の矢釜しい今日、耕地の無暗に倒されるのは決して放任すべきではない。

田畑を倒す事が國民の食糧に影響を及ぼすと云ふ實際の事實なしとするも、耕地を變じて宅地とするは少くとも社會的正義の容易に許し得ざる所である。蓋し物の所有者は之を如何に使用するも勝手なりと說くのは一片の法律論に過ぎず、而かも所有權に對する斯くの如き說明は少くとも今日の新らしい法律思想の直ちに許さゞる所である。社會的目的に合する範圍に於てのみ所有權の自由處分を認むべしと云ふのが最近の有力なる法律主潮ではないか。法律論は姑く措くとして、少くとも道德的見地よりすれば、假令自分の所有物でも天下萬民の爲めになるやうな方法で利用する事から、全然一個人の慾望の滿足の爲めに利用すると云ふ狀態に移すのは、斷じて一個の罪惡であると言はなければならない。

此理屈は耕地を變じて宅地となす場合のみに限らない。已に宏大なる邸宅を構へて居るものにも適用がある。殊に都會に於けるものに於て一層之を說く必要がある。之に對する非難の聲は已に從來いろ〳〵の人から說かれた。然らば之と同じ意味に於て郊外の耕地を一個人の娛樂の場所となすのも亦大いに之を責めなければならない。斯くして予輩は少くとも公德の問題として斯の如き弊風の斷じて行はれざらん事を希望するも、制度の問題としては市街宅地の課稅、殊に庭園稅の重課の說に贊成すると同じ意味に於て、田畑を倒して宅地とするものにも思ひ切つた重稅を課する事を主張したい。

尙此場合に注意すべきは宅地の大いさに應じて、一定の率に從ひ洽く課稅すると云ふやうな不都合な原則に誤られざらん事である。予輩の考では機械的だけれども、家族の數とか、或は建物の坪數とかに據る一定の標準を設け、それ以下のものは無稅としなければならないと思ふ。何故なれば特に重稅を課するの必要あるは格別贅澤をする者のみに限るからである。それ以下のものにも多少の稅を課すると云ふのは、表面公平なるが如くにして其實不當に下に重くするの結果となる事は彼の消費稅の場合と同じである。

人種的差別撤廢問題について

予は先月來所謂人種的差別撤廢運動と日米問題の關係を論じ、前者に依つて後者の完全なる解決を期待するならば、それは大いなる誤りなる所以を說いた。之に就いては其後二三の方面より非難を受けたから、此處に再び問題の要點を摘錄し、併て之に關する予輩の立場を一層明かにしたいと思ふ。

予は日米問題を全然人種問題に非らずとは言はない。單に人種問題と云ふばかりではないと主張したのである。若し純然たる人種問題ならば、即ち人種を異にすると云ふ點丈けが米國に於ける排日思想の理由ならば、その不都合なるは言ふを俟たない。

併し乍ら予輩の所謂人種的差別撤廢運動者の言論に慊らざるは、人種の差に依つて區別すると云ふ事は他に如何なる理由があつてもいけないと云ふ風に聞ゆるからである。所謂人種的差別待遇否認論には絕對的意義に於てするものと、相對的意義に於てするものとの二つを區別しなければならない。他にどう云ふ言分があらうとも、兎に角人種の差に依つて區別すると云ふ事がいけないと云ふ絕對論ならば、之は我々も大いに反對せざるを得ない。何故なれば、此論で行けば阿片を飲んだり、博奕を打つたりする支那の苦力をも入れよと要求する事になり、又同じやうな要求に接して我日本も亦之を排斥し得ない事になるからである。斯くの如きは其昔、天賦人權論に根據して如何なる犯罪を犯しても人を殺してはいけないと云ふ絕對的死刑廢止論と同じである。人命は貴い、併しながら他に相當の理由あれば之を刑殺するも已むを得ないと云ふ事になつて、玆に議論は相對的になる。人種問題に就いても他に特別の理由なき以上、差別的待遇をするのはいけないと云ふならば、我々も無論贊成である。そこで予輩は人種的差別撤廢論者に問ひたい。諸君の議論は絕對的意義に於てするのか、或は相對的意義に於てするのかと。

玆に於て問題は更に一轉する。所謂日米問題は人種的差別と云ふ事の外に、他に何等の理由が無くして起つたものかどうかと。人種的差別待遇の絕對的否認論を取るべからざる以上、猶此否認論を以て米國に迫らんとする以上、彼等は他に何等の理由なきに係らず我々に區別的待遇を與へて居ると云ふ事實の證明をしなければならない。而して此點に就いて予輩は人種的偏見と云ふ事も全くないとは言はない。併しそれは極めて輕微であ

る。排日思想の主たる原因は尚其他にいろ／＼のものがあると主張するのである。之れ予輩が人種的差別撤廢を要求するに先ち、米國に於ける排日の由來に就き精密愼重なる攻究を遂げよと叫ぶ所以である。

尤も予輩は米國に於ける排日思想の諸々の原因につき悉く之を是認すべきものと認むるものではない。少くとも一旦來住を許した日本人に土地所有權を與へないとか、賃借權も三年に限るとか云ふやうな、種々の區別的待遇をなすのは斷じて不都合だと考へて居る。尤も彼の加州土地法の如きは形式的法理論から言へば、加州の憲法にも背いて居ず、日米條約から言つても、合衆國憲法から云つても、正當有效な法律である。併し國際交通の條理から云つて之が如何にも不公正たる事は言ふを俟たない。若し差別撤廢の要求が主として此點にかゝるものならば、我々も亦双手を擧げて之に贊成するを躊躇しない。けれども新たに日本の移民を米國に容れよと云ふ問題になれば、之は原則として向ふの勝手に任かさなければならない。少くとも彼等が一定の標準に據り、何國人に論なく移民の制限をすると云ふなら、我我に文句の言ひやうがない。只日本人に限り特に苛酷なる取扱をすると云ふなら、玆に文句を云ふの餘地はあるけれども、それでも新たに移民を迎へる迎へぬの問題である以上、叮嚀に先方の言ひ分を聞くの必要はある。地を換へて日本が支那の苦力を容れるか容れないかと云ふ問題が起つたとして考へたならよく分る事であらう。斯う言つたからといつて予が日本の勞働者を支那の苦力と同一視したなどゝ揚げ足を取られては甚だ迷惑である。只米人の排日の理由をよく聞いてやれと云ふ迄の事である。云ふ移民の問題について差別撤廢の要求を斷じて撤回せよと云ふのではない。此點に就ては尚十分に彼我交渉を遂ぐべき問題であり、抽象的に移民來往の自由と云ふ事を振り翳して彼に迫るは誤つて居ると信ずるのである。

終りに彼地在留民に加ふる區別的待遇廢止の當然の要求を差向けるに就いても、之を外交問題として取扱ふ場合には更に一段の注意を要することがある。それは正當な要求でも輕々に出來る問題と出來ない問題とがある。例へば加州土地法の如きは如何にも不都合な法律ではあるけれども、米國の國體上中央政府では奈何ともする事が出來ない。而して我國は加州政府に向つては直接交渉の方法がない。然らば如何に中央政府に手厳しく喰つて懸つても、加州が固有の權限を楯に取つて動かない以上、結局出來ない相談に了らざるを得ない。尤も出來る相談か出來ない相談かは合衆國内部の事であり、之を顧慮して正當なる要求を手控る必要はないけれども、苟も大國の外交問題として

之を爭ふ以上は、或點まで中央政府の當局者と相當に疏通の路をつけて置かなければならない。中央政府が加州を動かして問題の正當なる解決を着くべき道德的責任を進んで取らない以上、之を表面の問題とするのは決して外交上の良策ではない。而して合衆國の中央政府がこれ丈けの道德的責任を取り得るものか否かは、日米交涉最近の歷史に通ずるものゝ深く諒解して居るべき事柄である。國際聯盟の規約が巴里に於て論議らせるゝの好機會を捕へて、此問題の解決を米國に迫つた手腕の冴えは戰略として巧妙に過ぐるものであつた。

涉外的問題に關する不理解

總て問題の正當なる解決は、事物の正當なる理解に根據しなければならない。不幸にして予輩は正しい理解を拔きにした議論を各方面に聞くのであるが、殊に近來涉外事項に關する此事の多いのを遺憾とする。正しき理解に基かざる斷案を振翳して兎も角言ふて居る間に、世界はまるで意外の方面に動いて行く。外交上の問題の發展が、總て國民の意表に出るが如き感あるは怪しむに足らない。

涉外的問題に關して吾人が如何に常に正當なる理解を缺くかは、同一事項に就き互に相容れざる說明を同時に併在せしめて訝まざる事によつても明かである。今最近の新聞に表はれた二三の例を擧げて見よう。

先づ一番近い朝鮮の事から始める。或新聞に朝鮮の今度の騷動は米國宣敎師の煽動に由る。彼等は莫大なる資金を提供して頻りに日本の統治に反抗せしめて居ると。然るに道の同じ新聞は他の一方に於て、今度の騷動は巴里の會議で朝鮮の獨立が議題に上るべしといふ誤解から起つた、仕事もせずに騷いで居つては今に食ふに困るに極つて居るから何うせ永く續く運動ではないと。

一方には米人が莫大の資金を提供したと云つて騷擾の原因を彼に歸し、他方には騷動の根柢さまで深きものにあらずと云ふて如何にも日本の施政が朝鮮人から深く恨まれて居ないと辯解せんとして居る。事物を正當に理解しての上なら、こんな矛盾した說明が同一の人から唱へらるゝ筈が無いではないか。

更に隣の支那に及んで見よう。或所で支那問題に關する某政客の演說を聞いた。此人は頻りに南北妥協、民國統一の思想を

說き、叉近年內爭を已めざるの狀態を罵つて、支那人に國家的精神がないと叫んで居つた。殊に昨今南北和議の進行を停滯せしめて居る當の責任者として、頻りに唐紹儀氏を攻擊して居る。然るに彼は叉他の一方に於て、支那が近時日本の利權獲得運動に撥を合はさない。否、動もすると我に反噬し來るの態度に出でんとするを說いて頻りに彼の不誠實を說いて居つた。殊に巴里に於ける支那委員の所謂不誠意については取分け極端な罵詈を注いで居つた。

然し事每に日本に賴れといふ事と、一日も早く統一和協せよといふ事とは兩立し得る事實か何うか。從來支那が日本に賴つたのは心から賴つたのではない。內爭の結果である。從つて賴る者は常にその一方の統治者に限つて居つた。內爭が熄み統一の實が揚がれば、支那は今までのやうな日本の遣方に共鳴し來らざるは明かである。支那問題も利己的の色眼鏡で觀ないで、もつと有りの儘に事件の發展を觀て行きたい。

今度は米國の問題に移る。米國に於ける日本人の差別的待遇は我々の憤慨して措かざる所たるは言ふまでもない。然し之は一朝一夕の事にあらず、叉單純な問題でもない。然るに我國多數の輿論は之を一片の理義の問題として之を爭はんとして居る。然しながら若し之を一片の理義の問題として爭ふなら、吾吾は直ちに我國に於ける朝鮮人・臺灣人の地位如何を反省しなければならない。朝鮮では單に朝鮮人の子たるの故を以て如何に進んで同化を希望しても日本人の學校に受け入れないと云ふ事實があつた。更に甚だしきは或日本人の子が母を朝鮮人とし、從つて日本語よりも朝鮮語により多くの親みあるの故を以て、之れ亦日本人の學校から拒まれたといふ事實がある。人種的差別待遇撤廢を唱へる前に、吾々は曾て右の點を考慮した事があるか。

朝鮮人の子を日本人の學校に入れないと云ふについては、單に朝鮮人なりと云ふ許りではない、他に叉いろ／＼の理由があらう。然らば之れ已に單純な人種問題ではない。之れ予輩が日米問題を以て亦單純なる人種問題にあらずと云ふ所以である。此等の點についても國民多數が如何に事物の正當なる理解を求むるに吝なるかを驚くものである。

人種平等主義の巴里會議に於ける運命を論じて、或る政治家は次のやうな事を言つた。曰く、國際聯盟は已に吾々を聯盟の主なる一員として仲間に入れて居るではないか。にも拘らず聯盟の他の一員が吾々に差別的待遇を與へるといふのは不都合ではないかと。然し乍ら斯くして飽くまで對等の地位を要求せん

となつては、[illegible]などについては特に[illegible]例を求むると云ふやうな論音を吹くべきでない。除外例を求むるの論據を東西國情を異にするなどと云ふけれども、畢竟此點に於て三段も四段も後れて居るといふ事實を匿くす事は出來ない。予輩は必ずしも除外例を求むべからずと云ふのでもなければ、人種不等主義を主張するなと云ふのでもない。けれども互に兩立すべからざる右の二點を無省慮に主張するの態度を難んぜんとする者である。

終りに露獨の關係について一言して置かう。近頃此兩國の結託を説くものがある。或はレーニンの代表者が獨逸に來たとか、エーペルトの代表者がモスコウに行つたとかいふ報道から推定して兩國の同盟を想像し、果ては此兩國の武力的復活を夢想して、我聯合國に對する新たなる脅威の出現を説いて居る。

然し乍ら若し露獨兩國が結托する事ありとすれば、そは必ず獨が今後過激派の主義に降服した上でなければならない、斯くの如きは全然有り得ないと思ふけれども、若し萬一有り得るとすればそは聯合國に取つて有力なる一敵國には相違なきも、然し之を武力的復活と見るは全然謬つて居る。何故なれば過激主義の勝利と武斷主義の勃興とは、始めより兩立すべからざるものであるからである。

又同じ論者は獨逸の兵力恢復の案外に早かるべき事、從つて其武力復活の近き將來に期待すべき事を説いて居る。若し獨逸にして武力的に復活する事あらんか、其時は斷じて露西亞と結託する事は有り得ない。

獨の武力的復活と、之と露國の過激主義の提携を説くが如きは、説く者の肚の底に或る一定の目論見のある事は讀めるが、然し露獨兩國の眞相を正當に理解した上の議論でない事だけは疑ない。

小題小言七則

◎樞密院の態度を議す

樞密院で一議論あるべく豫期された選擧法改正案は譯もなく通過を見た。關東州行政改革案の如きは、或る意味に於て軍閥の勢力に對する挑戰と見るべく、從つて山縣公の勢力の下にある樞密院の通過は餘程困難であらうと豫期されたのに、之れ亦すら〳〵と通過した。之を予輩は或る意味に於て樞密院の爲めに、又日本の政界の爲めに慶ふべしとする。何故なれば樞密院の如き最高の諮詢機關は

形式上の權限如何は姑く措き、實際に於ては多くの場合に於て內閣の決定に盲從すべく、よく〳〵の場合に於て始めて其法律上の權限を振り舞すべきものであるからである。普段常に法律上の權限を振り舞はしては、啻に政務の澁滯を來たし、改革の實行を不可能ならしむるのみならず、其輕々しき行動に由つて、國民の間に威信を失ふ事になる。普段は默つて居つて、よく〳〵の場合に極めて稀な例外として猛然起つて政府の非違を糺すといふ事になつて初めて樞密院を設けた意味がよく國民に徹底する。此意味に於て從來の樞密院の行動には所謂「老人の冷水」に類するものが多く、甚だ重厚な趣に缺くる所があつた。尤も今度のやうに大體政府の決定に從ふからと云つて、他日重大な問題に意見の相違あつた時まで、矢張同じく盲從するといふのでは困る。若しそれ今度の盲從が小仲修正を加へて責任を將來に避けんとしたとか、又は政黨內閣なるが故に特に虐めたといふやうな非難を避けんとしたのであると云ふやうな、そんな詰らない動機に出でたものとするならば、其は全然賞讚に値せざるは言ふまでもない。

◎京城教育會の一問題

京城通信として三月央の東京諸新聞に次のやうな記事が載つて居つた。同地の某高等女學校長が其卒業式の訓示中に一視同仁の德を說き、「朝鮮人だとて輕蔑したればこそ今度の騷動も起つた」と云ふやうな事を述べたが、後で騷動の主たる原因が日本人側にありと云ふやうな思想は此際甚だ穩當を缺くとて敎育界の一問題となつたと云ふのである。事の眞僞は能く分らないが、又眞僞の詮索は必ずしも必要でない、唯一人でもこんな馬鹿らしい咎め立てをする者が、而かも朝鮮人の中に仕事をして居る同胞の中にあるかと思ふと心細くなる。朝鮮統治成功の前途遼遠なるも又訝しむに足らない。

◎聯合國の對露策

聯合國の露國過激派政府に對する態度の不一致は現代の一大醜態である。英佛側は何とかして過激派を抑へたい、之は行掛りもあれば又實際の必要もある。併し強いて抑へんとすればもう一遍戰爭狀態に復らねばならず、斯くては國內勞働者の反感を買つて、どんな騷動が起るかも分らない。それに獨逸の或は起り得べき武力的復活に對して餘りに神經過敏であるから、露國に事を起すのは彼等の斷じて避けんとする所である。之に反して米國は國が遠い丈けに冷靜に事物を觀るの餘裕あるものと見え、英佛程獨逸を恐れてない。過激派の跋扈によつて蒙るべき影響も、國が遠い丈け強く

ないと[illegible]。それ[illegible]を[illegible]ない[illegible]ので北京政府は全然英佛と異つて居るらしい。此等の點が米と英佛との間に、何う意見の一致を見るに至るやは我々の特に注意を要する點である。

◎南北妥協の行悩み　二月廿八日一旦破裂した南北の和議は、四月に入つてまたもとに囘復した。併し我々は此會議の上に餘りに大いなる期待を置いてはいけない。南北の和議といふけれども、北が北で纏まつて居るにあらざるは勿論、南は南で決して纏つて居るのではない。段祺瑞は徐世昌に對して全然別個の天地を有するが如く、陸榮廷は必ずしも唐繼堯と最後まで事を共にするものではない。畢竟南北の和議は唐紹儀と朱啓鈐との談判に外ならない。其間の協定は南北に蟠踞する各種の勢力の銘々差支のないと認むる範圍に於てのみ有效に行はるる。唐紹儀は陝西省で陳樹藩が我儘をするからと云ふて交渉を中止したが、一旦我儘を止めたからというて安心していろくの問題を協定した所が、それが固より完全に行はるるとも限らない。畢竟南北妥協は劍を拔き掛けて困つて居る連中に、之を鞘に收むるの好き潮合を提供するに過ぎないので、各種の勢力各々割據して勝手放題の事をするといふ從來の形勢は當分[illegible]實業政治家に屬すると西南[illegible]や民黨に[illegible]たるところの和平の精神を後援助長するの外に途はない。我日本は段祺瑞の味方をするとか徐世昌の味方をするとか、或は唐紹儀、岑春煊の味方をするといふ小天地に跼蹐してはならない。須らく見えざる思想の後援者たるを期すべきである。

◎支那問題に關する一大謬想　支那問題に關する一大謬想は、一旦種を蒔いた見込のない地面に何時までも未練を殘すことである。之までの日本の官民は段祺瑞とか徐樹錚とかを見當てにして高價なる種を蒔いた。併しながら此地盤の上に立派な收穫の上るべからざるは今日餘りに明白の事實である。原内閣は此從來の謬りより醒めて、支那に對する開發事業に新規蒔き直しをやらうとして居ると聞いて居つたのに、最近に至り自分で蒔いた種を自分で踏み躙るとは何事ぞと云うて、對支政策の變更に反對する聲が有力な階級に起つて居ると聞くのは、我々の甚だ遺憾とする所である。いくら堀つても山から蛤は出て來ない。

◎世界的精神に對する共鳴　世界の大勢が斯う

と云へば、日本の國情は全く別だといふ。而して同じ人が民本主義といふ世界の大勢が押して來ると、之は何も新しいものではない、日本にも昔からあつたと云ふ。天の安河原の神集ひ山神謀りを持つて來なければ、近代的人民參政論に納得の行かないといふ連中は、一見笑ふに堪へたるが如きも、尚一面に於ては特殊原理の中に普遍的要素の潜在を認識して居るものと云はなければならない。凡そ民族各其所を異にして彼此相容れざる特色を發揮して居るは言ふを俟たない。併し乍ら彼等が其特殊のあるものの中に普遍的なる要素を具有し、此發展の上に共通の大文化を造り出しつゝあるは疑もない事實ではないか。普遍的原理を具有せざる特殊原理は存在の理由が無い。日本民族にして若し世界に其存在を主張し得る有爲なる民族とする以上、彼は必ずや世界的精神に共鳴する或物を有つて居なければならない。否、世界的精神其物を造り出す力を有つて居なければならない。

◎「**國際聯盟について**」 國際聯盟については之を贊成するものも、之に反對するものも共に精密に研究する事が當今の急務である。此時に方つて學友稻垣法學士の標題の新著に接したのは讀書界にとつて誠に喜ぶべき現象である。一言江湖に紹介する所以である。



進歩したるオッフヰースは
皆萬年筆を使用す、
進歩したる萬年筆使用者は
皆オノトを推薦す、

アルビオンは軸内のインキの量を外部より透視し得る唯一の透明器、オリオンは最も簡易低廉なる實用的萬年筆

オノト萬年筆
無飾金七圓
飾付金八圓以上

アルビオン萬年筆
飾付金五圓五十錢

オリオン萬年筆
無飾金貳圓八拾錢

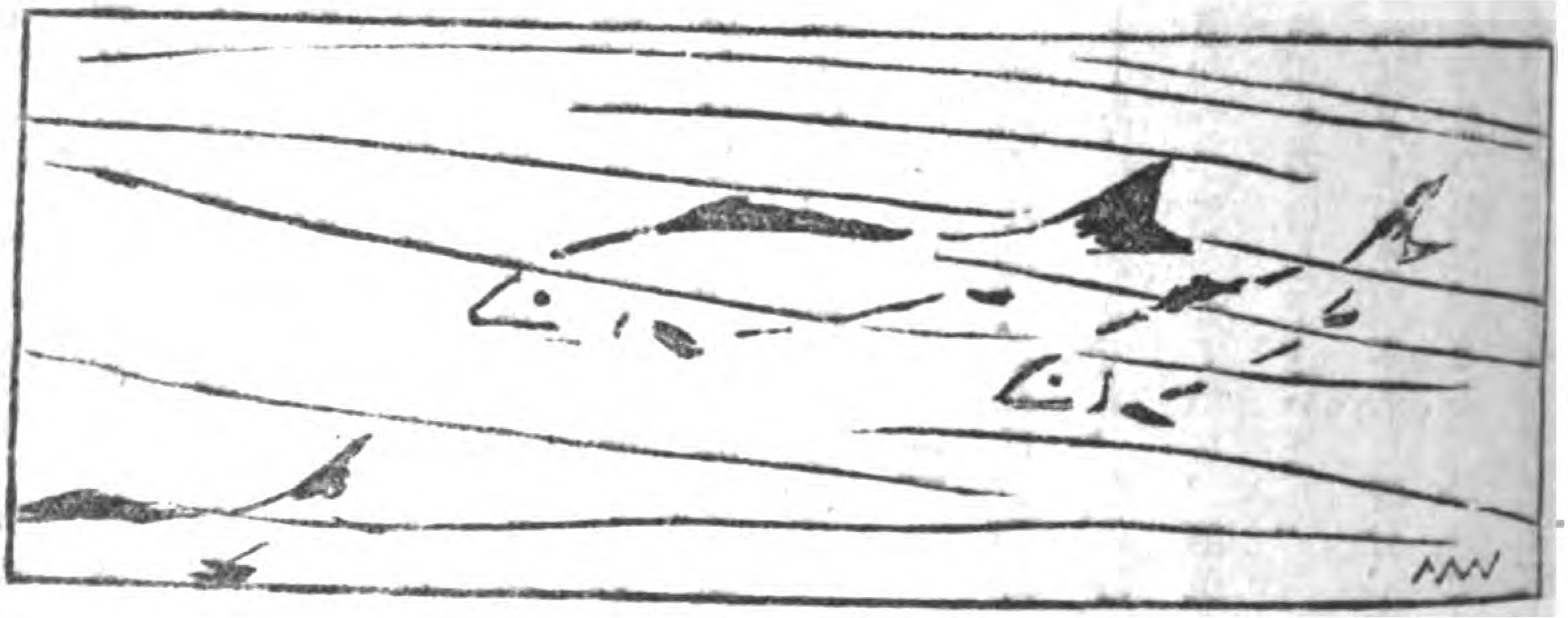
萬年筆用
アテナインキ金參拾五錢



大阪市心齋橋筋
京都市三條通

東京市日本橋通
丸善株式會社

福岡市上西町
仙臺市國分町



龍

芥川龍之介

一

宇治の大納言隆國「やれ、やれ、晝寢の夢が覺めて見れば、今日は又一段と暑いやうぢや。あの松ケ枝の藤の花さへ、ゆさりとさせる程の風も吹かぬ。何時もは涼しう聞える泉の音も、どうやら油蟬の聲にまぎれて、反つて暑苦しうなつてしまうた。どれ、又童部たちに煽いでも貰はうか。

「何、往來のものどもが集つた？　ではそちらへ參ると致さう。童部たちもその大團扇を忘れずに後からかついで參れ。

「やあ、皆のもの、予が隆國ぢや。大肌ぬぎの無禮は赦してくれい。

「さて今日はその方どもにちと頼みたい事があつて、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰うたのぢや。と申すはこの頃ふとここへ參つて、予も人並に双紙を一つ綴らうと思ひ立つたが、つらつら獨り考へて見れば、生憎予はこれと申して、耳にする程の話も知らぬ。さりながらあだ面倒な趣向などを凝らすのも、予のやうな怠け

ものには、何より臍切千萬ぢや。就いては今日から往來のその方どもに、今は昔の物語を一つづつ聞かせて貰うて、それを双紙に編みなさうと思ふ。さすれば内裡の内外ばかりうろついて居る予などには、思ひもよらぬ逸事奇聞が、舟にも載せ車にも積む程四方から集つて參るに相違あるまい。何と、皆のもの、迷惑ながらこの所望を叶へてくれる譯には行くまいか。

「何、叶へてくれる？　それは重疊、では早速一同の話を順々にこれで聞くと致さう。

「こりや童部たち、一座へ風が通ふやうに、その大團扇で煽いでくれい。それで少しは涼しくもならうと申すものぢや。鑄物師も陶器造も遠慮は入らぬ。二人ともずつとこの机のほとりへ參れ。鮓賣の女も日が近くば、桶はその緣の隅へ置いたが好いぞ。小法師も金鼓を外したらどうぢや。そこな侍も山伏も簟を敷いたらうな。

「よいか、支度が整うたら、まづ第一に年かさな陶器造の翁から、何なりとも話してくれい。」

二

翁「これは、これは、御叮嚀な御挨拶で、下賤な私どもの申し上げます話を、一々双紙に書いてやらうと仰有います——そればかりでも、私の身にとりまして、どの位恐多いかわかりせん。が、御辭退申しましては、反つて御意に逆ふ道理でございますから、御免を蒙つて一通り、多暖もない昔話を申し上げると致しませう。どうか御體屈でも暫くの間、御耳を御借し下さいまし。

「私どものまだ年若な時分、奈良に藏人得業惠印と申しまして、途方もなく鼻の大きい法師が一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思ふ位、年が年中恐しくまつ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに渾名をつけまして、鼻藏——と申しますのは、元來大鼻の藏人得業と呼ばれたのでございますが、それでは

ちと長すぎると申しますので、やがて誰云ふとなく鼻藏人と申し囃しました。が、暫く致しますと、それでもまだ長いと申しますので、さてこそ鼻藏々々と、謳はれるやうになつたのでございます。現に私も一兩度、その頃奈良の興福寺の寺内で見かけた事がございますが、いかさま鼻藏とでも譏られさうな、世にも見事な赤鼻の天狗鼻でございました。「その鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師が或夜の事、弟子もつれずに唯一人そつと猿澤の池のほとりへ參つて、あの釆女柳の前の汀へ、「三月三日この池より龍昇らんづるなり」と筆太に書いた建札を高々と一本打ちました。けれども惠印は實の所、猿澤の池に龍などがほんたうに住んでゐたかどうか、心得てゐた譯ではございません。ましてその龍が三月三日に天上すると申す事は、全く口から出まかせの法螺なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確だつたでございませう。ではどうしてそんな入らざる眞似を致したかと申しますと、惠印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の鼻を笑ひものにするのが不平なので、今度こそこの鼻藏人がうまく一番かついだ揚句、さんざん笑ひ返へしてやらうとかう云ふ魂膽で、惡戲にとりかかつたのでございます。御前などが御聞きになりましたら、嘸笑止な事と思召しませうが、何分今は昔の御話で、その頃はかやうな惡戲を致しますものが、兎角どこにもあり勝ちでございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如來樣を拜みに參ります婆さんで、これが珠數をかけた手に竹杖をせつせとつき立てながら、まだ霜のかかつてゐる池のほとりへ來かかりますと、昨日までなかつた建札が、釆女柳の下に立つて居ります。はて法會の建札にしては妙な所に立つてゐるなと不審には思つたのでございますが、何分文字が讀めませんので、その儘通りすぎやうと致しました時、折よく向うから鈍色の偏衫を着た法師が一人、通りかかつたものでございますから、賴んで讀んで貰ひますと、何しろ「三月三日この池より龍昇らんずるなり」で、

――誰でもこれには驚いたでございませう。其婆さんも呆氣にとられて、曲つた腰をのしながら、「此池に龍などが居りませうかいな」と、とぼんと法師の顔を見上げますと、法師は反つて落ち着き拂つて、「昔、唐の或學者が眉の上に瘤が出來て、痒うてたまらなんだ事があるが、或日一天俄に掻き曇つて、雷雨車軸を流すが如く降り注いだと見てあれば、忽ちその瘤がふつつと裂けて、中から一匹の黒龍が雲を捲いて一文字に昇天したと云ふ話もござる。瘤の中にさへ龍が居たなら、ましてこれ程の池の底には、何十匹となく蛟龍毒蛇が蟠つて居ようも知れぬ道理ぢや。」と、說法したさうでございます。何しろ出家に妄語はないと日頃から思ひこんだ婆さんの事でございますから、これを聞いて肝を消しますまい事か、「成程さう承りますれば、どうやらあの邊の水の色が怪しいやうに見えますわいな」で、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を獨り後に殘して、喘ぎ喘ぎ念佛を申しながら、竹杖をつく間もまだるこしさうに急いで逃げてしまひました。後で人目がございませんでしたら、腹を抱へたかつたのは此法師で――これはさうでございませう。實はあの發頭人の得業惠印渾名は鼻藏が、もう昨夜建てた高札にひつかかつた鳥がありさうだ位な甚怪しからん量見で、容子を見ながら、池のほとりを、歩いて居つたのでございますから。が、婆さんの行つた後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴の下人に荷を負はせた蟲の垂衣の女が一人、市女笠の下から建札を讀んで居るのでございます。そこで惠印は大事をとつて、一生懸命笑を嚙み殺しながら、自分も建札の前に立つて一應讀むやうなふりをすると、あの大鼻の赤鼻をさも不思議さうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺の方へ引き返して參りました。

「すると興福寺の南大門の前で、思ひがけなく顔を合せましたのは、同じ坊に住んで居つた惠門と申す法師でございます。それが惠印に出合ひますと、ふだんから片意地なげじげじ眉をちよいとひそめて、「御坊には珍しい早起きでござるな。これは天氣が變るかも知れませぬぞ。」と申しますから、こちらは得たり賢しと鼻を一ぱいににやつきながら、「如何

にもまだ龍が住んでゐぬとも限られませぬて。現にあの猿澤の池から三月三日には、龍が天上すると申すではござらぬか。」と、したり顏に答へました。これを聞いた惠門は厭はしさうに、ちろりと惠印の顏を眺めましたが、すぐに喉を鳴らしながらせせら笑つて「御坊は善い夢を見られたな。いやさ、龍の天上するなどと申す夢は吉兆ぢやとか聞いた事がござる。」と、鉢の開いた頭を傾かせた儘、行きすぎようと致しましたが、惠印がまるで獨り言のやうに、「はてさて、縁無き衆生は度し難しぢや」と、呟いた聲でも聞えたのでございませう。麻緒の足駄の齒を捩つて、憎々しげにふり返りますと、まるで法論でもしかけさうな勢で、「それとも何か龍が天上すると申す、しかとした證據がござるかな」と問ひ詰るのでございます。そこで惠印はわざと悠々と、もう朝日の光がさし始めた池の方を指さしまして、「愚僧の申す事が疑はしければ、あの釆女柳の前にある高札を讀まれたがよろしうござらう。」と、見下すやうに答へました。これにはさすがに片意地な惠門も、少しは鋒を折かれたのか、眩しさうな瞬きを一つすると、「ははあ、そのやうな高札が建ちましたか。」と氣のない聲で云ひ捨てながら、又てくてく歩き出しましたが、今度は鉢の開いた頭を傾けて、何やら考へて行くらしいのでございます。その後姿を見送つた鼻藏人の可笑しさは、大抵御推察が參りませう。惠印はどうやら赤鼻の奧がむづ痒いやうな心もちがして、しかつめらしく南大門の石段を上つて行く中にも、思はず吹き出さずには居られませんでした。

「その朝でさへ「三月三日この池より龍昇らんずるなり」の建札は、これ程の利き目がございましたから、まして一日二日と經つて見ますと、奈良の町中どこへ行つても、この猿澤の池の龍の噂が出ない所はございません。元より中には「あの建札も誰かの惡戯であらう」など申すものもございましたが、折から京では神泉苑の龍が天上致したなどと申す評判もございましたので、さう云ふものさへ内心では半信半疑と申しませうか、事によるとそんな大變があるかも知れ

ない位な氣にはなつて居つたのでございます。するとここに又思ひもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日の御社に仕へて居ります或禰宜の一人娘でとつて九つになりますのが、その後十日と經たない中に、或夜母の膝を枕にしてうとうと致して居りますと、天から一匹の黒龍が雲のやうに降つて來て、「わしは愈三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算だから、どうか安心してゐてくれい」と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめると、すぐにこれ〳〵かう〳〵と母親に話しましたので、さては猿澤の池の龍が夢枕に立つたのだと、忽ち又それが町中の大評判になつたではございませんか。かうなると話にも尾鰭がついて、やれあすこの稚兒にも龍が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも龍が現れて託宣をしたのと、まるでその猿澤の池の龍が今にもあの水の上へ、首でも出しさうな騷ぎでございます。いや、首までは出しも致しますまいが、その中に龍の正體を、目のあたりにしかと見とどけたと申す男さへ出て參りました。これは毎朝川魚を市へ賣りに出ます老爺で、その日もまだうす暗いのに猿澤の池へかかりますと、あの采女柳の枝垂れたあたり、建札のある堤の下に漫々と湛へた夜明け前の水がそこだけほんのりと明く見えたさうでございます。何分にも龍の噂がやかましい時分でございますから、「さては龍神の御出ましか」で、嬉しいともつかず、恐しいともつかず、唯ぶるぶる胴震ひをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足にそつと忍び寄ると、采女柳につかまつて、透かすやうに、池を覗ひました。するとそのほの明い水の底に、黒金の鎖を卷いたやうな何とも知れない怪しい物が、ぢつと蟠つて居りましたが、忽ち人音に驚いたのか、ずるりとそのとぐろをほどきますと、見る見る池の面に水脈が立つて、怪しい物の姿はどこへとも知れず消え失せてしまつたさうでございます。が、これを見ました老爺は、やがて總身に汗をかいて、荷を下した所へ來て見ますと、何時の間にか鯉鮒合せて二十尾もゐた商賣物がなくなつてゐたさうでございますから、「大方劫を經た獺にでも欺されたのであらう」などと哂ふものもござ

いましたら、けれども中には「龍王が擁護遊ばすあの池に龍の住まう筈もないから、これはきつと[illegible]御望みになつて、御自分のいらつしやる池の中へ御召し寄せなすつたのに相違ない」と申すものも思ひの外多かつたさうでございます。

「こちらは興福寺の惠印法師で、「三月三日この池より龍昇らんずるなり」の建札が大評判になるのにつけ、内々あの大鼻をうごめかしては、にやにや笑つて居りましたが、やがてその三月三日も四五日の中に迫つて參りますと、驚いた事には攝津の國櫻井にゐる叔母の尼が、是非その龍の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばると上つて參つたではございませんか。これには惠印も當惑して、嚇すやら、賺すやら、いろいろ手を盡して櫻井へ歸つて貰はうと致しましたが、叔母は「わしもこの年ぢやで、龍王の御姿をたつた一目拜みさへすれば、もう往生しても本望ぢや」と、剛情にも腰を据ゑて、甥の申す事などには耳を借さうとも致しません。と申してあの建札は自分が惡戲に建てたのだとも、今更白状する譯には參りませんから、惠印もとうとう我を折つて、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかりでなく、當日は一しよに龍神の天上する所を見に行くと云ふ約束までもさせられました。さてかうなつて考へますと、叔母の尼さへ龍の事を聞き傳へたのでございますから、大和の國内は申すまでもなく、攝津の國、和泉の國、河内の國を始めとして、事によると播磨の國、山城の國、近江の國、丹波の國のあたりまでも、もう此噂が一圓にひろまつてゐるのでございませう。つまり奈良の老若をかつがうと思つてした惡戲が、思ひもよらず四方の國々で何萬人とも知れない人間を瞞す事になつてしまつたのでございます。惠印はさう思ひますと、可笑しいよりは何となく空恐しい氣が先に立つて、朝夕叔母の尼の案内がてら、つれ立つて奈良の寺々を見物しに歩いて居ります間も、とんと檢非違使の眼を偸んで身を隱してゐる罪人のやうな後めたい思ひがして居りました。が、時々往來のものの話などで、あの建札へこの頃は香花が手

向けてあると云ふ噂を聞く事でもございますと、やはり氣味の悪い一方では、一かど大手柄でも建てたやうな嬉しい氣が致すのでございます。

「其内に追ひ〳〵日數が經つて、とうとう龍の天上する三月三日になつてしまひました。そこで惠印は約束の手前今更外に致し方もございませんから、澁々叔母の尼の伴をして、猿澤の池が一目に見えるあの興福寺の南大門の石段の上へ參りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡つて、門の風鐸を鳴らす程の風さへ吹く氣色はございませんでしたが、それでも今日と云ふ今日を待ち兼ねてゐた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、攝津、播磨、山城、近江、丹波の國々からも押し寄せて參つたのでございませう。石段の上に立つて眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それが又末はほのぼのと霞をかけた二條の大路のはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子の波をざはめかせて居るのでございます。と思ふとそのところどころには、青糸毛だの、赤糸毛だの、或は又栴檀庇だのの數奇を凝らした牛車がのつしりとあたりの人波を抑へて、屋形に打つた金銀の金具を折からうらゝかな春の日ざしに眩ゆくきらめかせて居りました。その外、日傘をかざすもの、平張りを空に張り渡すもの、或は又仰々しく棧敷を路に連ねるもの――まるで目の下の池のまはりは時ならない加茂の祭でも渡りさうな景色でございます。これを見た惠印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これ程の大騷ぎが始まらうとは夢にも思はずに居りましたから、さも呆れ返つたやうに叔母の尼の方をふり向きますと、「いやはや、飛んでもない人出でござるな」と情けない聲で申したぎり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元氣も出ないと見えて、その儘南大門の柱の根がたへ意氣地なく蹲つてしまひました。

「けれども元より叔母の尼には、惠印のそんな腹の底が呑みこめる譯もございませんから、こちらは頭巾もずり落ちる程一生懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程龍神の御棲まひになる池の景色は格別だの、これ程の人

出だ[illegible]た上からはきつと龍神も姿を御現しになさるだらうのと、何かと噂をつかまへては[illegible]ございます。そこでこちらも柱の根がたに蹲つてばかりは居られませんので、徐々腰を擡げて見ますと、こゝにも揉烏帽子や侍烏帽子が人山を築いて居りましたが、その中に交つてあの惠門法師も、相不變鉢の開いた頭を高く聳やかせながら、脇の目もふらず池の方を眺めて居るではございませんか。惠印は急に今までの情けない氣もちも忘れてしまつて、唯この男さへかついでやつたと云ふ可笑しさに獨り擽られながら、「御坊」と一つ聲をかけて、其から「御坊も龍の天上を御覧かな」とからかふやうに申しましたが、惠門は横柄にふりかへると、思ひの外眞面目な顏で、「さやうでござる。御同樣大分持ち遠い思ひをしますな」と、例のげじげじ眉も動かさずに答へるのでございます。これはちと藥が利きすぎた――と思ふと、浮いた聲も自然に出なくなつてしまひましたから、惠印は又元の通り世にも心細さうな顏をして、ぼんやり人の海の向うにある猿澤の池を見下しました。が、池はもう暖んだらしい底光りのする水の面に、堤をめぐつた櫻や柳を鮮にぢつと映した儘、何時になつても龍などを天上させる氣色はございません。殊にそのまはり何里四方が、隙き間もなく見物の人數で埋まつてでもゐるせいか、今日は池の廣さが日頃より一層狹く見えるやうで、第一ここに龍が居ると云ふそれが抑々途方もない譃のやうな氣が致すのでございます。

「が、一時々々と時の移つて行くのも知らないやうに、見物は皆片唾を飲んで、氣長に龍の天上を待ちかまへて居るのでございませう。門の下の人の海は益々廣がつて行くばかりで、暫くする内には牛車の數も、所によつては車の軸が互に押し合ひへし合ふ程、多くなつて參りました。それを見た惠印の情けなさは、大概前からの行きがかりでも、御推察が參るでございませう。が、ここに妙な事が起つたと申しますのは、どう云ふものか、惠印の心にもほんたうに龍が昇りさうな――それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなささうな氣がし出した事でございます。惠印は元よりあの

高札を打つた當人でございますから、そんな莫迦げた氣のすることはありさうもないものでございますが、目の下で審せつ返しつしてゐる烏帽子の波を見て居りますと、どうもそんな大變が起りさうな氣が致してなりません。これは見物の人數の心もちが何時となく鼻藏にも乘り移つたのでございませうか。それともあの建札を建てたばかりに、こんな騷ぎが始まつたと思ふと、何となく氣が咎めるので、知らず知らずほんたうに龍が昇つてくれゝば好いと念じ出したのでございませうか。その邊の事情は兎も角も、あの高札の文句を書いたものは自分だと重々承知しながら、それでも惠印は次第々々に情けない氣もちが薄くなつて、自分も叔母の尼と同じやうに飽かず池の面を眺め始めました。又成程さう云ふ氣が起りでも致しませんでしたら、昇る氣づかひのない龍を待つて、如何に不承々々とは申すものの、南大門の下に小一日も立つて居る譯には參りますまい。

「けれども猿澤の池は前の通り、漣も立てずに春の日ざしを照り返して居りばかりでございます。空もやはりほがらに晴れ渡つて、拳程の雲の影さへ漂つて居る容子はございませぬ。が、見物は相不變、日傘の陰にも、平張の下にも、或は又桟敷の欄干の後にも、簇々と重なり重なつて、朝から午へ、午から夕へ日影が移るのも忘れたやうに、龍王が姿を現すのを今か今かと待つて居りました。

「すると惠印がそこへ來てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のやうな一すぢの雲が中空にたなびいたと思ひますと、見る間にそれが大きくなつて、今までのどかに晴れてゐた空が、俄にうす暗く變りました。その途端に一陣の風がさつと猿澤の池に落ちて、鏡のやうに見えた水の面に無數の波を描きましたが、さすがに覺悟はしてゐながら慌てまどつた見物があれよあれよと申す間もなく、天を傾けてまつ白にどつと雨が降り出したではございませんか。のみならず神鳴も急に凄じく鳴りはためいて、絶えず稻妻が梭のやうに飛びちがふのでございます。それが一度鍵の手

に群る雲を引つ裂いて、瀧る勢に池の水を柱のごとく捲きおこしたさうでございましたが、惠印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を閃かせて一文字に空へ昇つて行く十丈あまりの黑龍が、朦朧として映りました。が、それは瞬く暇で、後は唯風雨の中に、池をめぐつた櫻の花がまつ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でございます――度を失つた見物が右往左往に逃げ惑つて、池にも劣らない人波を稻妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申し上げるまでもございますまい。

■さてその内に驟雨もやんで、青空が雲間に見え出しますと、惠印は鼻の大きいのも忘れたやうな顏色で、きよろきよろあたりを見廻しました。一體今見た龍の姿は眼のせいではなかつたらうか――さう思ふと、自分が高札を打つた當人だけに、どうも龍の天上するなどと申す事は、なささうな氣も致して參ります。と申して見た事は確に見たのでございますから、考へれば考へる程益々不審でたまりません。そこで側の柱の下に死んだやうになつて坐つてゐた叔母の尼を抱き起しますと、妙にてれた容子も隱しきれないで、「龍を御覽じられたかな」と臆病らしく尋ねました。すると叔母も大息をついて、暫くは口もきけないのか、唯何度となく恐しさうに頷くばかりでございましたが、やがてまた震へ聲で、「見たともの、見たともの、金色の爪ばかり閃かいた、一面にまつ黑な龍神ぢやろが」と答へるのでございます。して見ますと龍を見たのは、何も鼻藏人の得業惠印の眼のせいばかりではなかつたのでございませう。いや、後で世間の評判を聞きますと、その日そこに居合せた老若男女は、大抵皆雲の中に黑龍の天へ昇る姿を見たと申す事でございました。

「その後惠印は何かの拍子に、實はあの建札は自分の惡戯だつたと申す事を白狀してしまひましたが、惠門を始め仲間の法師は一人もその白狀をほんたうとは思はなかつたさうでございます。これで一體あの建札の惡戯は圖星に中つたのでございませうか。それとも的を外れたのでございませうか。鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師に尋ねま

しても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ございますまい。…………」

三

宇治大納言隆國「成程之は面妖な話ぢや。昔はあの猿澤池にも、龍が棲んで居つたと見えるな。何、昔もゐたかどうか分らぬ。いや、昔は棲んで居つたに相違あるまい。昔は天が下の人間も皆心から水底には、龍が住むと思うて居つたさすれば龍もおのづから天地の間に飛行して、神の如く折々は不思議な姿を現した筈ぢや。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行脚の法師の番ぢやな。

「何、その方の物語は、池の尾の禪智内供とか申す鼻の長い法師の事ぢや？　これは又鼻藏の後だけに、一段と面白からう。では早速話してくれい。――」



南瓜の苗

田中貢太郎

路次の泥濘に敷いた木炭俵の萱が、乾いた地べたに塗込んだやうに喰付いて、その袴がざらざらに剝げかけた上を履んで、奥山賢二は背の高い大きな體を猫背に屈めて、其所に軒を並べた陋屋の一軒へと入つて行つた。

狭い家の庭に向いた方の障子を取拂つた室には、前客があつて、主人夫婦と話してゐた。奥山の姿が見えると、細君が起つて來た。『奥山さんですか、さアおあがりなさい、飯田さんも見えて居りますよ。』

奥山は古ぼけた山高帽を二疊の玄關先へ投り出すやうに置いてあがると、細君の坐つてゐた所へ細君が自分で敷いてゐた汚い紀州ネルの蒲團を裏返しにして敷いてくれた。で、その上に胡坐を掻いたが、多濟のまゝで初夏の暑い陽の中を歩いて來た爲に、體が汗になつてゐて暑苦しくて仕方がない。袂から黄色になつた手布を出して、寛い額から襟元にかけて拭ふた。右の首には瘰癧の痕らしい薄黒い痕があつた。そして、手布の間から顔に不釣合な小さな眼を出して、顔の長い主人の方を見たり、小柄な胸元の骨ばつた客の方を見たりして、親しさうに口を利いた。

奥山は飯田とは、もう暫く逢はないやうな氣がした。『君とは何時逢つたかなア、』と云つて考へてみた。

『上野ぢやなかつたかなア、』と、飯田は頭をかしげながら云つた。

奥山もそれで氣が付いた。二月はじめの雲の降りさうな寒い日であつた。一部の政治浪人が主催して、××選擧期成同盟會と云ふのをやつた時に、奥山もそれに出かけて行つて、觀音堂の下の所を歩いてゐると、後から來た者が、『奥山も散髪賃がないなア、』と、大きな聲で云ふので、背後を向いてみると、飯田と小山と云ふ同志の二人が、連れ立つてゐた。散髪賃の事を云つた者は小山であつた。小山は剝げちよろけた木綿の紋付羽織を着、飯田は双子縞の羽織に樺色の毛糸の襟卷をして、鼻の先を赤くしてゐた。奥山は北の國で控訴院の判事をしてゐる兄から七八年も前にもらつた、何時も來て出る舊式のフロツクコートを着てゐた。そして、その日歸つて、細君に散髪賃の事を話すと、『散髪賃もなんですが、繪に書いた人のやうに、何時も何時も同じ物を着ずに、せめて洋服の一着位は新らしい物をこしらへたいですね、』と、云つた事を思ひ出した。

『さう、さう、上野だ。あの時に逢つて、逢はなかつたね、』

『さうだ、そして、今聞きや、細君が病氣だと云ふがどうだね、』

『肝臓病だと云ふからね、困つて居る所だ。』

『それは困つたね、醫師はどう云ふかね、』

『どうせ不治の病だよ、家内には癒る病氣だと云つてあるが、長い事はないだらう、呼吸をするたびに、瘤のやうな物が上へあがつたり下へさがつたりすると云つてゐるよ、』

『さうか、それは困つたなア、』

亭主の上に、かうなつちや、何もかも滅茶苦茶だ、』

『いや、お互に病氣は困るよ、私の家も春から家内が、煩つたり私が煩つたりして、今又家内が寢てゐると、とうとう出つてしまふ。それで、今日は中野さんに頼みがあつてやつて來た所だ。』

奥山は、この男も、あれを狙つてゐるではないかと思つて、不安を感じた。其所へ細君が茶を入れて來て、奥山と飯田との間に坐つて、皆の前にそれぞれを置いた。奥山はその茶で乾いた咽喉を潤しながら、早く云はなければいかんぞ、と思つた。

と、もう、飯田が主人の顔を見上げるやうにして口をきつた。『中野さん、あんたに頼みがあるが、明日の晩の頼母しだが、あれを皆に相談して、籤にせずに貰つてくれないかね、』

奥山はしまつたと思つた。彼も細君に云はれて、十五六圓あるその頼母しに目をつけてやつて來た所であつた。

『春から二人で煩つたのに、汁粉の資本をすつかり無くして、大に困つて居る所だ、』

奥山も二三年前、移民會社に關係して、幾等か小使に餘裕のある時に、飯田から商賣の資本が足りなくなつたからと云はれて幾等か出してやつた事があつたが、若い細君が不品行で傍の交番の巡査と怪しい噂があると云ふ事を聞いて、漠とした怒を飯田に感じた事があつたが、その怒が其所へ蘇生つて來たやうに感じた。

『好いとも、好いとも、相談して貰つてやらう、』と、主人の中野は老人に似合はない赤い受け唇の口元を顫はすやうにした。

奥山は茶碗の底に僅か殘つた冷たい茶を啜つてしまつて、澄ましたやうな顔をして庭の方を見た。三坪ばかりの空地があつて、割竹の垣根に寄つた方に、短冊のやうに土を盛りあげて、草花の苗らしい物を育てゝあつた。正午を過ぎた

ばかりの陽が其所にあつた。

『どうか頼むよ、かう何時も商賣の資本をくひ込んでゐるやうぢや仕方がない。』と、飯田は我と我身を嘲けるやうに云つてから、『奥山さんのやうに、學問でもして居ると、又何とか爲やうもあるが、私等のやうに、學問も何もそつちのけにして、わいわい騒いでゐた者はかうなると仕末が惡い。』

この言葉を聞くと、奥山もそつぽを向いてゐられなかつた。同じやうな過激な政治運動に失敗した人の中でも、飯田は比較的に入獄の日も淺く文官任用令の出ない時に自由な體となつてゐるので、身を立てるには便宜が多かつたであらうが、無謀な南洋貿易と云ふやうな事を云つて、帆船で南洋を往來した結局、信天翁の糞の採集にと行つた所は、渺たる珊瑚島で、荒涼とした海岸に、難破船の龍骨らしい物があるばかりで、鳥も何も居なかつた。そして、歸りに颶風に逢つて、マニラに漂着したと云ふ逸話を殘したのみで、素性の知れない女と同棲して、汁粉屋の亭主にまでなりさがつてゐると云ふのも、彼に修養の無い爲めだと云ふ同情は、奥山が常に持つてゐた。

『いや、もう、なんといつても、世の中が變つたから、お互に仕方がないさ、まア同志の中で、まだこれから何か爲やうと云つのは、奥山君ぐらゐの者だ。』と、中野は羅宇に紙を巻いた煙管で煙草を喫んだ。

『僕も駄目さ、時勢が變つた上に、かう貧乏しちや手が出せないからね。』

『なんと云つても奥山さんなんかは、土臺があるから、これで選擧費用の口さへ見付かれや、代議士になれるし、代議士になれや、△△會の連中なんかは、皆後輩と來てゐるから、直ぐ大臣になれんまでも、局長ぐらゐには直ぐなれるよ、なア中野さん。』

『さア、その選擧費用だて、そいつがなかなか見付からないよ、昨年の暮にも一つ見付かりさうになつてゐたが、矢張り駄

目だつた。もう、から一度躓いた者は、大井君だつて誰れだつて、矢張平凡な頭目には、第一、十年も十五年も監獄にゐちや、時勢に後れてるからね、あの間の事は、人に聞いても、書いたものを見てもどうしても繋ぎ合はせないからね、それだけでさへ一種の不具者だ。それに今の時勢ぢや、僕等のやつたやうな、自由とか、民權とか、專制とか、官僚とか、そんな抽象的な煽動的な事を云つた所で、世間が承知しないよ、其所になると、今の山崎君一派の連中は、一歩進んでゐるからね。これから先の政治家は、あア云ふ風に出て行かなくちやいかんが、僕等の頭はあまり古すぎる、やつと代議士になつた所で、何かの有志會の座長になる位が、めつけ者だ。が、併し、代議士にでもなれりや、又どうにでもなるが、運の惡い奴は、それがむつかしいよ。』

『君はいゝよ、それに君なんかは、新らしい本も讀んで居るし、若い奴等と一所になつても、負はとらないだらうが、併し、考へてみりや、あの躓きさへなければ、お互に何か一角の者になつて、今頃は、もう、そろそろ後進に後を讓つて隱居する時分だよ、僕が何時も云ふ事だが、お互に國事犯と云ふ綺麗な幽靈に騙されて、監獄へ連れて行かれたからね、』と、中野はとつて付けたやうな笑方をした。

『一體あの時分の者は、考が幼稚であつたよ、薩長政府さへ倒せば、我黨の天下になつて、金でもなんでも自由自在になると思つたからね、僕の先輩なんぞには、直ぐ我が黨の天下になるから、借金なんかうんとこしらへても好いと云つて、家も地所も抵當に入れてしまつて、酒を喫んでゐた者があつたからね、』と、飯田は微笑して、『それでも今になると、その時分が懷しいので、汁粉の材料の小豆を煮ながら、こんな事をぼんやり考へてゐて、又白晝夢が、はじまつたと云つて、よく家内に笑はれる事があるよ、』

奥山は醫師に拂はねばならぬ藥價の事を思ひ出した。せめて八圓位は入れてやらなくてはと考へて來ると、飯田が自

分の顏色を見て、自分の云ひ出さない前にと云ふやうな風で、自分があがつて來ると、直ぐ賴母しの事を云ひだした、その態度が如何にも狡猾に思はれて來た。

飯田と中野とは、まだその話を續けてゐたが、奥山の耳はその方に行かなかつた。二人の話の間に細君の聲も交るやうになつた。『あの時は鳴子の琴平樣の裏に居る時でしたから、私は裏の山へ行つて、白百合の花を折つて來ると、お爺さんは、乃公は詩を作つたと云ひましてね……』

奥山は、赤井の死刑になつた日の事だなと思つた。そして、細君の言葉に耳をやりながらも、賴母しが貰へないとすると、何處かへ行かなければならんなと思つて、あれかこれかと考へた。何時も車に乘つて出歩いてゐる眉の濃い、詐欺師のやうな男と、黄金齒の細君が何時も傍に引付いて客を監視してゐる痩せた代議士とが浮んだが、どうも金を出してくれさうな氣がしない。

『……それぢや失禮せう、ぢや、どうか、奥さんにも賴んで置きますよ、どうぞ貰つて下さい。それがないと明日から商買が出來ませんから、』と云つて、飯田は、細君にやつた眼を奥山の方へやつて、『奥山さんも、賴母しの一人だらうが、どうかくれたまへ、それから細君を大事にしたまへ、私もその内に見舞に行く。』

飯田はかう云つて坐を立つと、細君が送つて行つた。

奥山は、朝の中に來れば好かつた、と、殘念に思つてゐた。

細君が坐に戻つて來た。『私は飯田さんの事は思はなかつたが、奥山さんが入りはしないかと思つてゐたよ、』

『いや、僕も實はそれを貰ひたいと思つて來たが、飯田君があゝ云ひ出したから、』と、奥山は淋しさうに微笑した。

『さうか、それはしまつたな、』と、中野は殘念さうに云つた。

『そんな事なら、早くおつしやれば好いに、私や奥さんが病氣だから、今度のはあなたの方へ貰つてあげたら好いと、この間うち思つてゐましたよ、』

『飯田君も困つてゐるでせう、』

『飯田さんの困るのは、あんな奥さんと一所にゐるからですよ、私や飯田さんは、氣の毒とも思はない。』

『我家の婆さんは、ひどく飯田の細君が嫌ひだからね、』

『嫌ひですとも、あんな人にうしろ指を指されるやうな人は嫌ひですよ、』

『お前が嫌つても、ちよつと好い女だから、飯田は離せないよ、』

細君は默つて蔑むやうな眼で、夫の顏を見てゐたが、『…かうしてはどうでせう、飯田さんと半分わけにしては、』

『それが好い、それが好い、さうすると好い、』と、中野は一も二もなく同意した。

奥山は、心に疚しい所があつた。『それでは飯田君が困るだらう、』

『それや、多い方が好いでせうが、あなたもそれが入用で、おんなじにゐらしたから、あの時、乃公もと云へば、どうせ半分わけにすべき物だから、好いですとも、お爺さん、お前さんが行つて、さう云ふ事にしてあげてはどう、』

『好いとも、乃公が夕方に行つて、飯田に話して來る、』

『それや氣の毒だ、それに飯田君も困るだらうから、』

『當然の事だから、お爺さんに任して置きなさいよ、』

奥山は自分のやる事が卑怯なやうに思はれたが、他に金が出來さうにもないので、細君の言葉に從ふ事にして默つた。そして、あとで飯田の噂などをして歸りかけた。

『さうだ奥山さん、何時かお話のあつた南瓜の苗は、植ゑますか、』

奥山は玄關をおりかけて下駄を穿いてゐた。『貰つても好いですか、』

『好いですとも、ちや待つてゐらつしやい、引いてあげますから、』

敷居の上に片足をかけてゐた細君は、引返して行つて庭へおりた。奥山と中野とは玄關口で話してゐた。と、細君は新聞紙の破れに根本を包んだ一握の南瓜の苗を持つてあがつて來た。

奥山はそれを貰つて路次へ出ながら、中野君のああしてゐられるのも、あの細君のお蔭だと思つた。そして、彼女が、雪の市で十餘年も髪結をしながら、月に一度づつ監獄へ夫に面會に云つた事を思つてみた。

南瓜の苗に陽がさしてゐた。彼はそれを左の手に持ちかへて歩いた。

……あの晩は、石塚の細君が國から送つて來たと云つて、澤山眞綿をくれた晩だな、御馳走も平生の鰯や豚の小間切でなくて、鯖や刺身が出たな。「どうした、」といふと、石塚の奴、今度國の方へ出來る漁業會社の口を利いてやつたと云つたな、あの痘痕の顔ものんびりしてゐたぞ、幾等か纏つた金が入つたと見えるな。……

その歸りだ。あれは十一月であつたな、幾日頃であつたらう、高い所に月が出て地の上には牛乳のやうに淡い靄がゝつたぞ、石塚で長く話してゐたから、もう可成り更けてゐたな、人通のすくないあの坂をおりて、お濠の橋の上まで來ると、靄の中からひよつこり顔が出て、

「奥山さんぢやないかよ、」と、お國言葉で云つたな、聞き覺えのあるやうな聲だから、乃公も振返つた。右の眼のすこし小さい、暫く逢はなかつた顔だ。

「やあ、今歸りか、」と、乃公も足をとめたな、併し、あれは偶然出逢つたものか、それとも、乃公が石塚に行つてゐるのを知つて、その歸りを待つてゐたものか、どうも疑問だ。疑問と云へば、あの男その者が、第一疑問だ。あいつと十年も二十年も交際してゐる者でも、あいつの遣つてゐる事を知つた者が無い。國の方に財産の無い事も分つてゐる事だし、もう暫く政黨に關係してゐないから、小使をくれる者もないし、物の周旋も遣つてゐるやうにないし、それでゐて、細君の他に三四人の子供もあるらしいが、一體その生活費は何處から這入つて來る、どうも、あいつは、氣味の惡い男だ……

「久しぶりぢやから、何處かその邊で話しをせうぢやないか、」と、あの晩、あいつが云ひ出したな、乃公は氣が進まない上に、懷中に十錢の金もなかつたから、

「さうだな、」とあいつをはづさうと、その口實を考へてゐると、

「今晩はすこし金を持つちよるきに、行かう、」と、あいつが云つたな、それでも乃公の氣が進まなかつたのは、矢張りあの男の平生が面白くなかつた爲めであるが、乃公にした所で、其所で借金したり、此所で曖昧な金を貰つたりして、これと云ふ仕事をしてゐないから、考へてみれば同じ事だらう。……

「君用事があるかよ、」と、あいつが云ふから、うつかり、

「石塚君の所へ話しに行つて歸りよる所ぢや、別に用はない、」と、正直な所を云ふと、

「そんなら行かうぢやないか、暫く月ぢやないか、」と云つて、とうとう連れて行かれたな。

女中も小綺麗な奴がゐたし、室のかゝりもちよつと氣取つてゐたから、可成りな鳥屋であつたらう、それに場所が場所だ。すこし身分不相應のやうだから、怪しいと疑へば疑へない事はないが、さうでもなからう、その後あいつの遣方を見ても、時々は鳥屋ぐらゐで飯の喰へるぐらゐの收入はあるらしい。……

「さうだ君なら好い、君が適任ぢや、君一つ遣つてみないか、」と、あいつが云ひ出したのは、二人でさんざん話した後であつたな。あいつは怪物のかれこれ屋だと思つてゐたが、三大事件の時に奔走した男だけに、案外話は解つてゐるな、併し、後で、爆弾の事を書いた物があるなら借せと云つて、乃公の雜記帳を持つて行つたが、あれは何にする積りだらう……

長谷川の奴が來たのは、その翌々日であつたな。

「長谷川君も非常に人を探しよるきに、明日云ふちやれば、飛うで行く、二三日は家を開けずに居つてくれ給へ、」と、あいつが云ふから、待つて居ると、頭髮のもぢやもぢや生へた奴がやつて來た。話はあいつが鳥屋で云つたやうに、

「外來の危險思想を撲滅する爲めに、ある方面から金が出て、國家主義の雜誌をやる事になつたが、これには過去の經歴もあり、政黨政派の情僞にも通じ、それで危險人物とも多少の關係がある人でないといけないと云ふ事になつて、あつちこつち探したが、思はしい人が無くて困つてゐた所です、」

長谷川の奴、又、

「どうか引受けて下さい、その代り、この次の選擧には必らず候補者に立てると云ふ條件をつけます。」

どうせ官僚の雜誌だから、主義は合はないだらうが、代議士になりさへすれば、あとはどうにでもなると思つて承知をしたが、どうも餘り調子がよすぎたて……

それからあの怪物にあつたのは、二三日してであつたな。話してゐる内に足袋を拔いて、指の股をごりごりと掻き廻つて、白い皮を落したのは、年中水垢離をやつて、その後を綺麗に拭かないから、水蟲が出來てゐる爲めだらう。併し、あいつは怪物だ。あの口で、俺を引付けるだらうて。

「お名前は長い間承つて居りました」

「國家の爲めに大に奮發して下さい、長谷川君からの條件も皆承知して居ります」

「一方では危險人物を擯斥して下さい、」

何處から得て來たかと思はれるやうな力を以てそれかと云つて聲は大きくもない、みやうに力のある云ひ方をする奴だ……

はじめの勢では、正月早々からでも直ぐ雜誌を出すやうな勢であつたが、どうしたかなあ。

「すこし問題が起つてゐるから、それさへ落著すれば、直ぐ出す、」

長谷川の奴は、さう云ふけれどもとても物になりさうにないな。

こんな夢のやうな目には、乃公も度々逢つてゐるが、今度のは根柢がしつかりしてゐるから大丈夫だと思つてゐたが、矢張りこれも夢であつたかな。

併し、長谷川の奴が、あんなに勢込んでゐたし、怪物もあんなに云つてゐたから、成算はあつたにはあつたらう、こんな痩浪人をかついだ所で、何にもなりはしないからな、

が、世の中は多少見て來たが、世の中の事と云ふものは、何時もこんなものだ……

奧山はこんな事を思ひ思ひ、暑い陽の射した赤土の原の上を歩いてゐた。新綠を著けた樹木が其所此所に立つてゐた。左手の方になつた原の中ほどでは、僅ばかりの兵士が教練をやつてゐたが、それが小さく人形のやうに見えてゐた。

奧山は郊外の家に歸つて來た。其所は臺地の下になつた所で、杉の生垣をめぐらした中に二軒の小家があつて、土の

一町が奥山の住居になつてゐた。溝のやうに刳れた通りから、木を埋めてこしらへた二三段の土階をあがると、庭先に枯梓の井戸があつた。大柄な顔の青ぶくれた少年が米を洗つてゐるのが見えた。

『お歸りなさい、』と少年は汲みあげた釣瓶の水を洗桶に入れながら云つた。

　奥山は數日前から氣にかゝる事があつて、ある人の來るのを心待に待つてゐるので、聞いてみた。『誰れも來なかつたか、』

『えゝ、どなたも見えません、』

『さうか、』

　疲勞れて汗になつてゐる奥山は、すこしでも陽の下にゐるのが苦しいので、足を止めずに左側になつた自分の室へ這入つて、玄關の帽子掛にその帽子をかけると、客室にも寝室にも一切の事に用ゐる大きな書棚だけが眼立つて見える室へ入つて行つた。次の室には病氣の細君が、茶の間の方を枕にして、黄ろな恭黙縮の搔卷をかけ、小さな青白い顔を上にして寝てゐた。

　奥山の方で言葉をかけやうとしてゐると、細君の方で待ちかねてゐたと云ふやうに、重い病人とは思はれないやうなはつきりした聲で云つた。

『御歸りなさい、宜かつたんですか、』

『うむ全部は都合が惡るかつたがね、』

『どうしたんです、』

『飯用が來てゐたからね、』

『飯田さんどうしたんでせう、』

『春から惜て病氣したので、商買の資本を喰へんだつて、乃公より先に來て座つてゐたよ、』

『それで半分わけにしたんですか、』

『中野の細君がさうしてくれる事になつたよ、』と云つて、すこし間を置いて、『飯田が先に云ひ出したから、乃公はもう默つてゐたら、飯田が歸つて後で、細君が今年のは奧山さんに入るのぢやないかと思つてゐたと云ふから、實は貰ひたくて來たと云つたらそれぢや、半分わけにするが好い、お爺さんが飯田さんへ行つてやれと云つて、中野が夕方に飯田へ行つてくれる事になつた。』

『もう、ぢや、半分は出來るんですね、』と云つて、奧山の手にした南瓜の苗に眼をつけて、

『それ、なに、』

『南瓜の苗さ、お前が好きだから、何時か行つた時に話してあつたら、くれたんだ。』

『何處へ植えるの、』

『垣根の傍へ植えるさ、大きな奴がうんと出來るよ、』

奧山はこんな氣休めを云ひながら、緣側へ行つて苗を置き、飛白の袷羽織を脫き、セルの袴をとらうとしてゐると、細君が何か云つたやうである。

『なに、』

『飯田さんは、まだあの女を連れてゐるでせうか、』

『さうらしいな、』

「厭な方ねえ、」

奥山はシヤツ一枚になる積りで、黒いメリンスの兵子帶を解きかけてゐたが、病氣以來、男女の關係の事になるとみやうに邪推するやうになつてゐるので、うつかりした言辭はせられないと思つて、聞えない振りをして帶を解き、腰卷とシヤツになつて裸足で下におりた。

其所にも暑い夕陽があつたが、著物を拔いてゐるので冷々として氣持ちが好かつた。奥山は緣側に置いた苗を取つて、根本を包んだ新聞をほぐしながら、右手の隅になつた隣家との間に竹の袖垣をしてある方へ行つて、その隅から植えやうとしたが、穴を堀る物がないので杉の枯枝を折つて、その尖りで堀り、そこに二三本づつの苗を入れて砂をかけはじめた。苗が大きくなると、その蔓が垣根に這ひかゝるやうにしたものであつた。

……秋が來ると、大きな南瓜がこの垣に澤山ぶらさがるであらうが、その時家内はまだ生きてゐるだらうか、と考へてみると、それまで生命があらうとは、どうしても思はれなかつた。

……あれも可哀さうな女だ。あなたが國會議員になつてくれたら、あなたが國會議員になつてくれたら、と、自分の代議士になるのを待つてゐてくれたが、とうとうその滿足を得ずに淋しく死んで行かねばならぬのか。將來、何時自分に政界に出る日の來るかは分らないし、又一生そんな機會は來さうにも思へないから、どうで死ぬなれば、代議士にならずとも、せめて、生活上の苦痛を知らないやうにして死なしたいが……と、考へた奥山の、長い間の不遇にすりへらされた心は、さうした悲しみにも突き詰めては行かなかつた。

……そんな事を今更思つた所で、どうにもなるものでない。これが長い間見て來た世の中の事實だ……

南瓜の苗は二尺ぐらゐの距離を置いて植えられた。……其方儀自今東京府下に於て政治に關する事項を講談論議

するを禁ず――と云ふの告知書によつて、演說を禁止せられた青年は、[illegible]から中止を受けて、解散を命[illegible]や、の話にかこつけて、諷刺的な氣を吐いてゐた。さうした青年は、當時の人氣の中心になつた。其を贔負にする歌妓などは、引幕などを贈つて來た。この中に旭旗を染め拔いて、その左右の肩に血の付いた生首を一つづつ描いた物があつた。奥山はよくそれを思ひ出して、さうした空氣の中に浸つて得意になつてゐた子供染みた己の姿を、遠い昔の物語の中の人のやうに思つた。それと共に、引幕をくれた女の家に養はれてゐた可愛い女の子の姿を見た。その女の子は、彼が北國の監獄から歸つてみると、小さな男の子の母になつて長火鉢の前に座つてゐた。彼は其所にも己の姿を見出した。と、その女から引いた過去の線は、今、奥に半死の身を橫へてゐる現實の細君に繫がつた。……可哀さうな女だと、奥山は又思つた。南瓜の苗は、もう植はつてしまつた。その葉は萎れて砂の上にべつとりとなつて見えた。

それには水か肥料をやらねばならなかつた。奥山は糞汁をかけやらうと思つて、跼めてゐた腰をやつとこなしに延ばして眞直にしたが、さつきから陽に晒してゐた頭が熱いので、客室の並になつた便所に付いた手洗鉢で手を洗ひ、室の橫手から臺所の方へ廻つて、其所の入口の手拭掛に掛けてあつた手拭を取つて頰冠をした。そして、糞汁を汲む杓がないので、何にしたものであらうかと考へてゐると、昨年朝顏を作つた時に買つた如露のあつたのを思ひ出して、緣の下を覗いてみた。奥の室の前に錆びて赤くなつた如露が俯向けになつてゐた。それを引出したが、柄がないので、袖垣の竹の小さいのを一本拔いて來、そして、又臺所の方へ行つて細切を持つて來て如露の口にその竹を縛り付けた。で、やつと、杓が出來たので、奥山は隣家と庇合になつた便所の橫に行つて、掃除口の蓋を取り、それに杓を入れて糞汁を汲みあげて、袖垣の方の苗から順々にかけはじめた。陽にむれたその惡臭が鼻にしみた。

二杯目の糞汁をかけはじめてゐると、細君の尖りのある聲がした。

『枕もとでお穢なんかかけて、臭くつてたまらないぢやありませんか、』

奥山は杓の手をとめた。

『すこしは怺へて下さいよ、臭くつて臭くつて仕方がありませんよ、』

『よし、よし、』

『よしよしぢやありませんよ、よして下さいよ、』

『あゝ、もう濟んだ、濟んだ、』

奥山は微笑を肉の厚い頬に見せて、まだ二所三所殘つてゐた苗に、その殘りの糞汁をかけて、杓を隅の垣根に立てかけた。細君はまだ何か云つてゐた。

奥山はそれから便所の掃除口の蓋をして、臺所の方へ廻つて行つた。少年が板間の爐の前で釜の下の火を焚いてゐた。奥山は何か云つて、それに優しい顔を見せながら、流槽で足と手を洗ひ、頬冠にしてゐた手拭をとつて、それでちよつと拭いてあがり、茶の間から奥に寢てゐる細君の枕もとに行つた。

『あなたは本當に思ひやりがないわね、』

奥山は笑つてみせた。

『それでなくつてさへ、いろいろの物が鼻について困つてゐるのに、本當にあなたは、思ひやりがないんですよ、』

奥山は細君の寢床の裾の方に行つたが、疲勞が出て來て頭が重どろんで來たので、敷居と平行に體を横にして、片手で頬杖しながら、植えて來た苗の方を見た。

苗は萎れてゐた。明日の朝になれば立ちあがるだらうと思つてゐる中に、彼はつい眠つてしまつた。

奥山は暫く昏々と睡つて、眼を覺してみると、體には夜着を着せ、頭には氷をあてゝおいてあつた。彼は大きな欠伸をしながら、兩手をうんと延ばすと、右の手の先が敷居に當つて軽い痛みを感じた。

『もう起きたんですか、本當にあなたは呑氣ねえ、』

笑を含んだ細君の聲がした。細君は俯向になつて夕飯の粥を啜つてゐた。枕もとには少年が座つて給仕をしてゐた。

奥山は起きあがつて、縁側から便所に行つた。もう庭は蔭つて空氣は冷めたかつた。彼は便所から出て來ると、拔いてあつた袷を着た。

『御飯をおあがりなさいよ』

奥山の頭腦は、もうはつきりしてゐた。

『健次は済んだかね、』

『健次はまだですけれど、あれは後で好いんですよ、あなたが先へおあがりなさい。』

『まあ好い、』

『健次は此所でお給仕をしてもらつてゐるから、あなただけおあがりなさいよ、』

『まあ好い、あとで健次と一所にせう、』

奥山は少年より先に喫ふ氣はしなかつた。それは、その時ばかりではなかつた。少年は四五年前から細君の知つてゐる醫療器械屋へやられてゐたが、細君の病がひどくなつたので、先月から呼び寄せられてゐる者であつた。少年は彼と細君とが一所になつた時には、四歳ばかりであつたが、もうその時分から彼に氣を置く事を知つてゐた。彼はそれが可哀さうでもあれば、非常に可愛ゆくもあつた。

『ぢや二人で一所におあがりなさいよ、おかしな人ねえ、』と、細君は淋しい笑聲をさした。
『ぢや、そこは好いかね、』
『用があつたら呼ぶから好いんですよ、』と云つて、少年の方を見て、『ぢや一所におあがりよ、』
奥山はそれを聞くと、細君の傍を通つて茶の間に行つた。そして、後から來た少年と食卓に向きあつて、豆腐汁を汲ふて輕い食事を取つてゐると、日が暮れて、少年の點けた洋燈が光り出した。
飯の後で奥山は　客室兼用の自分の室へ歸つて、書棚の前の机に寄りかゝつて、朝見殘してあつた新聞を見てゐた。
蚊帳の中にゐた細君が暗い中から呼んだ。
『あなたの所に、すこしないんですか』
『ないが、何か買ふかね、』
『私の鷄卵と、味噌とを買ふんですよ、』
『幾等くらゐ入る、』
『一圓もあれば好いんですよ、』
『ぢや、又、書籍でも持つていくか、』
少年が顏を出すと、奥山は書棚の下の段から、二冊の洋書を出した。少年は微笑して、それを受け取つて出て行つた。
奥山はその後で、又新聞を讀んでゐたが、ふと、氣にかゝる事が浮んだので、考へ込んでゐた。
其所へ少年が用を辨じて歸つて來たので、奥山も考へ事をよして、平生のやうに少年は母の傍に寢かせ、己は其所へ蚊帳を釣して、その中に入つて寢た。

奥山が眼を覚してみると、もう朝になつてゐて、少年が縁側の雨戸をがたがたと云はせて開けてゐた。夜は縁側の方を枕にして、何時も寝癖の右枕に寝てゐた。

少年は縁側の戸を開けてしまふと、奥山の蚊帳の傍を静に通つて、玄關の方に行つて、その戸を開けかけた所で人聲がした。奥山は今日は新聞屋が馬鹿に早いなと思つた。と、少年があがつて來て、中腰になつて奥山の寝てゐる蚊帳の中を覗き込んだ。

『お父さん、お父さん、』

『なんだ。』

『お客さんですよ、』

奥山は不審に思ふた。

『誰れだ。』

『警察からですつて、二人見えて居ります。』

奥山は、もしや、あんな事に係り合ひがあるではないかと思つた。

『よし、乃公が起きる。お前は直ぐ蚊帳をはづして、床をあげてくれ、』

奥山が起きて蚊帳を脱け、枕もとに袖だたみにしてあつた羽織を引かけてゐると、少年はもう蚊帳の二隅を解いてゐた。警察からだと云ふ二人の男は、もうあがつて來て、玄關へ衝立つたなりで髭の濃い顔を並べて此方を見張るやうにしてゐた。

『あなた、なんです、』と、細君が顫のある聲で蚊帳の中から聞いた。

『別になんでもなからう、』

奥山はかう云つて玄關の方へ出ると、二人の男は座つた。

『朝早くからお氣の毒ですが、警察までお出でを願ひたい事があつてあがりました。』

男の一人は、かう云つて懷から書いた物を出して見せた。奥山はそれを見てぢつと考へ込んだ。それは彼が數日前から氣にしてゐた事が、現したのであつた。

『それぢや飯でも喫つてから行かう、』

『お氣の毒ですが、直ぐこれからお出でを願ひます。』

『よし、ぢや、便所へ行つて、着物を着更へて行かう、』

奥山が起つて便所の方へ行きかけると、二人の男も後から繼いて行つて、便所の口に立つてゐた。

奥の室の蚊帳ももうはづしてしまつて、細君は寢床の上に起きあがつてゐた。奥山が便所から出て來て着物を着更へはじめると、『あなた、なに、』

『なにか同志の事だらう、直ぐは歸れないかも分らんが、さう心配する事はない。飯でもすんだら健次をやつて、中野君に來て貰つて相談するが好い。』

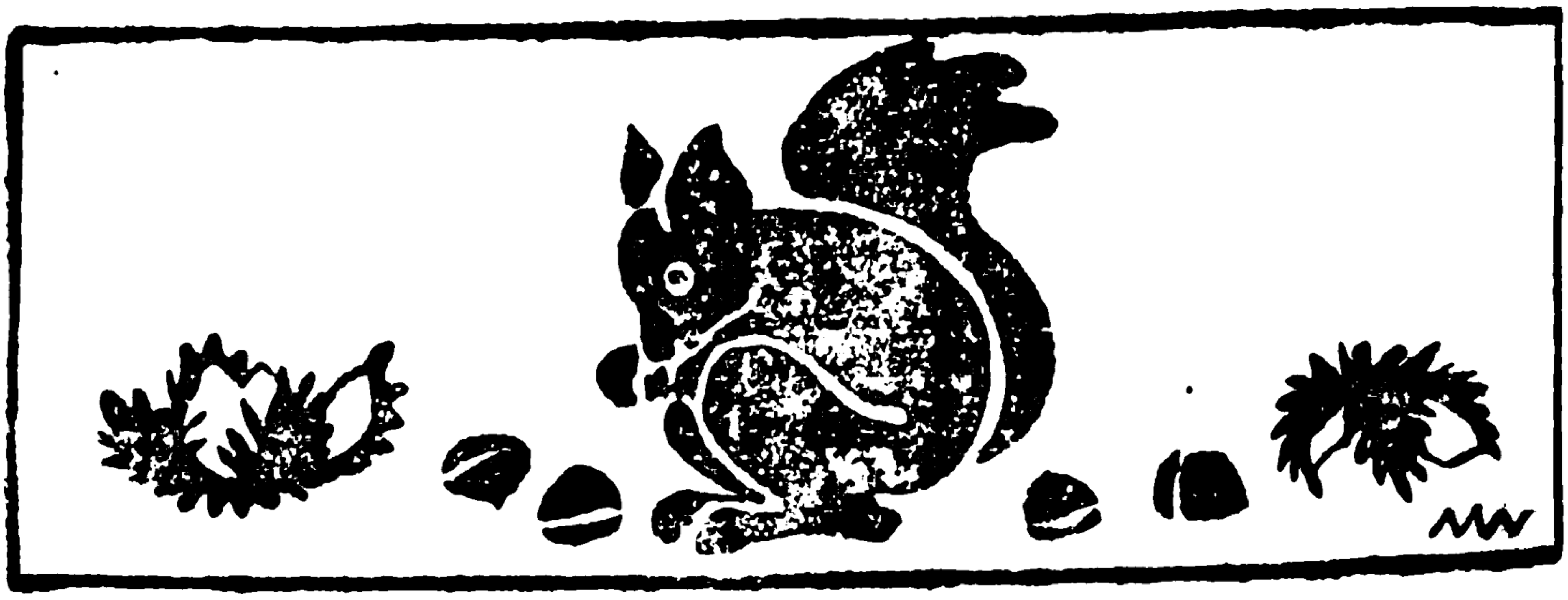
細君はもう泣いてゐた。

『乃公の事は心配する事はないから、自分の病氣を大事にせんといかんよ、』

そして、奥山は二人の男と一所に家を出やうとした。細君は少年に云ひつけて、自分の毎朝喫んでゐる牛乳を奥山の前に持つて行かした。その洋盃を持つた時の奥山の手は顫へてゐた。

南瓜の苗は、その朝まだ葉を立てなかつた。

（完）



呪はれた戯曲

谷崎潤一郎

「自然は藝術を模倣する。」とワイルドは云つたが、私が此れから話をする恐ろしい物語の中に現はれるやうな意味に於て、「自然」が「藝術」を模倣した例(ためし)を、私はまだ外に聞いたことも見たこともない。此の物語の主人公である藝術家の佐々木にしても、――(藝術家と云へば人間最高の機能を天から授かつた仕合せな男の筈である。けれども佐々木は人間よりか獣(けだもの)の心を持つた藝術家だつたのだ。獣でなくてどうしてあんな、世にも殘酷な、血も涙もない憎むべき罪惡が犯せるものか!)――また其の佐々木の妻であるところの、無慈悲な夫の毒牙に斃れた憐むべき玉子にしても、――(百人の人を殺すよりも、玉子のやうな貞淑な無邪氣な妻を一人殺す方が、夫として は遙かに殘酷な所行であると私は云ひたい!)――曾ては私の知人であつて、彼等の夫婦關係や、彼等が本郷駒込に所帶を持つて居た頃の生活の模様などを、私は满更知らない仲でもなかつたゞけに、今此の物語を書かうとするに方つて、何だか私まで が呪はれて居るやうな心地のするのを禁じ得ない。どうして私は、あんな陰険な、郷

味の惡い男を友達に持つて居たのか。どうして玉子は、あんな男の女房にならなければならなかつたか。私には未だに可憐な彼女の俤が、ありありと見えるやうな氣持ちがする。私の耳には彼女の最後の傷ましい呻き聲が地の底から聞えて來る！　實際私は其の時の光景を手に取るやうに想像する事が出來るのだ。まあ考へても見るがいゝ、玉子の様なあどけない、二十を二つ三つ越した後までも處女らしい正直と愛くるしさとを保つて居た女が、彼より外には誰一人此の世で頼る者もない其の夫から、あゝもむごたらしく取り扱はれて、殆んど闇討ちも同然に不意に命を奪はれてしまはうとは！　私は勿論、人並はづれて同情心が强い男でもなく、また彼女が殺された事に就いて、特殊の利害關係を持つて居る譯でもない。だが、生前の玉子の境遇や性格を知つて居る人間で、此れ迄世間に發表されなかつた彼女の死因の眞相を聞かされたなら、恐らく一人として彼女に同情を寄せない者はないであらう。――私が思ふのに、世の中には善人であると惡人であるとに拘らず、生れつき多くの人々から同情をされ易い性格の女がある。愛らしいうちにも何處となく哀れつぽい風情があり、日陰に咲く花のやうな淋しみを宿した、何と云ふ理由もなしに不仕合せなと云ふ感じを與へる女がある。ちやうど玉子はさう云ふ型の女だつた。十七八の娘のやうに晴れ晴れしい、林檎のやうに新鮮な血色をした圓ぽちやの頰ぺたを持ちながら、時々放心した如くぼんやりとして居る癖があつて、妙に涙脆い、かなしくなるほど氣だてのやさしい、何かの拍子に病み上りの病人じみた疲れた眼つきをする事のある女だつた。自分では其れに氣が付かないで、何處までも曇りのない、小鳥のやうな愛嬌のあるカラリとした氣象の人間だと思ひ込んで居るらしいのが、端から見ると一と入彼女をいぢらしい者にした。彼女は早くから兩親に死に別れた孤兒であつたと云ふから、そんな境遇が知らず識らずの間に暗い影を投げて居たのかも知れない。いづれにしても、彼女は戀ひ慕はれるよりも傷ましがられる女に出來て居た。――

前置きは此のくらゐにして置いて、私は直ちに本題の話に這入らう。讀者のうちで、文壇や劇壇の消息に多少通じて居られる人は、去年の夏、「善と惡」といふ一と幕物の新作の悲劇が、都下の某小劇場に上演せられたのを記憶せられること〻思ふ。あの戯曲は、或る貧乏な新劇俳優の團體に依つて、ほんの三日間ほど試演的に演ぜられたゞけであるから、世間一般には餘り注意を惹かなかつたけれど、藝術的價値から云へば可なり傑出した作品であつて、それまで凡庸作家として輕蔑されて居た作者の佐々木紅華の名は、一時に文學者の間に喧傳されたものであつた。此の物語の主人公の佐々木と云ふのは、卽ち彼のことなのである。さうして、私が敢て「呪はれた戯曲」と稱するのは、彼が唯一の傑作である其の一と幕物を指して云ふのである。なぜ其れが「呪はれた戯曲」であるか？——と云ふ事は、此物語の進行につれて自ら了解される時があるだらう。從來佐々木は新しい戯曲を書き上げると、先づ其れを何かの雜誌で發表するのが常であつたが、あの戯曲の草稿だけは或る事情の下に長らく篋底に隱されてあつたのを、いきなり而もたつた一週間稽古に懸けたきり、再び何處かへ隱されてしまつて居る。その草稿は、實に佐々木の二度目の妻であつた襟子(えりこ)の手許に今日保存されて居るので、此の物語とは密接な關係を持つ作品であるから、場合に依つたら私は其の一部なり全部なりを話の中に織り込んで、此處に掲載するかも知れない。一旦實演に供されたとは云へ、大方もう其の存在すらも忘れられてしまつた脚本であるから、更に活字として紹介するのも無駄ではなからうと私は思つて居る。

佐々木の最初の妻の玉子は、去年の二月に佐々木と一緒に上州の赤城山へ登つて、一週間ばかり其處に逗留して居たが、或る日夫につれられて山路へ散步に出た折に、過まつて足を蹈みすべらして數丈の谷底へ落ちて死んだ、と、今日まで一般に信ぜられて居た。それから又佐々木の方は、同じ年の夏あの戯曲の上演があつた後、二箇月ほどを過ぎて、極度の神經衰弱に陷つた結果精神に異狀を呈して自殺をした、と云ふ事になつて居る。佐々木の死に就いては、自殺と

云ふことに何の疑ひもある譯はない。しかし玉子の死が、決して過失から起つたのではなく、夫の佐々木に殺されたのだと云ふ事は、今や明かになつて來た。さうして佐々木の自殺は、自己の罪惡に對する良心の苛責が主な原因ではあらうけれど、あの忌まはしい戲曲を大膽にも舞臺で發表した事が、近因をなして居るのである。今考へると、あの戲曲と赤城山の事件との間には、誰が見ても深い脈絡があるらしく感ぜられるのに、我れ我れはあの芝居を見物しながら、どうして共れに氣が付かなかつたか、どうして玉子の死因に關して疑ひを挾まなかつたか、――世間と云ふものは案外迂濶だと云ふより外はない。私が玆に佐々木の秘密を摘發することが出來るのも、決して私自身の發見に依つたのではなく、彼の犯罪の直接の原因となつた戀愛事件の當事者たる襟子から、此の物語を構成するに足る凡べての材料を供給されたのである。（佐々木は自殺する少し前に、彼の犯した罪惡と良心の苦悶とを殘らず襟子に告白したのであつた。）もはや佐々木と玉子とが此の世に生存して居ない今日に於いて、彼等の秘密を私の好きな小說の形に仕組んだとて誰からも抗議を受ける心配はないのであらう。

佐々木がとうとう妻の玉子を殺さうと決心したのは、一昨年の十二月であつた。その時分になつて、どうしても玉子を殺さなければ彼女から完全に逃れる途はないと云ふ覺悟が、シッカリと彼の腹の底に根を据えた。――自分は生來恐るべき惡人でありながら、いつも善人の仲間入りをしたい虛榮心に囚はれて、中途半端な不徹底な生活を續けて居るが爲め、却つて一層罪業の數を重ね、悔恨の度を深めるやうな矛盾した結果に陷つて居る。寧ろ此れからはガラにもない虛榮心を放棄して自己の本性に復歸し、惡人なら惡人として飽く迄も徹底した方がいゝのだ。――此考が有力な槓杆と

なつて、彼の意志を其の恐るべき決心にまで押し動かして行つた。

善にもせよ、悪にもせよ、人が或る大決心を堅めた場合には、其れに附随する一種壯烈な感懐が胸一杯に溢れるものである。佐々木は自分の決心がいかに利己主義な、いかに残忍な動機から出たものであるかをよく知つて居り、いかなる點からも厘毫も假借する事の出來ない犯罪であることを認めて居たに違ひないが、其れが彼には、殉教者の心を持つた人でなければ味はひ難いやうな、寧ろ崇高と云つてもいゝくらゐに愉快な氣分に充ちた勇氣を喚ひ起させたことは事實であつた。彼は其の眞黒な邪念を頭の奥深く秘め隠しつゝ、毎日平氣で、やがて彼の罪悪の犠牲となるべき妻の玉子に接觸して居た。彼女の持ち前である無邪氣な言葉づかひや、まめやかな仕へ振りや、正直で愚鈍で而も純潔な表情の眼つきは、夫の胸に巣を喰つて居るあらゆる獰悪な感情に對照されて、一段と其の美しい輝きを増しつゝあつたにも拘らず、それが爲めに佐々木は決して憐憫を催しはしなかつた。いや、もつと深く彼の心理狀態に立ち入れば、たとへ憐憫は催すことがあつても、最後の決心だけは尚更撤回しなかつたのである。

「一日でも長く生かして置けば生かして置くだけ、餘計憐憫を催さなければならない。彼女を欺く事が可哀さうであればあるだけ、一層早く殺してしまふ必要がある。」

さう云ふ風にしか彼には考へられなかつた。彼女を哀れだと感ずることは、いよいよ彼の悪企みを促し立てる鞭にしかならなかつた。やゝともすると、彼は料理番が料理の材料となるべき鮮魚や野菜を打ち眺めるやうな工合に、彼女の顔をぢろぢろと眺めて居ることがあつた。料理番が其れ等の材料に向つてどう云ふ風に庖丁を入れ、どう云ふ風に煮たり燒いたりすべきかを考へるが如く、彼も亦彼女を如何にして殺害すべきかを考へながら、水々しくむつちりと太つた、「貞淑」と「温順」とが雪のやうに白い皮膚の色にまで現はれて居る柔かさうな肉づきを、何氣ない様子でしげしげと

見廻したりした。彼が自分を最も殘酷な人間だと感ずるのは、いつもさう云ふ瞬間であつた。こんなにもやさしい、少しく誇張して云へば天使のやうに淨らかな心と頭との持主である女に對しながら、そんな陰謀を胸に蟠んで居ることは、もう其れ自身で彼女を殺害するよりも遥かに重い罪ではあるまいか。彼女を殺す事が出來る人間でも、恐らく彼女を前にして此の陰謀を抱くことには躊躇するだらう。佐々木は彼女の生命に手を下すまでもなく、もう其の瞬間に地獄に陷ちてしまつたのである。

「あなた、此の頃はどうしてそんなに御機嫌がお惡いの。何だか始終怒つてばかり居らつしやるのね。」

そんな時に、玉子はよく斯う云つて夫の眼の中を覗き込んだ。――勿論その眼の奥に無慈悲な惡魔が潜んで居ようとは夢にも思つて居るのではない、彼女はたゞちよいとでも夫に笑顔を見せて貰へば滿足する。「昔のやうに私を可愛がつてくれずともよい。あなたに別な戀人が出來たのは悲しいけれど、それは私はちつと我慢をいたします。決して決して其れに就いて怨みがましいあてつけを云ふのではない。だが其の代り表面だけでも優しい言葉をかけて下さい。私はあなたの妻として自分に出來るだけの事はして居る積りです。せめては其れを殊勝だと思つて、可愛がる眞似事だけでもして下さい。私はつらくされるよりもいつそ欺されて居たうございます。私の前で笑つて下すつたら、陰では舌を出して居るのが分つても、それをまで追究しようとはいたしません。私は喜んで、いつでもあなたに欺されようとして居るのです。うはべだけでも自分が幸福なのだと思ひ込みたうございます。」――彼女は斯う云ひたいのであらう、彼女の小さい胸の裡には斯う云ふ哀願の言葉が、ぐつと壓さへつけられてわなゝいて居るのであらう。が、些細な事にも腹を立てて氣色を損ずる近頃の夫の素振を、ハラハラしながら見守つて居る氣の弱い彼女は、此讓步に讓步した唯一の願をだに云ひ出さうとはしなかつた。思ひ切つて云ひかけては、夫の嶮しい眉根に氣がつくと、急に淋しい笑ひに紛らして、

涼しい瞳を甘へるやうにぱつちりと瞠るだけであつた。時としては瞠つた目を落してしばたたいて涙を隠すこともあつた。しかし彼女がそんなにして隠すまでもなく、彼女の睫毛の端からあはや涙が落ちて來さうなけはひが見えると、佐々木はいつも眼敏く其れに感づいて、自分の方から顔を背けてしまふのである。

「何と云ふ意地の悪い夫だらう。此の涙をさへ哀れとは見てくれないで、わざとそ知らぬ風を装つて居ようとは！」

玉子はきつと腹の中でさう思つて居たに違ひない。善良でさうして單純な彼女の頭で、どうして此れ以上の「悪」を想像することが出來ようぞ！　けれども佐々木の此の行爲は、決して持ち前の意地悪から出たものとばかりは云へなかつた。さう云ふ場合の彼の態度には、平生の剛腹な夫としては似合はしからぬ素振があつた。妻の涙から顔を背ける時、彼はいつでも恐ろしい物を見まいとするやうに、臆病らしく眼を伏せて頭を垂れた。彼はことさらに見て見ぬ振りをするのではなく、見ようとしても面を上げ得ない人の如くであつた。彼女の涙を哀れと見るには、あまりに悪人過ぎることを自分でもよく知つて居た。悪魔が神を恐れるやうに、彼は彼女の涙を恐れた。

だが、いくら顔を背けても、彼女が訴へようとして訴へられずに居る心の聲は、はつきりと佐々木の胸にこたへたのである。たとへどれほど冷めたくなつた夫婦の間にでも、それを感得するくらゐな脈絡が通つて居ない筈があらうか！　この脈絡が、——この以心傳心の感應作用が、むかし相愛の仲であつた時代の唯一の形見、云はゞ二人の心臓に殘つて居る戀の廃墟ではなからうか。二人の間に少しでも夫婦の關係が殘つて居るとすれば、たゞ此の形見のお蔭である。此の形見があるばかりに、彼等はまだお互ひに「夫」と呼ばれ「妻」と呼ばれる權利を持つ。どうかして夫の愛を取り戻したいと願つて居る玉子は、半ば絶望しながらも、自分の胸に枯れ朽ちて横はつて居る戀の廃墟を掘り返しつゝ、追憶のなつかしさに生きて居るのである。それとは反對に、一刻も長く夫婦の關係を忘れて居たいと努めつゝある佐々木に對して、

その形見は何と云ふ不都合な邪魔物であつたらう、こんな物がある爲めに、佐々木はどんなに彼女を疎んじても、やつぱり自分が彼女の「夫」であることを事實の上に證據立てられる。どんなに冷酷になりきらうとしても、彼女を路傍の人と觀じ、あかの他人と感ずるまでにはなれないのである。

實際、若し此の傷ましい愛情の形見、――夫婦の心臓を繋ぐ最後の脈絡を、他の方法で斷ち切る手段があつたならば、佐々木は妻を殺さずに濟んだかも知れなかつた。彼の目的とするところは、たとへ彼女を殺さないでも、彼女に對して徹頭徹尾無關心の狀態に自分を据ゑることが出來さへすればいゝのであつた。自分は妻の顔を忘れ、妻の肉體を忘れ、妻の魂をも忘れ得る境涯に這入りたい。それ等の物を自分の頭から拭ふが如く滅却し去つて、全然彼女の影響の圏外へ自己を開放してしまひたい！ さう思つて彼は此れまでにどんなに苦心したゞらう。どんなに體驗を積み修行を重ねたゞらう。玉子の殊勝らしく打ち萎れて居るいたいたしい姿を見せつけられる毎に、彼は幾度び心中の惡魔を呼び醒まして鞭撻の言葉を加へたらう。

「玉子は今あゝして己に訴へて居る。あゝしてぽろぽろ涙を落して居る。あゝして愼ましやかに控へて居るあの女の心の悲しみが、いかに感じまい感じまいとしても、己の胸にこつそりと流れ込んで來る。――此の女が己の女房だつたのか、此のしほらしい、此の無殘な姿をした女が己の女房だつたのか。――あれを見ると己は何だかそんな氣持ちになる。あゝ『女房！』『何と云ふ嫌な言葉だらう！ 此の女の前に來ると、なぜ己はいつもいつも『此れが己の女房だ』と云ふ氣持ちから逃れることが出來ないのだらう。成程己は嘗て此の女を愛した。嘗て此の女と結婚した。嘗て己と此の女とは夫婦であつた。けれども今は、斷じて今は此の女を愛して居ない！ 此の女と夫婦ではない！ たとへ世間的には夫婦であつても、精神的には決して夫婦だとは云はれない。己の魂は、己の愛情は、悉くあの襟子に捧げてしまつて居る。己

の心と玉子の心との間には、――いやそれどころか、近頃ではもう肉體と肉體との間にすらも、夫婦的關係は殆んど存在して居ないのだ。それだのにどうして己は、彼女をあかの他人同様に冷眼に見る事が出來ないのか。あの女の泣くのが何だ。あの女の溜息が何だ、あほらしさがどうしたと云ふのだ。あの女の身の上が氣の毒だと云ふたら、あかの他人のうちにはあの女より十層倍も悲惨な境遇の人間が幾人も居るぢやないか。彼女があかの他人の一人だとしたら、特に取り立てゝ氣の毒がつたり、哀れを催す理由はないぢやないか。あの女は馬鹿な女だ、自分とは全然頭の程度の違ふ女だ、三文の價値もない人間の屑だ。あんな愚鈍な、あんな無智な女の魂なんか、存在を認める必要もないくらゐなんだ。魂のない、人間の形をした肉體の塊だと思つていゝんだ。さう云ふ風に悟つてしまへば、彼奴を木の端土の塊だと觀念してしまへば、己は完全に彼の女の束縛を超越する事が出來るぢやないか。」

佐々木が斯うして飽く迄も妻の存在を無視しようとする努力は、恰も三昧の境地に入らうとして煩悩解脱の工夫をする僧侶の苦心にも似たものがあつた。彼女の憂ひに充ちた顏色や、哀願を籠めた涙の雫に對する時、佐々木は眞面目にそれ等の物を一枚の白紙、乃至は一滴の雨水に異らずと觀じ得るやうな、冷靜な心境を養ひたいと思つたりした。

「自分は一體、何の積りでこんな女と結婚したのだらう。たとへ一時にもせよ、こんな女をどうして可愛がつたのだらう。あの味もそつけもない、驢馬のやな愚鈍な表情をした顏つきを見ろ。生き生きとした魅力に充ちて居る崇子の容貌とはまるで比較にならないぢやないか。」

――が、同時に斯かる悔恨の情が、胸の底からしみじみと湧いて來るのを如何ともする事が出來なかつた。さうして、悔恨の情が募れば募るだけ、却つて彼は冷靜を失して、「此れが己の女房だ」と云ふ意識が强まるばかりであつた。いかにも此の女は愚鈍であるには違ひない。隨つて其の容貌も精神的の光彩を缺いて居るには相違ない。けれども彼女

か若し彼の女房でなかつたら、佐々木に對して其れ等の缺點がそんなに痛切に感ぜられるだらうか。愚鈍ではあるが、彼女の頭腦の程度は世間一般の無教育な女たちに比べて、少くとも同等の水平線には立つて居る。器量にしてもあながち美人でないとは云はれない。あかの他人に評價させれば、彼女は人の妻たる資格を立派に充分に備へて居ると、云はれてもいゝ女である。それ故にこそ佐々木は彼女と結婚したのではなかつたらうか。――現在の佐々木が、彼女に對して抱いて居る名狀し難い嫌惡の情は、長年連れ添つた夫でなければ抱くことの出來ない、或る特別の情緒ではないだらうか。さう考へると、彼は彼女をどんなに强く嫌つたところが、嫌ふほどいよいよ深く絡み着かれ纏ひ着かれてしまふのであつた。彼女を可哀さうな女だと思ふ感情からは超越することが出來たにもせよ、此の嫌惡の情だけは容易に振り捨てることが出來ない。さうして更に惡い事は、嫌惡の情の迸る處には日のさす場所に極まつて影が伴ふ如く、哀憐の情も亦根を張つて已まなかつた。晝の後から必ず夜が來るやうに、佐々木は彼女を憎んだ後で、いつでもきつと云ひやうのない悲痛の雲が、彼女の胸と自分の胸とを一樣に暗く切なく鎖しに來るのを見たのであつた。彼女の心の琴線が一と度び哀音を奏で始めれば、佐々木の心の琴線も、佐々木には何の斷りもなしに忽ち相應じて同じ調を響かせる。果ては口惜しくも其の哀音に促されて、玉子ばかりか佐々木までがつひ涙をこぼしさうになる。

「それ見た事か、やつぱりお前と玉子とは精神的にも夫婦ぢやないか。お前の心と玉子の心とは斯うして一つの情緒の中に融け合つて居るぢやないか。お前は此の女を嫌つて戀人の樣子に夢中になつて居る。だが戀人の心とお前の心とが斯うも美しく融け合ふ事があるだらうか。戀し合ふのみが夫婦ではない。お前たちばかりでなく、世間一般の夫婦の間には、戀愛の泉が涸れ盡きた時、更に別箇の情緒が生れて、それに結び着けられながら彼等は生涯を共にして行く。――お前が今味はつて居る情緒がそれだ。悲しみに浸る時にこそ二人の魂はほんたうに、ぴつたり抱き合ふのだ。さう云

ふ風にして相抱いて居る二つの魂の関係こそ、恋愛関係よりも遥かに強い結合なのだ。それが世間の「夫婦」――何んでも呪つても一生離れることの出来ない「夫婦」の間柄なのだ。一旦結婚して夫と呼ばれ妻と呼ばれるが最後、誰にしたつてもう其の関係を逃れる事は出来ないのだ。お前が彼女を離縁すれば世間的には其の関係を絶つたと云はれよう。しかし彼女の心の琴線は、百里二百里を隔てゝ住んでもお前の琴線に響きを傳へずには居ない。お前が彼女を虐げた記憶が鮮かであれば鮮かであるだけ、響きは餘計傳はつて來る。彼女がどんな遠い所へ追ひやられて外の男を亭主に持たうとも、やつぱり彼女の魂はお前の魂の中に生きて居る。お前は彼女の魂を三文の價値すらない物だと云つたが、三文でも價値は價値だ。魂は魂だ。お前は彼女を一片の土塊に等しく見做さうとする。だが、見做せるものと思ふなら見做すがいゝ。たとへ肉體を土塊と見做す事が出來ても、あの女には『魂』がある！　其の魂はいかに愚かでもいかに單純でも厳然たる人間の『魂』なのだぞ。お前は其れを土塊と等しく見る事が出來るか。脚下に蹈み躙つてしまへるか。それどころかお前は今、その愚かな、『無』に等しいほど無價値な彼女の魂に散々悩まされて居るではないか。お前がいくら嫌がつても、現にお前の魂はしつかりと其の魂に抱き着いてしまつたではないか。」

此の良心の囁きが、哀憐の情に培はれつゝ佐々木の頭に忍び足で這入つて來る。「此れが己の女房だ」と云ふ叫びが、又しても惻々と胸に迫る。――

世の中には佐々木以上に妻に對して苛酷な男が、随分多く居るやうに思はれる。出來るだけ虐待した上に、平氣で離縁をして新しい戀人を後妻に迎へる。彼等は前妻に不幸を齎した自分達の行爲に就いて、何等の不快な記憶をも持つて居ないかのやうに見える。そんなら彼等は佐々木よりも性質の殘忍な惡人であるかと云ふのに、必ずしもさうであるとは限らない。妻が逆境に沈淪すると云ふ、たゞそれだけの事實に止まるなら、佐々木は彼等のしたよりももつともつと殘

忍な行爲に出る事を躊躇しない、佐々木の恐れる所は「妻に不幸を爲す」ことではなくて、その後に來る長い間の「不快な記憶」が、彼の享樂生活の妨害になりはしないかと云ふ一事であつた。自分の腦裡に不快な回想や陰鬱な追憶が巣を喰つて居れば、自然と其れが樣子の方へも暗い影を漂はせて、二人の戀の圓滿が傷けられはしないだらうか。妻は有り得るだけ不幸であつて差支へない、しかし自分は、有り得るだけ幸福であらねばならない！さう考へて居るところに人一倍の殘忍性がある事を、佐々木は自分でも認めない譯には行かなかつた。

彼は又、悟道の爲めに家を捨て妻子を捨てゝ佛門に歸依した名僧智識の場合などを考へて見た。彼等は其の動機が善であつたが故に、たやすく妻の羈絆から脱する事が出來たのであらうか。しかし其の動機が何であらうと、捨てられた妻の不幸に變りのあらう筈はない。生れつき善人であつた彼等には、妻に不幸を爲した事が、我れ我れよりも一層悲しみの種となつたに違ひない。彼等はたゞ信仰の力に依つて其の悲しみに打克たうとした。それと同じやうに、佐々木はなぜ、戀愛の力に依つて打ち克たうとしないのだらうか。彼の樣子を戀する心は、名僧智識の信仰に比べて宗教的情熱が乏しいのであらうか？——此の質問に對しては、彼は斷然「否」と答へる。自分が樣子にあこがれる程度は、殆んど盲目的の崇拜に近いものがある。自分の樣子に渇仰するのは、宗教家が佛に對するのと何等の相違もない。此の點に於いて、自分はたしかに彼等と同樣の情熱を抱いて居る。自分が妻との連絡から脱離する事が出來ないのは、情熱の有無や程度に關係して居るのではなささうに思はれる。前にも述べた通り、名僧智識でなくとも、世間には單に卑しい不道德な動機から、どうかすると淺はかなほんの一時の氣紛れからさへ、罪咎もない妻を逆境に陷れて平氣で居る人が澤山ある。さうして見ると、其れは情熱の程度に關係がないのみならず、動機の善惡にも拘らないのである。佐々木に云はせれば其れは其の個人々々のテンペラメント、——もつと適切に云へば其の人の體質の中にある神經の鈍さ鋭さ——に因る

のだとするより外はない。古の名僧智識は神經の逞い人々ではなかつたにせよ、少くとも頑健な神經を持つて居た。その神經は彼等の堅固な意志に對して妨害をする程病的ではなかつたらうと想像される。然るに佐々木には、不幸にして近代人に特有な、過度に銳敏な、病的な神經があつた。彼の心は、放埒な、飽くことを知らぬ利己的な情慾と、此の病的な神經とが、經となり緯となつて作り出された一枚の織物に似て居た。云ふ迄もなく道德的良心の銳敏と、神經衰弱的敏感とは全く種類を異にして居る。けれども佐々木は此の特質がある爲めに、たま〳〵「惡」の實行に際して、臆病であるかのやうに見えた。彼は自分の神經が複雜な過度な刺戟に堪へ得ないことを明かに知つて居た。自分は今、妻に對する根強い嫌惡と襟子に對する物狂しい愛慾とで、朝な夕なに交る交る攻め立てられて居る。此の現在の狀態に於いてすら自分の纖弱な神經は極端から極端へ走る刺戟の變化に應接し切れなくなつて居る。かゝる狀態が長く續くだけでも自分は發狂しさうだのに、此の上神經にさはるやうな行動を取つたら、歡樂に醉ふ暇もなしに死んでしまひはしないだらうか？――かう云ふ懸念が、絕えず魔の如く附き纏つて佐々木を脅やかして居た。彼は他人の不幸などを屁とも思はぬ男でありながら、其れが彼の脆い神經を昂奮させるやうな形に於いて起ることは、寧ろ彼自身の利益の爲めに恐ろしかつた。…………

それならどうして、彼は妻を殺さうと決心したのだらう？彼女を離緣する事さへなし得ない、そんなに迄小膽な佐々木が、どうしてさう云ふ大それた眞似をしたのだらう？其れを說明するには、妻の玉子の態度を玆に少しく語らなければならない。――正直で愚かで、肉體的にも健かであつた玉子は、もともと佐々木とは反對に頗る神經の鈍い方の女であつた。佐々木は彼女の存在を心の底から呪はずには居られなかつたが、しかし「神經が鈍い」と云ふ一點に於いては、まだしも自分に好都合だと考へて居た。若しも彼女が感じの敏い邪推深い女であつて、夫の戀を妨げる爲めに有らゆる

辛辣な奸計を設け、犀利な毒舌を弄したとしたら、恐らく佐々木の神經はいやが上にも掻きむしられて疾うの昔に發狂してしまつただらう。彼が其の脆弱な神經を以て強度な刺戟に抵抗しつゝも、葆子との戀を樂しむことが出來たのは、半ばは玉子の無神經のお蔭であつた。

「僕の女房はおめでたいから大丈夫だよ。それが彼奴のせめてもの取り柄さ。」

彼はかう云つて、葆子を安心させ、自分でも安心して居た。一體人間と云ふ者は自己の好都合を誇張的に考へる癖があつて、佐々木一人に限つたことではないかも知れない、が、狡猾な彼は深くも妻のおめでたさに信頼して居た。彼女のどんなに虐待されても容易に心までこたへさうもない水々した體質、苦勞のわりには衰への目立たない、常に色つやのいゝ豐かな肉づきは、そのおめでたさを永遠に保證して居るらしく見えた。勿論以前のやうなコケットリーは今の彼女のどの方面にも殘つては居ない。その表情は日増しに淋しくなるばかりである。けれども彼女の盛んな健康は、表情とは無關係に、體中のあらゆる部分にうら若い血を燃やして居た。をりをり彼女の泣く時があつても、その涙が流れ落ちる頬の肉は、桃の實のやうに赤かつた。彼女は恐らく、世路の艱難を嘗め盡して四十五十の歳になるまで生きて居ても、まだ何處かしらに「處女の誇」を想はせるやうな無邪氣さを維持し得たであらう。些細な物にも激動し易い佐々木の神經に取つて、彼女の涙は少からぬ威嚇であつたが、同時に豚の如く脂切つた强壯な彼女の肉體は、その昂奮を緩和させる鎭靜劑であり慰安であつた。

「此の女の頬が靑ざめて來ない間は、――此の女が貧血に苦しみヒステリーに苦しむ徴候を示さない間は、――己はもつと虐待しても差支へない！」

佐々木は始終彼女の眼の色に注意して居た。其處から今にヒステリカルな、氣違ひじみた表情がイライラと輝き出し

はしないだらうか？——一つの殘忍な行爲が成された後では、必ず斯う云ふ危惧が彼を襲つた。ちやうど、臆な盜賊が人の寢息を窺ひながらビクビクもので偸みに這入るやうに、彼は妻の眼の色を判じつゝ虐待の器を執つた。だが好人物の玉子は、夫にこんな滑稽な弱點があることを知る由はない。彼女がもう少し意地の惡い、頭の働く女であつたら、發狂の眞似をして夫を思ふさま惱ますのは譯のない事であつたらうに、さう云ふ芝居を演ずるには餘りに呑氣過ぎ、餘りに無技巧過ぎて居た。そのいつもいつも和氣藹々とした、單調なくらゐに淨らかな眸の裏には、時として包むにあまる憂ひの影のさす折があつても、それは白百合の花に宿る朝露のやうに清々しく新鮮なだけであつた。

「妻と云ふ者は、一體誰の妻でもさう夫から愛せられるものではない。却つて夫の戀路の邪魔をする憎まれ役に廻るのが、多くの妻の運命である。さうだとすれば、己は襟子と結婚する事が出來ない限り、憎まれ役として最も不適當な玉子を妻に持つた事を、不幸中の幸だとしなければなるまい。」

さう思つて佐々木はいくらかあきらめても居たのである。

けれども、此の不幸中の幸は佐々木の爲めに長く續いてはくれなかつた。其の時分になつて、妻の態度が少しづゝ彼の身勝手な信頼を裏切りつゝあることを、佐々木は多少の恐怖を以つて嗅ぎつけるやうになつた。——其の時分と云ふのはたしか一昨年の春の末、五月下旬の頃であつたらう、平生めつたに家に泊つた例のない佐々木が、或る日久し振りで妻と褥を並べつゝ一と夜を過した事があつた。その折始めて、彼女は何と思つたか長い間堪へ忍んで居た嘆きと怨みとを、夫に向つて俄かに熱烈に掻き口説き出したのである。

「あなた、ねえあなた、後生だから後生お願ひだからそんなに其方ばかり向いて居ないで、どうぞ此方を向いて下さい。たまにはあなたの顔を私に一と目見せて下さい。どうぞ、どうぞ、どうぞお願ひ申します。どうしてあなたはそん

なに私をお嫌ひなさるのでせう。あたしはあなたに嫌はれたのに、あなたの顔が見たくつて見たくつて………」

此の言葉と共に、妻の眼からは極めて突然夥しい涙が止め度なく流れ落ち流れ落ちた。それはいつもの遠慮がちな、しめやかにぽつりと一點はふり落ちるやうな涙ではなく、彼女の健康な體力と水々しい血液との限りを盡して渾身から沸き上つて來る、煮え返るやうな涙であつた。佐々木は何處までも剛情を張り通して、彼女の方へ冷たい背中を向けて居ながらも、そのしたゝかな涙の勢に不思議な氣後れを覺えずには居られなかつた。彼女は自分でも其の涙をどうする譯にも行かなかつたのであらう、聲を立てまいとして激しくしやくり上げながら、一生懸命に息を殺して居る代りに、體中を藻掻いて泣いた。

「………今更あたしをそんなに嫌つたつて仕方がないぢやありませんか。あたしと結婚なすつたのは、あなたが惡いんぢやありませんか。ねえ、あなた、あなたつてば!………みんなあなたが惡いんです。あたしはちつとも惡かありません。あたしは可哀さうな女です。あなたはきつと、私を逐ひ出して襟子さんを内へ入れようとなすつて居らつしやるんでせう。さうしたらあたしはどうしませう。あたしには親もなし兄弟もなし、あなたの内を逐ひ出されたら外に行く處はないんですよ。………ねえ、後生だから、ちよいとでいゝから此方へ顔を見せて下さい。ねえあなたつてば!あなた、あなた、あなた、あなた、あなた、………」

かう云ふ間にも涙は後から後からと流れ出た。が、彼女はもう其涙を呑み込む事すら敢てしないで、流れ放題に打ち捨てたまゝ、夫の枕元へ顔を擦り寄せつゝ一つ事を繰り返し繰り返し訴へるのであつた。佐々木は尚も眼を瞑つて知らぬ振りをして居たが、さうすればするほど彼女はいよいよ襟頸へしがみ着いて來て、頸飾りの鈴のやうに耳の側で騒々しく泣き咽んだ。どうかすると、犬が主人の足の先にぢやれ廻るが如く、彼女は唇の端で夫の耳朶をぱくりぱくりと咬

んで見たり摑つて見たりしたおかげ、殆んど[illegible]を失つたかのやうに[illegible]もなく[illegible]しだらで紙屑籠からこぼれ出る襤褸のやうに醜く拙くはあつたけれども、それが涙に濡れ光り熱せられて、異様に粘つこい力を持つた聲音の中に溶け込みつゝ、沸騰する酒のやうに降りかゝつて來るのを、佐々木は心に聞くまいとしても聞かずに居る事は出來なかつた。彼の耳朶に降りかゝつて來るものは言葉ばかりでなく、涙も其れと量を爭つてさめざめと注がれるのであつた。始めのうちは雨が瓦を叩くやうにばらばらと粒を落して居たものが、しまひには顳顬のあたりへびつしよりと水の如く纏はつて、やがて彼の頰の上にまで幾筋もの絲を曳き始めた。其れは佐々木が嘗て經驗したことのない程、灼けるやうに熱い涙であつた。涙自身が蛇の如くのたうち廻る生物であつて、彼女の爲めに夫に哀願して居るのかと訝しまれるほど、執拗に佐々木の頰の上を這つて流れながら、頰を傳はり、鼻筋を傳はり、果ては眼の中へも口の中へも容赦なく割り込んで行つた。その涙の熱に浸され、その言葉の息がかゝつたら、冷たい銅像でも彼女に對してきつと暖かい胸を開いたに違ひない。!佐々木がどんなに體を固く硬張らせ心臟を引き締めようと努めても、綿々として彼の耳元から沸り落ちる言葉の數々は、其の胸の中を瀧壺のやうに氾濫させた。彼は否でも應でも自分の眼瞼の内に滲み入る妻の涙を味はひ、自分の唇を割つて這入る妻の涙を呑み込まねばならなかつた。いつしか彼の眼は妻の涙を以て泣き、彼の鼻と咽喉とは妻の涙に依つて歔欷した。——自分の眼の球を熱くさせて居るものは、自分が吸り上げて居るものは、妻の涙であらうか其れとも自分の涙であらうか。自分の頰を傳はつて居る涙は、誰が流して居るのだらうか。——さう思つた時、佐々木は既に自分も泣きつゝある事を感じたのである。

「なぜ己は此の女と一緒になつて泣くのだらうか。こんなにしつツこくしがみ着いて來る女を、なぜ己は向うへ蹴飛ばしてしまはないのだらうか。」

か弱い女、痴鈍な女として輕んじて居たところの妻から、佐々木は明らかに身動きのならない壓迫を加へられたのであつた。彼は勿論、今夜始めて妻の不幸をしみじみと悟つた譯ではない。自分がどれ程彼女を虐待しつゝあるか、彼女の胸の中にはどれ程の悲しみが湛へられて居るか、それは今更彼女の訴へを聽くまでもなく、最初から分り切つて居たのである。彼女がいかに涙を交へて其の悲しみを數へ立てようとも、其處に佐々木を動かすべき新しい理由が生ずる筈はない。佐々木が感じたところの壓迫は、精神的の其れではなくて寧ろ彼女の肉體から來る壓迫であつた。少くとも佐佐木に取つては、肉體的として感ぜられた。滾々として無限の泉の如く湧き上り降り注いで來る多量の涙、さうして其の一滴一滴が含んで居る火のやうな熱さ、――此れ等のものゝ與へる壓迫を、肉體的と云はないで何と云ひ得よう！彼女の唇を衝いて出る言葉にしても、それはたゞ健やかな肺臟から吐き出された恐ろしい底力のある呼吸として、火照つた、深い息として、彼の官能を痺れさせ惑亂させた。それればかりではない、佐々木は彼女の肥え太つた胸板の蔭で時計のやうにドキドキと打つて居る心臟の鼓動や、發達し切つた全身の筋肉が籐のやうに硬く撓つて痙攣的に引き緊められる刹那の苦しみまでが、はつきりと彼自身の肉體の上に傳はつて來るのを覺えた。「か弱い者」として彼が平生見くびつて居たのは彼女の魂に就いてゞあるのに、其處に荒れ狂つて居るものは彼女の强壯な體格であり血液であり筋骨であつた。おまけに彼女は佐々木から見れば「痴鈍な女」であつたゞけに、それだけ肉の力の逞ましさが獸のやうな猛威を以て彼を脅やかした。其處には彼女の幼稚なセンチメンタリズムは跡を絕つて、たゞ肉體の嵐があつた！

「………實際、己までが玉子に釣り込まれてぼろぼろと涙を流すなんて、どうしてそんな氣持ちになつたんだか譯が分らない。何しろ己は昨夜すつかり玉子に壓迫されたんだ。玉子にと云つて惡ければ玉子の肉體にと云ひ直してもいい。さう云つた方が寧ろたしかだ。己のやうな神經衰弱の人間には、あの女の泣き方や口說き方は全く刺戟が强過ぎ

る。あんなに[illegible]せかけられて、あんなにえらい[illegible]頭ッたまへ[illegible]、[illegible]たから大概己は參つてしまふ。始めのうちはぢつと眼をつぶつて我慢して居たが、間もなく己は頭の中を鋭い爪で滅茶滅茶に掻き擾られたやうになつて、ぼうツとのぼせ上つてしまつた。それからどうかした彈みに、玉子の涙が己の眼の中へ流れ込んで來たのでパチパチと眼ばたきをして居るうちに、眼玉の周りが妙に溫かく潤んで來たなと思つたら、己は溜らなくなつてとうとう一緖に泣き出したのだ。泣き出したらいくらか頭の痛みが剝がれて行くやうな、何とも云へない好い氣持ちになつた。泣くと云ふ事は糞をたれるのと同じやうに一種の生理的快感だ。玉子にしたつて悲しいから泣いて居たのではなく、好い氣持ちだから泣いて居たのかも知れない。或ひは馬鹿な女だから自分でも孰方だか分らずに泣いて居たんだらう。涙がこぼれるから泣いたんだと云ふかも知れない。彼奴はまるで汗を搔くやうに雜作もなく涙を出す。………

そのうちに玉子は己の肩を抱へて、己の體をぐいと自分の方へ向け直した。己はまるで屍骸のやうにぐつたりとなつて、もう抵抗する氣も何もなかつた。が、泣き顏を見られるのが口惜しかつたので、顏をぴつたりと彼奴の頰にくつつけてしまつた。四つの眼から流れ出る涙が己の頰つぺたと彼奴の頰つぺたとを一面に水のやうに濡らした。己の眼から出た涙が、彼奴の眼へ這入つてもう一遍涙になつて出たかも知れない。彼奴の眼から出た涙を、己は自分の涙だと思つて鼻の孔へ吸り込んだかも知れない。何にしても厄介な事になつたと思つたが、しかしどうにもしやうがなかつた。さうして泣いて居る間はまだよかつたが、散々ツぱら泣いてしまつたら又しても頭がキリキリと痛み出した。體中の神經が妙にトゲトゲしく焦立つて來て、眼はすつかり冴え返つて、額の邊が糊着けの薄紙か何かを貼つたやうにピーンと突つ張つて居るのを感じた。手足の節々に云ひやうのない倦怠と疲勞とが行き亘つて、顏には熱があるやうな、その癖背中の

方がゾクゾクとうすら寒いやうな、風を引いたのかと思はれるほどイヤな氣持ちがした。此の樣子では明日きうと病人になると己は思つた。ところが玉子の奴は、あんなに泣いて置きながら、ちつとも疲れたらしくはなかつた。大概の人間は極度に神經を昂奮させると、あとで肉體の疲勞を感じるにきまつて居る。己のは其の感じ方が餘りヒド過ぎるが、玉子と來たら全然普通の人間と反對だ。彼奴のは神經が昂奮すればするほど肉體の方もいよいよ健康の度を加へる。彼奴が泣いたり喚いたりするのは、中學生がテニスやボールをやるのと同じやうな、一種の壯快なる運動なのだ。何と云つたらいゝか兎に角實に不思議な女だ。まるで動物のやうな頑强な無神經な女だ。さうして己が默つて居れば好い氣になつてますます附け上つて來る。お蔭で己は夜ツぴてまんぢりとする事は出來なかつた。此の調子でやられたら明日はたしかに病人になる。

それにしても玉子はヒステリーになつたのだらうか。ゆふべの彼奴の行動は、あの女としては正に常軌を逸して居る。此の間から己の心配して居た事が、とうとうやつて來たのだらうか。普通の神經を持つた女なら其れも別段不思議ではないけれど、あの女にもヒステリーになる可能性があるのかと思ふとちよいと意外だ。あの女の、太つた、だぶだぶした錐を刺しても容易に骨の心までこたへさうもない肉體を徹して、ヒステリーが少しづゝ沁み込んで行つたとすると少し滑稽だ。鬼の霍亂だ。しかしさすがに彼の女のヒステリーは一種特別の趣がある。あたり前ならヒステリーになるとだんだん顏が青ざめて痩せ衰へて來るところだのに、彼奴は此の頃一層むくむくと太つて來るらしい樣子が見える。恐らくどんなに激しい神經衰弱でも、彼奴の肉體に對しては齒が立たないんだらう。……………」

佐々木の死後、彼の手文庫の底から搜し出された日記のペエヂを繰つて見ると、其の頃の玉子が彼の爲めにどれ程懊惱の種であつたかは明かに想像する事が出來る。日記は其の年五月の下旬から、彼がいよいよ殺意を生ずるに至つたら

し、抹殺される十一月の初旬の頃までの心の推移を、再たび精細に[illegible]

「同病相憐む」と云ふ事は肉體の病氣に就いて云はれた眞理である。神經衰弱の患者に取つて、同じ性質の病人を見ることは如何に恐ろしい脅威であらう！「自分が長く氣違ひに接觸して居たら、きつとしまひに自分も氣違ひになつてしまふ」と、常にさう信じて居たくらゐ、佐々木は自分の神經過敏を苦にして居た。それ故妻のヒステリカルな行爲が、その過敏性を一層病的に募らせたのは云ふ迄もない、妻のヒステリーが一歩昻進する間に、彼の神經衰弱は其れに促されて二歩も三歩も昻進するやうに感ぜられた。自分の生命が持つて居る凡べての物を傾倒して、襟子との戀愛を樂しまうとして居る矢先に、それでなくてさへ貧弱な、限りのある彼の精力が、却つて玉子との接觸の爲めに奪ひ去られつゝあるのを覺つた時、佐々木はどうして彼女の存在を呪はずに居られよう。而も彼女の健康は其の爲めに何の打擊をも蒙らないのに、彼の心と體とは一日一日に疲れを增して行くのである。さう考へると彼の彼女に對する憎惡の念は、再び新なる薪を加へて燃え上るのであつた。彼はかうして、全く以前とは別の意味に於いて、玉子を畏れ疎んずるやうになつた。――

「いゝ鹽梅に玉子のヒステリーはあの晩偶然に突發したゞけで、あれ切り昨日まではそんな徵候が見えなかつた。きつとあれで直つてしまつたんだらうと思つて、己は氣を許して居たのだつた。するとどうだらうゆうべのあの始末は？やつぱり彼奴のヒステリーは直つて居なかつたんだ。直るどころか昨夜の樣子だと此の間よりもヒドいくらゐだ。尤も己は此の間の晩以來ゆうべまで家に泊つた事がなかつた。此の頃は大分約束の原稿が溜つて居るから、晝間は書齋に閉ぢ籠つて仕事をするが、夕方になればとても我慢がし切れなくなつて襟子のところへ行つてしまふ。さうして翌日の朝でなければ歸つて來ない、出來る事なら原稿を書くのも襟子の傍で書きたいのだけれど、戀愛と仕事とはとても

一つ所でやれるものぢやないから、よんどころなく家へ歸つて來るのだ。——それにつけても己はつくづく金が欲しい。金さへあれば戀愛の邪魔をする仕事なんぞをやりたくないんだが!——

昨夜は生憎十二時過ぎまで仕事の方にかゝつたので、家に泊らなければならなかつた。ちやうど此の間の晩から半月ぶりだ。寢たのは何でも一時過ぎだつたらう、玉子は胸に心配があつても豚のやうによく寢る女だから、きつともう熟睡しただらうと思つて居ると、豈圖らんや、其れと同時に、冴え返つた眼をパッチリと開いてぢーいッと己の顏を視詰めて居る。己はギクリとした、が、もう遲つた。ぢーいッと視詰めて居る彼女の眼が、急にぱちぱちと眼瞬きを始めたなと思つたら、もう其の眞赤な頬ッペたには、涙が音もなく瀧のやうに流れて居るではないか。

『あなた、お休みになるの? 何時でせう?』

彼女は其の言葉を平氣で云つた。自分の頬に涙の流れて居ることは、まるで氣が着かないと云ふ風であつた。運わるく顏と顏とを見合はせてしまつたので己は今更横を向く譯には行かなかつた。行かないことはなかつたのだけれど、さうした爲めに却て彼女を激させる事を恐れたのだ。しかし結局そのくらゐな讓歩は何の役にも立たなかつた。それから後は凡べて此の間の晩と同じだつた。しみじみとイヤになるほど同じだつた。己は又しても此の間の晩の通りの氣持ちを新たに繰り返させられた。

あれから半月の間、少しもさう云ふ素振りは見えなかつたのに、どうして昨夜再發したのであらう?——だが考へて見ると、己は其の半月の間と云ふものは、晝間の彼女を知つて居るが、夜の彼女を知らなかつたのだ。己が昨夜まで毎晩家に泊つて居たら、あの女も毎晩あの通りになつたかも知れない。いや事に依ると、己が家を明けて居る晩でも彼奴

は[illegible]の中であつたやうに涙を流しては、ぺちやぺちやと獨り言を言つて居るのかも分らない。さうして晝間になると、夜とはまるで別人のやうにケロリとして居る。相變らず愼ましやかで、始終オドオドと己の顏色をうかがひながら、たまに話をしかけるのさへ遠慮がちである。おまけにあの通り依然として血色がよく、ふつくらとした肉づきをして居るのだから、誰にしたつてあの女をヒステリカルだと思ふ譯はない、夜に限つて發作が起ると云ふ事、それは彼女のヒステリーの原因を突き止めて見れば、必ずしも理由のない事でない。その理由は外の人には分らないでも、彼女の夫たる己の胸には分り過ぎるほどよく分つて居る。己にはたしかに其れだけの覺えはある。分つて居ながら、意地惡くもわざと分らないやうな風をして居るものだから、彼女は一層しつくどく泣いたり口説いたりするのだらう。彼女の訴へようとする事は、操子との關係に對する嫉妬の感情ではなく、問題は寧ろ其の外にあるのだが、いくらヒステリーに罹つて居ても、それを露骨に言ひ出してせがみ着くには、彼女は不斷から餘りに羞耻の觀念の強い女なのだ。何と云つても其れはあの女のしほらしい所、あの女の美點に違ひない、ところが己は其の美點に附け入つて飽く迄も意地を惡くする。さうして彼女は己の其の意地の惡い事すらも、分つて居ながら指摘する譯に行かない。問題に觸れようとして觸れる事が出來ない爲めに、彼女の言葉はますます廻りくどく熱烈になり、涙はしげくなるばかりである。

兎に角夜がいけないのだ。夜を警戒しさへすればいゝのだ。此の後己は成るたけ家へ泊らないやうにするより外はあるまい。」

「あゝ夜、夜！戀人の側に居る時は夜がどうしてあんなにも樂しく、自分の家に泊る時はどうして斯うも忌ま忌ましく呪はしいのだらう！ゆふべはちやうどあれから一と月ぶりだつた。實は其の間にも、家に泊らなければならない用事が

あつたのだけれど、己は出來るだけ共れを繰り合はせて、機會を延ばし延ばしして居たのだ。『今夜はどうしても家に居なければならないのかな。』――己はさう考へるだけでもゾッとする程いやだつた。しかし昨夜は、もう原稿の締切りに三日も後れて居たので、どうしても家に居ない譯には行かなかつた。それに己はあまり家を明け過ぎて、二た月三月も泊らずに居たら、その爲めに却つて玉子の病氣がどれ程昂進するか分らない、と云ふ事も可なり此の間から心配だつた。此の後己は一生玉子と夜を共にしないと云ふ、堅い決心をしたのなら兎に角、さもないうちはやはりたまに泊つてやらないと、何だか氣がゝりなやうでもある。一生側に寄り付かないくらゐなら、離縁してしまつた方がいゝのだ。一つ家の中に住んで居れば、いくら何でもそれ程までに思ひ切つた眞似は出來ない。

昨夜は己も始めから覺悟して居た。しかし覺悟をして居た爲めに少しでも不愉快の度を減じたのではない。却つて己は、もう寢ない前から脅やかされて、夜の事が氣になつて仕樣がなかつた。その内にいよいよ寢る時刻になると、案の定、その瞬間に玉子は又パッチリと眼を睜いた。さうして額と額とをぴつたりと突き合はせる。彼奴の鼻と己の鼻とが、二つの掌のやうに重なり合ふほどぴつたりと突き合はせる。勿論己の方から突き合はせるのではない、彼奴の額が無闇に己の額の方へ押し出して來るのだ。双方の鼻を中心として、お互ひの額の出つ張つた所と凹んだ所とがガッチりと喰ひ違つて、二つの額がまるで一つの塊のやうになつてしまふ。額と額ばかりではない、彼奴の眼球と己の眼球とが薄い眼瞼の皮を隔てゝ互ひにぐりぐりと押し合つて居る。己の額はもう自分の額ではなくて、彫塑家の使ふ粘土の如く、彼奴の額の鑄型になつてしまつたやうだ。かうなると以前の覺悟などは何の用をもなさない、――あゝいやだいやだ、何と云ふいやな女だらう、――と云ふ氣持ちが胸一杯に塞がつて來る。………

さあ、此れからそろそろお極まりの文句が始まるのだ。もう今に涙がぼろぼろとこぼれ出す時分だ。[illegible]さう思ひながら、死んだやうになつてぢつと息を凝らす。と、二人の眼球の間に挾まつて居る彼女の眼瞼が、次第々々に、ちやうど風に吹かれる蝶々の翅のやうに微かにぶるぶると顫へ出すのが、電氣の如く己の眼瞼に感ぜられる。やがて其の顫へて居る眼瞼の裏で、今度は彼女の眼の球が、遠い地鳴りか何かのやうにぴーんと鳴り始める。それは明かに涙が涙腺から搾り出されつゝ其處へ集まつて來る音なのだ。——恐らく己より外にあの眼の球の音を聞いた經驗のある人は多くはなからう。その音を聞いて居ると、涙と云ふものが、何處か腦髓の深い所から滾々として温泉のやうに湧き出して來るのを感ずる。微かな音には違ひないのだが、其れが己の眼の球の方へ響いて來る工合では、そんなに低い音だと云ふ氣がしない。どうかすると、ゴウ、ゴウと云ふ響きを立てゝ、彼女の頭の中全體が釣鐘の如く鳴つて居るやうな氣持ちもする。さう云ふ時には、己の頭の中にも響きが傳はつて來て、その震動の爲めに腦髓がぴりぴりと痛むやうになる。眼瞼のおのゝきとの眼の球の地鳴りと、二つの物がだんだん激しく強くなつて來て、急に何だかぽうツと熱くなり出したなと氣が付く時分には、既に涙の雫が二人の頬の上にだらだらと流れ落ちて居るのである。

『おい、又おきまりの塩當が始まつたのか? もう澤山だから好い加減にして置いてくれ。いくらそんなに泣いたつて、己は可哀さうだとも何とも思やしないんだから。』

不愉快の度があまりヒドいので、己は此の言葉を口に出して云ふだけの勇氣もない。が、口に出して云ふよりももつと烈しい語氣を以て、腹の中で何遍も何遍も繰り返す。——實際此の頃ではかう云ふ場合に、不愉快と云ふよりも憎惡の念がムラムラと込み上げて來る。一面に於いて「可哀さうな女だ。」と云ふ感情も起つて來ない事はないが、その感情が起る爲めに猶更此の女が憎く疎ましくなるのである。晝間の彼女の樣子を見たり、離れて居て考へたりする時は、そ

れ程にも思はないのだけれど。かうなつて來ると實に溜らない。もうとても堪へ切れないから、何とかして此の女を遠ざけてしまふより仕方がない。それより外に己の助かる途はない。萬難を排して斷然たる處置を取らう。此の狀態を續けて居ては己も此の女も共に非常な不仕合はせだ。――と、己は眞面目に考へさせられる。

しかし、まあ假りに斷然たる處置を取るとして、どう云ふ風にしたらいゝのだ。離緣をするとしたつて、此の女を引き取るべき里はない。さうかと云つて、貧乏な己は、此の女を別居させて、生涯扶養して行くだけの負擔には堪へられない、そんな金があるくらゐなら、己は襟子の爲めに使ふ。此の女の爲めに餘計な金を一文でも費したくない。するとやつぱり、己は生涯此の女と連れ添はなければならないのか。あの恐ろしい『夜』を此の後何年も何年も繰り返さなければならないのか。あゝいやだいやだ、己たち夫婦は最初に考へたよりもずつと不仕合はせな人間なのだ。……」

「如何にしたら、己は玉子の影響から完全に離脫する事が出來るか。――近頃の己の頭には、始終此の問題ばかりが引懸つて居る。

二人の間に子供がないと云ふ事は、いくらか此の問題の解決を容易にして居るやうに見える。子供と云ふ連鎖があつたら、此の問題は始めから解決の望みはない。いくら妻を遠ざけたところで、彼女の生命の一部、――彼女の分身とも云ふべき子供があつたら、己は到底彼女の影響から逃れ出る譯には行かない。たが、子供がなかつたら、己は完全に逃れ出ることが出來るだらうか？ 子供以外に完全な離別の邪魔をする連鎖はないだらうか？

己が特に完全と云ふのには意味がある。體と體とが離別したところで、心と心とがほんたうに離別しなければ、その離別は完全でない。己の望むのは飽く迄も完全な離別だ。玉子と云ふ女が、自分の妻としては勿論、單に一個の人間と

[illegible]最初から此の世に存在して居なかつた場合と同様な心持ちに、自分を[illegible]のだ。

單に離別をしたところで、嘗て己の妻であり己の虐待を受けた女が、今も猶此の世の何處かに恨を呑みつゝ生きて居ると云ふ意識があれば、結局彼女が己の側に生きて居ると同然だ。己の頭に彼女の記憶が蘇る度毎に、己と襟子との戀は常に呪はれなければならない。

あゝ、どうかして己の心と彼女の心との連鎖を斷ち切る方法はないか知らん? 眼に見える連鎖ならまだしも置き換へる方法はある。眼に見えない連鎖だけはどうともする事が出來ない。」

「こゝにたつた一つ、問題の解決を可能ならしむる手段がある。たつた一つあるだけだ。それ以外には全く絶望だ。己の心と彼女の心とを繋いで居る連鎖を打ち切るには、己の心を別の處へ置き換へるのだ。己の心を惡魔にするのだ。さうしたら連鎖はきつと切れる。人間の心と惡魔の心とを繋ぐ連鎖はない筈だ。

惡魔になるにはどうしたらいゝか。それはちやんと分つて居る。」

「己は惡魔になれるだらうか。惡魔の行爲を學んだが爲めに、生きながら地獄の苦しみを受ける恐れはないだらうか?――無論恐れがないとは云はれない。しかし、己が今まで些細な事にも神經を病んで、憶病だつたのは、己の態度が極まらなかつた爲めなんだ。人間にならうか、惡魔にならうかといつも中途で迷つて居たせゐなんだ。心を鬼にしてしまへば、恐ろしい事も何もなくなる。先づ思ひ切つて極端に大膽な惡事を決行して見るんだ。さうすれば自然と心は鬼のやうになる。それでなくても己は生れつき、惡魔になれる性質を多量に持つて居るんだ。人間よりも惡魔になる方がやさしいくらゐだ。襟子との戀を樂しまうとするのに、そのくらゐな覺悟がなくつてどうするのだ。…………」

佐々木の日記は此處で終つて居て、それからの事は彼の死に至るまで、一行も書き止めてない。上に掲げた最後の一節は、十一月二日の記錄であるが、思ふに彼は其の頃になつて、全く「惡魔の心」を固めたのであらう。かくて十一月以降は、其の決心を如何にして遂行すべきかと云ふ計劃の時期に這入つたのである。彼はさすがに其の計劃を、日記に書き記す大膽さは持つて居なかつたに違ひない。

さうして佐々木は、日記を書く代りに「呪はれた戲曲」の筆を執り始めたのであつた。その前の一と月半ばかりの間何か頻りに鬱々と考へ込んで居て、仕事もろくろく手につかないらしい樣子を見せて居た彼は、十二月の中旬に這入つてから、晝間は毎日机に向つて或る脚本の組立てに頭を惱まして居る風であつた。

戲曲　**善と惡**（一幕物）

時　現代（夏にすべきか冬にすべきか？）

所　東京を離れた或る淋しい場所

登場者

A　青年文學者

B　その妻

同様用紙の第一ペエヂには、黒い萬年筆のインキで斯う云ふ文字が記されてあつた。[illegible]ないらしく、それから先けまだ一枚も捗つては居なかつた。玉子が折々、何かの用事で書齋へ行つて見ると、佐々木は大概兩手で頰杖を衝いたまゝ、ぢつと其れ等の文字を睨み詰めて居た。

日を經るに隨つて、第一ペエヂには新たな文句が書き入れられたり、眞黑な消しが出來たり、消しが餘り澤山になると更に淨寫されて、又その上に訂正が加はつたり、作者の趣向はいろいろに迷つて居るらしかつた。例へば、

時　現代（夏にすべきか冬にすべきか？）

の横の方に、

時刻は夜？　或は早朝？

など〻云ふ文字が這入つた。それから二三日過ぎると、

夕方、日沒の頃

と、もう一度書き改められた。

「所」に就いては佐々木は最も苦心して居る樣子であつた。

東京を離れた淋しい場所

此の行の側へ持つて來て、最初に、

（海岸？　溫泉？）

と記した一行が加へられたが、やがて「海岸？」の三字が消されてしまひ、次ぎには「溫泉？」の方も消し取られて、新しく、

東京を數十里離れた或る温泉場、信州或は上州邊の山間の僻地

と、今度はやゝ詳細に指定された。また二三日立つうちに其れが悉く抹殺されて、

東京の郊外、井頭辨天の近所

となつたり、或は、

東京の郊外、綾瀬川附近

となつたりした。さうかと思ふと全然飛び離れて、

淺草公園內、活動寫眞館の立ち續く狹き道路

と改められ、同時に「時刻」の方も、

或る土曜日の晚、淺草公園の雜沓最も激しき頃

と云ふ風に訂正された。かうしてちやうど一週間程何遍も何遍も書き直された後、漸く最初の一ペエヂが次ぎのやうに出來上つた。

戲曲 **善と惡**（一幕物）

時　現代　冬の二月頃の或る日の夕方

所　上州赤城山中

登場者

井上　青年文學者
春子　その妻

此れでもう直す所はないと佐々木は思つた。が、いよいよ本文の夫婦の對話に這入つてからも、いつもの彼の速力に比べると、筆の進みは不思議なほど遲かつた。主人公の井上が先づどう云ふ態度で、どう云ふ方面から妻の春子に話し出したらいゝだらう。それに對して春子はいかなる素振りを見せ、いかなる受け答へをするだらうか。——彼は幾度となく書きかけの原稿用紙を書き捲つた。

舞臺面——晴れた冬の黄昏の山中の光景。一方は崖、一方は深き谷、その間を通ずる一條の道路あり。雪一面に積りて人跡稀なる樣子。

下手より井上と春子とが散歩姿にて出て來る。井上の年は二十七八歳、二重廻しを纏ひ、鳥打帽を冠り、襟卷にて鼻の下まで顏を包んで居る。春子は二十一二歳の女なれど圓ぽちやの愛らしき顏立ちにて十八九にしか見えず。セルのコートを着、束髮に結つて居る。

（井上）あゝ、雪を見ながら大分好い運動をした。あんまり歩いたので己は汗が出て來た。どれ、此の邊で少し休んで行かう。（襟卷を取り、額の汗を拭ひながら谷に臨んだ道端に腰かける。）

（春子　嬉しさうに夫に寄り添ふ）ほんたうにかうして歩いて居ると、寒くも何ともありませんわね。だけど、もう日が暮れますから、こんな所で休まないで、早く歸らうぢやありませんか。（と云ひつゝ夫の傍に蹲踞まる。）ねえ、あなた、歸りませうよ。

（井上）まあ、待つてくれ。あんなに歩いたのに、お前はちつともくたびれないのか。

（春子）いゝえ、ちつともくたびれないわ、あたしはあなたより足が丈夫よ。

（井上）ほんたうにお前は女のやうぢやないな。そんな丈夫な體でもつて、どうしてヒステリーなんぞになつたんだらう。

（春子）もうヒステリーぢやない事よ。山へ轉地をしたお蔭で、すつかり直つてしまつたわ。

此處まで書き上げて來る間に、佐々木の顏には時々奇妙な微笑が浮かんだり、不安な表情がさつと閃いて通ることがあつた。創作をやり始めると、成るべく書齋へ人を入れないやうにするのが常であつたのに、どう云ふ譯か彼は屢々妻を呼んで、茶を入れさせたり火をつがせたり、細かい用を云ひつけては、そつと彼女の樣子に眼を配つた。さう云ふ折には、動ともすると例の奇妙な微笑が、知らず識らず口元に漂うて居たのである。

「己は何の爲めに此の原稿を殊更妻に見せびらかさうとするのだらうか？」——

その心理は佐々木自身にもはつきりと說明する事は出來なかつた。若しも彼女が此の原稿を終りまで偷み讀んだとして、たまたま此れが單なる「戲曲」として書かれた物でない事に氣が付いたら、どう云ふ結果になるだらう。彼女は恐怖と絕望の餘り、佐々木の手を待たずして自殺するかも知れない。或は自殺しない迄も、夫の殘忍狂暴な人格に愛憎を盡

かして、自分の方から家を逃げ出してしまふかも知れない。さうなつてくれれば佐々木には却つてもつけの幸である。戯曲は遂に單なる「戯曲」たるに止まり、而も其れを實生活に適用したのと同等な效果を收め得られるのである。――佐々木が故意に妻の鼻先へ原稿を見せびらかすのは、多少さう云ふ目的を伴つて居るやうでもあつた。しかし一方では又、彼女の生命に關する計劃を、悠々と本人の面前に於いて運らしながら、飽く迄も彼女の痴鈍と迂濶とを嘲笑つてやりたいやうな、皮肉な惡戯も交つて居た。

夫にそんな目論見があらうとは夢にも知らない玉子は、やがて自分の身に振りかゝる陰謀が其處に着々と描かれつゝある原稿を、別段氣に止めて見もしない樣子であつた。彼女は寧ろ、夫が近頃急に優しい態度を示すやうになつたのを心私かに訝しみながらも喜んで居たのであらう。長らく渇えて居た者は、一掬の水を惠まれても再生の恩を感ぜずには居られない。今迄虐待に馴れて居た彼女は、たまに夫から溫かい言葉をたつた一と言かけられてさへ、懷かしさと嬉しさとが胸一杯に込み上げて、涙がほろりと落ちて來さうになる。たとへ夫の腹の中までは分らないにしろ、襟子との關係は未だに續いて居るらしいにもしろ、表面だけでも優しくしてくれるのが、彼女には他の何事をも忘れさせる程有難かつた。彼女の頭は感謝の念に充たされて居るのに、どうして夫の原稿などに氣を廻す餘裕があらう。

佐々木は彼女を思ふさま嘲弄の的にしながら、猶それに飽き足らないで兇行の犧牲にする計劃を、一歩一歩進めて行つた。ちやうど其の年の暮になつて、戯曲の原稿は既に半分ばかり出來上つたのである。

…………………

(春子)もうヒステリーぢやない事よ。山へ轉地をしたお蔭で、すつかり直つてしまつたわ。

(井上) さうか、そりやお好い鹽梅だつた。頭の病氣は山の空氣を吸ふに限るよ。已の神經衰弱も殆んど全快したらしい。彼れ此れ三週間にもなるんだから、そろそろ東京へ歸るとするかなあ。

(春子) でも、成るべくならもつと此處に居たいと思ひますわ。

(井上) なぜ? こんな淋しい冬の山の中が、そんなに氣に入つたのかい?

(春子) えゝ、淋しくつても東京に居るよりは安心だわ。東京には照子さんが居るんですもの。

(井上 沈鬱になりたがる氣分を强ひて引き立てようとして殊更快活を裝ふ) はは、照子の事か。さう燒餅を燒くとまたヒステリーになるかも知れんぜ。

(春子 夫のわざとらしい快活を少しも疑はぬ樣子) 燒餅なんか燒きはしませんわ。今のはちよいと冗談を云つたの。照子さんがお好きならいくら可愛がつてお上げなすつても構はないわ。その代りあたしも可愛がつて下さいね。此の頃はあなたが優しくして下さるので、あたしどんなに嬉しいか知れませんの。ねえあなた、いつまでも今のやうにして居て下さいね。(話して居るうちに少しく感傷的な調子になる。)

(井上 蔽はんとしても蔽ひ得ざる沈鬱な眼つきをする。)

(春子) ねえあなた、何を考へて居らつしやるの?

(井上) いや、何も考へて居やしない。……………

(春子) 何か私の云つたことがお氣に觸つて?

(井上) いゝや、そんな事はないよ。

(春子) さう? そんならいゝけれど。……………

(井上　春子と顔を見合はせて、狼狽したやうにちよいと横を向く。兩人暫時無言。)

(春子　何となく心細くなつた樣子。日の暮れかゝつたあたりの景色を見廻しながら、急き立てるやうな口調で、)さあ、もう行きませうよ。何だか寒くなつて來たわ。

(井上　容易に立ち上らうとする氣色も見えず)うん、まあもう二三分休んでから出かけよう。己はひどくくたびれちまつた。

(春子)ですから早く宿屋へ歸つて休まうぢやありませんか。歸り路に日が暮れてしまつて、谷へでも落つこちると大變だわ。

(井上)なあに、日が暮れる迄にはまだ一時間も間がある。宿屋は直ぐ其處なんだからそんなに急がないだつて大丈夫だ。何しろこんな山の中ぢやあ、散歩をすると云つたつて別に行く處もなし、朝から晩まで雪ばかり見て暮すんだから、大概飽きてしまふなあ。兎に角己は二三日のうちに東京へ歸らうかと思ふ。

(春子)えゝ歸りませう。先のことはあれはほんとに冗談なの。あたしだつて、あなたが優しくして下さりさへすればこんな山の中にいつ迄も居たくはないわ。明日でも東京へ歸りますわ。

(井上)しかし明日と云ふ譯にも行くまい。早く歸りたい事は歸りたいが、己はもう二三日、此處に居なければならない用事がある。

(春子)こんな所に何の用事があるの？

(井上　眼の縁に奇怪なる微笑が浮ぶ。)實は去年の暮れから書きかけて居る脚本があつてね、それを山へ來たついでに此處で書いてしまはうと思つてちやんと原稿を持つて來てあるんだよ。それが出來上るまでは此處に居なければなら

ないんだ。
（春子）あゝ原稿をお書きになるの？　あたしそんな事は知らなかつたもんだから、毎日あなたに暇を潰させてしまつて、濟みませんでしたわね。それぢや今夜から直ぐにお始めなさいな。出來上るまで成るべく邪魔をしないやうにしますわ。さうして早く書き上げて東京へ行きませう。
（井上）なあに、書き上げると云つたつてちよつとなんだ。去年の暮れから書き始めて、先月の末にすつかり出來上つたんだけれど、あと二三行ばかりちよいと書き足す所があるんだよ。其處を書き足してしまひさへすればもう其れでいゝのさ。
（春子）それぢや二三日もあれば大丈夫なの？
（井上）あゝ、うまく行けば二三日かゝらないかも知れない。今度の脚本は己としては可なり骨を折つた積りなんだ。いつもなら好い加減に脱稿して居る時分なんだが、今度のだけは己の一生の傑作だから、さう易々と書き流す譯には行かなかつたのだ。十二月から、一月、二月と、此れでちやど三月ほどかゝつて居る。
（春子）さう云へば去年の暮れに、何か頻りに書いて居らしつたわね。あの原稿がさうなの？
（井上）うん。………お前あれを讀んだのかい。
（春子）いゝえ、あたしあなたの書きかけの原稿なんか、勝手に讀んだ事は一遍もありませんわ。でも、机の上に載つて居たので題だけは知つて居ますわ。「善と惡」と云ふ一と幕物ぢやないの？
（井上）うん、あの脚本さ。それぢやお前はあの題だけしか知らないのかい。中は一ぺエジも讀まなかつたのかい。
（春子）えゝ、

(井上) あの脚本はね、やつぱり此の赤城山を場面に使つて、ちやうど私たちのやうな夫婦が出て來るのだよ。

(春子) あゝ、さうらしうございますね。中は讀みませんけれど、それは知つて居ますわ。題の横に書いてあつたんですもの。

(井上) あれはね、大體から云ふ筋なんだよ。或る若い文學者があつて、外に戀ひしい女が出來た爲めにどうかして妻君と別れたいと思つて居る。しかし其の妻が氣立てのやさしい女なので、とても可哀さうで離緣をする事が出來ない。離緣する事が出來ないもんだから尙更いやでいやで溜らなくなつて來る。さうしてしまひに、いつそ妻君を殺してしまはうと決心をする。……

(春子　まだ何事も心付かない樣子で、極めて呑氣に) でもおかしいわね、離緣をするのが可哀さうなら、殺すのは猶可哀さうだわ。

(井上) その氣持ちはお前には分るまいが、男の心と云ふものはさう單純なものではないんだ。――さうして、いよいよ殺すことに決心して、妻がヒステリーにかゝつたのを幸ひに、病氣の保養を口實にして赤城山へ連れて行く。二月の寒い最中でちやうど今時分の事なのだ。(語りつゝ時々ちらりと春子の顏を見る。しかし彼女の好人物らしい眼の中には、未だに何等の反應も現れず。) 場所もやつぱり此處と同じやうな、深い谷底に臨んだ山路なのだ。其處へ或る日の夕方散步に連れ出して、それとなく因果を含めた後、油斷を窺つて、不意に絕壁から谷へ突き落して殺してしまふ。まあざつとさう云ふ筋なんだ。(語り終つて更に春子を顧る。)

(春子　その時漸く不安の影が微かに浮ぶ。が、ほんの一瞬間で直ぐまた無邪氣な調子に復す。) 隨分氣味の惡い筋だことね。その脚本は何の雜誌へお載せになるの。いづれ何處かで芝居にするのでせうか?

(井上) そんな事よりも、お前は今の話を聞いて別段恐いとは思はないかね。

(春子) えゝ、氣味の惡い筋だと思ひますわ。

(井上) いや、筋の事を云ふのではない。何か外に恐いと思ふ事はないかと云ふのさ。――その脚本を書いた人間は現に此處に居る己なのだ。さうしてお前も其の脚本の中の妻君のやうに、ヒステリーを煩つて赤城山へ連れて來られて居る。お前と己とは今、脚本の中の夫婦と全く同樣に、同じ時刻に同じ場所に立つて居る。(半ばは冗談におどかして居るやうな、半ばは眞面目なやうな、曖昧な口調で云ふ。)――さう考へても、お前は恐いと思ふ事はないかね。

(春子 はつとして云ひ知れぬ戰慄に襲はれ、暫くもぢもぢして居たが忽ち何事をか思ひ付いて急に元氣を盛り返す。)いやよ、あなたは、そんな事を仰つしやつて私をおどかさうとなさるのね。そんな眞面目な顏をしたつて、おどかされやしない事よ。もうヒステリーぢやないんですもの。

(井上) あはゝゝゝ、でも少しは恐いだらう。

(春子) いゝえ、ちつとも恐かありませんわ。若しもあなたが去年のやうに私をいぢめてばかり居て、あたしも亦あの時分のやうに陰氣な泣き蟲の女だつたら、恐いと思ふかも知れないけれど、今ではもう大丈夫だわ。今の私は、そんな邪推をするやうな不仕合はせな女ぢやないんですもの。

(井上) しかしだね、やつぱり其の脚本の中の妻君のやうに、お前がおめでたい人間で、夫に欺されて居たのだとしたらどうする。己が此の頃お前に對して優しくなつたのも、實はお前を欺して置いて、此の山へ連れて來ようと云ふ腹があつた爲めかも知れない。ねえ、或はさうかも知れないぢやないか。少くともさうでないと云ふ證據はないぢやないか。

(春子)だつて、そんな風に疑ひ出したら、胸の中の事は何から何まで心配になりますわ。證據がなくつても私はあなたを信じて居ますの。だからあなたが何と云つておどかしたつて、ちつとも恐いことなんかありやしないわ。

(井上)ふん、お前はそれ程己を信じてくれるのだね。

(春子)え丶、信じて居ますわ。そんなつまらない事で、かりにもあなたを疑つたりしちや濟みませんわ。

(井上)でもお前は其の脚本を自分で讀んで見ないから、恐がらずに居られるのだ。あれを若し讀んで居たら、お前はきつと赤城山へ來なかつたかも知れないぜ。

(春子)そんな事があるもんですか。あなたの入らしやる所なら、どんな恐ろしい淋しい所へでも附いて行きます。

(井上)さうかね、きつとさうかね。そんなら此處で其の脚本を少し讀んで聞かせようか。ちやうど好い鹽梅に、ポッケットのなかに其の原稿が這入つて居る。(外套の内隱しより厚く綴ぢた原稿を取り出し、それを膝の上にひろげる。)

(春子)まあ、あなたそんな冗談は好い加減にしてそろそろ出かけませうよ。もう疾つくに二三分立つてしまつたわ。

(井上)そら御覽、やつぱり少し恐くなつたんだらう。

(春子)さうぢやないのよ。だけどほんとに日が暮れると困るから、歸らうぢやありありませんか。そんなに私に聞かせたければ、宿屋へ歸つてから讀んで頂きますわ。

(井上)いや、宿屋で讀んだのぢや面白くない。やつぱり此の脚本と同じ時刻に、同じ場所に居て讀まなければ興味がないからな。まだ日は暮れないから大丈夫だ、ちよいと、初めの方を少し讀んで見るから聞いて居て御覽。

(春子)(一旦立ちかけたが再び迷惑さうに腰をおろし、原稿の方を覗き込むやうにする。)そんなら聞いて居ますから讀

んで頂戴。おどかさうとしたつて駄目よ。

（井上）いゝかね、題は「善と惡」と云ふ一と幕物。時は現代、冬の二月頃の或る日の夕方。所は上州赤城山中。

（春子 少しつんとして、）えゝ、それはもう知つて居ますよ。

（井上）登場者は夫婦二人きり。男は青年文學者の井上、女は井上の妻の春子、………

（春子 微笑しながら）あらいやだ、名前まで私たちの名をお附けになつたの？

（井上）まあさうとして置くさ。それからト書きだ。いゝかね、舞臺面、晴れた冬の黄昏の山中の光景、一方は崖、一方は深き谷、その間を通ずる一條の道路あり。雪一面に積りて人跡稀なる樣子。下手より井上と春子とが散歩姿にて出て來る。井上の年は二十七八歳、二重廻しを纏ひ、鳥打帽を冠り、襟卷にて鼻の下まで顏を包んで居る。春子は二十二歳なれど圓顏の愛らしき顏立ちにて十八九にしか見えず。セルのコートを着、束髮に結つて居る。………

（春子、聞きながら井上と自分の服裝を顧みて）まあいやだ、何から何まで同じね。

（井上）もう少し聞いて居て御覽、もつと同じ所があるんだから。いゝかね、此れから井上の臺辭になる。（讀み上げる）「あゝ、雪を見ながら大分好い運動をした。あんまり歩いたので己は汗が出て來た。どれ、此の邊で少し休んで行かう。」（此れから先は朗讀と説明とを交へつつ語る）こゝで井上は襟卷を外して、谷の方へ臨んだ道端に腰をかける。ちやうど今己が居る此處のところだ。すると今度は春子、お前の臺辭だ。

（春子）いやよ、あなた、私は其の中の春子ぢやなくつてよ。

（井上）でもおかしいぜ、此の中の春子もやつぱりお前と同じやうな事を云つてるぜ。

（春子）どんな事を云つて居るの？

(井上)「もう日が暮れるから早く歸りませう。」とか、「私はあなたより足が丈夫だから、ちつともくたびれない。」とか、お前も先づそんな事を云つたぢやないか。

(春子　少しづゝ好奇心を起して釣り込まれる)ほんたうにさう書いてあるの？

(井上)ほんたうさ、ほれ、此處を御覽。(原稿を示す。)そら、ちやんと書いてあるだらう。

(春子)まあ！　ほんたうだわね。かう云ふ所は、きつと私をモデルにしてお書きになつたのね。でなければ斯う同じに行く譯はないわ。

(井上)さうさ、此の脚本はしまひまでお前がモデルになつて居るのさ。

(春子)ほんたうに？

(井上)ほんたうだらうさ。だからお前も谷へ落されるかも知れんぜ。

(春子　忽ち悚然として眞青な顏になる)あなた、もう嫌よ。もう後生だから讀むのは止して頂戴。あたし何だか恐くなつて來たわ。

(井上)それ見ろ。するとやつぱり己を信じては居ないんだらう。

(春子)信じて居ない譯ぢやないけれど、そんな事を云つておどかされゝば誰だつて恐くなるわ。

(井上)まあもう少し、もう少聞いて御覽。

(春子)もういやいや、勘忍して頂戴。またヒステリーになつちまふわ。

佐々木は此處までを十二月一杯かゝて書いた。書いて居るうちに彼はだんだん戯曲と實際との境界が餘りに不明瞭に

なつて行くのを發見して、此原稿を妻の眼の前へ曝して置く事の危險さを、少しづゝ自ら警戒するやうになつた。けれども同時に、「藝術」よりは「實際」を目的として書き起された此の戯曲が、たま〳〵「實際」の刺戟に依つて「藝術」としても優れた作品になりつゝある皮肉な事實に動かされて、此れを此の儘篋底へ葬むる事の殘念さをも感ぜずには居られなかつた。此の原稿の處置に關する彼の意志は、執筆中に幾度も動搖した。最初は戯曲の假面を着た精細なる計劃書の積りで書き、中途で危險を顧みず雜誌へ發表しようとする虛榮心に驅られ、最後に危險の度が一層高まりつゝあるのに驚いて、絕對に秘密にしなければならない必要を悟つた。さうして、正月になつてからは能ふ限り玉子にも見せないやうにして、日に半ペエヂか一ペエヂぐらゐづゝ、隙を盜んで書き續けた。

（春子）もういやいや、勘忍して頂戴。またヒステリーになつちまふわ。

（井上）あはゝゝゝ、馬鹿だなお前は。そんなに恐がらなくつてもいゝよ。創作家が自分の女房や友達をモデルに使ふのは珍しい事でも何でもないさ。モデルはモデル、脚本は脚本さ。

（春子）そんな事は分つて居ますわ。でも何だか先のやうにおどかされると、氣味が惡くなつて來ますもの。

（井上）もう決しておどかさないから、ちよつと此の先を聞いてくれ。まあさ、もうちよつとだよ。お前をモデルにしてあるんだから、是非とも當人に聞いて貰ふ必要があるんだ。お前だつたら斯う云ふ夫を持つて、斯う云ふ事を云はれた場合に何と返辭をするか。己の想像が間違つて居たら直して貰はうと思ふんだ。ほんとうにもう少しだよ。

（春子　だんだん又安心して來る）あたしだつたら、殺されちや大變だから、相手にならずにどんどん逃げてしまひますわ。

(井上) だつてお前は、さうして逃げずに居るぢやないか。

(春子) あら、又そんな事を云つておどかすから嫌！

(井上) あはゝゝゝ、もうおどかさないよ、もう大丈夫だよ。――ところでだ、先の續きになるんだが、その男がちやうど斯う云ふ屋緣の所に腰をかけてね、「東京へ歸りたいけれども、山に居るうちに書き上げてしまひたい原稿があるんだ。」と云つて、己と同じやうに外套のポッケットから脚本の原稿を出して見せる。

(春子) まあ、隨分入り組んで居るのね。脚本の中に又脚本が出て來るなんて。

(井上) さうさ、さうして其の脚本の中にも亦井上に春子と云ふ夫婦があるのさ。

(春子) まあいやだ。

(井上) それでつまり、其の男は自分の作つた脚本の朗讀に托して、それとなく妻に因果を含めるのだね。自分が妻を殺さなければならなくなつた理由を、遠廻しに云つて聞かせるのだね。

(春子) 何だと云つて？

(井上) その男の臺辭がこゝにある。――「ねえ春子、己だつて此の脚本の中の男のやうに、お前をこんな淋しい所へ連れ出して置いて、殺す氣なのかも知れないぜ。それでもお前は恐くはないかね。」すると春子が、「いゝえ、私はあなたを信じて居ますから、恐くも何ともありません。」と云ふ。――まあ此の邊は己たちがしやべつた通りなんだから、ずつと飛ばして先の方を讀まう。――(原稿を五六枚めくつて終から十枚目ほどのペエヂを開く) さ、此處から先を讀んで見よう。此れから終まで十枚ばかりある。此の十枚が濟んでしまふと、妻君の殺される場面になるんだ。いゝかね、男の臺辭だ。――「お前は己を信じて居るが、しかし己は、お前が信じて居るやうな善人ではないかも知れな

い。己は今正直に白狀する。己が此の脚本を書いた動機は、事に依つたら己も此の中の主人公のやうに、お前を殺してしまひたいと云ふ心持であつたかも知れない。……」

(春子) そんな恐い所は拔かして讀んで頂戴よ。ねえあなた、あなたは今日はどうかして居らつしやるわ。

(井上) いや、こゝが肝腎なところなんだ。此處を拔かす譯には行かない。――それでと、今の臺辭の續き、「……己にもやつぱり照子と云ふ戀人がある。己はもう其の戀人を、たゞ戀人として置くだけでは我慢がし切れなくなつて居る。お前と云ふ者さへ居なければ、己は照子と結婚する事が出來るんだからな。」

(春子、涙ぐんで來る) あなた。あなたはほんとにさう思つて居らつしやるの? どうしても照子さんと結婚なさる思召しなの?

(井上) いや、己が云ふんぢやないんだよ。此の脚本の中の男が云ふんだよ。すると女が涙ぐんで、かう云つて居る。「そりやあなたあんまりですわ。あたしは照子さんに對して、ちつとも燒餅なんぞ燒きはしないぢやありませんか。それだのに私を邪魔になさるなんてあんまりですわ。あたしはあなたから、せめて照子さんの半分も可愛がつて貰へれば、それで滿足して居るんです。あなたの名義だけの妻にして置いて下されば、もう其の名義で滿足して居るんです。だのに、たつた一つの名義までも取り上げようとなさるなんて、あんまり殘酷ぢやありませんか。少しは私を可哀さうだと思つて下さいまし。」

(春子、釣り込まれてますます涙ぐむ。) ほんとにさうですわ。あたしだつてあなたからそんな無理を云はれゝば、きつとさう云ひますわ。

(井上、春子に頓着せず讀み續ける。) 男の臺辭、――「そりやあ可哀さうだとは思つて居る。しかし己だつて、戀ひしい

女を自分のまゝにする事が出來なければ可哀さうぢやないか。」

(春子)だけど其れは勝手な理屈だわ。男の方は自分の我が儘から出た事ぢやありませんか。自分の我が儘を徹して、女の方を構はないなんて法はありませんわ。

(井上)うん、脚本の中の女も同じやうな事を云つて居る。それに對して男は斯う云ふのだ。「なる程己は我が儘には違ひない。だが今假りに、お前も可哀さうだし己も可哀さうだとして、孰方を助けたらいゝだらう。己にも欲望がありお前にも欲望がある。しかし己の欲望はお前のに比べると、ずつと積極的なのだ。お前は己の名義だけの妻で滿足出來るのに、己は己の戀人を完全に自分の物にしてしまはなければ承知が出來ない。それだけに若しも望みがかなはなかつたら、己の方がお前よりも遙かに餘計苦痛を忍ばなければならない。お前は己に比べれば無神經な、趣味も智識も狹い人間だ。お前のやうな女には死ぬより以上の苦痛はないが、己には死以上の苦痛がある。だから公平に考へて見て、お前の苦痛を助けるよりも己の苦痛を助ける方が慈善になるのだ。かう云ふと、いかにも冷酷なやうに聞えるけれど、それが至當だと己は思ふ。」

(春子、さめざめと泣入る)さうすると、あたしのやうな馬鹿な人間は、無神經だから苦しめてもいゝと仰つしやるのね。それぢやあまるで世の中と云ふものは弱い者いぢめになつてしまひますわ。どうして男は、そんな勝手な理屈が云へるのでせう。

(井上、次第に殘忍な、氷の如く冷やかな表情を表はす)「春子、己はお前に賴む。どうか死んでくれ。己はお前と添ひ遂げる事はとても出來ないのだ。」これはやつぱり此の中の臺辭だよ。己が云ふのぢやないんだよ。

(春子、恐ろしく昂奮して)だけどあなただつてやつぱりさう思つて居らつしやるんでせう。分りました。ようござい

ますわ。どんな事があつてもあなたの側を離れまいと決心して居ましたけれど、あなたが其れ程に仰つしやるものを
もう私もさつぱりとあきらめますわ。ねえ、私を離縁して下さいまし。

(井上)「離縁したつてお前は行くところがないぢやないか。何處までも己の妻になりたいなら、いつそ思ひ切つて死んでくれる氣はないか。」

(春子)いゝえ、死ぬのは嫌でございます。あたしはもう、決してあなたの妻になりたいとは思ひませんわ。あなたはまるで鬼のやうな心を持つて居らつしやるのね。離縁だけでは飽き足らないで死んでくれろなんて、どうしたらそんなむごい事が仰つしやられるでせう。あたしは馬鹿な女ですけれど、それでも人の妻たる道は盡した積りでございます。それ程までにあなたから憎まれる覺えはございませんわ。

(井上、依然として原稿を讀む)「お前に妻としての缺點がないから、猶更死んでくれろと頼むのだ。若しもお前に落度あれば、己はお前を離縁して平氣で居られる。しかし生憎お前には落度がない。そればかりか、お前は己の處を追ひ出されたら歸る家もなし生きて行く道もない。己はお前を離縁した爲めに一生胸を痛めなければならない。もつと露骨に正直に云へば、お前のやうな愚ろかな、取るにも足らない女一人を離縁した爲めに、己はお前が受ける以上の苦しみを受けなければならない。それでは己は差引勘定損をする事になる。………

(春子)あなたは自分の苦しみばかり考へて居らしつて、人の苦しみなんか何とも思つては居らつしやらないのね。

(井上)「……何とも思はないのではない。お前には、己がお前を離縁した爲めにどれほどの苦しみを受けるか、とても想像がつかないのだ。己は決して、お前を離縁して愉快に居られる譯はない。己はお前よりも感情の働きが複雜だし、神經も鋭いのだから、それだけ己の苦痛は、お前の苦痛よりもずつと大きい。」

(春子) ではあなたには、離縁をされた女の苦しみがどんなだか分つて居らつしやるの？

(井上、いつの間にか脚本の臺辭を暗誦するやうな、自分自身の言葉のやうな、孰方にも見られるやうな口調になつて居る。)それはちやんと分つて居る。お前に己の心は分らないでも己にはお前がよく分つて居る。分つて居ればこそ比較が出來るのだ。……兎に角、離縁をしてもお前が何處かで生きて居れば、お前がなまじ氣立のやさしい善人であるだけに、己の苦痛は完全には除かれないのだ。

(春子) 死ねばどうして除かれるのでせう？

(井上) いや、たとへ死んだつて完全には除かれない。お前が初めから此の世に生れて來なければよかつたのだ。それが一番己の望ましい事なのだ。己にはそれほどお前と云ふものが邪魔になつて居る。だが、それが到底望まれない事だとすれば、やつぱり死んで貰ふのが一番いゝ。それでも飽き足りないのだけれど、それで我慢をするより外に仕方がない。

(春子) それぢや私は、死んでもあなたを充分に喜ばして上げる事は出來ないんですね。

(井上) うん、忌憚なく云へばまあそんなものだ。しかしお前が死なゝければ、己には死以上の苦痛が來る。お前の命と己の命と、孰方が貴いかと云へば、己の立ち場を離れて考へて見ても、己の命の方が貴い。お前は何の動きも自覺もない平凡な女だ。己は此れでも才能のある藝術家だ。孰方か一人の人間の命を失つて濟む事なら、お前の命の失はれるのが正當の順序だ。それが當然の運命だ。無慈悲のやうに聞えるけれど、己は決して理由のない事を云ひはしない。理屈から云へば己は自分で手を下してお前を殺しても差支へない。たゞ己には膽力がないから、進んでそれを實行することが出來ずに居る。…………

（春子、悲しみの表情より漸く恐怖の表情に移る）それでも私が、死ぬのが嫌だと云つたらばどうなさるの？

（井上）さあ、それだから私はお前に頼むのだ。己は自分でお前を殺す勇氣はない。どうか己を助けると思つて、自分の意志で大人しく死んでおくれ。一と思ひに此の谷底へ身を投げておくれ。己はお前が正直な女だと云ふ事をよく知つて居る。だからお前を欺かして、もつと殘酷な陷穽へ引き込まうと云ふ氣があれば、いくらでも其方法はあつたのだ。それをさうしないで、己は何も彼も包まず打ち明けて頼んで居る。己は此れでもお前に對して出來るたけの好意を示したのだ。かけられるだけの慈悲をかけたのだ。己は此の點で、お前から感謝されてもいゝとさへ思つて居る。こんな世の中に生きて居たつてどうせお前は樂しい事はありやしない。ねえ、さうぢやないか。己の心が分つたら頼むから死んでおくれ。（此の時、彼の手にある原稿の最後のペエヂ殆んど盡きんとす。）

（春子　恐怖恐度に達し、危く卒倒せんとして身を顫はせながら）あゝツ、いやです、いやです、あたし何と云はれても死ぬのはいやです！　後生だから助けて下さい！　私の命を助けて下さい！

（井上　手に持つて居た原稿を疊んで再びポツケツトに收めながら）あはゝゝゝ、とうとうすつかりおどかしてやつたぞ。おい、おい、何をそんなに恐がつて居るのだ。今のはみんな此の原稿の中の事ぢやないか。もう脚本は濟んでしまつたんだよ。此處で妻君が谷へ突き落されて幕になつたんだ。しかし私は、此の通りお前を谷へ突き落しはしない。だからもうそんなに恐がる事はないさ。お前をおどかしたのは惡かつたから勘忍しておくれ。ほんたうに詫るよ。さあ、もう機嫌を直しておくれ。さうして日が暮れないうちに早く歸らう。ね、さうしよう。（いたはるやうに彼女の肩へ手を廻して立たせようとする。）

（春子　まだぶるぶると戰きながら、井上の手に縋りつゝよろめくやうにして立ち立る。井上いきなり彼女の腰を強く

どしんと突き飛ばす。春子は突かれて崖から足を踏み滑らし、悲鳴を擧げながら谷へ落ちんとした一刹那、絶壁に突き出て居る岩角に兩手をかけて、全身を虚空に吊る下げつゝ一生懸命に藻掻き叫ぶ）あれエ！ 後生だから助けて下さい！ 私の命を助けて下さい！ それぢやあなたはやつぱりほんたうだつたんですね。やつぱり私を殺す了見だつたんですね。私や死ぬのは嫌です嫌です！ 私だつてまだ世の中に生きて居たいんです！あなたに離縁されたつて、まだ樂しみはあるんです！ あなた、後生だから助けて下さい！

（井上 凄慘な微笑を浮かべて上から彼女を瞰下しつゝ）いや、後生だから死んでおくれ。己は照子と結婚しなけりやならないんだ。さうして居たつて助かりつこはないんだから、早く手を放して、一と思ひに谷へ飛び込んでおくれ。

（道端の石ころを拾つて來て、岩角に摑まつて居る彼女の兩手を力一杯に打つ）

（春子）いやだいやだ、私や死ぬのはどうしてもいやだ。打つならいくらでも打つがいい。死んだつて此の手を放すもんか。あれエ！（遂に堪へ切れずして手を放し、谷へ墜落する）

（井上）あゝ、とうとう欺してやつた。馬鹿な女だ。（彼女の手をかけて居た岩角に立ち上り、谷を覗かうとして忽ち眩暈を感じたるが如く、慄然として二三歩後ろへ退き、失神したやうに臀餅を舂く。）

靜かに幕が下りる。

以上が、私の所謂「呪はれた戯曲」の全部である。

この戯曲を引用したからには、佐々木が玉子を殺した時の狀況に就いて、茲に改めて描寫をする必要はあるまい。なぜかと云ふのに、彼が其の後襟子に自白した所に依れば、彼の赤城山中に於ける犯罪は、殆んど此の戯曲と同一の順序

を蹈み、同一の形式を以て行はれたのださうであるから。

去年の夏、佐々木が大膽にも此の戯曲を劇場で發表したのは、恐らく藝術家としての功名に心驅られた結果であつたらう。當時の臺本と此處に揭げた原本との相違は、纔かに赤城山が箱根山と改まつて居るだけであつた。彼は舞臺監督として俳優の稽古に立ち會つたが、可なり演出のむづかしい劇であつたにも拘らず、此の芝居が好評を博したのは、殆んど彼の監督の力であつた。稽古の最中に彼の與へた演出上の注意は、恐ろしい程實際を穿つて居て、此の物凄い劇の效果を充分深刻に發揮させたのであつた。

彼の功名心は希望通りに滿足された。彼は此の戯曲の爲めに藝術家としての價値を認められたばかりでなく、舞臺監督としての技倆までも、黑人の間に買ひ被られたのであつた。（大正八、四月作）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	内國	外國	
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢	以上郵稅共
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正八年四月三十日印刷納本
大正八年五月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧谷憲治
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（長小石川一四四四）（小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は謝絶す